愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第181集

桑下城跡

本文篇

2013

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第181集

桑下城跡（くわしたじょうあと）

本文篇

2013

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

春日井郡上品野村古城絵図　　蓬左文庫　所蔵

07 区　北東堀出土和鏡　　菊花双鶴鏡

菊花・八重菊・葉　　菊亀甲形紐・鶴

菊花双鶴鏡と水滴

鍬形台　09区9曲輪出土

巻頭図版４

桑下城　CG 遠景　南西より

桑下城　CG 遠景　南西より

桑下城跡・桑下東窯跡・上品野西金地遺跡（左より）

04区　桑下城　遠景（中央）　南東より　05.03.14

04区　全景　西より

04区　全景　北より

巻頭図版 6

09 区　全景　西方向より

09 区　全景　南方向より

08 区　全景　西方向より

08 区　全景　北方向より

07 区　全景　北東方向より

07 区　全景　北より

序　　文

瀬戸市は愛知県の中央北部、岐阜県との県境、北は岐阜県多治見市、土岐市などに接し、西は春日井市、名古屋市、尾張旭市に隣接しています。濃尾平野の東、尾張丘陵の一角にあり、周囲を標高 100 ～ 300m の小高い山々に囲まれ、自然と伝統とやきもののまちとして知られ、名古屋市の北東約 20km に位置します。

瀬戸市上品野町地内に所在する桑下城跡は東海環状自動車道せと品野インターの北東側、かつて信濃と結ぶ重要なルートであった中馬街道を眼下に望む丘陵に立地しています。桑下城跡の東には、桑下東窯跡、上品野西金地遺跡があります。中馬街道の南側に品野城、北側に桑下城と、二つの城があり、中世にこの地が三河と尾張の要衝の地であったことが景観からも窺えます。

国道 363 号線改良工事のため、その事前調査として平成 16 度より平成 21 年度の間に 4 回に亘る発掘調査を実施しましたところ、本丸とその周りに大規模に展開する曲輪や菊花双鶴鏡と鍬形台の出土遺物などから、当地域の戦国時代を代表する重要な城跡であることが明らかになりました。

丘陵頂部、急斜面、堀、等と足場が悪い状況での作業でしたが、熱心な支援業者の作業員と調査補助員のご協力と愛知県建設部道路建設課はじめ瀬戸市教育委員会などの関係諸機関の暖かいご理解と多大なるご協力で発掘調査を遂行することができました。

今回の調査により、戦国時代の城と隣接する窯跡との関係を探るうえで貴重な資料を新たに得ることができました。この成果が今後の地元での研究の一助になることを願っています。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご理解、ご指導、ご協力をいただきました関係者の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成 25 年 3 月

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長　加藤　髙明

例　　言

1、本書は愛知県瀬戸市上品野町地内に所在する桑下城跡（愛知県遺跡番号 030624）の調査報告書である。

2、発掘調査は国道 363 号道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

3、調査は 4 次に亘り実施し。調査面積は 10,400㎡である。

平成 17 年 1 月～3 月 1,000㎡　　平成 19 年 8 月～平成 20 年 3 月 4,000㎡

平成 20 年 8 月～平成 21 年 3 月 3,300㎡　平成 21 年 9 月～平成 22 年 1 月 2,100㎡

4、調査において次の関係機関のご協力を得た。

愛知県建設部道路建設課、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、

愛知県埋蔵文化財調査センター、瀬戸市教育委員会、

公益財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター。

5、発掘調査、報告書の作成においては以下の方々のご協力を得た。

青木　修、井上喜久男、内田恭司、江崎　武、岡本直久、金子健一、河合君近、久保智康、坂本範基、佐野　元、柴垣勇夫、城ヶ谷和弘、千田嘉博、中井　均、仲野泰裕、野澤則幸、服部　郁、松岡有里、松田秀貴、松澤和人、村上泰樹、棚瀬規子、藤澤良祐、渡辺英美子。

6、発掘調査において各社の支援を受けた。

平成 16 年度　　株式会社アコード

平成 19・20 年度　株式会社シン技術コンサル

平成 21 年度　　国際文化財株式会社

7、遺物整理および報告書作成に際して作業の一部を委託した。

遺物実測、デジタルトレース　株式会社イビソク

遺物実測、CG 作成　　国際文化財株式会社

遺物実測、編集　　ナカシャクリエイテブ株式会社

遺物の写真撮影　　金子知久（写真工房遊）

自然科学分析　　株式会社パレオ・ラボ

8、本書の執筆は以下の通りである。なお編集は小澤一弘が担当した。

小澤　一弘　第 1 章、第 2 章第 1 節、第 3 章第 1 ～ 4 節、第 6 ～ 8 節、第 5 章第 4 節

伊奈　和彦　第 2 章第 2 節、第 5 章第 2 節

武部　真木　第 2 章第 3 節、第 5 章第 3 節

宇佐見　守　第 2 章第 4 節

永井　邦仁　第 3 章第 5 節、第 5 章第 1 節

黒沼　保子（パレオ・ラボ）　第 4 章第 1 節、第 2 節

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）　第 4 章第 3 節

小林和貴　佐々木由香　能城修一　鈴木三男　第 4 章第 4 節

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ　第 4 章第 5 節、第 6 節

堀木　真美子　第 4 章第 7 節、第 8 節

9、発掘調査および本書で使用した方位は、国土座標第Ⅶ系、基準高は東京湾平均海面（T.P.）に基づく。ただし表記は「日本測地系」とした。

10、巻頭図版 1「春日井郡上品野村古城絵図」蓬左文庫所蔵の掲載については、

名古屋市博物館特別利用許可書（蓬左文庫）　24 指令教蓬第 1-68 号の 2 による。

11、出土遺物の登録番号は遺物実測図の通し番号をこれに当て、出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターに保管している。

12、発掘調査の記録（遺構実測図、写真）は愛知県埋蔵文化財センターに保管している。

目　　次

カラー図版
序文 i
例言 ii
目次 iii

第１章　立地と調査経過 1
　第１節　環境と立地 1
　第２節　調査の経緯と経過 7

第２章　遺構 11
　第１節　調査の概要 11
　第２節　16 年度 04 調査区、21 年度 09 調査区 23
　第３節　20 年度 08 調査区 36
　第４節　19 年度 07 調査区 61

第３章　出土遺物 89
　第１節　出土陶磁器の概要 89
　第２節　04 区 09 区出土遺物 96
　第３節　08 区出土遺物 98
　第４節　07 区出土遺物 99
　第５節　瓦塔 105
　第６節　金属製品 106
　第７節　石製品 110
　第８節　木製品 114

第４章　自然科学分析 124
　第１節　木製品の樹種同定 124
　第２節　炭化材の樹種同定 134
　第３節　大型植物遺体 140
　第４節　和鏡鈕孔内の紐の素材同定 142
　第５節　放射性炭素年代測定 146
　第６節　土器付着物および漆器塗膜の放射性炭素年代測定 150
　第７節　皿付着物について 154
　第８節　金属製品について 156

第５章　総括 160
第１節　山頂造立瓦塔の系譜 160
第２節　09 区９曲輪について 166
第３節　中世・戦国期の陶磁器搬入品について 169
第４節　桑下城今昔　古城絵図と発掘調査 173

参考・引用文献目録 186
遺構一覧表 188
報告書抄録 201

巻頭図版　目次

図版１　春日井郡上品野村古城絵図
図版２　07 区北東堀出土和鏡、菊花・八重菊・葉、菊亀甲形紐、鶴
図版３　菊花双鶴鏡と水滴、鍍形台
図版４　桑下城 CG 遠景
図版５　04 区調査区全景
図版６　09 区調査区全景
図版７　08 区調査区全景
図版８　07 区調査区全景

挿図　目次

第１図　瀬戸市位置図 1
第２図　瀬戸市の地質概要図 2
第３図　桑下城跡・桑下東窯・上品野
　　西金地遺跡の調査区位置図 3
第４図　桑下城跡の周辺遺跡図 5
第５図　調査区グリット図 9
第６図　調査区別曲輪図 11
第７図　04 調査区全体図 13
第８図　09 調査区全体図 14
第９図　09 調査区全体図 15
第 10 図　08 調査区全体図 16
第 11 図　08 調査区全体図 17
第 12 図　08・07 調査区全体図 18
第 13 図　07 調査区全体図 19
第 14 図　07 調査区全体図 20
第 15 図　07 調査区全体図 21
第 16 図　07 調査区全体図 22
第 17 図　上品野村古城絵図トレース図 23
第 18 図　04・09 調査区 24
第 19 図　09 区 748SA 25
第 20 図　09 区 534SA・535SA・536SA 27
第 21 図　09 区 430SA・431SA 29
第 22 図　9 曲輪 1 面 417SD・432SD・
　　435SD・533SD 30

第 23 図　09 曲輪 2 面 395SW・639SW・575SX・581SX　31
第 24 図　09 区 469SE・493SK・504SE　34
第 25 図　08 調査区　36
第 26 図　08 A 区 001SY 上品野 E 窯跡　37
第 27 図　08 A・B 区 SD157　38
第 28 図　08 B 区 ピット列 1 ～ 9　39
第 29 図　08 B 区 ピット列位置図・列 10 ～ 12　40
第 30 図　08 区 192SX・247SX　42
第 31 図　08 A 区 土塁トレンチ　44
第 32 図　08 B 区 159SX・182SX・189SX　45
第 33 図　08 B 区 櫓トレンチ A　46
第 34 図　08 B 区 166SI　48
第 35 図　08 A 区 庭園遺構平面図と断面図 H・A・B　49
第 36 図　08 A 区 庭園遺構平面図と断面図 C・G　50
第 37 図　08 A 区 085SX　51
第 38 図　08 A 区 庭園遺構平面図と断面図 K・E・D・F　52
第 39 図　299SD 土層図　54
第 40 図　07 A 区 299SD（古）　55
第 41 図　07 A 区 299SD（古）　56
第 42 図　07 A 区 299SD（新）　57
第 43 図　07 A 区 299SD（新）　58
第 44 図　本丸部分下層の遺構群の新旧関係図　59
第 45 図　08 B 区 161SX・167SX　59
第 46 図　本丸周辺図　60
第 47 図　07 調査区　61
第 48 図　07 A 区 上面図　62
第 49 図　07 A 区 088SE　64
第 50 図　07 A 区 001SX・104SX　65
第 51 図　07 A 区 004SX　66
第 52 図　07 A 区 071SX・087SX・090SX　67
第 53 図　07 A 区 002P　68
第 54 図　07 A 区 008SX・009P・034P・065P・054P・055P・063P・064SX・006SX　69
第 55 図　07 A 区 119SD　71
第 56 図　07 A 区 土層ベルト位置図 SPA ～ SPS　73
第 57 図　07 A 区 SPA　74
第 58 図　07 A 区 SPB・SPC　75
第 59 図　07 A 区 SPD　76
第 60 図　07 A 区 SPE　77
第 61 図　07 A 区 SPF　78
第 62 図　07 A 区 SPH　79
第 63 図　07 A 区 SPI・SPJ　80
第 64 図　07 A 区 SPK　81
第 65 図　07 A 区 SPL　82
第 66 図　07 A 区 SPM・N・O　83
第 67 図　07 A 区 SPP　84
第 68 図　07 A 区 SPQ　85
第 69 図　07 A 区 SPR・SPS　86
第 70 図　07 A 区 085SX　87
第 71 図　07 A 区 125SK・118SE　88
第 72 図　縞蓮弁文丸碗、茶入実測図　91
第 73 図　中国陶磁器実測図（上段）・印花文丸皿と匣鉢の実測図（下段）　92
第 74 図　器種別出土状況図　93
第 75 図　出土水滴実測図　95
第 76 図　08 区出土瓦塔実測図　105
第 77 図　菊花双鶴鏡と鍬形台の拓影　108
第 78 図　鉄鏃、簪、金具、鍬形台実測図　109
第 79 図　一字一石経実測図　110
第 80 図　石製品実測図　113
第 81 図　木製品実測図（1）　120
第 82 図　木製品実測図（2）　121

第 83 図　出土木製品の光学顕微鏡写真（1）
131
第 84 図　出土木製品の光学顕微鏡写真（2）
132
第 85 図　出土木製品の光学顕微鏡写真（3）
133
第 86 図　出土材の顕微鏡写真 137
第 87 図　出土材の顕微鏡写真 138
第 88 図　出土材の顕微鏡写真 139
第 89 図　出土大型植物遺体 141
第 90 図　和鏡鈕孔内に残っていた紐 144
第 91 図　現生植物繊維の光学顕微鏡像 145
第 92 図　試料 No.4：ウィグルマッチング
結果 148
第 93 図　試料 No.5：ウィグルマッチング
結果 148
第 94 図　試料 No.6：ウィグルマッチング
結果 149
第 95 図　試料 No.7：ウィグルマッチング
結果 149
第 96 図　試料 No.9：ウィグルマッチング
結果 149
第 97 図　各土器付着物および漆器塗膜の
暦年較正図 152
第 98 図　漆器椀 (試料 No.126(4)) の塗膜の
暦年較正図とマルチプロット図 153
第 99 図　004SX-20
スペクトル図と元素分布 154
第 100 図 004SX
スペクトル図と元素分布 155
第 101 図 滝町古窯　563
スペクトル図と元素分布 155
第 102 図 001 和鏡
鏡面のスペクトル図 157
第 103 図 051 鍬形台
表面のスペクトル図と元素分布 158
第 104 図 115 小刀
表面のスペクトル図 158
第 105 図 135 簪
表面のスペクトル図 159
第 106 図 184 小刀
表面のスペクトル図 159
第 107 図 185 飾り金具
表面のスペクトル図 159
第 108 図 桑下城跡瓦塔出土分布図 161
第 109 図 三河・遠江における山中瓦塔造立
の事例 163
第 110 図 上品野地区の主要古代集落遺跡と
その東遷 165
第 111 図 9 曲輪遺構変遷図 168
第 112 図 中世に搬入された遺物（1） 171
第 113 図 中世に搬入された遺物（2） 172
第 114 図 上品野村古城絵図（蓬左文庫）
トレース図 174
第 115 図 桑下城周辺縄張図と地籍図 176
第 116 図 調査区（04・07 ～ 09）全体図
177

付表　目次

第 1 表　周辺遺跡一覧 6
第 2 表　時期別出土点数表 91
第 3 表　出土遺物破片表 94
第 4 表　樹種構成 124
第 5 表　工具・履き物・容器類の樹種構成 127
第 6 表　食事具・祭祀具・雑具の樹種構成 127
第 7 表　板材・加工材の樹種構成 128
第 8 表　出土木製品の樹種同定結果（1） 129
第 9 表　炭化材の樹種同定結果 134
第 10 表　出土大型植物遺体 140
第 11 表　測定試料および処理 147
第 12 表　試料 No.4 の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果 148
第 13 表　試料 No.5 の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果 148
第 14 表　試料 No.6 の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果 148
第 15 表　試料 No.7 の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果 148
第 16 表　試料 No.9 の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果 148
第 17 表　測定試料および処理 150
第 18 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 151
第 19 表　分析試料一覧 156
第 20 表　分析結果 156
第 21 表　定量分析結果 157
第 22 表　使用痕が認められた陶片 170
第 23 表　桑下城関連年表 180
第 24 表　瀬戸・美濃の城館と窯跡 185

図版篇　目次

・遺物実測図　図 1 ～ 89　1 頁～ 89 頁
・図 1 ～図 67　陶磁器
・図 68　金属製品
・図 69 ～図 75　石製品
・図 76 ～図 89　木製品

・写真図版　図版 1 ～ 51　91 頁～ 141 頁
・図版 1 ～図版 29　各地査区
・図版 30 ～図版 40　陶磁器
　図版 50、51
・図版 41 ～図版 44　金属製品
・図版 44 ～図版 46　木製品
・図版 47 ～図版 49　石製品

付篇（CD のみ）

・1、遺物カラー図版
・2、CGによる桑下城遠景

第１章　立地と調査経過

第１節　環境と立地

1. 遺跡の位置

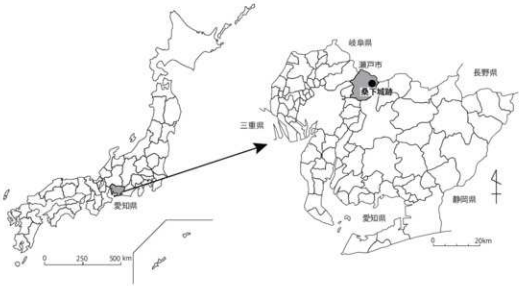
桑下城跡は、愛知県瀬戸市上品野町地内の、庄内川支流である水野川により形成された品野盆地の北東岸の丘陵地に所在する。瀬戸市は愛知県の中央北部岐阜県との県境に位置し濃尾平野の東、尾張丘陵の一角にあり旧尾張国の北東端にあたる。北は岐阜県多治見市、土岐市等に接し、西は春日井市、名古屋市、尾張旭市に隣接する。東及び南方は旧三河国に属する豊田市や愛知郡長久手町に接している。瀬戸市域は東西 12.8km、南北 13.6km で、周囲約 50km の楕円形を呈している。

2. 瀬戸市の地形と地質

瀬戸市は名古屋市の北東約 20km に展開する尾張丘陵地帯の一部に位置し、木曽山脈の最南端にあたる。その大部分の標高は 100m から 600m の丘陵地で占められている。中でも市域西側には 100m から 200m の低位丘陵が展開しており、市街地や耕作地を形成している。

各低位丘陵帯は市内を流れる河川によっていくつかに区分されている。市境北東に沿って庄内川が南流し、その支流である蛇ヶ洞川が市域北部、水野川が市域中部を東から西へと流れている。また市域中南部には矢田川（山口川）とその支流である瀬戸川が東から西へと流れている。

水野川の北側を穴田丘陵、水野川と瀬戸川に挟まれた地域を水野丘陵と呼んでいる。また瀬戸川と矢田川に挟まれた部分を菱野丘陵、矢田川以南を幡山丘陵と呼称している。さらに河川沿いには狭い沖積地が



第１図　瀬戸市位置図

盆地状に広がっており、蛇ヶ洞川沿いには上半田川盆地、下半田川盆地、水野川沿いには上流に品野盆地、下流に水野盆地が形成され、矢田川上流（赤津川）には赤津盆地がある。

また、矢田川と瀬戸川沿いには西方にむかって平地が広がっており、名古屋市北東部の沖積地へとつながっている。北部及び東部山地は国有林と県有林が広がり、土砂採集場以外は自然の多く残る丘陵地帯となっている。（第２図）

瀬戸市における地質的特徴は、伝統的な窯業地であることからも分かるように、やきものの原料となる良質の陶土やガラスの原料となる珪砂を豊富に含んでいる陶土層（瀬戸陶土層）が市域中央部にみられることである。

この陶土層は、その基盤である中・古生層及び花崗岩層の上に厚く堆積しており、その由来は第三紀鮮新世から第四紀更新世初めにかけて伊勢湾を中心に広がっていたとされる東海湖の堆積物である。また、市域中部に広がる水野砂礫層、蛇ヶ洞川北部に広がる土岐砂礫層（いずれも矢田川累層）中にも砂礫層に挟まれて粘土層がみられる。一方市域北部には中・古生層、東部には花崗岩類が広がっており、この部分では粘土層はみられない。

3. 周辺の遺跡

庄内川の支流である水野川によって形成された瀬戸市北東部にあたる品野盆地周辺の集落遺跡・窯跡の分布と桑下城跡の東側、隣接した桑下東窯跡の調査成果を概観する。

第２図　瀬戸市の地質概要図 『瀬戸市史』自然編をもとに作成

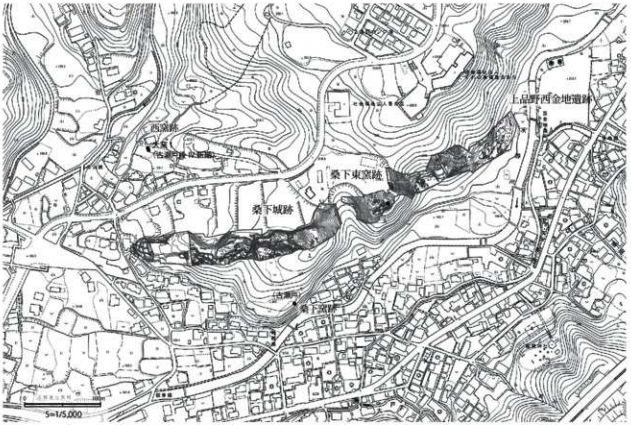
A. 品野盆地の遺跡

品野盆地南東の丘陵部に立地する上品野遺跡では、県内で最も古い時期に属する後期旧石器時代の石器群が出土し、弥生時代も前期と中期の土器が散見され、古墳時代前期、古代には居住域が南斜面を中心に展開するのが確認できる。品野盆地南西に立地する品野西遺跡も縄文草創期から利用が始まり、古代の集落の成立は古く瓦葺き建物が存在した。上品野遺跡でも 8 世紀の馬形や斎串などの祭祀関連の木製品などが出土し、すぐ北側低地部の上品野蟹川遺跡とともに墨書灰釉陶器など文字資料が比較的多い。古代官衙との関連が窺われるなど、瀬戸市域でも品野盆地は中心的な地域であったと考えられる。

中世の集落遺跡の調査例は少ないが、山茶碗窯の分布から、13 世紀代に入り品野盆地南西部の丘陵を中心に山茶碗専焼窯が展開することが確認されている。14 世紀前半にかけては古瀬戸を併焼する窯などを含めこの地域の窯業生産は盛期を迎える。その後は窯数全体が減少し、品野盆地より北西部の丘陵地帯に、盆地南東部丘陵にわずかに（中）後期の古瀬戸を併焼する窯が分布する。続く大窯の時代は、盆地周縁の集落に近い場所に窯跡が散見されるが 16 世紀半ば以降から近世の連房式登窯まで窯跡はみられない。

B. 桑下東窯跡の概要

桑下東窯跡は水野川北側の丘陵部に立地し、丘陵の西側には桑下城跡、東側には上品野西金地遺跡と両遺跡に挟まれた 16 世紀前半の大窯 1 段階の窯跡である。平成 17 年 9 月から平成 18 年 3 月にかけて発掘調査が実施され、平成 22 年 8 月に愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 164 集『桑下東窯跡』として刊行された。



第 3 図　桑下城跡・桑下東窯・上品野西金地遺跡の調査区位置図 (1:5,000)

丘陵頂部付近の平坦部を利用し、作業場を造成し、竪穴建物、粘土溜、轆轤工房、掘立柱建物を設け、丘陵で轆轤から製品選別までの一連作業が行われ、さながら焼き物工場のような状況が見られ、「窯大将組織」が想起される遺構群である。東谷では区画溝に区画された建物があり、出土遺物が丘陵の工房と比べ器種が豊富で生焼け製品が少なく、また焼き上がり良好な製品が多いことから、製品の集荷と出荷に関係した建物があった屋敷の可能性がある。

丘陵の南北 43m 東西 37m の範囲内で、山側の斜面を削り平坦面を拡張し、窯に伴う各施設を整備している。遺構が見られる部分と遺構立地可能な滅失部分を含め丘陵部全体の面積を復元すると約 1,425㎡でこの面積の約 60% の 875㎡が滅失し、検出した遺構は遺構立地可能面積の 40% からである。滅失した面積の中に窯体を含め工房等の施設があったことは明らかで、丘陵全体が大規模な工場になっている。

土壙墓が A 区の轆轤ピット群の下層、SK34 と E 区の西縁辺部、SK35、と C 区の SK44、B 区（上品野西金地遺跡）の西側斜面の上段 SK30 では大窯 1 期の伏せた擂鉢が、下段 SK12 では江戸期の墓が見られることから、時代を問わず丘陵縁辺の見晴らしのよい場所に墓が設けられていたようである。

出土遺物は 36 器種で総破片数は 24,725 点である。口縁部個体数 1,294 個体、底部個体、1,553 個を数えた。千点以上出土した器種は、擂鉢 8,115 点、端反皿 7,598 点、天目茶碗 1,903 点、釜 1,269 点 緑釉皿 1,141 点である。特徴的な遺物として削り出し輪高台の天目茶碗、鎬連弁文丸碗、付高台の端反皿、稜花皿、削ぎのある丸皿、稜皿、鉄緑釉皿等、また特殊な器種として魚形掛花生と狛犬の阿形が出土。

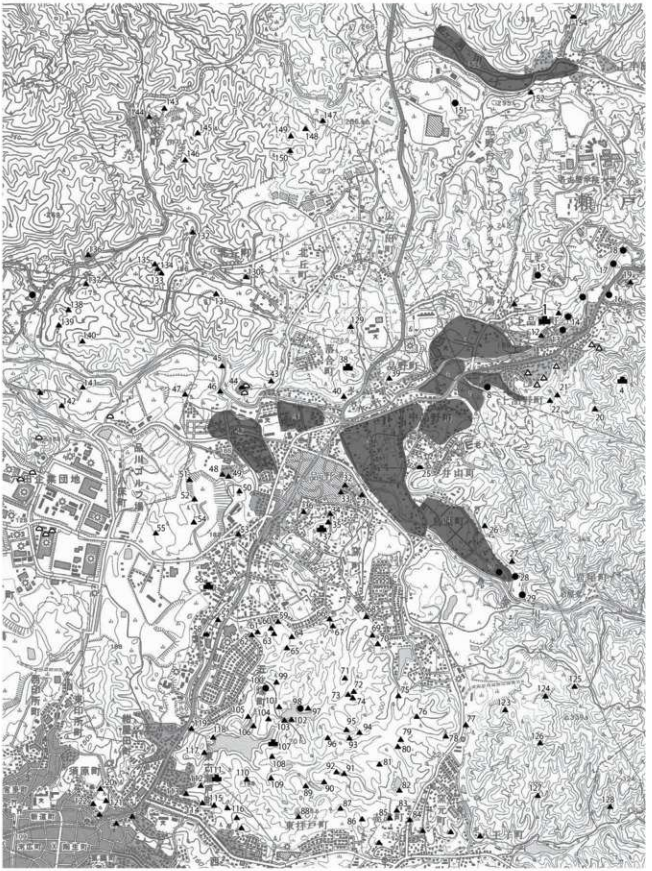
出土遺物は藤澤編年の後期Ⅳ新段階から大窯 3 段階（15 世紀末から 16 世紀後葉）まで見られたが、第 1 段階が 64% と操業の中心時期である。　後期Ⅳ新段階が 56 点（6.55%）、後期Ⅳ新段階から大窯 1 段階が 33 点（3.86%）、大窯 1 段階が 548 点（64.16%）、大窯 1 段階から大窯 2 段階が 63 点（7.37%）、後期Ⅳ期新段階から大窯 2 段階が 139 点（16.27%）、大窯 2 段階から大窯 3 段階が 5 点（0.58%）、大窯 3 段階が 10 点（1.17%）で、大窯 1 段階が 548 点（64.16%）と中心段階なのである。

藤澤編年の後期Ⅳ期新段階が 1460 年から 1480 年代に、大窯 1 段階が 1480 年代から 1530 年、大窯 2 段階が 1530 年から 1560 年、大窯 3 段階が 1560 年から 1590 年、大窯 4 段階が 1590 年から 1610 年と考えられている。

なお、上品野西金地遺跡（平成 24 年度刊行）は縄文時代から江戸時代の複合遺跡で、桑下東窯の工人の墓が、桑下東窯跡と接する西側斜面上段に見られる。丘陵東斜面から南東斜面に大窯前半の茶壺・甕・鉢・鍋等の大型製品が多く出土し、調査区北側の丘陵斜面平場に桑下東窯に従事した集団の居住域があった可能性が想起されている。

C、戦国から江戸時代の桑下城

戦国期にかけて品野一帯は尾張・三河の国境として緊張関係にあった。品野地区には桑下城、品野城、山崎城、落合城、阿弥陀ヶ峰城、片草城の 6 ヶ所の城館があり、江戸時代の寛文年中（1670）の『寛文村々覚書』には桑下城の城主を松平内膳（品野城主松平信定）の家老永井（または長江）民部の居城としている。寛政 4 年（1792）に作られた「春日井郡上品野村絵図」に付載する「絵図面別紙之覚」では城根（桑下城）を松平信定の屋敷跡とし、また松平信定の家老を長江刑部、長江民部としている。長江氏は定光寺に残る『祠堂帳』に「科野長江修理進」の名があり、永正 15 年（1528）に科野（品野）の有力者として長江氏がいたことは明らかである。



第４図　桑下城跡の周辺遺跡図 (1:25,000)

第1表　桑下城跡の周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時期
1	**桑下城跡**	**中世**
2	桑下東窯跡	16世紀　大窯1後半～2前半
3	上品野西金地遺跡	中世～近世
4	品野城跡	室町～戦国
5	上品野蟹川遺跡	縄文～近世
6	上品野向橋南遺跡	中世～近世
7	中洞遺跡	縄文～中世
8	大洞遺跡	弥生
9	上品野遺跡	旧石器～近世
10	中品野遺跡	縄文～近世
11	西窯跡	16世紀
12	桑下窯跡	15世紀
13	上品野桑下B遺跡	中世～近世
14	上品野桑下A遺跡	中世～近世
15	菩提寺遺跡	中世
16	上品野東山遺跡	中世～近世
17	上品野一ノ瀬南遺跡	中世～近世
18	上品野一ノ瀬遺跡	中世～近世
19	上品野丸山窯跡	15世紀
20	上品野A窯跡	15世紀、山茶碗、施釉陶器
21	宇トゲ窯跡	14～15世紀
22	中洞窯跡	縄文～中世
23	品野中部遺跡	縄文～近世
24	烏原遺跡	古代～近世
25	井山古墳	古墳
26	浄源寺西窯跡	近代、磁器
27	霞窯跡	14～15世紀
28	浄源寺遺跡	19世紀
29	浄源寺境内遺跡	19世紀
30	烏原縄文遺跡	縄文
31	窯町E窯跡	18～19世紀、陶器
32	窯町C窯跡	17～19世紀、陶器
33	窯町B窯跡	17～19世紀、陶器
34	窯町A窯跡	17世紀
35	円六窯跡	15～16世紀
36	品野馬場窯跡	19世紀、陶器
37	山崎城跡	中世
38	落合城跡	中世
39	品野町八丁目A窯跡	19世紀、磁器
40	勘介窯跡	16世紀
41	落合橋南遺跡	縄文～近世
42	品野西遺跡	縄文～近世
43	落合窯跡	16世紀
44	大白1号墳	古墳
45	品川北7・8号窯跡	13～14世紀、山茶碗、施釉陶器
46	品川北6号窯跡	13世紀、山茶碗
47	品川北1・2号窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
48	八床7・8号窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
49	八床6号窯跡	山茶碗
50	八床5号窯跡	13世紀、山茶碗
51	八床11・12号窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
52	八床13・14号窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
53	八床18号窯跡	15世紀
54	八床2号窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
55	八床21号窯跡	山茶碗
56	阿弥陀峰城跡	中世
57	五位塚北窯跡	13世紀、山茶碗
58	五位塚古墳	古墳
59	五位塚F窯跡	施釉陶器
60	五位塚E窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
61	五位塚G窯跡	14世紀、山茶碗、施釉陶器
62	五位塚H窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
63	五位塚D窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
64	五位塚B窯跡	13・15世紀、山茶碗、施釉陶器
65	五位塚C窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
66	墳1・2号窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
67	五位塚A窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
68	墳3号窯跡	不明
69	墳4号窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
70	墳5号窯跡	山茶碗
71	殿原窯跡	13～14世紀、山茶碗、施釉陶器
72	馬ヶ城C窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
73	馬ヶ城D窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
74	馬ヶ城B窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
75	馬ヶ城A窯跡	13～14世紀、山茶碗、施釉陶器
76	馬ヶ城F窯跡	13・14世紀、山茶碗、施釉陶器
77	針原窯跡	13～14世紀、山茶碗、施釉陶器
78	奥白根窯跡・サカイ窯跡	13・17世紀、山茶碗、施釉陶器
79	馬ヶ城E窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
80	馬ヶ城D窯跡	13世紀、山茶碗
81	保手窯跡	13・15世紀、山茶碗、施釉陶器
82	帆立北窯跡	13世紀、山茶碗
83	唐三郎窯跡	17～19世紀、施釉陶器
84	窯元B窯跡	19世紀、施釉陶器
85	仙左衛門窯跡	17～19世紀、施釉陶器
86	馬ヶ城P窯跡	不明
87	馬ヶ城N窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
88	井守沢A窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
89	銭亀窯跡	13・15世紀、山茶碗、施釉陶器
90	銭東C窯跡	13・15世紀、山茶碗、施釉陶器
91	銭東B窯跡	13・14世紀、山茶碗、施釉陶器
92	銭東A窯跡	13・14世紀、山茶碗、施釉陶器
93	大栃C窯跡	13・15世紀、山茶碗、施釉陶器
94	大栃窯跡	13・15世紀、山茶碗、施釉陶器
95	大栃B窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
96	椿窯跡	13～15世紀、山茶碗、施釉陶器
97	菅原窯跡	13～14世紀、山茶碗、施釉陶器
98	馬ヶ城M遺跡	古代
99	五位塚I窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
100	五位塚J遺跡	18世紀
101	馬ヶ城J窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
102	馬ヶ城I窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
103	馬ヶ城K窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
104	馬ヶ城H窯跡	13・15世紀、山茶碗、施釉陶器
105	馬ヶ城Q窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
106	馬ヶ城I窯跡	13～14、15世紀、山茶碗、施釉陶器
107	馬ヶ城跡	中世
108	馬ヶ城窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
109	馬ヶ城G窯跡	13～14世紀、山茶碗、施釉陶器
110	留林窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
111	瀬戸城跡	中世
112	馬ヶ城R窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
113	菊畑窯跡	15世紀
114	東古瀬戸A窯跡	山茶碗
115	井守沢C窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
116	井守沢B窯跡	15世紀、山茶碗、施釉陶器
117	馬ヶ城S窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
118	水源池西窯跡	13世紀、山茶碗、施釉陶器
119	五位塚K窯跡	13世紀、山茶碗
120	夕日3号窯跡	19世紀、施釉陶器
121	夕日4号窯跡	19世紀、施釉陶器
122	日影窯	17世紀、施釉陶器
123	針原C窯跡	14世紀、山茶碗
124	五葉窯跡	13～14世紀、山茶碗、施釉陶器
125	祢宜窯跡	14世紀、施釉陶器
126	赤津長根窯跡	14世紀、山茶碗、施釉陶器
127	神事池窯跡	14世紀、山茶碗、施釉陶器
128	木下川窯跡	14世紀、山茶碗、施釉陶器
129	広之田B窯跡	13世紀、山茶碗
130	北山南6号窯跡	山茶碗
131	北山南3～5号窯跡	13～15世紀、山茶碗、施釉陶器
132	萱刈窯跡	14世紀、山茶碗、施釉陶器
133	曽野F窯跡	13世紀、山茶碗
134	曽野G窯跡	14世紀、山茶碗
135	曽野B窯跡	13～14世紀、山茶碗
136	余床E窯跡	13世紀、山茶碗
137	曽野C窯跡	14世紀、山茶碗
138	曽野E窯跡	13～14世紀、山茶碗
139	曽野H窯跡	13世紀、山茶碗
140	曽野D窯跡	14世紀、山茶碗
141	種成5号窯跡	14世紀、山茶碗
142	種成3号窯跡	不明
143	余床A窯跡	13世紀、山茶碗
144	余床F窯跡	19世紀、陶器
145	余床B窯跡	14世紀、山茶碗
146	余床C窯跡	14世紀、山茶碗
147	七曲窯跡	14～15世紀、山茶碗、施釉陶器
148	北丘C窯跡	14～15世紀
149	北丘A窯跡	14世紀、山茶碗
150	北丘B窯跡	14世紀、山茶碗、施釉陶器
151	広之田A遺跡	中世
152	上半田川A窯跡	近代、磁器
153	上半田川遺跡	中世～近世

※施釉陶器＝古瀬戸

品野城はこの地を攻略した松平清康（家康祖父）より松平内膳（信定）に与えられ、桑下城はその家老永井（または長江）民部の居城とされている。

永禄年間の織田・今川の戦いについての確実な史料は実は明らかでない。しかし、寛政７年（1795）成立の地誌『因幡志』に船越氏所蔵の「今川義元感状写」があり、永禄元年（1558）科野城で合戦があり、科野（品野）城の武将船越五藤次に送られた感状で、このとき桑下城は今川方の城として織田と戦ったと考えられ、織田方との戦いは永禄元年、二年、三年にもあったとされ、永禄三年（1560）の戦いで、織田信長の総攻撃に会い、品野三城（品野城、桑下城、落合城）が焼き払われ、廃城になったと言われているが、このことを江戸時代の資料で確認することはできなかった。

品野城跡の発掘調査は行われていないが、土塁、虎口、横堀、堀切などの痕跡をよく留めており、建保年間（1213～1219）の築造とされ、後に桑下城と同様の終焉をたどったとみられている。最近の研究では、桑下城を館城、品野城を詰めの城として、二つの城を関連して捉えるようになっている。

また戦国時代には桑下東窯跡、西窯跡（大窯１・２段階）が操業していることから、桑下城跡との関連が注目されている。

第２節　調査の経緯と経過

1. 調査の経緯

桑下城跡範囲確認調査

平成９年（1997）度の事業として平成 10 年１月から３月にかけて県土木部（道路建設課）国道 363 号線道路改良関連の４遺跡（上品野蟹川遺跡　桑下城跡　桑下東窯跡　上品野西金地遺跡）範囲確認調査の一つとして桑下城跡の範囲確認を目的とする調査が 150㎡実施された。

担当者（現職名）　主査　北村和宏　（豊田西高校教頭）
　　主任　小澤一弘
　　調査研究員　後藤英史（天白高校教諭）

調査方法：調査は、事前に調査対象地内のレーダー探査を行い、その結果をふまえ、適宜地内に試掘坑（トレンチ）を設定し、土層の断面監査、遺構の有無、遺物の出土状況を調査し、範囲を確認する方法で実施し、試掘坑は 22 ヶ所である。

レーダー探査：平成 10 年２月３日～７日に行い、地表面で視認できる本丸周辺の堀切および丘陵地を造成した平坦面を中心にほぼ全域を探査した。その結果、本丸周辺の堀切およびその西方の尾根上で堀切りの存在が、さらに数ヶ所の地点で溝状遺構および基盤の高まりなどが想定された。

試掘調査：レーダー探査の結果および上品野村古城絵図・佐分清親氏作成の「縄張り」図・地形をふまえ、平成 10 年３月 12 日から 30 日に適宜地内に試掘坑（トレンチ）を 22 ヶ所設定し、調査を実施。土層の断面監査および遺構・遺物の有無を調査し、遺跡の範囲を把握した。

試掘概要：地形的なまとまりから便宜的に（1）本丸以東部分では T01 から T04、（2）本丸部分では T15 から T22、（3）本丸以西部分では T05 から T14、の３地区とした。

範囲確認調査の成果：試掘坑設定位置に制約があったが、調査所見、地形等から桑下城の範囲の東限と西限が確認された。

東限　本丸の東側堀切りの東側掘肩には平坦面が展開し、平坦面および東斜面に設定した T01 から T04 からは明確な遺構は認められなかったが、大窯期の遺物が出土し、谷を挟んだ対面には時期を同じくする桑下東窯跡があることから、両者の関連が予想されるところであり、T01 から T03 の東端の谷筋（桑下東窯跡の西限）を桑下城の東限と考えられた。

西限　本丸西側の尾根筋上および南側斜面には、造成面（明治 17 年の地籍図に畑地と示される）が展開する。遺構および戦国時代の遺物の出土をみたのは本丸部分を除くと T09 と T11 で、造成面のトレンチでは遺構、遺物は認められなかった。戦国期の山城の他調査例からすれば、この時期の遺構、遺物が僅少であるのを通例とする。少なくとも明治 17 年段階まで畑地として利用されていたことが知られる平坦面が続く T10 の西側尾根部分までも、地形的なまとまりからみて、遺跡の範囲に含めると判断された。

2. 調査の経過

桑下城跡の発掘調査は、国道 363 号道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、4 次に亘る調査が実施された。

第 1 次調査　平成 16 年度（2004）は平成 17 年 1 月から 3 月まで 1,000㎡、
調査担当者：主査　酒井　俊彦　　調査研究員　樋上　昇
発掘調査支援：株式会社アコード　　調査補助員　西村　匡広
当初城外とされていた丘陵西端部を調査し曲輪を多数確認した。曲輪は南側と西側のみに築かれており、北側は武者走りのわずかな平坦面のみ確認された。桑下城の範囲が丘陵西先端まで広がることが判明した。

第 2 次調査　平成 19 年度（2007）は平成 19 年 8 月から平成 20 年 3 月まで 4,000㎡、
調査担当者　主査 小澤　一弘
主任　宇佐見　守
（現職名　愛知県埋蔵文化財調査センター 調査研究課長補佐）
発掘調査支援　株式会社シン技術コンサル
現場代理人　松田　秀貴
調査補助員　菊池　康一郎　　測量技師　本田　豊
本丸の北西部分とそれを囲む堀と本丸北東にある平場を調査。本丸を囲む堀は東と西が薬研堀、北西が幅 12m、深さ 4m の巨大な箱堀で、東西の堀を掘削した時の土を堀の外側に盛り上げ土塁を築いていたことが確認された。東堀から鏡面が現在でも鮮明に映る『菊花双鶴鏡』が出土した。木製品も堀から多く出土。本丸では 2m もの整地層と掘立柱建物跡（1 間× 4 間）、礎石建物（1 間× 1 間）、井戸を検出した。

第３次調査　平成 20 年度（2008）は平成 20 年８月から平成 21 年３月まで 3,300㎡、

調査担当者　主任専門員　小澤　一弘

調査研究主事　宇佐見　守　　調査研究主任　武部　真木

発掘調査支援　株式会社シン技術コンサル

現場代理人　松田　秀貴

調査補助員　大島　秀俊　　測量技師　足立　秀彦

丘陵中央部分、本丸の西側で、丘陵を切り込んで造成された 14 ヶ所の曲輪を調査。曲輪から竪穴状遺構（番小屋）、掘立柱建物、柵列、調査区南西部の曲輪で井戸、池、石組み溝を伴う庭園を確認した。本丸西側の堀は３回の掘り返しを確認。また縄文時代の陥穴、古代の焼失住居、中世の山茶碗窯などの築城以前の遺構も確認した。

なお新たに発見された山茶碗窯については、『上品野Ｅ窯跡』として別に発掘調査が実施され、平成 23 年３月に愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 170 集として刊行された。

第４次調査　平成 21 年度（2009）は平成 21 年９月から平成 22 年１月まで 2,100㎡

調査担当者 調査研究専門員　小澤　一弘

調査研究主事　宇佐見　守

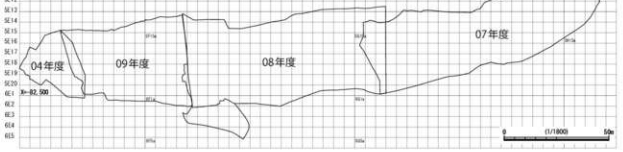
調査研究主事　伊奈　和彦（現職名　愛知県埋蔵文化財調査センター 主任）

発掘調査支援　国際文化財株式会社

現場代理人　足立　勤

調査補助員　坂野　俊哉　　測量技師　川崎　雄二

丘陵の西側部分で第１次調査の東側、第３次調査の西側の位置関係となる。丘陵に沿って平な面を造成しており９ヶ所の曲輪を確認した。９曲輪では整地面、焼土面、築城面の３面を確認し、鳥形水滴、猪形水滴、兎形水滴、鍬形台、茶臼等が出土した。９曲輪は出土遺物が豊富で、９曲輪が重要場所であつたことが窺える曲輪でもある。



第５図　調査区グリット図 (1:1800)

調査に伴って期間中に現地指導を受けた。

平成16年度　平成17年 2 月23日　千田　嘉博　先生（国立歴史民俗博物館）
平成19年度　平成20年 1 月 7 日と 3 月12日　千田　嘉博　先生（奈良大学）
平成20年 1 月24日　上村　喜久子　先生（名古屋短期大学名誉教授）
平成20年 1 月30日　渡辺　誠　先生（名古屋大学名誉教授）
平成20年 2 月 8 日　柴垣　勇夫　先生（愛知淑徳大学）
平成20年度　平成20年12月22日　千田　嘉博　先生（奈良大学）
平成21年 1 月16日　丸山　宏　先生（名城大学）
平成21年 2 月17日　仲　隆裕　先生（京都造形芸術大学）
平成21年度　平成22年 1 月 8 日　丸山　宏　先生（名城大学）

調査期間中に、2回の現地説明会と1回の地元説明会を開催し、参加者は総計905名となった。

平成19年度の平成20年2月16日（土）現地説明会。午前と午後の2回で参加者は524名。
本丸と大規模な堀の遺構に驚いた様子で、菊花双鶴鏡と漆椀、杓子、陶物の木製品や陶磁器の出土遺物を展示。菊花双鶴鏡の前に人垣ができる。午後は雪がちらつく寒い日でもあった。

平成20年度の平成21年1月24日（土）現地説明会。1回の説明会で参加者は300名。
庭園と番小屋と称した竪穴遺構と土塁の遺構。出土陶磁器の展示、前年出土の和鏡も展示。

平成21年11月21日（土）地元説明会。参加者は81名。
9曲輪の遺構を中心に鍬形台や猪・兎・鳥形の水滴などの出土陶磁器を展示。

3. 整理・報告書作成

平成22年（2010）度より平成24年（2012）度までに二次整理と報告書作成作業を実施した。遺物はP27のコンテナに207箱、整理作業は出土陶器片を1点毎に器種分類し、口縁、底部、胴部に分け、カウントし、出土遺物を復元、実測、遺構図面の整理、図版の作成等を行った。また木製品と金属製品の一部について保存処理を実施した。

平成22年度　整理担当者　主任専門員　小澤　一弘
整理作業員　木下　由貴子　　小島　裕子　　山田　有美子
平成23年度　整理担当者　主任専門員　小澤　一弘
整理作業員　木下　由貴子　　瀧　智美
平成24年度　整理担当者　嘱託員　小澤　一弘
整理作業員　阿部　裕恵　　木下　由貴子　　鈴木　好美　　瀧　智美
前田　弘子

報告書作成に伴って遺物についての指導を受けた。

平成24年3月22日　藤澤　良祐　先生（愛知学院大学）
3月23日　井上　喜久男　先生（愛知県陶磁資料館）

第２章　遺構

第１節　調査の概要

桑下城は、近世の城館絵図「春日井郡上品野村古城絵図」136.5㎝× 111.5㎝（蓬左文庫蔵）に見られる。絵図は廃城後の状況が描かれ、本丸の北の堀の一部が「水堀」として、本丸の北東部分には土塁、本丸の東と南側に曲輪が描かれているが、本丸の西側は「芝」と書かれ曲輪はない。「芝」の南側は「侍屋敷」「畠」とあり、丘陵部分は「畑」丘陵下は「畠」と区別され、「侍屋敷」と細長く東に突き出た形の「芝」の部分が丘陵下と考えられる。蓬左文庫蔵の絵図作成は正保年間にはじまり、慶安もしくは承応年間の初期には完了したと推測されている。現在も本丸推定地の南側麓には「城前」の地名が残る。調査範囲が城の裏手部分の一部ということもあり、桑下城の全貌は未だ不明である。

桑下城の防御施設は主郭の周囲が顕著で西・北・東側を画する堀切が見られる。

主郭中央北側には主郭より低い突出したテラス状平坦面が見られ、平坦面の周囲は北側と東側の形状が崩れ、テラス状平坦面を挟み北側の堀は北西箱堀と北東箱堀に区別できる。

西堀（薬研掘）は上端幅 10m、深さ 3.1m である。北側の北西堀（箱堀）は東西 16m × 4m40㎝、で堀の底部が西堀の薬研堀の底より約 80㎝程低い。主郭と箱堀底の比高差 8m を測る。北東堀（箱掘）は主郭側に弧状を呈した堀で東堀（薬研堀）までの間に三段の段があり南側が高い。東堀（薬研掘）は調査区外に続き、現状では幅約 7m 主郭との比高差約 6m を測る。東堀（薬研堀）の主郭側には土塁が見られる。

主郭の周りの遺構は城の最終段階の姿で、当初はどのような規模であったのか、主郭西縁の約 2m の整地層の下からは、別の軸線方向をもつ溝 299SD と 309SX とピット列が確認されていることから、改修を繰り返したものと思われる。主郭の北東側に土塁の一部が残り、その他遺構の配置等から北・西側にも土塁を巡らせていた可能性が高いが主郭の東側は判然としない。主郭平場より標高が高い北東方向の尾根に竪堀（最大幅 3m70㎝深さ 1m20㎝）が見られ、尾根を遮断し城の防衛施設としている。竪堀（西斜面）の反対側（東斜面）の低い谷を挟み桑下東窯跡の平場へと繋がっていくことから、主郭の遮断機能は西側に比べ厳重とはいえない。

第６図　調査区別曲輪図 (1:1800)

主郭の西側、西堀の対岸には櫓跡と推定される高まりがあり、そこから尾根上の北縁に沿って東西方向に土塁の痕跡が残る。

櫓跡の付近では、床面積約 9㎡前後の竪穴状遺構が 3 基検出された。これらは眺望の開けた位置に配置されており、番小屋と推定している。

尾根上では中心を幅 1m 深さ 1m30cm規模の溝が東西方向に掘削されているが、城館の時期の早い段階に埋められている。

また曲輪縁辺ではなく、土塁や曲輪の壁に沿う方向で複数のピット列が検出される場合があり、これらを柵列でなく建物跡とするならば、床面の一方を段の上にさしかける「掛け造り」のような形が想定できるかもしれない。

調査区からは、丘陵西端から尾根南側斜面にかけて、削平整形された平坦面曲輪が連続して主郭を含め曲輪が検出された。利用頻度の高い空間、あるいは恒常的な居住空間として利用を伺わせる曲輪は、07 区主郭と丘陵西寄りで尾根南斜面を長方形に削り込み整形した 09 区 9 曲輪との二例のみで、搬入品である常滑産陶器壺・甕類、土師器皿、土師器鍋、貿易陶磁器などが散漫に分布し、重複する遺構群が確認されている。周辺の窯跡（桑下窯跡 .桑下東窯跡）からの廃棄品と区別が難しいものの、古瀬戸後 Ⅳ 新段階から大窯 3 段階まで連続して比較的多くの遺物が出土している。

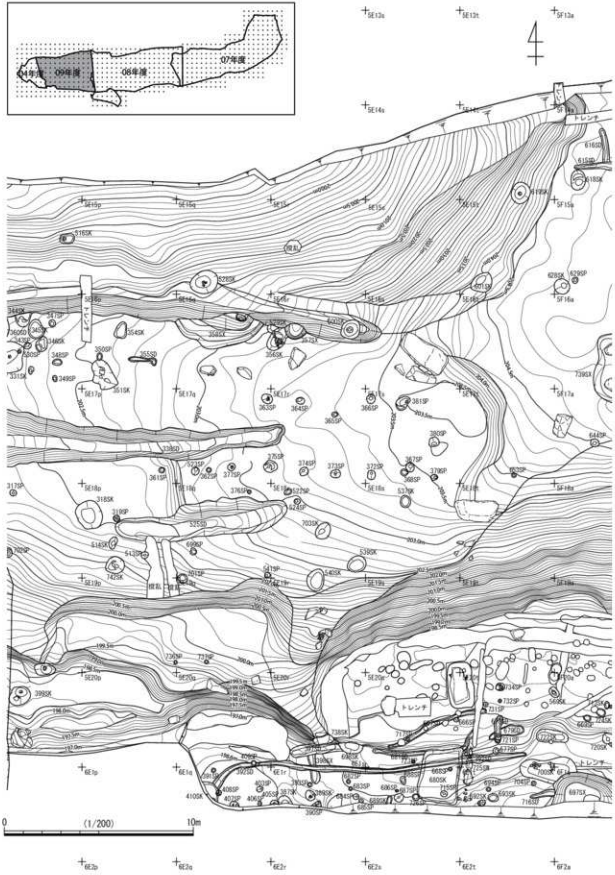
07 区主郭の範囲は東西 43m を測ることから南北も同規模の方形に近い形状と推定される。調査範囲は面積の 1/2 に満たない北側部分であり、最終段階の平坦面には 1 間× 4 間の掘立柱建物跡、溝、土坑、井戸があり、このうち北東寄りで確認された 090SX 土坑は周囲に大型の石材や拳前後の円礫が散乱し、庭園を構成するために搬入された石材と想定している。北辺周縁は特に遺構の密度が低く、唯一確認された 1 × 1 間の特殊な形状の礎石建物跡は、北側の低いテラス状平坦面と関係あると考えられ、平坦面に片面石組の井戸があり竹樋が通され、土坑に流れるように設置されていた。北東堀では土塁の崩落土などの堆積層の下より下駄や漆碗やしゃもじ、など木製品のほか白銅鏡 1 点が出土している。鏡の直径は 11.3cm、鏡背の文様から「菊花双鶴鏡」で 14 世紀代に京都の工房で製作されたものと思われる。

西側屋敷地 09 区の 9 曲輪は平坦面が 25m × 10m 程度と規模は然程大きくはないが整った形状をしており、東側、西側はそれぞれ土塁、石積などで明確に区切られている。整地層が確認でき、溝や建物跡等から少なくとも 3 段階に分けられる。建物跡は 2 段階に区画溝と 2 間× 3 間？の掘立柱建物を検出し、区画溝と建物跡とほぼ重複する 42㎡程度の範囲に炭化物の集積層を確認した。9 曲輪では使用痕のみられる碗、皿、擂鉢類のほか茶入、動物形水滴（猪、兎、鳥）、特異な遺物として鍬形台 1 点が出土した。

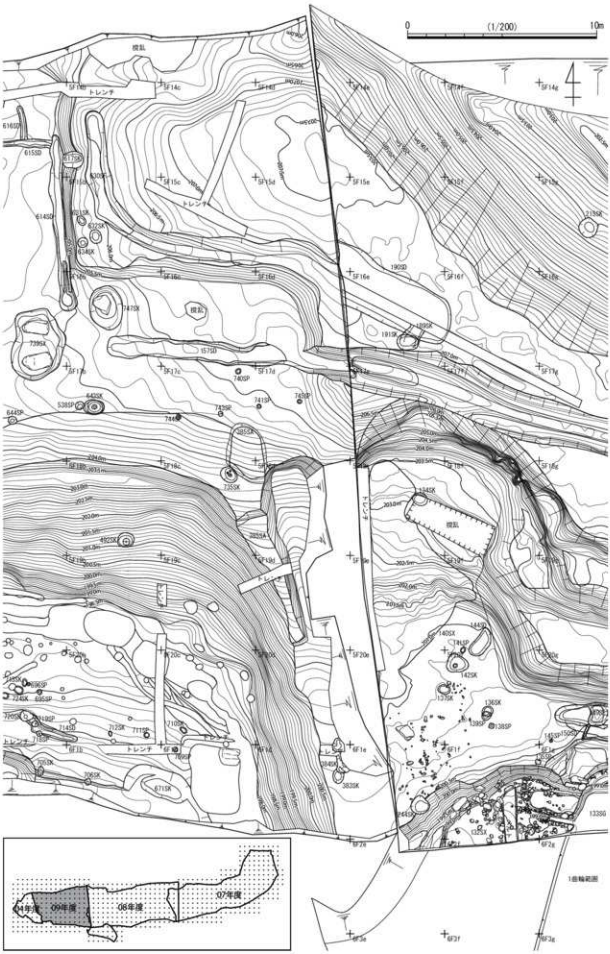
そのほか、西側曲輪の東側下段にやや広い平坦面があり、調査範囲内では築山、池、井戸からなる小規模な庭園遺構の一部が検出されている。

桑下城跡の存続時期は、出土遺物より古瀬戸後 Ⅳ 期段階頃から先述の 2 カ所の曲輪（付近）で造成と居住が始まり、大窯 1 ～ 2 段階にかけて盛期を迎える。主郭最終面で検出された遺構群（井戸・土坑）には大窯 3 段階の遺物が含まれるが、主体となる量ではない。

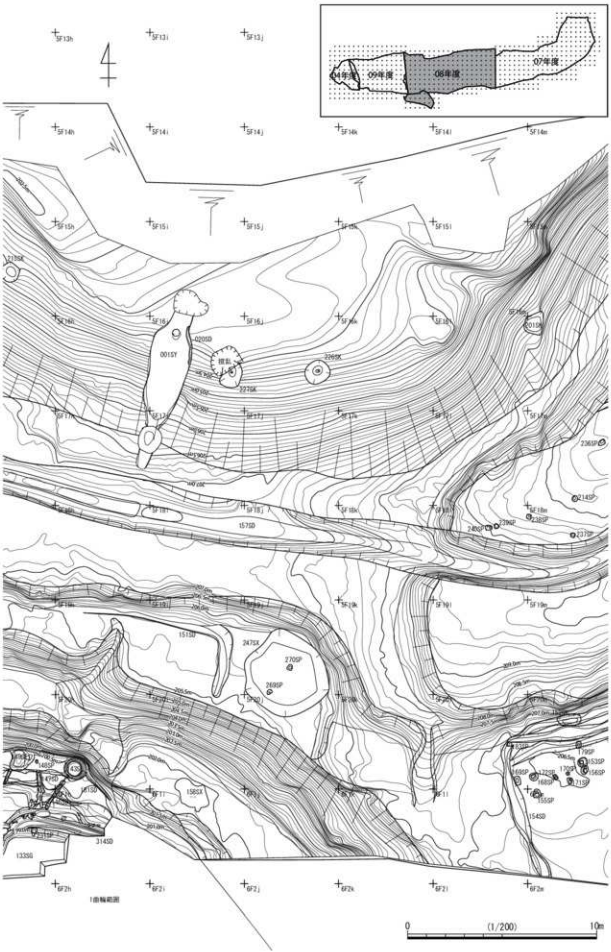
第 7 図　04 調査区全体図 (1:200)



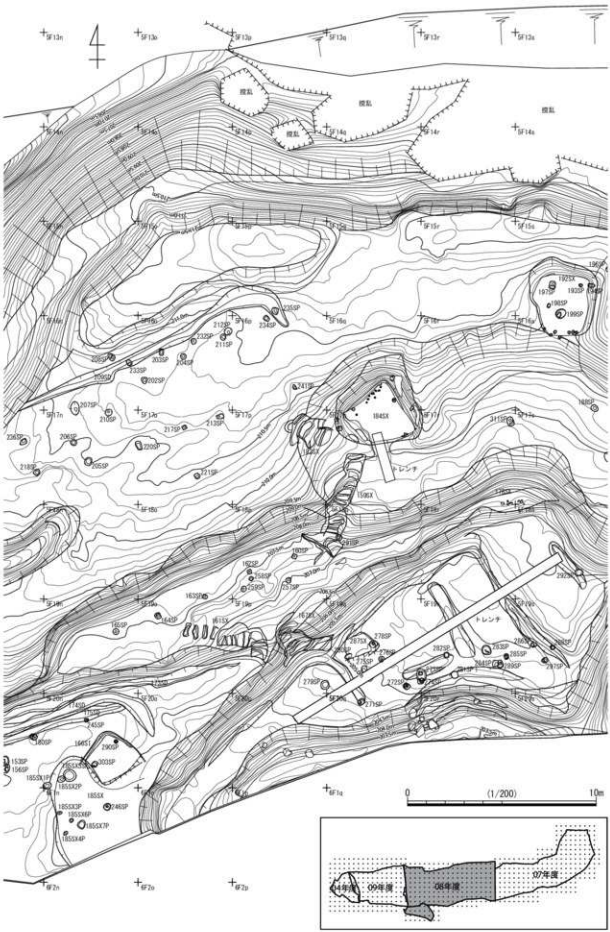
第8図　09 調査区全体図 (1:200)



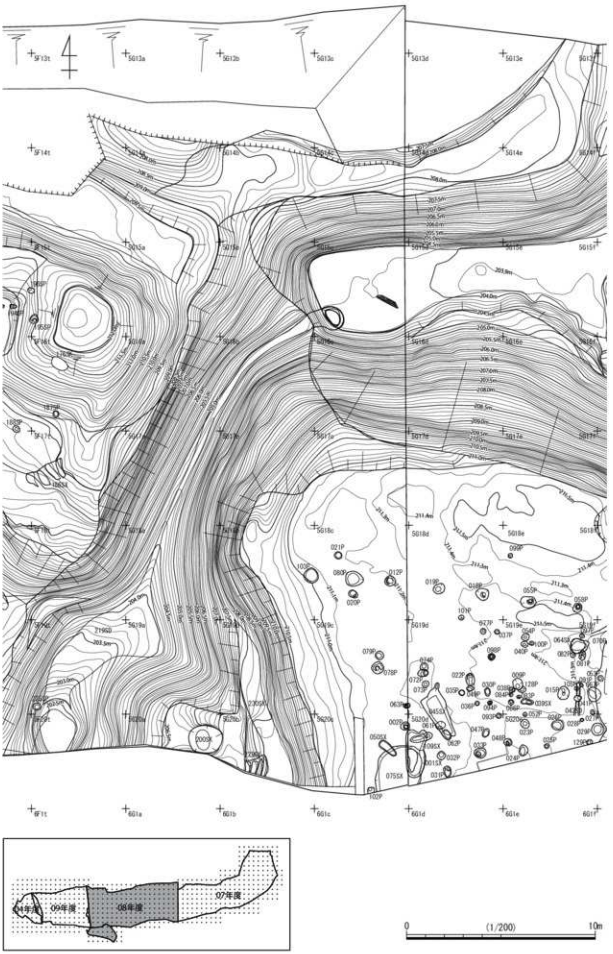
第９図　09 調査区全体図 (1:200)



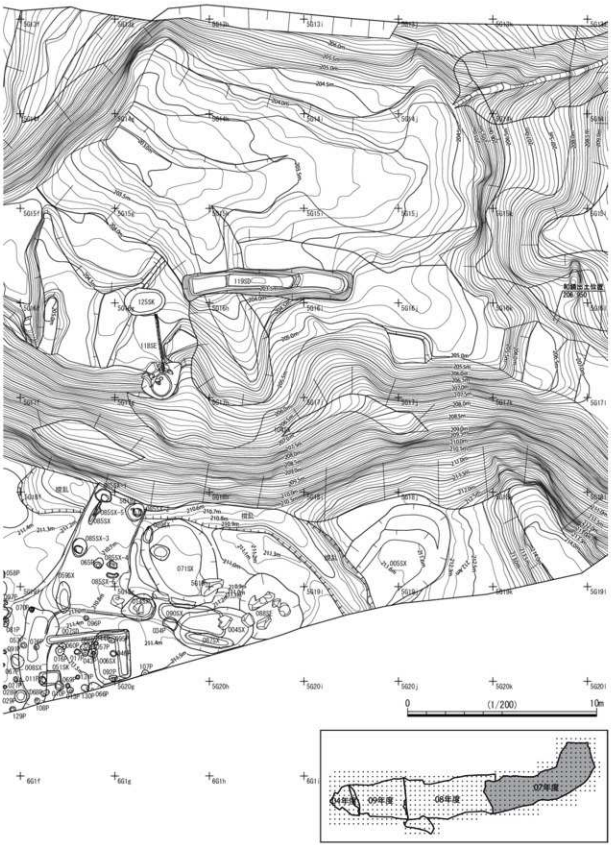
第 10 図　08 調査区全体図 (1:200)



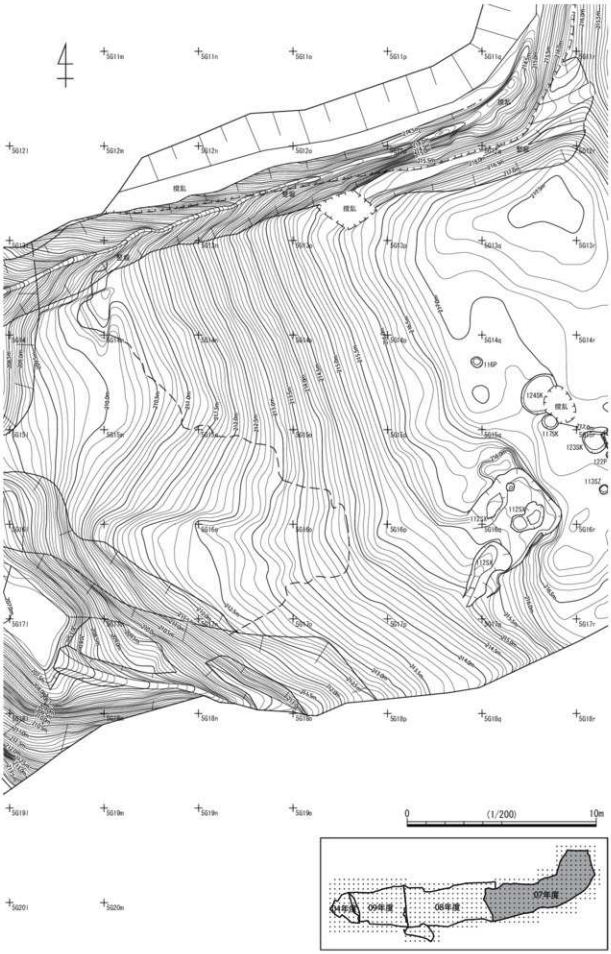
第 11 図　08 調査区全体図 (1:200)



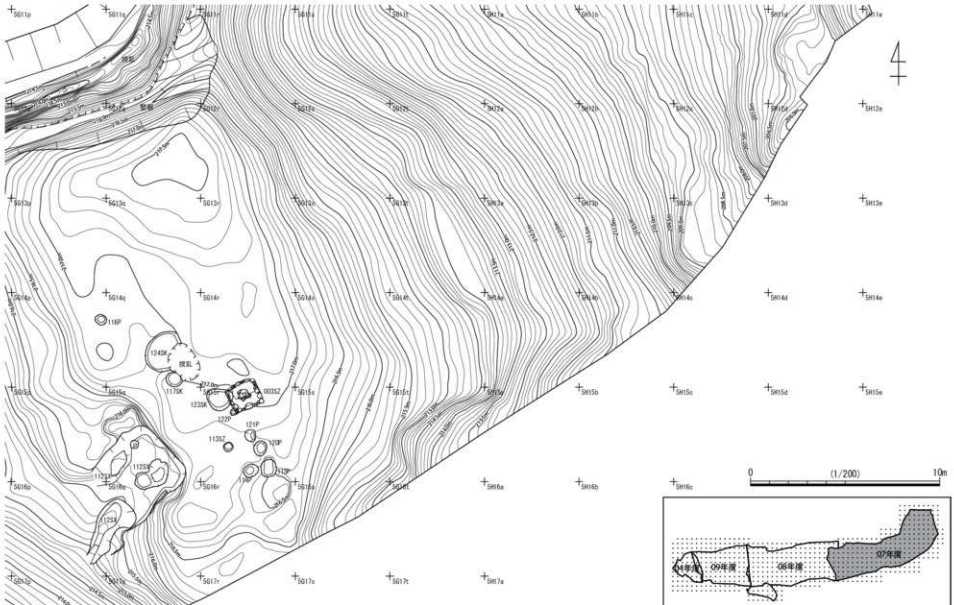
第 12 図　08・07 調査区全体図 (1:200)



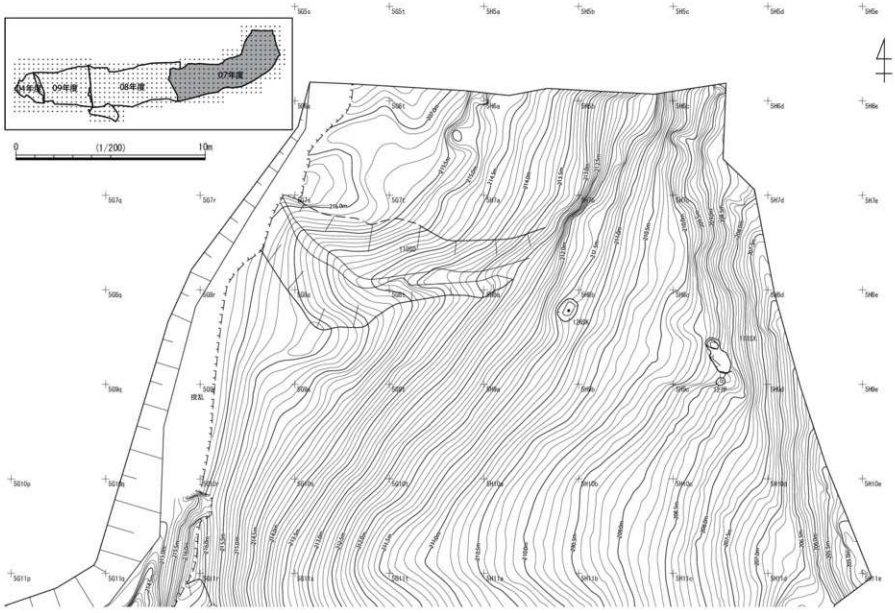
第 13 図　07 調査区全体図 (1:200)



第 14 図　07 調査区全体図 (1:200)



第15図　07調査区全体図(1:200)



第16図　07調査区全体図(1:200)

第 2 節　16 年度 04 調査区、21 年度 09 調査区

1. 平成 16 年度 04 調査区概要

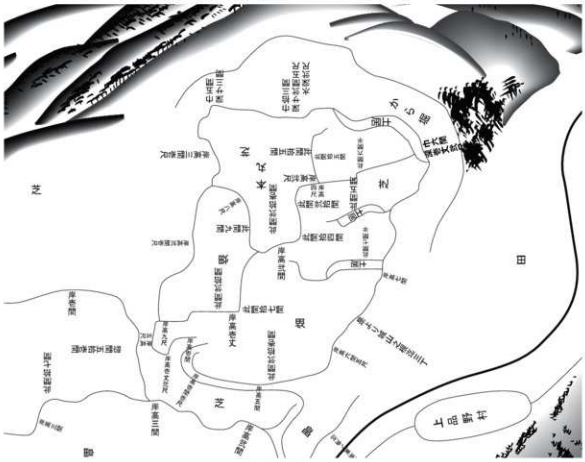
丘陵の西端部の調査区で、当初桑下城の範囲に入るか否か疑問視されていた丘陵西端部であった。畑として改変はうけていたが、8 ヶ所の平場を確認した。丘陵西南端から平場を 1 曲輪とし番号をつけた。

曲輪は中馬街道を意識して南側と西側にのみ築かれている。

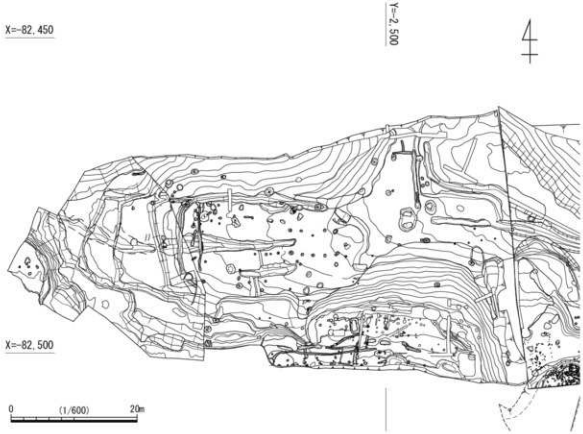
丘陵北側は武者走りと思われる僅かな平坦面（最大幅 1m）のみである。丘陵頂部を利用した曲輪は南北に長い曲輪で 7 曲輪と 8 曲輪が、一番広い 8 曲輪は南北約 13m、東西約 5m を測る。丘陵南側に見られる 1 曲輪から 4 曲輪の南側が調査区外でそれぞれの規模は不明である。頂部を利用した曲輪は広く、丘陵の斜面を利用した曲輪は狭いようである。6 曲輪、7 曲輪、8 曲輪の中央を縦断する SX02 は 09 調査区 338SD に繋がっている（第 7 図）。

古瀬戸後期から大窯期にかけての遺物と近世から近代の遺物が出土している。近世から近代の遺物が多く、廃城後、平場が利用されていたことが窺われる。

『上品野村古城絵図』には 04 調査区部分は「芝」と記載が見られるのみである。桑下城「本丸」の西側、「侍屋敷之地」の北側である。



第 17 図　上品野村古城絵図　トレース図より



第 18 図　04・09 調査区 (1:600)

2. 平成 21 年度 09 調査区概要

平成 16 年度 04 調査区の東隣で、庭園状遺構等を検出した 20 年度 08 調査区の西隣になる。調査区内に大小の 9 ヶ所の平場が確認でき、平場を曲輪と考え、上位よりそれぞれ 1 ～ 9 曲輪とした。遺構は、隣り合う調査区から続く大溝、柵列、通路状遺構、上面が水平に据えられた巨石、石垣、石列などを検出した。9 曲輪では、築城当初と考えられる面、大規模に造成された面、火災後の整地面、の 3 面 3 時期を確認した。各面より井戸、石組みの溝、柱穴など多くの遺構を検出した。

その他の遺構・遺物として、縄文時代の陥穴 13 ヶ所と、縄文時代の石鏃、旧石器時代の細石核が出土した。

なお遺物器種名（No.）は遺物登録番号である。

（1）1 曲輪

09 調査区最頂部に位置し、東西約 14 m・南北約 12 m を測る。方形を呈し、東辺が 4 mほど張り出した形である。全体が盛土され、調査区東端の木丸方向から 3 曲輪へ続く 157SD が埋められている。西側に位置する 2 曲輪と南側に位置する 3 曲輪との間は段差となる。曲輪北端で江戸後期の完形擂鉢（1137）が伏せた状態で出土し、城廃絶後、平場が利用されていたようである。

630SF

曲輪の縁辺を囲むように L 字状になっている。西辺から南辺に沿って見られ最大幅約 1m20㎝を測る。

（2）2 曲輪

1 曲輪の西隣に位置し、東西約 15 m・南北約 14 m、南端から西端を結ぶ長さが約 20 m の三角形を呈し、

北西側は急な崖となる。3曲輪との間には明瞭な段差はなく、築城時には3曲輪と一体の曲輪であったと推定できる。

614SD

曲輪東辺の1曲輪斜面裾に沿う南北方向の溝、長さは約9mを測る。

(3) 3曲輪

1曲輪・2曲輪の南側に位置し、東西最大23m・南北最大10mを測る長方形を呈する。2曲輪との間には明瞭な段差はなく、築城時には2曲輪と一体の曲輪であったと推定できる。

157SD

本丸から曲輪中央まで延びる幅約1mの大溝である。3曲輪中央で花崗岩の固い岩盤となり収束する。

739SX

157SDの収束地点から西へ約2m先に位置し、巨石2個が上面を水平に保つように据えられている。石は2つとも岩盤を深く掘り込んで根石と土で据えられており、石の下から大窯期の灰釉丸皿(8)、小杯(9)が出土し周辺から大窯期の仏花瓶(10)、印花のある丸皿(11)、天目茶碗(12)が出土した。

748SA[第19図]

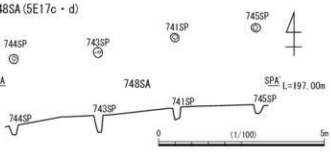
曲輪南端に、2m間隔で4本の柱穴741SP・743SP～745SPが直線に並ぶ柵列である。柱穴はいずれも直径25cm程で、深さは約30～50cmを測る。柵列の南側は崖となっている。

(4) 4曲輪・5曲輪

4曲輪は3曲輪の西隣に位置している。4曲輪の南西部分に平場があり5曲輪とした。平場の北側は4曲輪との間に段差がない。東側に段差があるものの、畑の耕作に伴う近世以降の溝が認められ、畑の造成による平場と思われ、4曲輪と5曲輪は一体の曲輪と推定できる。両曲輪を合わせると、東西最大32m・南北最大18mを測る長方形をした調査区内最大の曲輪である。4曲輪北東の2曲輪との境のくびれ部分に廃棄された集石が見られ、この集石部分から大窯期の灰釉小壺(277)や鉄釉筒型容器(284)が出土した。

321SD

曲輪西端で南北方向にやや内側に弧を描いて走る溝で、長さ約15m・幅約0.5～1.2mを測る。溝は大溝(338SD)を切って交差しており、338SDが埋められた後に掘削されている。4曲輪で改修が行われたことを示す遺構である。



第19図　09区748SA(1:100)

330SD

南北方向に直線的に走る溝で、長さ約11m・幅約30～50cmを測る。大溝(338SD)を切って交差し、338SDと重なる部分、溝の片側(東側)に石組みが見られる。土留めのための石組みのようである。この溝も4曲輪で改修が行われたことを示す遺構である。大窯期の擂鉢

(21) が出土した。

338SD

曲輪中央を貫く大溝で、平成 16 年度調査区から続いている。最大幅約 3 m・最深部までの深さ約 1 m を測る箱堀で、西に行くほど幅広になっており、形状から通路とも考えられる。この溝は本丸方向から 3 曲輪に続く大溝（157SD）に繋がるかと思われたが、4 曲輪中央やや東寄りの位置で収束している。大窯期の燭台（22）が出土しているが遺物は少ない。

525SD

大溝（338SD）から 3 m程南で、並行するように東西に走る溝で、長さ約 9 m・最大幅約 2 mを測る。

534SA[第 20 図]

曲輪中央から東へ大溝（338SD）の南辺に沿うように約 13 mの長さで続く柵列である。8 本の柱穴 361SP・367 SP・372 ～ 375 SP・377 SP・523SP が認められる。柱穴の直径は 30 ～ 80㎝程、深さも 20 ～ 80㎝と一定していない。柱間は 1.8 から 2.2 mを測る。375SP から古瀬戸の瓶子（24）が根石とともに出土。

並行して走る 338SD は 375 SP の辺りで収束する。

535SA[第 20 図]

534SA と 536SA を閉じる形で、534SA 寄りに南北に並ぶ柵列で、柱穴は 2 本 379SP・380SP である。柱間は約 2 mを測る。

536SA[第 20 図]

大溝（338SD）の北辺ラインに沿うように約 7.5 mの長さで続く柵列である。338SD の収束地点から東に 4 本の柱穴 363SP・364SP・366SP・381SP が認められる。柱穴の直径は 50 ～ 80㎝程、深さは 40 ～ 80㎝である。柱間は 363SP と 364SP 間、366SP と 381SP 間が、共に約 1.7 mであるのに対して、364 SP と 366 SP の間は約 4 mと離れている。534SA・535SA・536SA は 338SD の収束地点をコの字状に囲むように並んでいる。364SP からは土師質の内耳鍋（23）と大窯期の筒型容器（285）が出土。

512SW

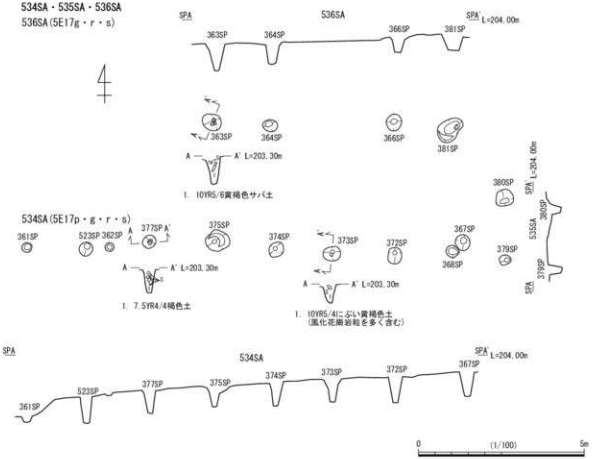
大溝（338SD）は 16 年度 04 調査区へと延びており、4 曲輪の端で幅約 2 mにわたり石を組んで塞ぐようにしている。4 曲輪を改修、あるいは造成した際の土留めと考えられる。

(5) 6曲輪

4 曲輪・5 曲輪の南側に位置し、東西最大 11 m・南北最大 4.5 mを測る。4・5 曲輪の南側、7 曲輪・8 曲輪の北側、9 曲輪の西側に位置し、それぞれの曲輪との間に明瞭な段差があり、独立した平場となっている。遺構は直径 20㎝程のピット 2 基 736SP と 737SP を確認した。

(6) 7曲輪

6 曲輪の南西側、8 曲輪の西側に位置し、両曲輪との間に明瞭な段差がある。曲輪の範囲は 16 年度 04 調査区へと続き、04 調査区分を含めると東西最大 20 m・南北最大 3 mを測る帯状の平場となっている。南側は崖となっており、崖際には近・現代の畑の造成時に築かれたと考えられる石積みを検出した。石積



第 20 図　09 区 534SA・535SA・536SA(1:100)

みの石のいくつかには被熱痕が見られ、城時代の石を転用したとも考えられる。

なお縄文時代の陥穴を 2 基検出した（後述）

(7) 8 曲輪

6 曲輪の南側、9 曲輪の西側に位置し、6 曲輪のある北側崖は切り立っている。南側は盛土され調査区外は崖となる。曲輪の形状は長径約 7 m、短径約 5 mの楕円形を呈する。2 面を確認した。

第 1 面　西側の 9 曲輪との間には石垣（395SW）が築かれ、曲輪間は遮断されている。

386SX

曲輪面積の 3 分の 1 近くを占める長径約 2 m・短径約 1.2 mの楕円形を呈し、多量の中礫や大礫にまじり大窯期の挟み皿（38）、鉄釉反皿（39）、灰釉丸皿（40）、土師質内耳鍋（41）が出土した。

395SW［第 23 図］

9 曲輪との境を遮断するように南北方向に築かれた、幅約 3.8 m・最大高約 1.5 mを測る石垣である。裏込石はなく、古い時期の石垣の特徴を有する。本遺跡において唯一認められる石垣である。395SW の北端には 9 曲輪との境を区切るように土塁状の高まりがあり、土崩れを防ぐように東西方向に約 70cmの

石組みが見られる。石垣の下から大窯1段階の天目茶碗（154）が出土した。

396SD

長さは約2.5 mで東西方向に延び、西端は土坑状の溜まりとなる。多量の中礫～大礫で埋まっていた。礫に交じり古瀬戸の広口壺（43）、大窯期の焼台（42）、甕（44）などが出土。上層からは近世と近代の遺物が出土している。

第2面 [第23図]

9曲輪との境の395SWを外すと基底石の据えられた面に炭化物が広がり、石垣の下から大窯期の天目茶碗(154)が出土したことから、曲輪の南側は盛土され、盛土上面と下面で9曲輪第3面に続く柵列（430Sと431SA）を検出した。下面で検出した溝392SDも9曲輪第3面へと続いており、築城時には9曲と一体の曲輪であった。

392SD

東西方向に走る溝で、8曲輪の西端から9曲輪の中ほどまであり、長さ約17 m・幅約30～50㎝を測る。8曲輪と9曲輪が一体の曲輪であったことを示す遺構である。8曲輪西端の392SDの取束地点先にある410SKからは狛犬の鼻（1188）が出土した。

430SA [第21図]

曲輪南端の盛土上面で検出。8曲輪から9曲輪にかけて2 m間隔で5本の柱穴407SP・405SP・390SP・684SP・687SPが約9 mにわたって直線に並ぶ柵列。柱穴は直径約40～50㎝、深さ約50～70㎝を測る。407SP・405SP・390SPからは根石が出土。柵列の南側は崖となっている。

431SA [第21図]

曲輪南端の盛土下面で8曲輪から9曲輪にかけて5本の柱穴408SP・403SP・393SP・682SP・688SPが約10 mにわたって直線に並んでいる。柱穴は直径約20～40㎝、深さ約10～50㎝を測る。

(8) 9曲輪

3曲輪と4曲輪の南側崖下、20年度08調査の庭園遺構の西側に位置する。08調査区西側と9曲輪との間に土塁（385SA）が築かれ、東側の法面も北側と同様な急峻な法面となり、両曲輪を隔てている。

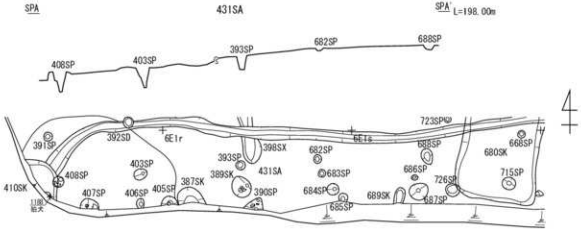
曲輪の平坦面は東西約25 m・南北約10 mを測り、250㎡程の広さである。他の曲輪と異なり、少なくとも3度の改修が行われ、遺構と出土遺物の多さから屋敷地と推定できる。曲輪中央部分で焼土や炭化物、被熱した石などが出土した。火災後の整地面（第1面）、大規模に造成された面（第2面）、築城当初と考えられる面（第3面）の3面を確認した。

第1面 [第22図]

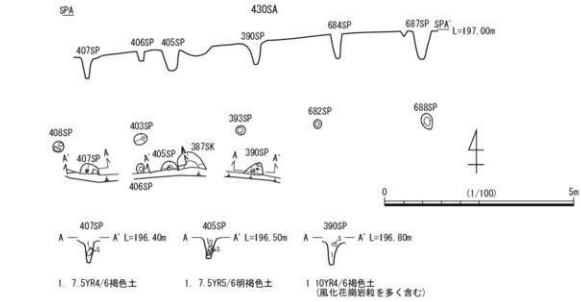
曲輪中央部分で東西方向と南北方向に走る複数の溝を確認した。石組み溝や、溝周辺の柱穴から、溝は区画溝で、複数の柱穴より建物が建っていたと推定される。石組み溝に使われている石の中には被熱したものが見られ、焼土や炭化物が混じる斑土が確認できることから、火災後の整地面と考えられる。曲輪の北東部分に3基の井戸が確認でき、生活空間であったことを窺わせる。出土遺物は天目茶碗、茶入、水滴などの大窯製品の他、茶臼（S-44）、鉄製刀子（M-5）、ガラス製数珠玉（S-12）、中国産染付碗（168）が出土しているが、土師質の鍋など日常生活用具は少ない。

430SA・431SA(6Elg・lr・ls)

431SA(6Elg・r・s)



430SA(6Elg・r・s)



第21図　09区 430SA・431SA(1:100)

区画溝

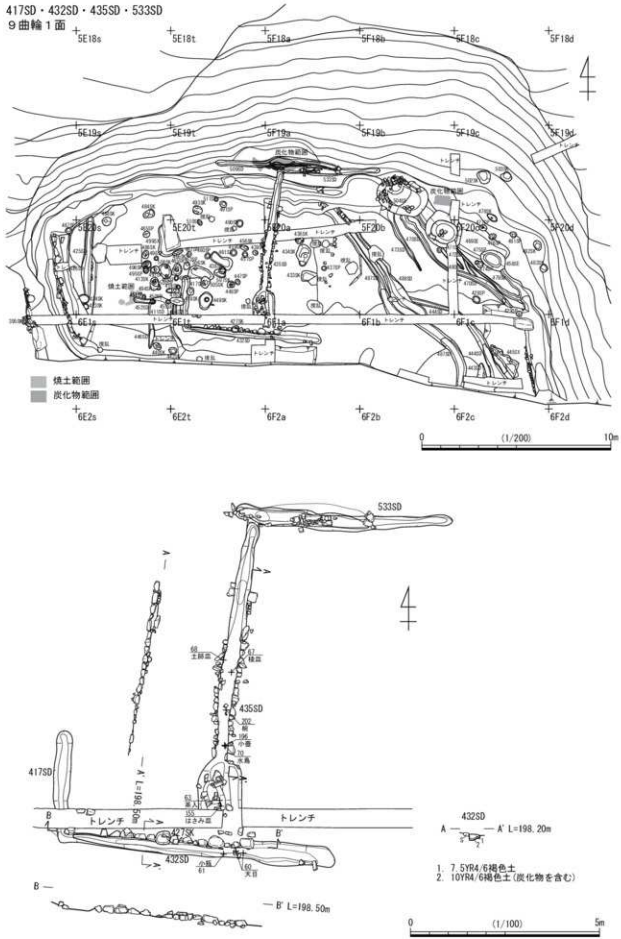
417SD・432SD[第22図]がある。

417SD

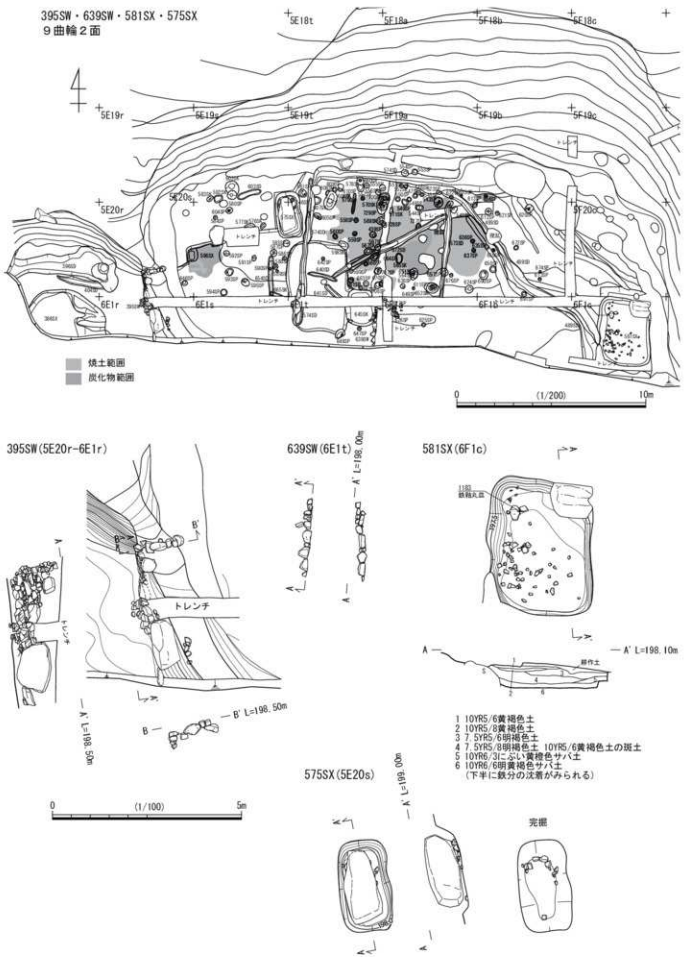
432SDの西端から直角に北へと延びる417SDは長さ約3m・幅約30～50cmを測る。溝の中から416SK（417SD西隣で検出した土坑）から出土した水指（59）と同一個体の水指が出土した。

432SD

曲輪南部に位置する東西方向に走る溝で、長さ約7.5m・幅約20～50cmを測り、北側部分のみに約5mにわたって石が組まれている。溝は焼土と炭化物で埋まっており、東西方向溝の中央部分に直接火を受けた痕跡が見られた。溝の中より大窯期の天目茶碗（60）と鉄釉小瓶（61）が出土した。



第22図　9曲輪1面417SD・432SD・435SD・533SD



第23図　09曲輪2面 395SW・639SW・575SX・581SX

435SD[第 22 図]

曲輪中央を南北方向に走る石組みの溝で、長さ約 8.5 m・幅約 30 ～ 50㎝を測る。石組みは一部崩れていたが、溝の西辺約 3 m、東辺約 4.5 mに渡り残存する。部分的に 3 段に積まれている箇所も見られる。溝の南端は石組みが崩落している。石組みに使われている石に被熱痕のあるものが多く火災後の整地が想定される。溝からは茶入（63）、合子（64）、灰釉筒型香炉（65）、灰釉豆皿（66）、鉄釉稜皿（67）、土師皿（68）、猪水滴（69）、水鳥水滴（70）など大窯期を中心とした遺物が出土した。

509SD

曲輪北端の斜面裾付近で検出した斜面裾に近い溝で東西方向に走る。長さ約 6.5 m・幅約 30㎝を測る。

533SD[第 22 図]

509SD の南隣に沿うように走る長さ約 6 m・幅約 30 ～ 50㎝を測る溝である。西端部分で南北方向に走る石組みの溝（435SD）と接している。溝の西部分で東西方向最大 3.5 m・南北方向最大 80㎝の範囲で炭化物が広がっていた。

土坑

曲輪中央を南北方向に走る石組みの溝（435SD）両側の建物が想定される周辺で、土坑を検出した。

416SK

417SD 西隣で検出。長径約 80㎝・短径約 40㎝の楕円形を呈する。417SD から出土した水指（59）と同一個体の水指が出土した。

433SK

曲輪中央やや東寄りで検出。短径約 50㎝ (長径は撹乱に切られて不明) の楕円形を呈する。大窯期の茶入（62）が出土した。

461SX

曲輪中央やや西寄りで検出。直径約 40㎝の円形を呈する。大窯期の灯明皿（1180）が出土した。

493SK[第 24 図]

461SX から北西方向へ 2.5 m程の地点で検出。長径約 1.3 m・短径約 1 mの楕円形を呈し、最深部の深さは 70㎝を測る。礫とともに大窯期の擂鉢（76）が出土した。

排水溝

曲輪の東部分で北西から南東方向に向けて走る溝を 8 条確認した 443SD・444SD・470SD・472SD・473SD・479SD・480SD・487SD。いずれも走る方向はほぼ同じであるが、長短はまちまちで、最長は 487SD の約 12 mで曲輪北斜面の裾部分から掘削されている。最短は曲輪南端の 443SD で約 1 mである。

曲輪が尾根の裾部分に位置していることから湧水が多く、排水対策としての排水溝であろう。また、井戸周辺にも何条かの排水溝がみられる。

井戸

3 基の井戸 458SE、469SE、504SE、は南東方向へ下る緩やかな斜面に直線的に並び、これと並行する溝やそれぞれの井戸を結ぶ複数の溝が確認できる。

458SE

長径約 1.5 m・短径約 1 mの楕円形を呈した井戸で、469SE から南東方向へ 1.3 m程下った位置である。

469SE[第 24 図]

長径約 2 m、短径約 1.6 mの楕円形を呈し、深さは 50㎝を測る井戸で、504SE から南東方向へ 50㎝離れた位置である。大窯期の擂鉢 2 点（71.72）と天目茶碗（73）小天目茶碗（74）が出土した。

504SE[第 24 図]

北東部の石組み井戸。石組みは北側のみに残り、長径約 3 m、短径約 2 mの楕円形を呈し、深さは 90㎝を測る。石組みに大窯期の焼台も使われていた。井戸の中より大窯期の天目茶碗（80）、鉄釉丸皿（78）、灯明皿（79）が出土した。

第 2 面[第 23 図]

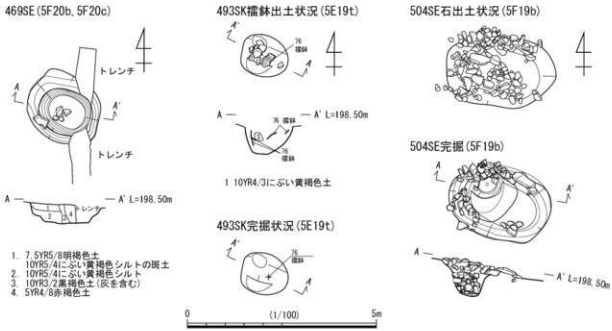
曲輪北側の斜面を削った土で南側の落ち込み部分を 1 m以上盛土して平場を造るなど、曲輪全体で大規模な造成が行われたことが分かる。曲輪中央では掘立柱建物の柱穴と考えられる複数のピットを検出し、これを取り囲むように区画溝が巡っている。2 間×3 間の掘立柱建物が想定される。区画溝と建物跡とほぼ重複する 42㎡程の範囲に炭化物と焼土が広がっており、火災が起こったことを示している。焼土塊には「すさ」が含まれており、土壁の建物が燃えたと推定できる。

区画溝

572SD、573SD、574SD がある。

572SD

北東より南西方向に斜めに走る溝で、長さ約 7 m・幅約 30㎝を測る。区画溝 574SD に囲まれた焼土面の中央部分に位置する。溝の中に焼土塊が多数埋まっており、焼土塊は壁の一部である。溝の底部から古瀬戸後期の鵜水滴（85）、大窯期の天目茶碗（86）・灰釉稜花皿（87）・徳利（88）・端反皿（89）・匣鉢（90）、鍍金された銅製飾り金具（M-7）が出土した。573SD と 574SD とは軸線が異なる。



第 24 図　09 区 469SE・493SK・504SE(**1:100**)

572SD の南側の焼土面からから大窯期の小天目茶碗（199.200）と小壺（水滴）（201）や鍬形台（M-8）が出土し、周辺からは鉄製の角釘（M-13 ～ M-17）が出土している。

573SD

中央を南北方向に走る溝で、長さ約 5 m・幅約 30㎝を測る。大窯期の鉄釉端反皿（1182）が出土した。

574SD

中央の焼土面の西側と北側を囲む L 字状の区画溝で、長さは西側部分が約 8 m北側部分が約 9.5 m、幅は約 30㎝を測る。匣鉢（91）が出土した。

575SX 巨石遺構［第 23 図］

巨石（上面は長辺約 2 m・短辺約 80㎝の長方形を測る花崗岩）は地山を掘り込んで据えられ、上面の水平を保つよう底部に石が挟み込まれている。574SD 西側約 50㎝に位置する。この巨石の南西約 3 mの位置にも、長径約 1 m・短径約 80㎝を測る楕円形の花崗岩の巨石が同様に上面を水平に保つように地山を掘り込んで据えられており、二つの花崗岩巨石が庭石か建物に伴うものか、その性格は不明である。

土坑

571SK

区画溝に囲まれた焼土の広がる部分の北側中央に位置し、長径約 30㎝・短径約 20㎝を測る小土坑である。東濃産山茶碗（83）と大窯期の匣鉢（84）が出土した。

606SK

区画溝に囲まれた焼土の広がる部分の北西角に位置し、長径約 1 m・短径約 60㎝を測る楕円形を呈する。大窯期の鉄釉蓋（98）が出土した。

柱穴

543SP、612SP、620SP

曲輪北側で検出した。543SP は東側の区画溝（573SD）の北端内側に位置し、612SP と 620SP は 573SD の東側に位置する。これらの柱穴は東西方向に並ぶが、直線上には揃わない。いずれも柱根が残り根固め石を包含している。543SP の柱根は直径 15㎝、長さ 70㎝を測り残りが良い。

排水溝 489SD

曲輪東部分で北西から南東方向に向けて走る溝で長さ約 12 m・幅約 30 ～ 60㎝を測る。建物の区画溝（573SD と 574SD）の北東角辺りから掘削されている。9 曲輪の第 1 面と同様に北側斜面裾部分の湧水対策としての排水溝と推定できる。

581SX［第 23 図］

曲輪の南東角に位置し、岩盤を掘り込んでいる。長径 3.5 m・短径 2.3 mの隅丸方形を呈し深さ約 60㎝を測る。排水溝と推定する 489SD の収束点に位置しており、水を溜めるための施設と考えられる。大小の礫とともに古瀬戸後Ⅳ新か大窯期の鍋（96）、大窯期の鉄釉内耳鍋（97）・鉄釉丸皿（1182、1183）2 点が出土した。

639SW［第 23 図］

曲輪中央南端に南北方向に約 2 mの長さで並ぶ石列である。溝に伴うものではなく用途は不明である。

第３面

曲輪の西側と東側とでは様相が異なる。東側は南方向へと大きく落ち込んでいる。西側は８曲輪へと岩盤が続き、８曲輪と９曲輪が一体の平場であったと考えられる。遺構は８曲輪を含めて西側で多く検出された。出土遺物は第１面・第２面が大窯期のものが大半であったのに対して、この面では平碗、直縁大皿、耳付水注、卸目付大皿、天目台など古瀬戸後Ⅳ期のものが多い。築城当初の面と推定される。

671SK

曲輪東南端に位置し、長径約５ｍの半円形を呈する大型土坑である。匣鉢（100）が出土した。

697SX

曲輪中央南端に位置し、長径約3.5 ｍの半円形を呈する大型土坑である。拳大前後の花崗岩礫が多く詰め込まれた状況で、埋土が 1.8m 程あった。底部が９曲輪では一番低く部標高 196m34㎝となった。多数の遺物が出土した。主な出土遺物は古瀬戸ⅠかⅡ期の古瀬戸皿（111）、古瀬戸後Ⅳ期の平碗（102.104）・灰釉天目茶碗（103）・腰折皿（106）・縁釉小皿（107）・仏餉具（109）・燭台（110）・内耳鍋（112）・鉄釉四耳壺（113）・四耳壺（114）、大窯期の灰釉丸碗（103）、東濃産生田期の小皿（108）などである。

725SW

曲輪南端から北方向にかけて約３ｍの石列を検出した。この石列を境にして東側は南方向へと大きく落ち込んでいる。９曲輪から８曲輪へつながる溝（392SD）を切っており、溝よりも後に築かれたものである。この曲輪を改修（土盛りによる平場拡張）する際の造成工事に関係するものかも知れない。

(9) 築城以前の遺構

縄文時代の陥穴を検出した。土坑底部中央に小ピットが１ヶ所から３ヶ所見られる。２曲輪西側斜面に２基（601SK、619SK）、３曲輪南の崖際に１基（643SK）・斜面に１基（735SK）、４曲輪に３基（331SK、526SK、600SK）・北側斜面に３基（516SK、517SK、528SK）、７曲輪に２基（399SK、400SK）、９曲輪北側斜面に１基（735SK）の計 13 基を確認した。

なお、７曲輪の土坑(400SK)から石鏃(S-20)が、９曲輪からは細石核２点(5F20a グリット S-17)(5F18b グリット .S-18）と石鏃２点（S-19.S-21）が出土した。

第 3 節　20 年度 08 調査区

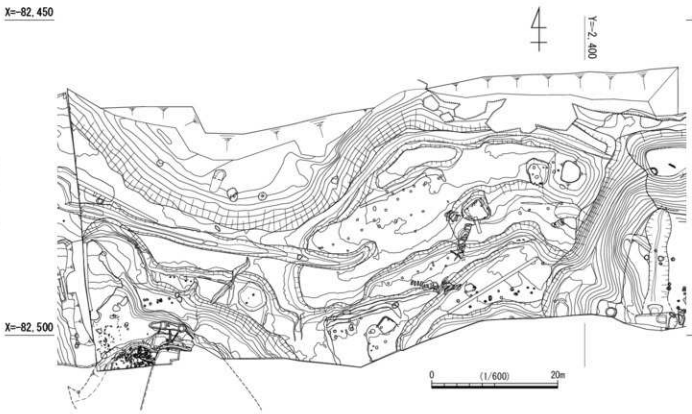
1. 概要

08 年度調査区は桑下城跡の本丸部分の西隣に当たる範囲である。主要な遺構には土塁とこれに付随する高まり、曲輪と考えられる平坦面が 14 箇所、「番小屋跡」と推定した竪穴状遺構が 3 基、そして庭園状遺構があり、その他に同時期と思われる溝、土坑、建物柱穴がある。古代の竪穴住居 1 棟と土坑が確認されている。また、縄文時代の陥穴 3 ヶ所（第 26 図）を検出した。

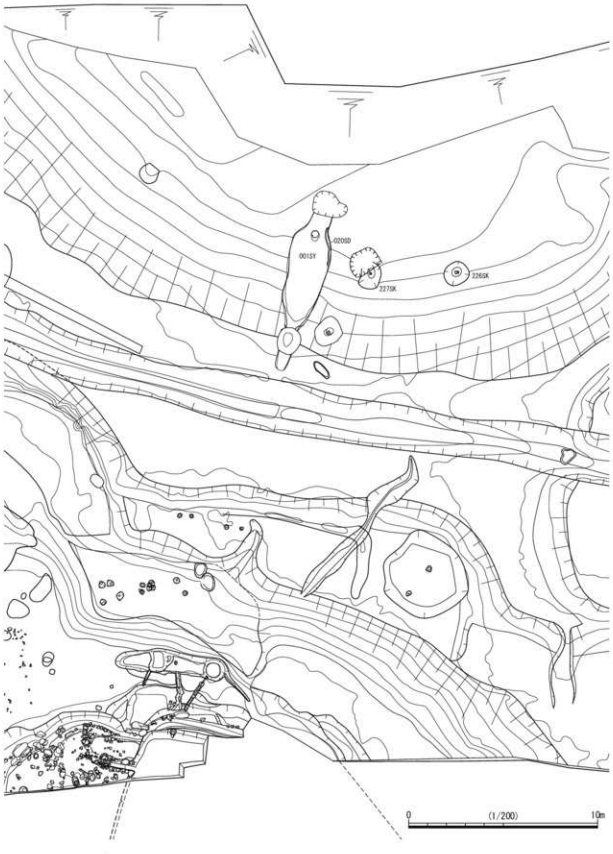
(1) 土塁・櫓跡 [第 31 図、第 33 図]

土塁は尾根上の平坦面(11 曲輪)の北側縁に沿って東西方向に約 15.5m、幅 7 ～ 8m の規模が確認された。盛土により構築されており、残存する最も高い部分で基盤層から 0.7m を測る。土塁とほぼ並行して北側斜面の途中をめぐる溝 316SX があり、同曲輪東端の櫓跡北側までの約 46m を確認した。溝の断面は台形状を呈し、上端幅約 0.9 ～ 1.2m、下端幅約 0.5m、深さ 0.3 ～ 0.6m の規模であり、溝内の埋土は特にしまりが強く、通路としての機能も想定できる。ただし、機能していたはずの本来の土塁の高さ・幅から推定すると盛土の基礎部分に含まれるため、土塁構築工法に関連する施設と考えたい。

櫓跡としたものは、11 曲輪と 12 曲輪の東端で本丸西堀切からみて対岸にあたる位置にあり、周囲より少し小高くなった部分である。基部の平面形は円形に近い隅丸方形を呈し、直径約 7 ～ 8m、高さ約 1.2m、

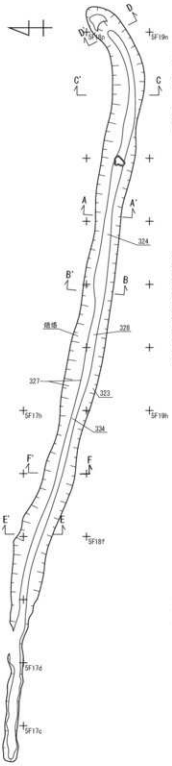


第 25 図　08 調査区 (1:600)



第 26 図　08 A 区 001SY 上品野 E 窯跡と縄文時代の陥穴 (1:200)

157SD(A・B区)



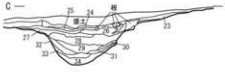
D — D' L=210.00m

1. 10YR4/6褐色粘土質シルト
   10YR6/6粘土ブロック(地山)(小・大)が混じる
2. 10YR4/6褐色粘土質シルト
   砂粒を含む しまりがやや弱い
3. 10YR5/6黄褐色粘土質シルト
   10YR6/6粘土ブロック(大)が混じる
   細粒砂が混じる
4. 7.5YR5/6明褐色粘土質シルト 細粒砂を含む
5. 10YR5/8黄褐色シルト 砂礫を多く含む
6. 10YR6/6明黄褐色粘土 地山か?

B — B' L=208.00m

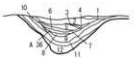
1. 10YR5/6黄褐色粘土質シルト
   砂粒を多く含む ややしまりあり
2. 10YR5/6黄褐色粘土質シルト しまりが弱い
3. 10YR4/6褐色シルト 粗粒砂を含む
4. 10YR4/6褐色シルト
5. 10YR4/6褐色粘土質シルト
   上位:風化花崗岩の砂礫が多い 下位:粘土
6. 10YR5/6黄褐色粘土質シルト
   地山の砂礫が混じる

C — C' L=210.00m



1. 表土 植物根が多い
23. 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト
24. 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土ブロックが混じるシルト
25. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土質シルト 植物根が多い
26. 10YR5/6黄褐色シルト 10YR6/6砂・5Y5/4粘土がブロック(小)状に混じる
27. NO.26にほぼ同じ粘土ブロックが多い 粗粒砂が混じる
28. 10YR4/6褐色砂質シルト 10YR6/4粘土ブロック(大)が混じる
29. NO.28にほぼ同じ 地山の砂礫が混じる
30. 10YR4/6褐色粘土質シルト しまりが弱い
31. 10YR5/6黄褐色粘土質シルト しまりが弱い
32. 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 砂粒を含む
33. 10YR5/6黄褐色粘土 砂粒が混じる
34. 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 砂粒を含む

F — F' L=208.00m

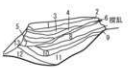


1. 10YR7/2にぶい黄橙色土
   整地層(風化花崗岩の砂礫層)
2. 10YR7/4にぶい黄橙色土 粗砂を含む
3. 10YR6/3にぶい黄橙色土 やや粘性あり
4. 10YR6/3にぶい黄橙色土 粗砂を多く含む
5. 10YR6/3にぶい黄橙色砂質土 しまりは小さい
6. 10YR6/3にぶい黄橙色砂質土
   少量の炭化物を含む
7. 10YR6/3にぶい黄橙色砂質土
   少量の炭化物を含む
8. 10YR6/2灰黄褐色砂質土 炭化物を多く含む
   しまりは小さい
9. 10YR5/2灰黄褐色砂質土 粗砂粒を多く含む
10. 10YR6/2灰黄褐色土 やや粘質
11. 2.5Y6/3にぶい黄色粗砂土 地山の風化土
12. 2.5Y5/4黄褐色砂層 粗砂粒(花崗岩風化土)

A — A' L=208.00m

1. 10YR4/4褐色シルト 粗粒砂、表土の土(暗灰色)・
   地山(粗砂)ブロック(小)が混じる
2. 10YR5/6黄褐色シルト 砂粒を多く含む
3. 10YR5/6黄褐色砂質シルト 地山粗砂が混じる

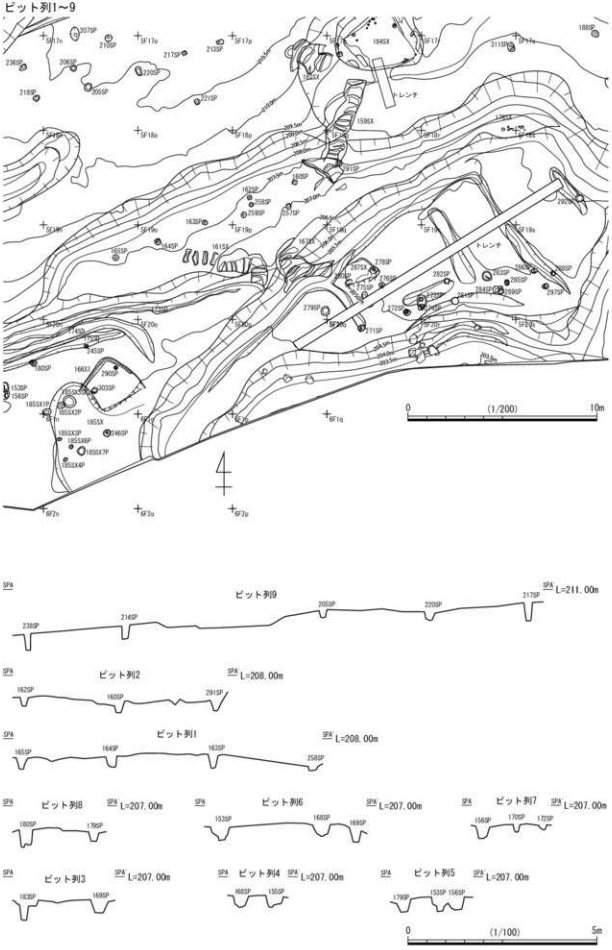
E — E' L=208.00m



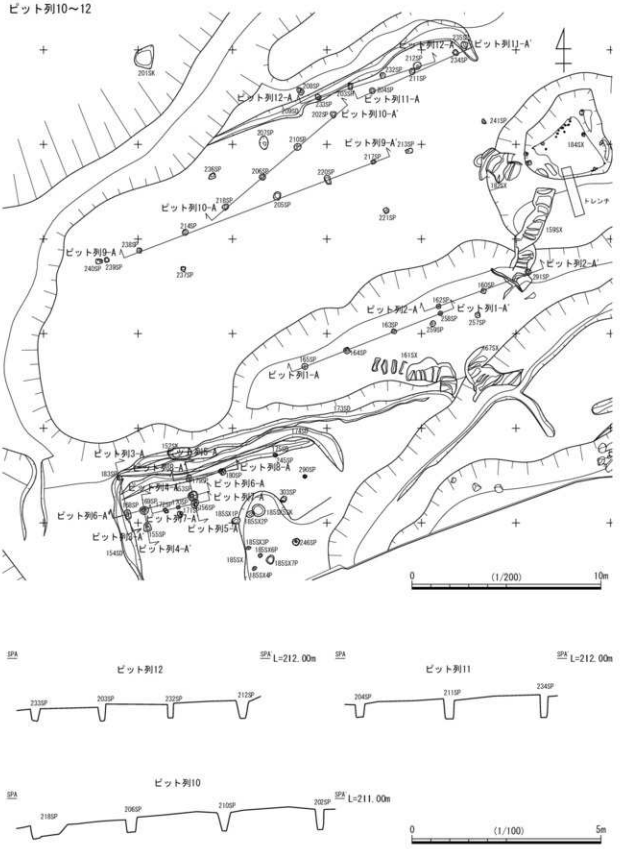
1. 10YR6/2灰黄褐色土
   10YR7/1灰白色粘土ブロックを含む やや粘質
2. 10YR7/3にぶい黄橙色土 粗砂を多く含む しまりは小さい
3. 10YR6/3にぶい黄橙色土 粘性あり しまりは小さい シルトブロックを含む
4. 2.5Y6/2灰黄色砂質土 粘土ブロックを含む しまりは小さい シルトブロックを含む
5. 10YR6/4にぶい黄橙色土 やや粘質土
6. 10YR6/4にぶい黄橙色土 やや粘質土
7. 10YR6/3にぶい黄橙色土 やや粘質
8. 10YR6/4にぶい黄橙色土 やや粘質
9. 2.5Y6/3灰黄色砂質土 しまりは小さい
10. 2.5Y6/2灰黄色砂質土 しまりは小さい
11. 2.5Y6/3灰黄色砂質土 粗砂を多く含む 地山の風化層(風化花崗岩)
12. 2.5Y5/3黄褐色砂質土 粗砂を多く含む
    地山の風化層(風化花崗岩) NO.11より粗砂の粒径が大きい

0 (1/100) 5m

第27図 08A・B区SD157



第28図　08B区ピット列1～9



第29図　08B区 ピット列位置図・列10～12

上端は直径 2.0m 前後の平坦部となっている。断面観察では、基盤層を平坦に整形したのちに厚さ 0.2 ～ 0.3m 前後の単位で土を幾層も積み重ねるという築造方法が確認できた。また、溝 316SX が櫓跡の盛土に先行する遺構であることから、櫓跡となった部分もかつては北縁から連続する土塁の一部をであった可能性も考えられる。土塁上部の出土資料として 471 の擂鉢片（大窯 3 段階前半）を掲載しているが、混入品と思われる。

(2) 竪穴状遺構

184SX[第 32 図]

12 曲輪の西端に位置する。掘込みの平面形は隅丸の三角形状を呈し、上端で一辺が 5m 前後あり、床面となる平場は四角形に近い形状となる。床面の面積は 6.4㎡程度であり、南西側の壁は低く傾斜が緩やかであり、こちらが出入口であったと考えられる。床面の壁際で多数の小土坑が検出されたが、出入口に対して奥となる北西の壁際に特に集中してみつかっている。また、出入口付近から続く階段状の遺構があり、南側に約 5.5m 延びる 159SX と西側へ約 2.3m 延びる 182SX が検出されている。

192SX[第 30 図]

11 曲輪の東寄りの部分、櫓跡とした高い盛土の西隣に接している。掘込みは上端で 4 × 2m の規模をもち、長方形に近い形状を呈する。床面もほぼ同様の形状で面積は 7.8㎡程度である。南辺は壁の立ち上がりがほとんど無く、こちら側が出入口と考えられる。床面にはピットが 5 基があり、南辺に沿って不揃いに並ぶより小さい小土坑 7 基が検出されている。大窯期（大窯 1 段階）の灰釉腰折皿（335）が出土している。

247SX[第 30 図]

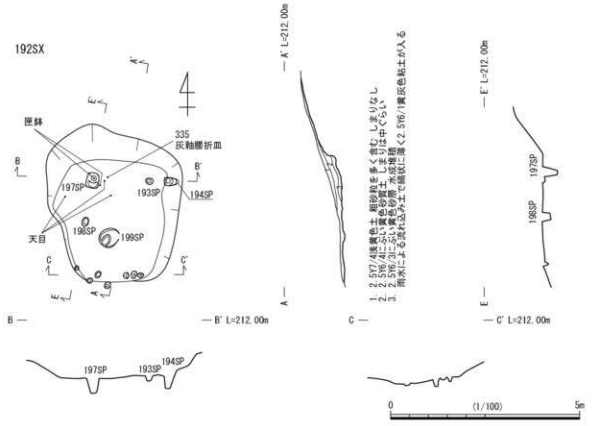
7 曲輪の東端に位置し、土塁のある尾根（11 曲輪）を北側の背にして、北～東の辺は斜面を削り込むように造られている。掘込み上端で直径約 4.2m、平面の形状は六角形に近い不整形を呈し、床面の平面形も同様で 9㎡程度の面積がある。床面直上のほぼ水平の堆積層は炭化物を含み、小片ながらも比較的多くの遺物が出土している。古瀬戸後期の四耳壺（342）、古瀬戸後Ⅳ期～大窯 1 段階の双耳釜（343）、鉄釉褐（344）、常滑窯産の褐（327）は 157SD と接合関係にある。

以上の竪穴状遺構としたものの性格について、土坑の規模・形状などは瀬戸市域の窯跡（登窯跡、古瀬戸、窖窯）で検出された工房跡に類似点がみられ、遺跡の東方 100m 弱の距離に位置する桑下東窯跡（大窯）でも工房跡と推定される方形の竪穴状遺構が確認されている。ただし桑下城跡では今のところ近辺に山茶碗専焼の窯窯（上品野 E 窯跡）のほか窯体は検出されておらず、窯工房と直接結びつく関係性は見いだせない。一方で桑下城の領域内の遺構として見るならば、竪穴状遺構はいずれも尾根に近い標高の高い場所にあり、すべてが南側を中心とした方角へ眺望が開けた位置に配置されていることがわかる。したがって、ここでは城の防御機能のひとつ、見張りが待機する「番小屋」の遺構である可能性を提示しておきたい。

(3) その他の遺構

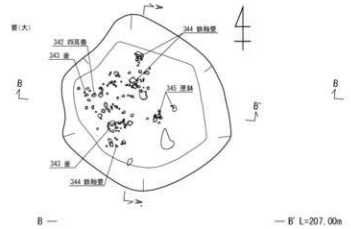
溝 157SD[第 27 図]

土塁のさらに西側に続く一段低い尾根（8 曲輪）で長さ約 50m の範囲が確認された。現況の尾根の中

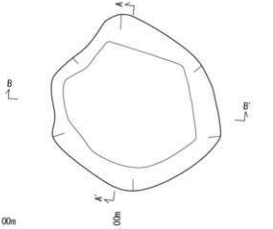


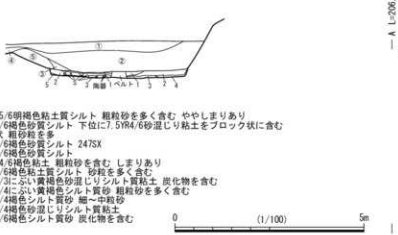
247SX

出土状況図



完掘状況図





①. 7.5YR5/6明褐色粘土質シルト 粗粒砂を多く含む ややしまりあり
②. 10YR4/6褐色砂質シルト 下位に7.5YR4/6砂混じり粘土をブロック状に含む
斑土状 粗砂粒を多
③. 10YR4/6褐色砂質シルト 247SX
④. 10YR4/6褐色砂質シルト
⑤. 7.5YR4/6褐色粘土 粗粒砂を含む しまりあり
1. 10YR4/6褐色粘土質シルト 砂粒を多く含む
2. 10YR5/3にぶい黄褐色砂混じりシルト質粘土 炭化物を含む
3. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト質砂 粗粒砂を多く含む
4. 10YR4/4褐色シルト質砂 細～中粒砂
5. 10YR4/4褐色砂混じりシルト質粘土
6. 10YR4/6褐色シルト質砂 炭化物を含む

第30図　08区 192SX・247SX(1:100)

央を縦断するようにほぼ直線的に延びており、東端が 11 曲輪にかかる。この部分でのみ溝は北へ湾曲して土塁手前で終息する。断面は底部に狭い平坦面をもつ台形状、やや開く V 字状を呈し、幅は 1.9 ～ 2.6m、深さは 0.6 ～ 1.0m を測る。埋土は硬くしまっており、少なくとも上層は周囲と同様で検出が困難であった。掘削時期は明らかでないが、出土遺物から大窯 2 段階以降に埋められたと判断できる。この溝には通路としての機能が考えられるほか、土塁やピット列 9 との位置関係などから城の防御施設の一部であった可能性についても指摘しておきたい。古瀬戸後期から大窯 1 段階の擂鉢（326）、常滑窯産の甕（327）などがある。近世焙烙（1145）は上層で確認された小規模な溝 177SD と接合関係があり、混入品と思われる。

ピット列 1 ～ 12

土塁・櫓跡のある尾根上（11 曲輪）とその南側の 10 曲輪にかけての範囲で検出されたものであり、直線で並ぶ単位で区切り、1 ～ 12 の番号を付している。ピットは径 20 ～ 40cm、深さ 20 ～ 50cm であり、多くが基盤層である風化花崗岩を削り込みつくられている。一部のピットでは、平面形状が方形となるものが確認できた。配置にみられる特徴から分類すると（a）小規模な区画溝を伴うもの、（b）土塁に並行して並ぶもの、（c）曲輪の形状に沿って並ぶもの、（d）その他に分けられる。（a）はピット列 3、4、5、6、7 であり、溝 174SD、154SD で囲まれた 11 × 5.6m 程度の方形区画内か、あるいは溝 175SD 廃絶後に造られている。溝とピット列は同じ軸線方向をとる。（b）はピット列 11、12 である。現況の土塁の基部から 1.0m または 1.4m 離れた位置に並ぶ。それぞれのピットの一部が近接しているため、同時存在ではなく作り替えがあったと考えられる。（c）はピット列 1、2 であり、曲輪の崖下に沿って直線的に並んでいる。（d）はピット列 9、10 である。周辺の遺構との関連を探ると、ピット列 9 は溝 157SD の東端から続く形で並んでおり、一連のものであった可能性も考えられる。ピット列 10 は土塁の延長線に沿った方向に延びており、（b）と同様の性格であったとすれば、本来の土塁がこの付近まで存在した可能性も考えられる。

以上のピット列は（a）は簡便な建物の柱の痕跡と考えられる。そのほかは単独では柵列の痕跡が考えられる。ただ、土塁あるいは曲輪の際に沿って造られている場合もあり、高低差を利用した差し掛けの建物柱跡の可能性も考えられよう。

（4）庭園状遺構 | 第 35 図～第 38 図 |

尾根を南側へ下った位置にあたる 12 曲輪にあり、尾根との標高差は現況で 8.6m を測る。奥行のやや狭い細長い平坦面が階段状に連なる部分では導水部分をもつ湧水施設があり、接続する下段の曲輪で築山、池の痕跡とみられる遺構を確認したことなどから、ここでは「庭園状遺構」として記述する。なおこの曲輪は調査範囲外に続き、現況では 320㎡前後の比較的広い平坦面をなしている。

まず湧水施設としたものは、やや切立った斜面の下に配された井戸（143SE・149SE）とこれらを含む長さ約 6m、深さ約 25cm の浅い楕円形の凹みである。この西寄りの部分にある 149SE の平面形は隅丸方形に近い不整形であり、1.3 × 1.0m、深さ 25cm を測る。内部に構造物はなく、素掘りであった可能性がある。これに南側の下段へ導水する幅 0.3m 程度の溝（150SD）が接続する。東端の 143SE は特殊な構造をもつ素掘りの井戸であり、直径 1.1m、深さ 85cm を測る。下段へ導水する溝（146SD）が

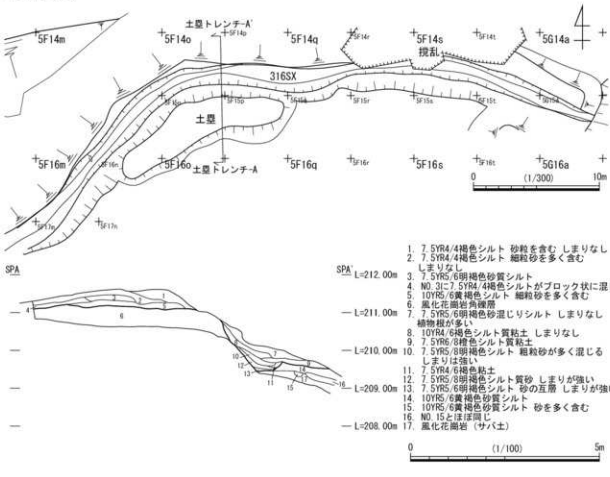
井戸から南西方向に延びているが、直線的には接続していない。143SE 底面から約 10cm 上となる側面に横穴が開けられており、断面でこれが地中を上方へのび幅 0.4m 前後の 146SD と接続していることを確認した。実際に 143SE に水を溜めて実験したところ、水位が 146SD 底部の上端レベル以上になって水が流れ始めたが、大半がすぐに溝の底面土中に浸透してしまった。したがって導水方法の復元案としては 146SD 上端から樋状のものを使用して下段の池（133SG）へと流すことが考えられるが、ちょうど 146SD の延長方向となる池の端にピット（231SP）があり、これが樋状構造物の支柱の痕跡とみることも可能であろう。なお 143SE 内部の横穴は、検出時には窯壁片で塞がれていたことを確認している。

これらの井戸周辺は周囲の壁面からの湧水を溜めるように造られているとみられ、東側からも幅 0.4m 程度の溝（181SD）が接続している。また凹みの中央付近からも直接南側へ幅 0.4m の溝（147SD）が延びているが、こちらは途中から本来の形状を留めておらず導水方法の詳細は不明である。

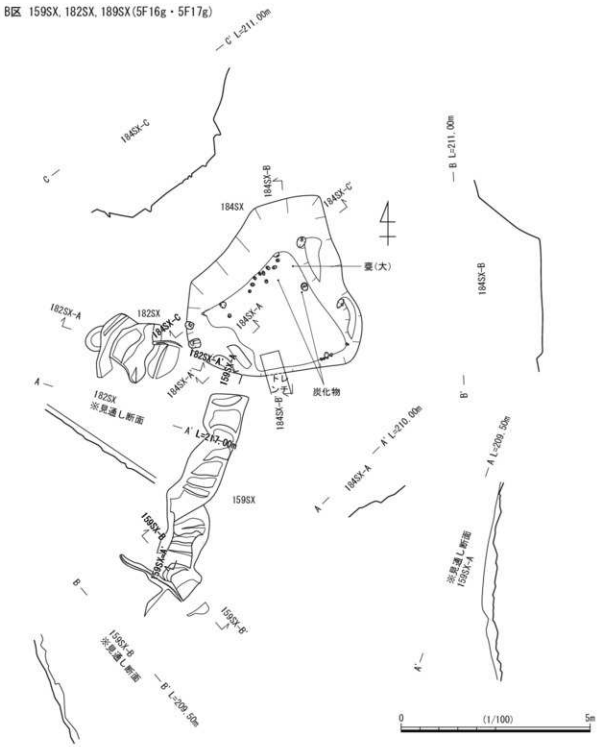
以上の南側に広がる曲輪には、溝で囲まれた礫混じりの盛土部分と一段凹む範囲があり、それぞれを築山（132SX）と池（133SG）の痕跡と推定した。

132SX は導水部の南西に位置する平坦面の範囲であり、僅かな高まりと石組の溝が検出されている。溝の幅は約 0.25m であり、133SG に向かって開く形でコの字状にめぐっている。溝に囲まれた範囲は、2.5 × 1.0m 程度の隅丸長方形を呈し、礫を含む砂質土の盛土で形成されている。溝の尾根側の部分は小礫が

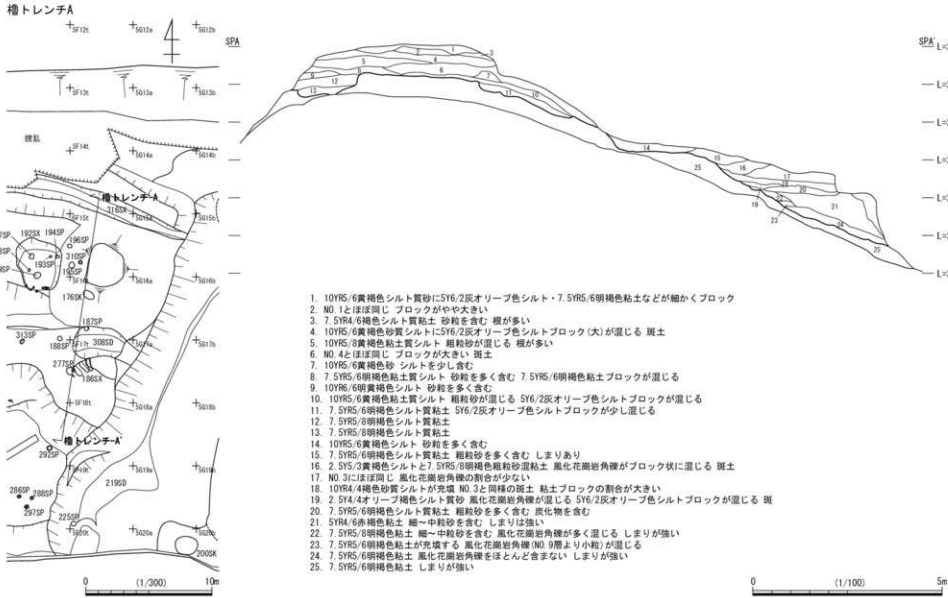
土塁トレンチ



第31図　08 A区 土塁トレンチ



第32図　08 B区 159SX・182SX・189SX(1:100)



1. 10YR5/6黄褐色シルト質砂に5Y6/2灰オリーブ色シルト・7.5YR5/6明褐色粘土などが細かくブロック
2. NO.1とほぼ同じ ブロックがやや大きい
3. 7.5YR4/6褐色シルト質粘土 砂粒を含む 根が多い
4. 10YR5/6黄褐色砂質シルトに5Y6/2灰オリーブ色シルトブロック(大)が混じる 斑土
5. 10YR5/3黄褐色粘土質シルト 細粒砂が混じる 根が多い
6. NO.4とほぼ同じ ブロックが大きい 斑土
7. 10YR5/6黄褐色砂 シルトを少し含む
8. 7.5YR5/6明褐色粘土質シルト 砂粒を多く含む 7.5YR5/6明褐色粘土ブロックが混じる
9. 10YR6/6明黄褐色シルト 砂粒を多く含む
10. 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粗粒砂が混じる 5Y6/2灰オリーブ色シルトブロックが混じる
11. 7.5YR5/6明褐色シルト質粘土 5Y6/2灰オリーブ色シルトブロックが少し混じる
12. 7.5YR5/8明褐色シルト質粘土
13. 7.5YR5/8明褐色シルト質粘土
14. 10YR5/6黄褐色シルト 砂粒を多く含む
15. 7.5YR5/6明褐色シルト質粘土 粗粒砂を多く含む しまりあり
16. 2.5Y5/3黄褐色シルトと7.5YR5/8明褐色粗粒砂混粘土 風化花崗岩角礫がブロック状に混じる 斑土
17. NO.3にほぼ同じ 風化花崗岩角礫の割合が少ない
18. 10YR4/4褐色砂質シルトが充填 NO.3と同様の斑土 粘土ブロックの割合が大きい
19. 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト質砂 風化花崗岩角礫が混じる 5Y6/2灰オリーブ色シルトブロックが混じる 斑
20. 7.5YR5/6明褐色シルト質粘土 粗粒砂を多く含む 炭化物を含む
21. 5YR4/6赤褐色粘土 細〜中粒砂を含む しまりは強い
22. 7.5YR5/8明褐色粘土 細〜中粒砂を含む 風化花崗岩角礫が多く混じる しまりが強い
23. 7.5YR5/6明褐色粘土が充填する 風化花崗岩角礫(NO.9層より小粒)が混じる
24. 7.5YR5/6明褐色粘土 風化花崗岩角礫をほとんど含まない しまりが強い
25. 7.5YR5/6明褐色粘土 しまりが強い

第33図 08B区槽トレンチA(1:100)

並ぶ程度であるが、133SG に接続する位置ではやや大型の礫の面を揃えた石積みが残存する。盛土範囲の認定が困難なため周辺の大型礫を築山の基部を仮定すると、築山は石組み溝全体を含む長軸 4m 前後の楕円形の範囲が考えられる。石組内の盛土から大窯 1 ～ 3 段階の擂鉢片が出土している。

尾根側の崖面には大型の礫が露出する箇所や土坑（244SK）があり、また盛土内部や平坦面に含まれる拳大～人頭大の礫の中には被熱の痕跡のある石材が多く混じる。133SG は導水部の南側に位置し、検出範囲は東西 3.5m、南北 2.5m、深さは 0.4m である。

147SD からは大窯期（大窯 2,4 段階）の鉄釉丸皿、鉄釉大皿、132SX からは大窯期（大窯 1 ～ 3 段階）の擂鉢、133SG からは大窯期（大窯 1 ～ 2 段階）の擂鉢、灰釉皿が出土している。

さて、これら一連の遺構の時期について検討しておきたい。検出状況からは 133SG は現代に利用・改変されたことが明らかであり、本来の形状を留めているとは考えられない。したがって 133SG の現況の形状に接続する 132SX の溝の石積部分も現代の改変の可能性が考えられる。また 143SE からは明治から大正期の銅版転写の磁器大皿、手描染付の飯茶碗が出土しており、極めて新しい時代に利用された痕跡が認められる。曲輪と一連の遺構の配置からは「庭園」と推定される構造が多々認められるものの、以上の状況からこれらが桑下城の機能していた時期に遡る確実な根拠を示すことはできない。また、09 年度調査区で確認された中心的な居住域であった 9 曲輪との間には連絡する通路が見当たらず、むしろ土塁等により断絶しているようにみえる。以上の庭園状遺構の構築は桑下城の機能時よりも新しくなる可能性が高いことを指摘しておきたい。

（5）竪穴住居（古代）

166SI［第 34 図］

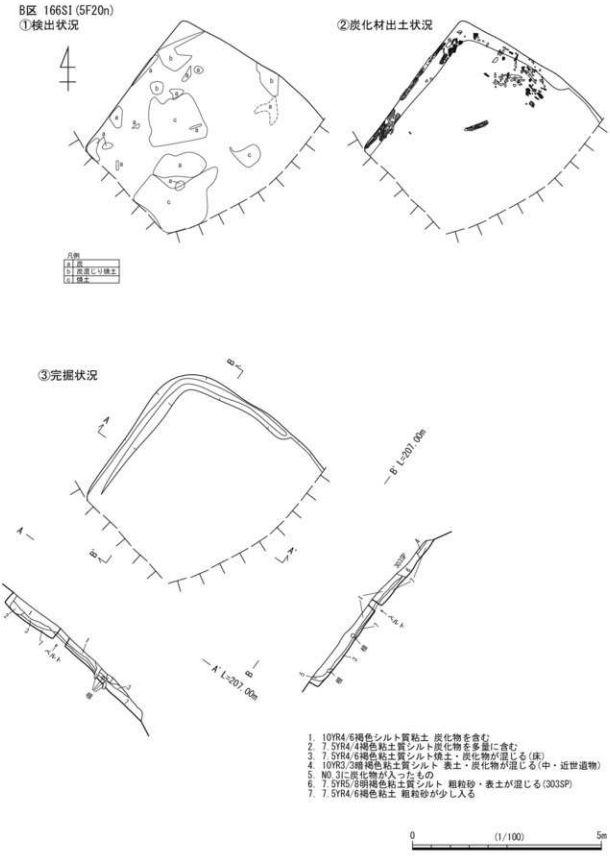
13 曲輪で検出されたもので、方形竪穴住居の一部と思われる。遺存していたのは北側の隅と壁溝が含まれる 4.5 × 4.2m 程度の範囲であり、壁溝は幅約 0.3m、深さ 0.2m あり、この中からは床上面よりも密度の高い状態で炭化材が検出された。床上面の北側から西側にかけて、広く炭化物と焼土の分布が認められた。須恵器坏蓋、蓋が出土している。なお、竪穴住居跡とは確定できないものの、炭化物を含む竪穴状の掘込みの一部を東方の離れた別の平坦面でも確認している。

（6）本丸西部の改修以前の遺構群について

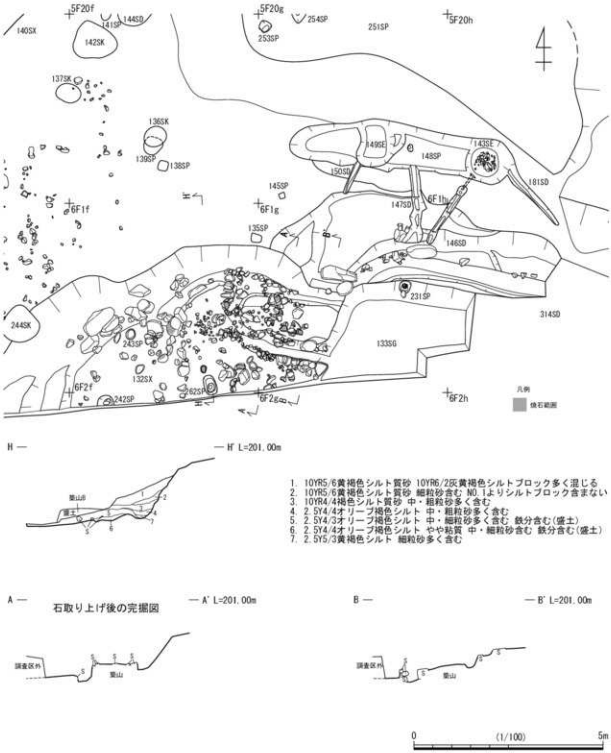
08 年度の調査範囲に隣接する本丸西部について補足調査を行い、最終時の本丸平坦面が形成される以前の遺構群が確認された。桑下城築城以前の旧地形を復元する手掛かりが得られたほか、北堀・西堀の掘削、および本丸平坦面の形成などは旧地形の大幅な改造を経たものであることが明らかとなった。

溝 299SD（古）［第 40・41 図］

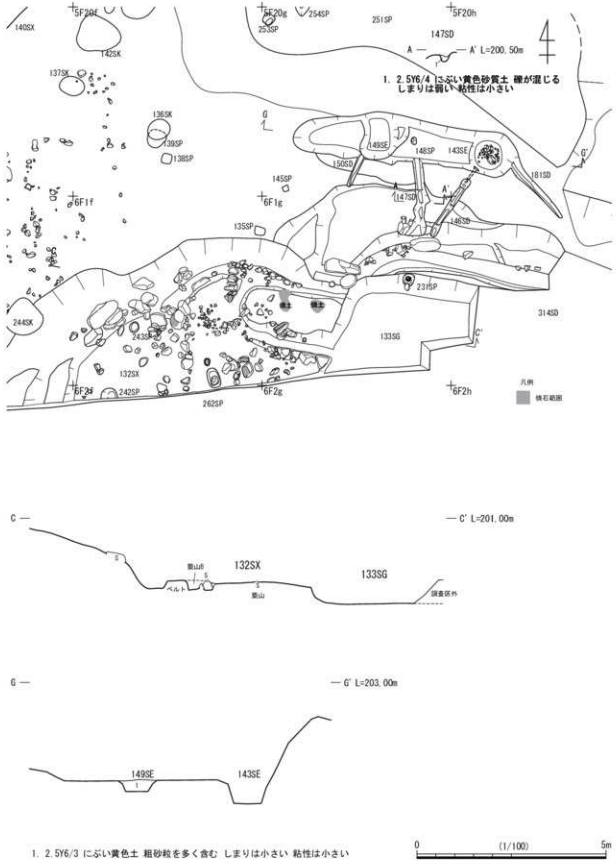
南北方向にのびる溝状の部分である。上端幅 3.6m、深さ 2.6m、断面は逆台形を呈し、溝底の幅は約 0.7m を測る。北端は整った形状で終息しているが南端は調査範囲外に続くものか確認できていない。北端から約 6.0m は溝状にのびるが、それ以南は東側に 309SX が接している。両者の掘削の前後関係は明らかではないが、同時期に埋められた状況が確認されている。南北方向に 16.5m の範囲を確認した。遺物なし。



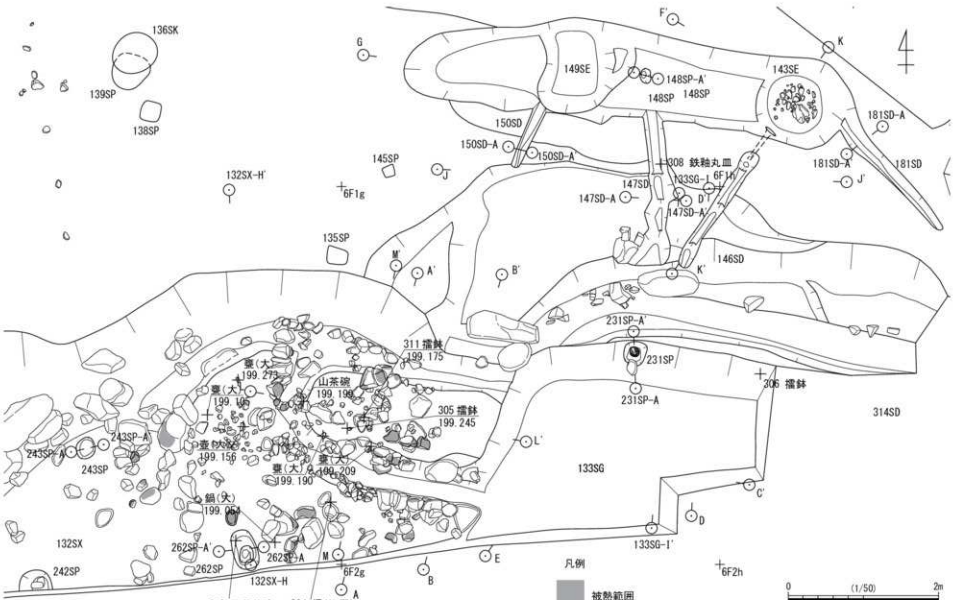
第 34 図　08 B 区 166SI(1:100)



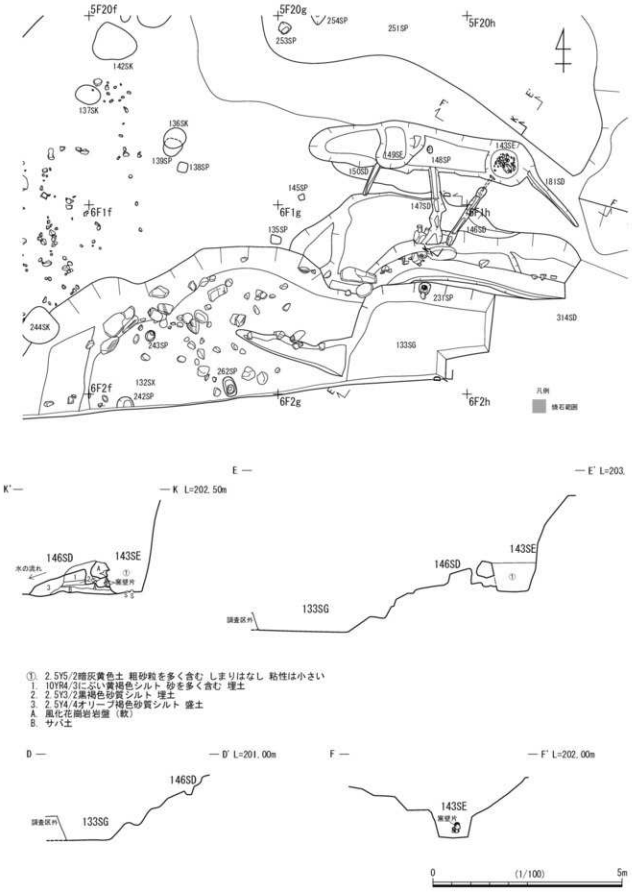
第 35 図　08 A 区 庭園遺構平面図と断面図 H・A・B(1:100)



第36図　08A区 庭園遺構平面図と断面図C・G(1:100)



第 37 図　08 A 区 085SX(1:50)



第 38 図　08 A 区 庭園遺構平面図と断面図 K・E・D・F(1:100)

溝 299SD（新）［第 42・43 図］

299SD（古）に重複して同じ場所に再掘削されている。古い段階の溝とは異なり、溝底の平坦部の幅は狭く、断面はやや開いたＶ字状を呈する。深さは 2.1m、幅は 2.9 ～ 4.1m と一定せず、北端は北堀により途切れている。埋土は短期間に埋められた状況を示している。遺物なし。

不明遺構 302SX［第 43 図］

299SD（新）の南端付近に掘削された土坑状の遺構である。南辺を 298SX に切られており、残存部で 2.4 × 1.5m 規模の不整形な方形状を呈する。古瀬戸後Ⅳ新段階の天目茶碗（454）のほか挟み皿（452）、口径 12.0cm のロクロ成形の土師器皿（453）が出土している。

不明遺構 309SX とピット列［第 41 図］

平面形状は 299SD（古）を一辺とする三角形状を呈する。北東辺は 3.8m、南東辺は 6.0m を測る。三角形の平坦な床面と 299SD（古）に沿って階段状に下がった位置にピット列（304SP,305SP,306SP,307SP,312SP）が並ぶ。ピットは概ね直径 35 ～ 50cm、深さ 45 ～ 60cm の規模であり、階段状の遺構に沿った位置に掘削されている。ピット列は 299SD と方位が一致しており、列の長さも 309SX の規模と整合性が認められるため、これら三者は同時に機能していたものと考えたい。309SX とピットからはともに遺物なし。

溝 300SD［第 41 図］

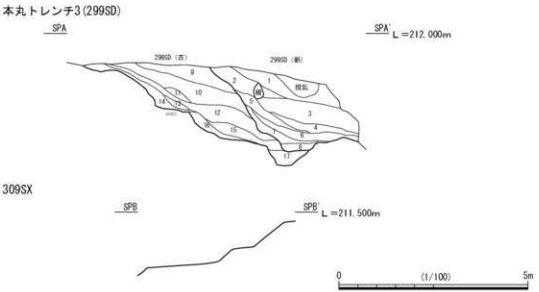
本丸の西辺で検出された幅 1.5m、深さ 65cm、断面形状がＵ字状となる溝である。両端は本丸西堀と 299SD で切られている。遺物はない。方位は北西 - 南東方向であり、309SX の東側形状と整合性が認められる。また、延長線上には本丸西堀の対岸となる位置に類似する形状の溝 308SD が確認されている。

溝 308SD［第 41 図］

櫓跡の南側、12 曲輪に位置する。櫓跡の盛土の下で確認された幅 2.5m、深さ 20 ～ 70cm、断面形状が浅いＵ字状となる東西方向の溝である。西端は削平を受け、東端は本丸西堀により切られているため、北側の肩で痕跡程度の部分も含めて長さ 9.0m 程度を確認した。大窯第 1,2 段階の鉄釉皿（468）が出土している。

不明遺構 298SX・301SX［第 43 図］

調査区南壁に接して検出された大型の土坑状の遺構の一部である。東西 6.7m、南北 2.5m、検出面から最深部まで深さ 2.4m の範囲を調査した。299SD の南端に重複する位置にあり、ほぼ全体が暗灰色土で埋まっている。本丸平坦部上面で検出されており、近世以降の撹乱である可能性も考えられる。遺構底面は西堀方向に少し傾斜する平坦面をなし、最下層では南側調査区外に続くような形で焼土と炭化物を含む薄い堆積層がみられたため、この部分を別遺構として取り扱った（301SX）。調査時にはこれを窯跡に伴う灰原の一部である可能性を考慮してすすめたが、窯体の存在につながる痕跡は得られなかった。出土遺物は比較的多く、古瀬戸後Ⅳ新段階から大窯第 1 段階の施釉陶器碗皿類が多く、ほかには茶入（461）、灰釉小壺（462）、筒型容器（463）、匣鉢がある。特にロクロ成形土師器皿（438 ～ 446）は一括性の高い良好な資料である。なお鉄釉直縁大皿（382）は、西堀の箱堀部分（219SD）出土遺物と接合関係にある。また 298SX 出土のロクロ成形土師器皿（418 ～ 420）は 301SX のものと同様である。



1. 7.5YR5/6明褐色砂混じり粘土質シルト 細かいブロック状斑土 根が多い ややしまりあり
2. 7.5YR5/6明褐色砂質シルト 細かいブロック状斑土
3. NO.2に風化花崗岩角礫を多く含む 斑土
4. 7.5YR5/6明褐色シルト質粘土が充填 風化花崗岩角礫と7.5YR4/6 褐色粘土がブロック状に混じる
5. 10YR4/6褐色粘土質シルト 砂粒を多く含む
6. 7.5YR5/6黄褐色シルトに風化花崗岩角礫（小）が混じる 斑土
7. 10YR4/6褐色シルト質粘土 砂を多く含む 下位に2.5Y6/3 にぶい黄色粘土がブロック状に混じる
8. 10YR5/6 黄褐色砂 下位に薄く粘土層
9. 7.5YR4/6 褐色粘土質シルトに10YR4/6 褐色粘土ブロックが混じる 斑土
10. 7.5YR4/6 褐色粘土 しまりが強い 粗粒砂を含む 風化花崗岩角礫が混じる
11. 10YR4/6 褐色砂混じり粘土 斑土状 しまりが弱い
12. 10YR5/6 黄褐色砂混じり粘土 斑土状 均一でない混ざり 風化花崗岩角礫が少し混じる
13. 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘土ブロックが少し混じる
14. 7.5YR4/6褐色粗粒砂混じり粘土 しまりが強い
15. NO.12と同じ 斑土 混ざりが均一 風化花崗岩角礫（小）
16. NO.15と同じ 粗粒砂を多く含む 風化花崗岩角礫（大）
17. 10YR5/4 にぶい黄褐色粗粒砂混じり粘土 しまりが強い 炭化物を含む

第 39 図　299SD 土層図 (1:100)

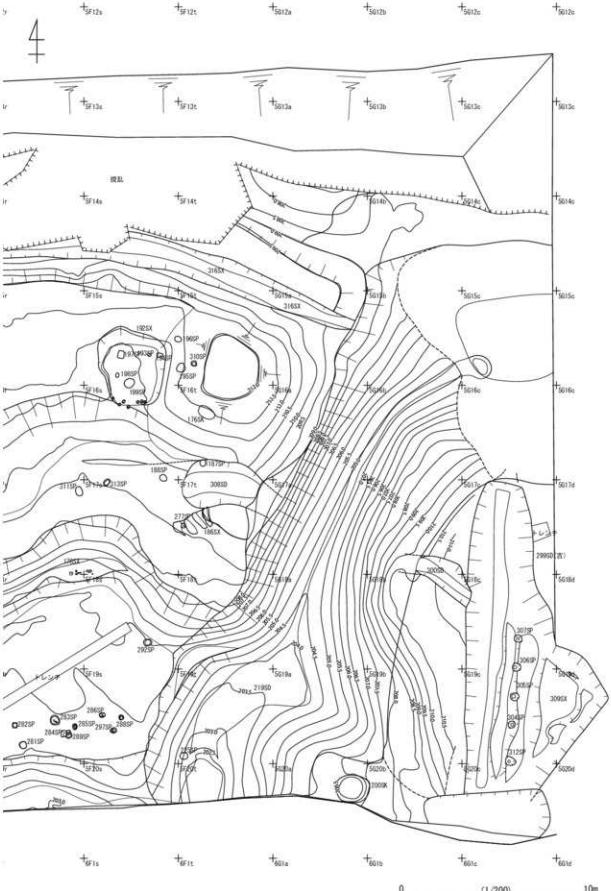
土坑 200SK[第 43 図]

北堀から続く西堀が薬研掘の形状から箱堀（219SD）の形状に接続する部分では本丸西辺の堀の上端が屈曲しており、それに沿うように本丸斜面の一部が堀に向かって張り出している。遺構は張り出し部の小さな平坦部に掘削されている。平面形は 1.7 × 1.5m の楕円形を呈する筒形の土坑であり、検出面から深さは 1.2m を測る。素掘井戸のような形状であるが、湧水する状況にはなく性格は不明である。遺物なし。

300SD と 308SD の両者が同一の溝であったと仮定すれば、本丸西・北堀が掘削される以前の旧地形は、櫓跡のある北縁から現況の本丸にかけて丘陵または平坦部が連続していたものと考えられる。また 299SD（古）の北端の形状と併せて考えると、現況の本丸北縁よりも少し北側まで広がっていたものと復元できる。遺構の切り合い関係から新旧を整理すると（第 44 図）の通りである。

第 40 図　07 A 区 299SD（古）(1:400)

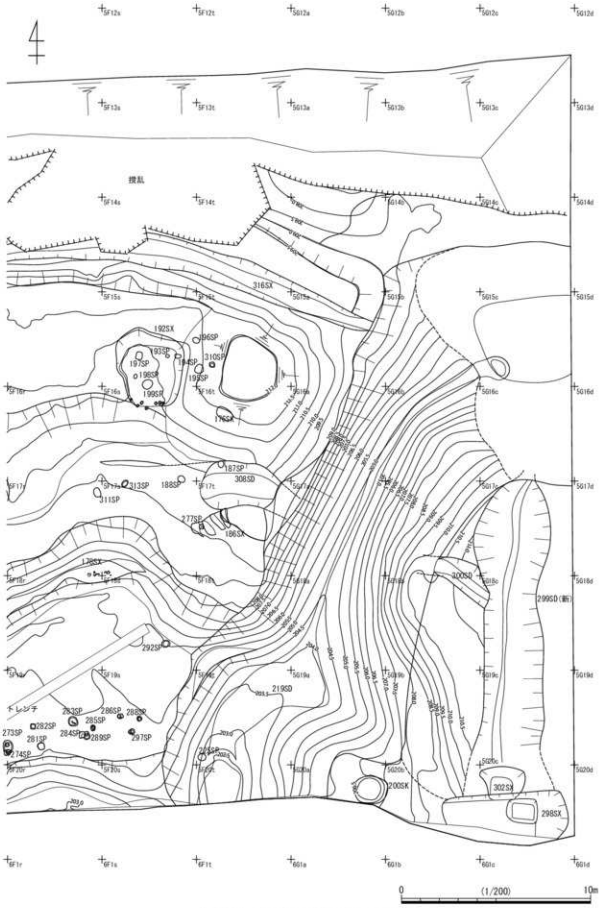
0　(1/400)　20m



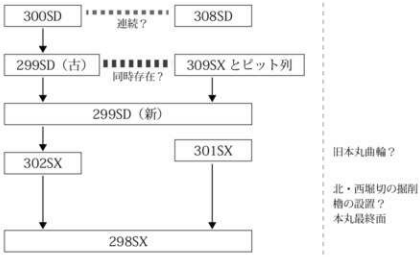
第41図　07A区299SD（古）(1:200)

第 42 図　07 A 区 299SD（新）(1:400)

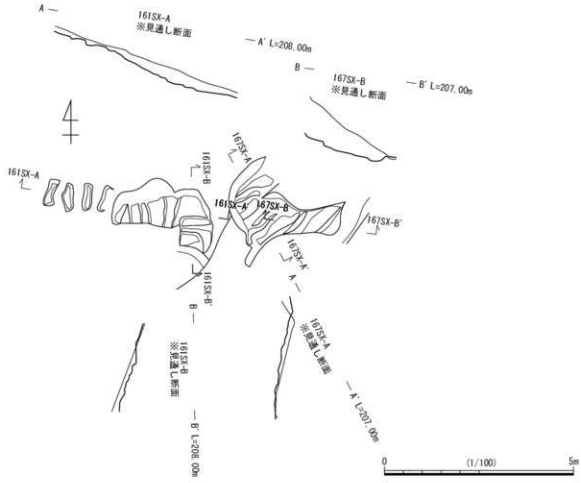
0　(1/400)　20m



第 43 図　07 A 区 299SD（新）(1:200)



第 44 図　本丸部分下層の遺構群の新旧関係図



第 45 図　08 B 区 161SX・167SX(1:100)

第 46 図　本丸周辺図 (1:400)

第４節　19 年度 07 調査区

1. 平成 19 年度 07 調査区概要

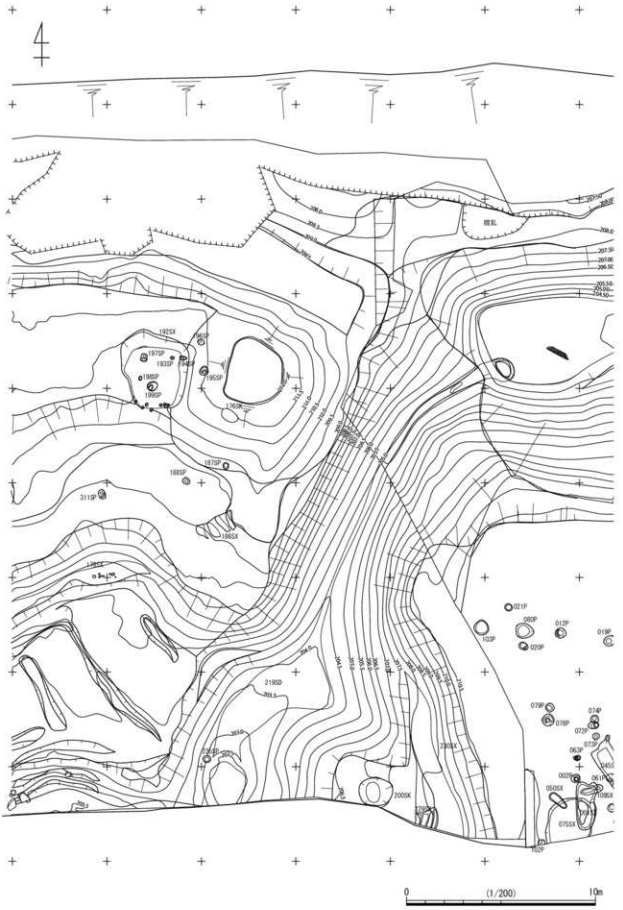
調査したのは城の北東部分である。A 区は本丸北部分と本丸を囲む堀、B 区は本丸北東方向にある平場と東に続く斜面にわけて実施した。調査の結果、本丸の西と北東部分は堀を掘った時に出た地山ブロックにより大規模に埋め立てられていることが判明した。遺構は地山ブロック層が見られる部分に関しては、それを境に２時期にわけることができる。造成が行われた時期は地山ブロック層より下から大窯２段階の遺物が出土していないことから、大窯１段階～大窯２段階と考えられる。

2. 遺構

(1) 土塁

調査前の表面観察で本丸北東端に土塁状の高まりが確認できた。この部分は江戸時代に作られた古城絵図には土居と記されており、絵図が作られた時期から大きな改変は受けていないと考えられた。調査はこの土塁の北端約５m 分であったが、土塁に直交するトレンチ（土層ベルト 0-0'）を入れ構築過程を確認した。その結果、土塁の芯の部分は盛土ではなく、地山を削り残していることが判明した。遺物は盛土部分から常滑産の甕（1054）が出土している。なお、本丸の北側には土塁の痕跡を見つけることはできなかったが、北の堀が本丸からの土砂で埋められていること、本丸北西端に遺構がないこと、本丸西隣の

第 47 図　07 調査区 (1:1000)



第 48 図　07 A 区 上面図 (1:200)

曲輪には土塁の痕跡が残っていることなどから、本丸北側にも土塁はあったと考えられる。

(2) 礎石建物 085SX[第 70 図]

本丸中央北端で検出した 1 間× 1 間の礎石建物である。柱間は東西 2 m、南北 3 m を測る。礎石（S-50. S-51）は周囲より一段下がった状態で検出した。礎石は約 40cm四方の花崗岩を使用し、高さをそろえるために浅い穴（085SX-1 ～ 4）を掘って据えている。また、南東部分の礎石の東横で、2 段積みされた人頭大の石列を検出した。石は上段 3 個、下段 4 個残存していたが、その並びで石の抜き取り痕と考えられる土坑（085SX-6）を検出しているため、石積みは 085SX-6 まで延びていた可能性が高い。北側直下が堀であることと段が北側全面、南東隅、南西隅に見られないことから、建物は北側に開口する門と考えられる。東西横は現状 50cm ほど垂直に掘り下げられているが、門の両脇には土塁が存在していた可能性が高い。門から城内に入ると、通路が東西に折れ曲がる構造になっていたと考えられる。

遺物としては、天目茶碗（1015）、端反皿（1019）、擂鉢（1016）、浅鉢（1017）、耳付水柱（1023）、筒形容器（1025）が出土している。

(3) 掘立柱建物

本丸中央から南西部にかけて 86 基のピットを検出した。これらの多くは掘立柱建物の柱穴と思われるが、調査が本丸の北部に限られているため、建物を復元できたものは 2 軒（A.B）のみである。

A　本丸北西部で検出した 1 間× 4 間の東西に長い掘立柱建物である。柱穴は 012P、019P、018P、055P、058P、015P、009P、022P、072P、078P であり、柱間は東西 1.2 ～ 1.3 m、南北 2.3 m を測る。012P、072P、078P は本丸造成土の上から掘り込まれている。

遺物は、009P から擂鉢（566）、挟み皿（565）、018P から稜皿（567.568）、土師皿（569）、022P から陶丸（570）、058P から天目茶碗（571）が出土している。

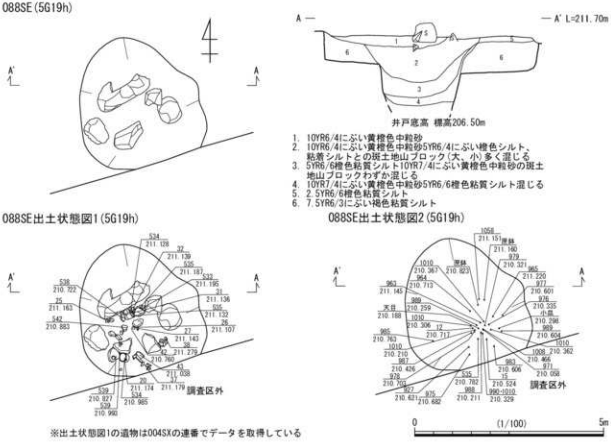
B　本丸中央で検出した 1 間× 1 間以上の南北に長い掘立柱建物である。確認した柱穴は 091P、043P、066P、029P であり、柱間は東西 2 m、南北 0.9 m を測る。北東部と西部に建物を取り囲む溝（007SD、042SD）と、建物内に炭化物を含む方形の土坑（051SX）が付属する。

遺物は、066P から匣鉢蓋（573）が、007SD から天目茶碗（557）が出土している。

(4) 井戸 088SE[第 49 図]

本丸中央で検出した直径 3.0 m、深さ 4.7 m の円形をした素掘りの井戸である。検出面から約 2.0 m までは人力掘削したが、それより下層は安全を考慮し重機掘削で底を確認するにとどまった。埋土の状況は上層と下層で大きく異なる。下層は遺物を含まないにぶい褐色土で、土を選んで埋めていることが想像できる。それに対して上層は、炭化物混じりのにぶい黄橙色土から大量の礫と遺物が出土した。礫には 50 ～ 150cm の巨石も含まれる。

遺物は天目茶碗（983 ～ 985.992 ～ 997）、端反皿（987.1007.1008）、丸皿（988.1009）、稜皿（989）、灯明皿（1006）、卸目付大皿（982）、茶入（1004）、小杯（986）、擂鉢（961 ～ 968.1002）、擂鉢形小鉢（1001）、筒形容器（969.970）、釜（971）、蓋（1005）、狛犬（1003）、挟み皿（974.975）、匣鉢（976 ～ 979）、常滑産甕（927.990.1010）、内耳鍋（972）、土師皿（973）、中国産青花皿（998）、角釘（M-9）が出土している。多くは大窯 1 段階～ 2 段階のものであるが、大窯 3 段階のものも含まれている。



第 49 図　07 A 区 088SE(1:100)

(5) 大型土坑

001SX[第 50 図]

本丸西側で検出した長軸 2.5 m、短軸 1 mの不定形をした浅い土坑である。被熱痕が見られる拳大の礫がまとまって出土した。礫の下で、焼土ブロックと炭化物の面的な広がりを確認した。遺物は徳利（507.508）、土師皿（509）などが出土している。

004SX[第 51 図]

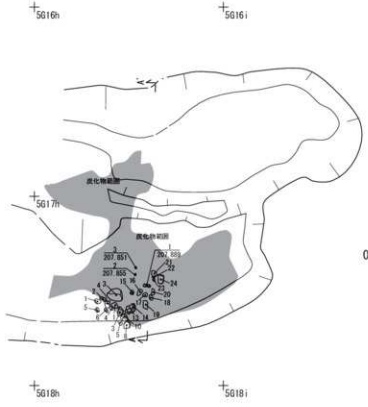
本丸中央で検出した長軸 4.2 m、短軸 2.3 m、深さ 30㎝の楕円形をした大型土坑である。088SE との境は不明瞭である。大量の大型の礫が廃棄された状態で出土した。礫は被熱痕のあるものが多い。

遺物は天目茶碗（513 ～ 516）、端反皿（524）、丸皿（525 ～ 530）、灯明皿（523）、鉄絵丸皿（531）、徳利（538）、擂鉢（517 ～ 522）、筒形容器（533.534）、釜（540）、手水鉢（539）、甕（535.536）、匣鉢（542）、焼台（1064）、内耳鍋（537）などが出土している。多くは大窯 1 段階～ 2 段階のものであるが、大窯 3 段階前のものも含まれている。

005SX

本丸東側で検出した長軸残存長 2.8 m、短軸 2.2 mの不定形をした大型土坑である。土塁の残欠を掘り込んで築かれており、大型の礫とともに丸皿（545）などが出土している。

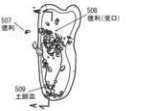
104SX-A 上面出土状況(5G16h)



S-1	207.233
S-3	206.458
S-4	206.735
S-5	205.914
S-8	205.528
S-10	206.337

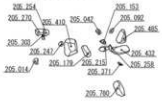
001SX(5G20d)

001SX石出土状態図(5G20d)

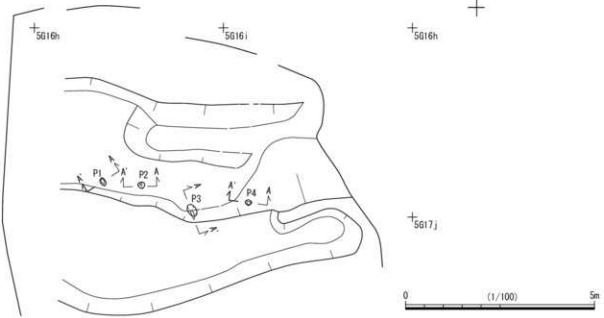


1. 5YR6/2灰褐色中粒砂中粒砂焼土ブロック多く含む
2. 炭化物層
3. 2.5Y5/1黄灰色細粒砂

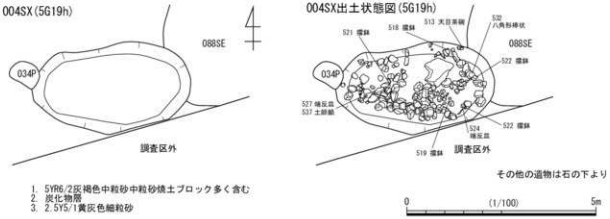
104SX-C 完掘状況(5G16h)



※104SX造成時沼に投げ込まれた石



第50図　07A区001SX・104SX(1:100)



第 51 図　07 A 区 004SX(1:100)

006SX[第 54 図]

本丸中央で検出した長軸 2.6 m、短軸 2 m、深さ 15㎝の方形をした土坑である。遺構の東端で大型の礫と遺物がまとまって出土した。

遺物は天目茶碗（547.548.550）、丸碗（549）、腰折皿（551.552）、端反皿（553）、縁釉挟み皿（554）、土師皿（555.556）など、古瀬戸後Ⅳ新段階～大窯 1 段階のものである。

礫は底から浮いた状態で出土しているが、遺物は底に張り付いた状態で出土している。

遺構の北端から東端にかけての下層にはＬ字状に折れ曲がる浅い溝（007SD）があり、遺物は 007SD に伴うものの可能性もある。

008SX[第 54 図]

本丸中央で検出した長軸残存長 5 m、短軸 1.8 m、深さ 30㎝の不定形をした土坑である。遺構の北端で大型の礫が廃棄された状態で出土した。

遺物は天目茶碗（559）、稜花皿（558）、擂鉢（560）、匣鉢（561 ～ 564）などが出土している。多くは大窯 1 段階～２段階のものである。

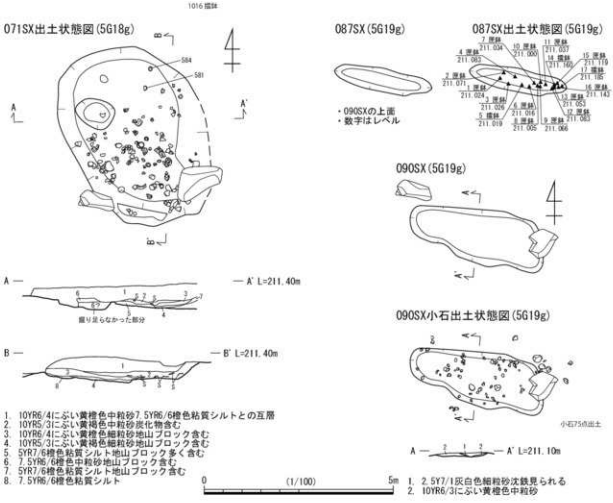
071SX[第 52 図]

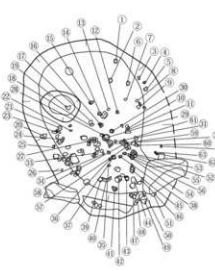
本丸中央北端で検出した長軸 5 m、短軸 3.6 m、深さ 60㎝の楕円形をした本丸整地土土に築かれた大型土坑である。被熱痕が見られる人頭大の礫とともに大量の遺物が出土した。

遺物は天目茶碗（584 ～ 589）灰釉天目茶碗（583）、丸皿（593.595 ～ 597）、輪花丸皿（598）、稜皿（592）、擂鉢（599.600.602 ～ 604）、釜（607.608）、蓋（606）、小鉢（605）、徳利（590）、匣鉢（543.576 ～ 581）、挟み皿（574.575）などが出土している。古瀬戸後Ⅳ新段階～大窯３段階と時期幅があるが、大窯２段階～３段階の割合が高い。

087SX[第 52 図]

004SX の下層で検出した長軸 2.6 m、短軸 0.6 mの楕円形をした土坑である。遺物は擂鉢、匣鉢の破片と褄（536）が出土している。





番号	遺物番号	遺物種類	標高
①	584	天目茶碗	210.787
②	581	擂鉢	210.799
③	585-1	天目茶碗	210.823
④	585-2	天目茶碗	210.825
⑤	598	丸皿(輪花)	210.799
⑥	577	擂鉢	210.703
⑦	608-1	鍋釜	210.746
⑧	587-1	天目茶碗	210.726
⑨	574	折れ皿	210.803
⑩	608-2	鍋釜	210.799
⑪	600-1 603-1	擂鉢	210.701
⑫	580-1	擂鉢	210.801
⑬	605	鉄鉢,底部切目小鉢	210.852
⑭	587-2	天目茶碗	210.890
⑮	583	灰天目茶碗	210.853
⑯	700	擂鉢	210.753
⑰	603-2	擂鉢	210.789
⑱	607-1	鍋釜	210.724
⑲	577-1	擂鉢	210.795
⑳	708	擂鉢	210.801
㉑		鉢	210.826
㉒		碗	210.779
㉓		擂鉢	210.717
㉔		擂鉢	210.757
㉕		小皿	210.786
㉖		茶碗	210.762
㉗	577-2 580-2	擂鉢	210.655
㉘	577-3	擂鉢	210.702
㉙	576	擂鉢	210.683
㉚	593	灰皿丸皿	210.667
㉛	588	天目茶碗	210.743
㉜	608-3	釜	210.663

番号	遺物番号	遺物種類	標高
㉝	604	擂鉢	210.648
㉞		擂鉢	210.630
㉟		擂鉢	210.688
㊱	607-2	鍋釜	210.718
㊲	575	折れ皿	210.840
㊳	597	灰皿(鉄皿丸皿	210.718
㊴	600-2	擂鉢	210.698
㊵	535-1	甕	210.719
㊶	578	擂鉢	210.725
㊷	543	擂鉢	210.690
㊸	579 1250	擂鉢 天目茶碗	210.765
㊹		甕	210.773
㊺		擂鉢	210.765
㊻	607-3	鍋釜	210.764
㊼	607-4	鍋釜	210.839
㊽		擂鉢	211.141
㊾	603-3	擂鉢	211.061
㊿	535-2	甕	211.042
(51)		擂鉢	211.197
(52)	586-1	天目茶碗	210.795
(53)	599	擂鉢	210.732
(54)		擂鉢	210.749
(55)	535-3	甕	210.762
(56)	586-2	天目茶碗	210.778
(57)		擂鉢	210.717
(58)	684	甕	210.705
(59)		擂鉢	210.814
(60)		擂鉢	210.686
(61)		擂鉢	210.646
(62)		擂鉢	210.859
(63)	607-5	鍋釜	210.805
(64)	607-6		210.823

第52図　07A区071SX・087SX・090SX(1:100)

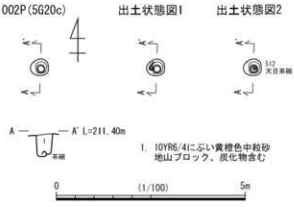
(6) 庭園遺構

本丸北東側で検出した 088SE や 004、008SX からは、大型の礫が廃棄された状態で大量に出土した。中には全長約 1.5 mの巨石もある。さらに、004SX、034P、090SX の底からは、拳大の川原石が張り付いた状態で大量に出土した。これらのことから、石庭がこの付近にあったことが想像できる。

(7) その他の遺構

002P[第 53 図]

本丸西側で検出した直径 0.5 m、深さ 0.6 mの円形のピットである。検出面で徳利（507）、擂鉢（510.511）が出土した。さらに掘り下げると、底部中央から大窯2段階の完形の天目茶碗（512）が伏せた状態で出土した。



第 53 図　07 A 区 002P(1:100)

054P[第 54 図]

本丸北西部で検出した直径 0.4 m、深さ 0.6 mの円形のピットである。検出面で水平に置かれた状態の石が出土した。

063P[第 54 図]

本丸北西部で検出した直径 0.3 m、深さ 0.2 mの円形のピットである。石が3段に積まれた状態で出土した。

064SX[第 54 図]

本丸中央で検出した直径約 0.5 m、深さ 0.2 mの円形のピットである。ピットの上層で炭化物と焼土ブロックの広がりを検出した。遺物は天目茶碗（572）が出土した。

065P

本丸中央で検出した直径約 0.8 m、深さ 0.1 mの円形のピットである。ピットの上層で炭化物と焼土ブロックの広がりを検出した。

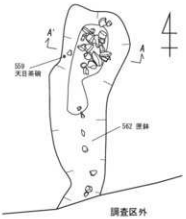
(8) 堀 [第 56 図、第 62 ～ 66 図]

調査前の表面観察で本丸の北・東・西の三方に大きな凹みが確認できた。特に北側の凹みは池になっていた。江戸時代に作られた古城絵図から、本丸の西北から北東にかけて堀が巡っていたことと、北の部分は水堀であったことが解っており、これらの凹みはその痕跡と考えられた。調査の結果、堀より外が土取りにより削平され、堀の一部が産廃により埋められていたものの、全体的には旧状をよく残していることが判明した。堀は場所と形状の違いにより、西堀、北西堀、北堀、北東堀、東堀に分けることができる。

西堀：薬研堀

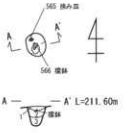
全長約 18 m、幅約 10 m、本丸からの深さ約 6 mを測る薬研堀である。本丸西側から続く丘陵を分断して掘られている。掘削に伴う排土は本丸西側の盛土として利用したと思われる。盛土の下から先行する堀の跡（08A 区 299SD）などを検出している。5G15b・16b、5G17a・17b、5G18a、5G19a。

008SX出土状態図(5G19f)



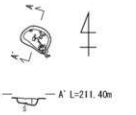
1. 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂
2. 10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂

009P出土状態図(5G19e)



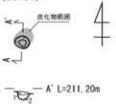
1. 7.5YR7/3にぶい橙色細粒砂
2. 10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂
3. 10YR6/3黄橙色細粒砂

034P小石出土状態図(5G19g)



1. 10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂
10YR6/4にぶい黄橙色中粒砂との斑土

065P(5G18f)

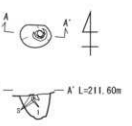


1. 10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂 炭化物、
焼土ブロック多く含む
2. 10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂

054P(5G19e)

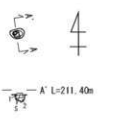
1. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂

055P(5G18e)



1. 10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂

063P(5G19c)



1. 7.5YR7/3にぶい橙色粘質シルト
2. 2.5YR6/8橙色粘質シルト

064SX(5G19e)

1. 10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂
炭化物多く含む
2. 10YR6/3にぶい黄褐色中粒砂

006SX出土状態図(5G19f)

1. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂
2. 10YR6/3にぶい黄橙色中粒砂
3. 7.5YR6/8橙色中粒砂(粘質)
7.5YR6/3にぶい橙色中粒砂との斑土
4. 7.5YR5/1褐灰色粗粒砂

第54図　07 A区 008SX・009P・034P・065P・
054P・055P・063P・064SX・006SX(1:100)

北西堀：箱堀

全長約 16 m、本丸と対岸の土塁を結んだ幅約 16 m、堀底の幅約 2 m、本丸からの深さ約 7 mを測る箱堀（北箱堀）である。堀底が西堀より約 1 m低く、段差の部分には流れ落ちる水により穴ができていた。穴から漆器椀（W-1）が出土した。本丸側の張り出しは地崩れの跡であり、堀が埋まる前に本丸斜面が地滑りしたことがわかる。対岸の土塁の断面観察（土層ベルト Q-Q'）から、堀は北向き緩斜面を横断するように掘られ、排土を外側に盛り上げ土塁を構築していることがわかった。土塁の北側は土取りにより破壊されており不明である。5G15c・15d・15e・15f。

遺物としては、天目茶碗（629.630）、天目台（609）、端反皿（633.634）、稜皿（610）、浅鉢（631）、釜（611）、内耳鍋（632）、擂鉢（612）、挟み皿（616）、匣鉢（614.615）、漆器椀（W-1 ～ 3）、杓子（W-5）、建築部材（W-7 ～ W-14）などが出土している。

北堀：

北部が調査区外のため全長、幅、深さとも不明である。北水堀。検出した堀底の長さ約 9.5 m、幅約 4.5 m、対岸からの深さ約 3 mを測る。対岸の土塁の断面観察（土層ベルト P-P'）から、堀は元々あった東から西に下がる谷を、堰止めて構築していることがわかった。堀の東側の地山ブロックの盛土の下から先行する薬研堀を検出した。先述の土塁の断面には谷の埋土が再掘削されている様子が観察できることから、薬研堀はさらに西に続いていた可能性もある。5G13h.i.j、5G14f.g.h.i.j、5G15f.g.h.i.j、5G16g.h.i.j、5G13h.i.j。

遺物としては、天目茶碗（617.618.768.769）、平碗（776）、緑釉挟み皿（619.757）、端反皿（626.627.777.792）、丸皿（778.1186）、片口鉢（625）、深鉢（756）、釜（760）、双耳徳利（790）、合子蓋（767）、擂鉢（770 ～ 772）、筒形容器（621）、鍋（620）、土師皿（774.775）、内耳鍋（780）、匣鉢（622.758.759.764 ～ 766.781 ～ 787）、匣鉢蓋（762.763）、挟み皿（761.788）、漆器椀（W-20 ～ 23.27）、曲物（W-28）、下駄（W-29）、陽物（W-30）、杭（W-15 ～ 19.31）、建築部材（W-37.44.45）などが出土している。

北東堀：箱堀

北堀との境は不明瞭であるが、全長約 12 m、本丸と対岸の土塁を結んだ幅約 9 m、堀底の幅約 3 m、本丸からの深さ約 6.3 mを測る箱堀である。SX106 グリット 5G15i・j、5G16i・jも含む。堀底は東から西に向かって階段状に 2 段下がっている。段差の高さは東から約 0.5 m、1.2 mである。掘削に伴う排土は本丸北東部分や本丸の対岸の盛土に利用したと考えられる。堀の埋土を観察する（土層ベルト L-L'）と、堀底約 0.6 mは地山ブロックがほぼ水平に堆積しているが、その後は、本丸から流れ込む土砂で埋められていることがわかる。

遺物として、2 段目の対岸寄りで和鏡『菊花双鶴鏡』（M-2）が出土している他、天目茶碗（799.833.834.860 ～ 866.869 ～ 873.875 ～ 877.914）、丸碗（800.832.859.868）、小天目（878）、緑釉小皿（793.814.816）、腰折皿（815.854.882）、端反皿（628.824 ～ 830.884 ～ 890）、丸皿（821 ～ 823.893.894）、稜皿（892）、緑釉挟み皿（817 ～ 820.855.883）、灯明皿（895.913）、深鉢（813）、片口鉢（802.880）、四耳壺（850）、仏花瓶（852）、小壺（624.836）、合子蓋（794）、茶入（835）、耳付水注（897）、茶壺の蓋（898）、徳利（839.840.896）、筒形容器（881）、釜（795.837.858.901）、擂鉢（803.807 ～ 812.867.906 ～ 912）、甕（844 ～ 848.899.900）、挟み皿（798.853.856.857.902）、

匣鉢（804.849.903 ～ 905.915.916）、焼台（806）、中国白磁皿（842.843）、青磁碗（874）が出土。石臼（S-48）、漆碗（W-24 ～ 26）箸（W-76.77）、篦（W-41）、横槌（W-42）、鋤状木製品（W-43）、柄杓（W-78）、曲物（W-79 ～ 82）、桶底板（W-94）、板（W-93.95）杭（W-50.51.61）、楔（W-72）、柱（W-49.56.57）建築部材（W-46 ～ 48.53 ～ 55.62 ～ 71.83 ～ 86）、などが出土している。特に木製品は最下段に集中して出土している。

東堀：薬研堀

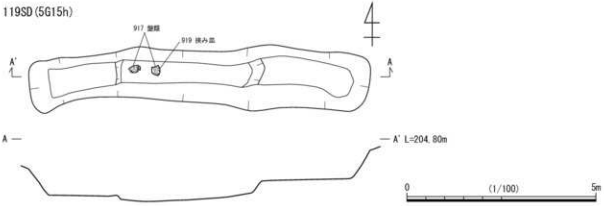
本丸の東側にある薬研堀である。南東部が調査区外のため全長、幅、本丸からの深さとも不明である。検出した長さ約 10 m、対岸から堀底までの幅約 3.5 m、対岸からの深さ約 3 mを測る。西側の薬研堀が堀底の標高がほぼ同一であったのに対して、東側の薬研堀は東に行くにつれ浅くなっている。掘削に伴う排土は本丸の対岸に盛り上げ堀を深くしている。5G16k.l、17k.l.m。

遺物としては、天目茶碗（664.673 ～ 675.688）、端反皿（639.640.668 ～ 671.680 ～ 684.690）、丸皿（641.643）、稜皿（642）、腰折皿（667）、灯明皿（638）、小瓶（645）、浅鉢（649）、深鉢（666）、鉢（691）、擂鉢（646 ～ 648.677.695 ～ 697）、手水鉢（698）、仏餉具（676）、花瓶（678）、祖母懐茶壺（650）、耳付水注（689）、甕（653.654）、匣鉢（655 ～ 663.685.692.694.699.700）、挟み皿（687）、常滑産甕（701）、土師皿（635 ～ 637）、青磁碗（651）、鉄鏃（M-1）などが出土している。

(9) 本丸北曲輪 104SX[第 50 図]

本丸の門跡直下で井戸（118SE）を検出したことから、井戸の周辺に曲輪があったことが考えられた。そこで埋土を層位ごとに掘り下げ、曲輪の確認に努めたが、明確な曲輪を確認することはできなかった。その理由としては、元々浅い谷だった部分を埋めて造成しているため、わかりにくかったことと、廃城後堀がある程度埋まった後に溝が掘られており（土層ベルト E-E'）、その時、曲輪が破壊された可能性が高いことなどが考えられる。

出土遺物としては、最上面（104SX-A、検出 1）で、炭化物の広がりと人頭大の焼けた石に混じり、天目茶碗（744）縁釉小皿（751）、腰折皿（752）、端反皿（753）、内耳型擂鉢（704）、瓶子（747）、両面硯（728）、小壺（745）、口広有耳壺（749）、深鉢（731）、丸皿（738.739）、桶（740）など古瀬戸、大窯製品と土師皿（725）、白磁皿（735）が出土している。しかし、二・三面目（104SX-B.C）で二面 B より、平碗（714）、腰折皿（720）、耳付水注（711）、四耳壺（706）、匣鉢（729）、山茶碗（730）、三



第 55 図　07 A 区 119SD(1:100)

面 C より、平碗（741.742）、緑釉小皿（736）、口広有耳壺（709）、瓶子（710）、仏餉具（743）、壺（750）、筒形容器（754）、匣鉢（755）など古瀬戸、大窯製品に混じり近世の徳利（1171）が出土しており、これより上層は近世以降の堆積と考えられる。最終面（104SX-D）の遺物は、口広有耳壺（707.708）、平碗（712.713.715）、丸碗（723.724）、緑釉小皿（717.718）、匣鉢（732）など古瀬戸後Ⅳ新段階から大窯 1 段階のものに限られるため、この面が曲輪の可能性が高いが、堀との明確な境を見つけることはできなかった。

また、特殊な遺物として、104SX-B.C から一字一石経（図 70）思われる「氏」（S-1）、「悉」（S-2）、「多」（S-3）、「那」（S-4）などの墨書のある拳大の石が 10 個出土した。

（10）井戸 118SE［第 71 図］

本丸の門跡直下で検出した直径約 1.1 m、深さ約 0.9 mの円形の井戸である。井戸の北部分のみ石組みを施していた。石組みの下には通水用に長さ約 3.3 mの竹樋が 2 列埋められており、井戸の水が長軸約 2.2 m、短軸約 1.4 m、深さ約 0.8 mの楕円形の土坑（125SK）に注ぐ構造になっていた。118SE からの遺物の出土はなかったが、125SK から擂鉢（921.922）、徳利（920）、常滑産甕（928）、匣鉢（923 ～ 926）が出土している。

（11）溝 119SD［第 55 図］

104SX 下層で検出した長辺約 9 m、短辺約 1.5 m、深さ約 0.8 ～ 1.1 mの長方形の溝である。中央約 4 m分が窪む。125SK に近く関連する遺構の可能性があるが性格は不明である。出土遺物としては、直縁大皿（917）、土師皿（918）、挟み皿（919）が出土している。

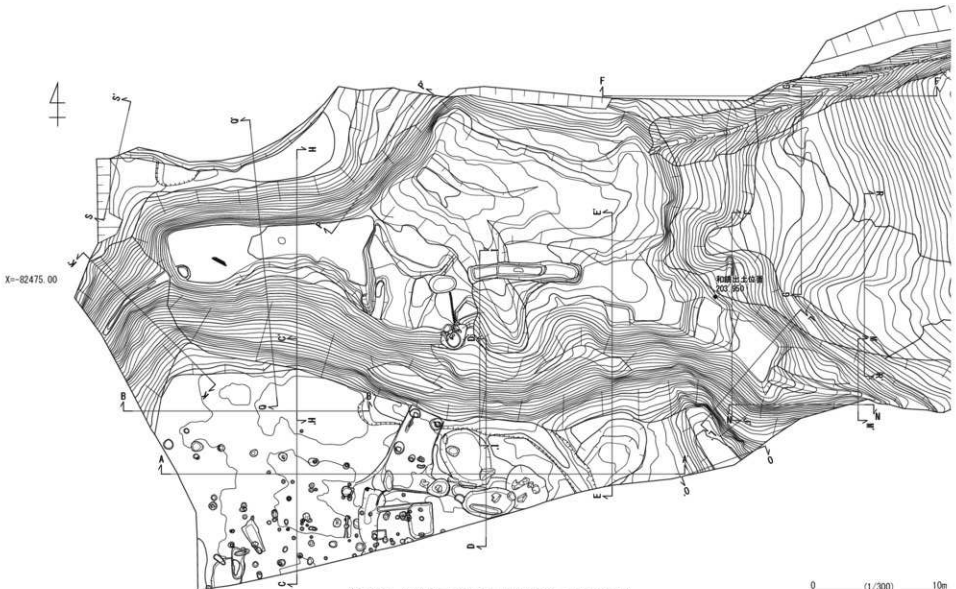
（12）本丸北東曲輪

江戸時代に作られた古城絵図では本丸と堀を挟んだ北東部に林が描かれ、城外となっている。ところが、北堀の東側斜面で、竪堀を検出したため、ここも城内であったことがわかった。この竪堀は北堀掘削時に出た地山ブロックで埋められており、東堀が掘られたことにより城外となったと思われる。平坦部で検出した遺構は、供養碑（003SZ）やそれに伴う集骨土坑（123SK）など近現代のものであり、この空間には建物等は建っていなかったようである。

竪堀は長さ約 20 m、幅約 2 m、深さ約 2.5 mの薬研堀で、出土遺物は擂鉢（936）、桶（937）、端反皿（938）、釜（942）、土師皿（939 ～ 941）、匣鉢（943 ～ 948）など古瀬戸後Ⅳ新段階と大窯 1 段階の遺物のみが出土しており、竪堀が埋められた時期、つまり北堀が掘削された時期は大窯 1・2 段階ころと考えられる。

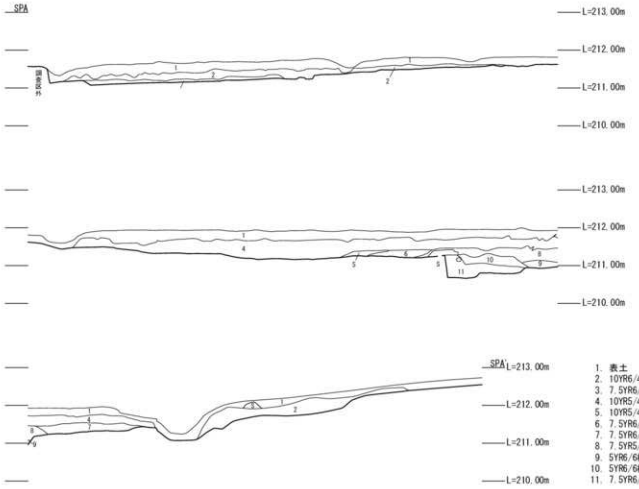
（13）東斜面

北東曲輪の東斜面はなだらかな傾斜をしており、築城に伴う改変は受けていないものと思われる。遺構としては、天目茶碗（931）、平碗（930）、擂鉢（934）、仏餉具（932.933）、匣鉢（935）など古瀬戸後Ⅳ新段階から大窯 1 段階の遺物が出土した溝状の落ち込み（110SD）、縄文時代の陥穴（126SK）、時期・性格ともに不明の石組の窯跡（111SX）を検出した。



第 56 図　07 A 区 土層ベルト位置図 SPA ～ SPS(1:300)

本丸:19ライン東西ベルト

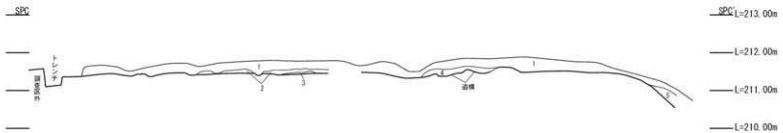


第57図　07A区SPA(1:100)

本丸:18ライン東西ベルト

1. 表土
2. 10YR5/4にぶい黄橙色細粒砂
3. 10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂
4. 10YR7/4にぶい黄橙色シルト 10YR8/3浅黄橙色シルト混じる
5. 10YR7/6明黄褐色シルト
6. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト
7. 10YR7/6明黄褐色粗粒砂 風化花崗岩混じる

本丸:eライン南北ベルト

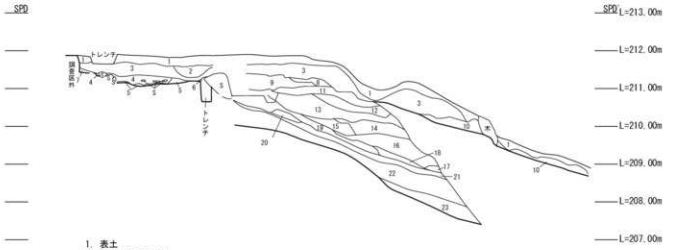


1. 表土
2. 10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂
3. 7.5YR6/6橙色中粒砂
4. 10YR5/4にぶい黄褐色中粒砂
5. 7.5YR7/6橙色中粒砂

第58図　07A区SPB・SPC(1:100)

0　(1/100)　5m

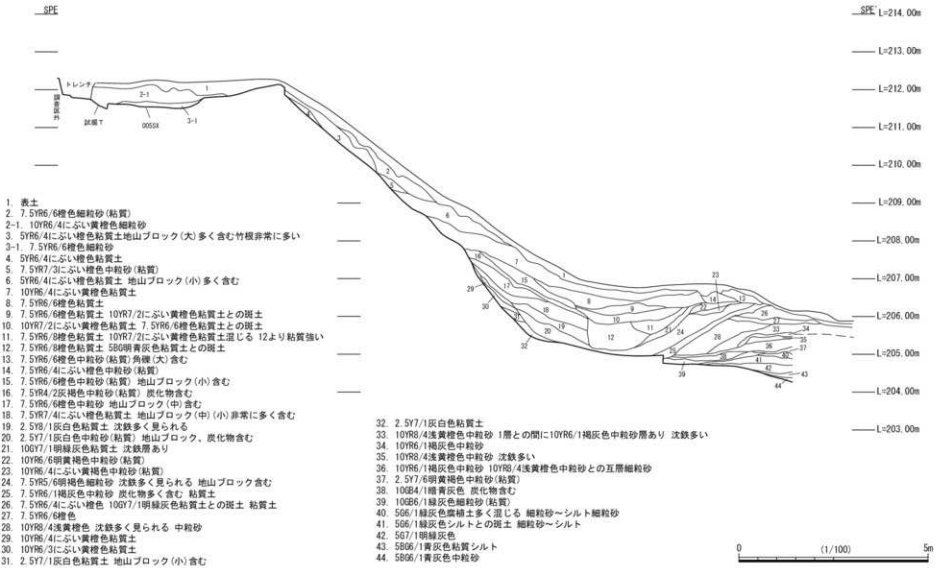
本丸:hライン南北ベルト



1. 表土
2. 5YR6/8橙色粘質土
3. 10YR5/2灰黄褐色中粒砂～10YR5/4にぶい黄褐色
4. 10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂 人頭大礫、炭化物含む(004SX)
5. 7.5YR4/3褐色細粒砂(粘質)
6. 5YR5/6明赤褐色粘質シルト
7. 5YR7/6橙色粘質土 10YR8/1灰白色粘土 ブロック混じる
8. 5YR6/4にぶい橙色中粒砂(粘質)
9. 7.5YR5/4にぶい褐色中粒砂 5YR5/6明赤褐色粘質シルト、10YR8/1灰白色粘土ブロックわずかに混じる
10. 10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂～7.5YR6/4橙色
11. 5YR6/8橙色中粒砂(粘質) 地山ブロック(大)混じる 整地層
12. 5YR6/8橙色中粒砂(粘質) 地山ブロック(大)多く混じる 整地層
13. 2.5YR8/1灰白色 地山ブロック層 7.5YR7/3にぶい橙色シルト混じる 整地層
14. 10YR7/6橙色粘質シルト 地山ブロック(小)多く混じる 整地層
15. 7.5YR7/1明褐灰色粘質シルト 地山ブロック(大)多く混じる 整地層
16. 7.5YR6/4にぶい橙色シルト 下方に地山ブロック(大)、沈鉄あり
17. 7.5YR6/6橙色中粒砂 整地層
18. 7.5YR7/8黄橙色中粒砂～シルト旧表土遺物含む
19. 5YR6/8橙色細粒砂～シルト旧表土遺物含む
20. 5YR6/8橙色細粒砂 5YR5/1褐灰色シルトとの互層(植物根跡か)
21. 10YR5/3にぶい黄橙色粘質シルト 炭化物混じる 無遺物
22. 10YR6/3にぶい黄褐色粘質シルト～10YR7/4にぶい黄褐色 無遺物
23. 5YR6/8橙色粘質シルト 風化花崗岩粒混じる 締まり強い

0 (1/100) 5m

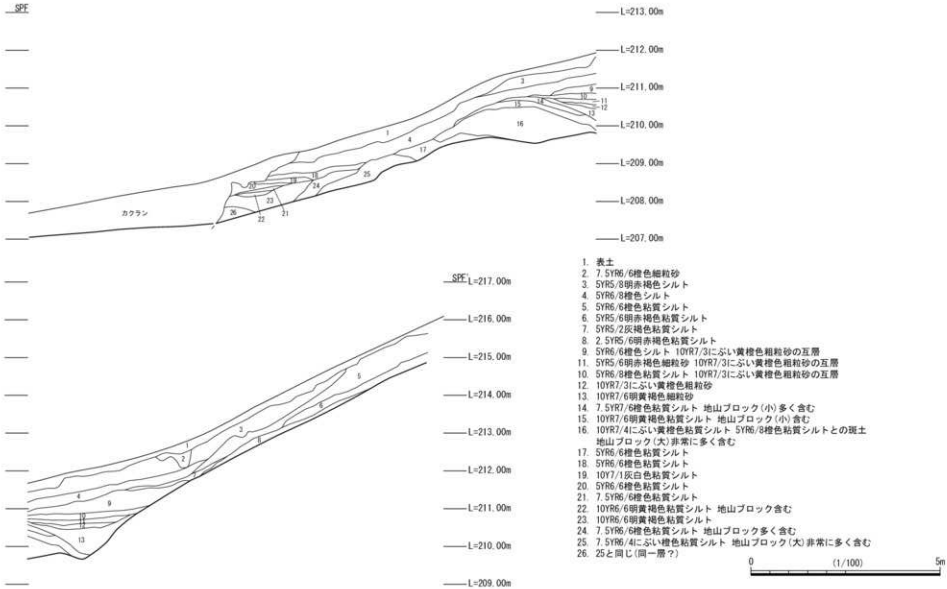
第59図 07A区 SPD(1:100)



1. 表土
2. 7.5YR6/6橙色細粒砂(粘質)
2-1. 10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂
3. 5YR6/4にぶい橙色粘質土地山ブロック(大)多く含む竹根非常に多い
3-1. 7.5YR6/6橙色細粒砂
4. 5YR6/4にぶい橙色粘質土
5. 7.5YR7/3にぶい橙色中粒砂(粘質)
6. 5YR6/4にぶい橙色粘質土 地山ブロック(小)多く含む
7. 10YR6/4にぶい黄橙色粘質土
8. 7.5YR6/6橙色粘質土
9. 7.5YR6/6橙色粘質土 10YR7/2にぶい黄橙色粘質土との斑土
10. 10YR7/2にぶい黄橙色粘質土 7.5YR6/6橙色粘質土との斑土
11. 7.5YR6/8橙色粘質土 10YR7/2にぶい黄橙色粘質土混じる 12より粘質強い
12. 7.5YR8/8橙色粘質土 5B6明青灰色粘質土との斑土
13. 7.5YR6/6橙色中粒砂(粘質)角礫(大)含む
14. 7.5YR6/4にぶい橙色中粒砂(粘質)
15. 7.5YR6/6橙色中粒砂(粘質) 地山ブロック(小)含む
16. 7.5YR4/2灰褐色中粒砂(粘質) 炭化物含む
17. 7.5YR6/6橙色中粒砂 地山ブロック(中)含む
18. 7.5YR7/4にぶい橙色粘質土 地山ブロック(中)(小)非常に多く含む
19. 2.5YR/1灰白色粘質土 次鉄多く見られる
20. 2.5Y7/1灰白色中粒砂(粘質) 地山ブロック、炭化物含む
21. 10GY7/1明緑灰色粘質土 次鉄際あり
22. 10YR6/6明黄褐色中粒砂(粘質)
23. 10YR6/4にぶい黄橙色中粒砂(粘質)
24. 7.5YR5/6明褐色細粒砂 次鉄多く見られる 地山ブロック含む
25. 7.5YR6/1褐灰色中粒砂 炭化物多く含む 粘質土
26. 7.5YR6/4にぶい橙色 10GY7/1明緑灰色粘質土との斑土 粘質土
27. 7.5YR6/6橙色
28. 10YR8/4浅黄橙色 次鉄多く見られる 中粒砂
29. 10YR6/4にぶい黄橙色粘質土
30. 10YR6/3にぶい黄橙色粘質土
31. 2.5Y7/1灰白色粘質土 地山ブロック(小)含む
32. 2.5Y7/1灰白色粘質土
33. 10YR8/4浅黄橙色中粒砂 1層との間に10YR6/1褐灰色中粒砂層あり 次鉄多い
34. 10YR6/1褐灰色中粒砂
35. 10YR8/4浅黄橙色中粒砂 次鉄多い
36. 10YR6/1褐灰色中粒砂 10YR8/4浅黄橙色中粒砂との互層細粒砂
37. 2.5Y7/6明黄褐色中粒砂(粘質)
38. 10GB4/1暗青灰色 炭化物含む
39. 10GB6/1緑灰色細粒砂(粘質)
40. 5G6/1緑灰色腐植土多く混じる 細粒砂～シルト細粒砂
41. 5G6/1緑灰色シルトとの斑土 細粒砂～シルト
42. 5G7/1明緑灰色
43. 5B6/1青灰色粘質シルト
44. 5B6/1青灰色中粒砂

第60図　07A区SPE(1:100)

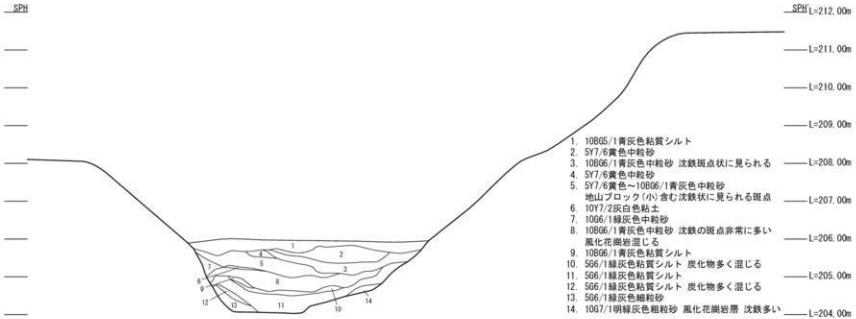
本丸:13ライン東西ベルト



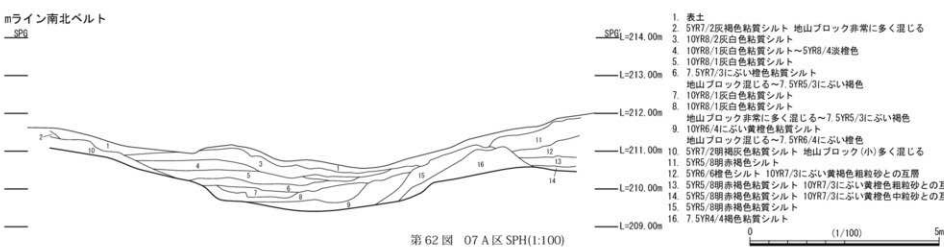
第61図　07A区SPF(1:100)

箱堀

eライン南北ベルト

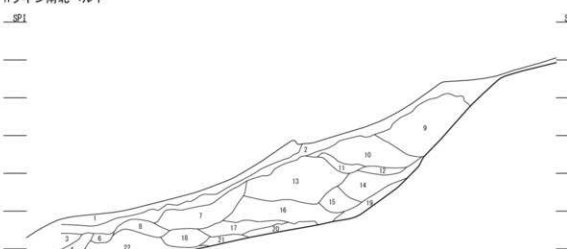


mライン南北ベルト



第62図　07A区SPH(1:100)

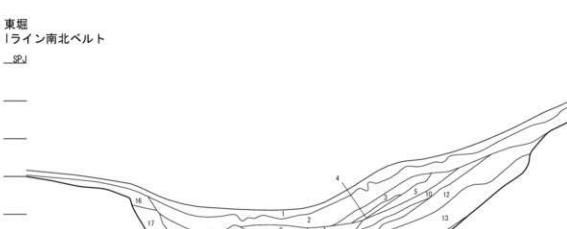
本丸北法面
hライン南北ベルト



1. 表土
2. 10YR6/4にぶい黄橙色中粒砂 竹の根多い 地山ブロック(中)わずか混じる
3. 10Y7/1灰白色中粒砂 鉄分が斑点状に見られる
地山ブロック(中)わずかに混じる
4. 10YR7/1灰白色中粒砂 鉄分のしみ3層より多い
5. 10Y6/1灰色細粒砂 鉄分のしみ見られる
6. 2.5Y8/1灰白色粘質シルト 鉄分のしみ見られる
7. 7.5YR6/6橙色中粒砂(粘質) 地山ブロック(大・中)多く混じる
8. 7.5YR5/6明褐色粘質シルト 地山ブロック(小)多く混じる
9. 7.5YR5/6明褐色粘質シルト 地山ブロック(小)混じる
10. 10YR6/4にぶい黄橙色中粒砂
11. 2.5Y7/3浅黄色細粒砂
12. 5YR6/6橙色粘質シルト 地山ブロック(大)多く混じる
13. 7.5YR6/6橙色中粒砂 地山ブロック、5YR6/6橙色粘質シルトブロック混じる
14. 7.5YR6/6橙色細粒砂 地山ブロック(中)
5YR6/6橙色粘質シルトブロック(小)混じる
15. 7.5YR6/6橙色細粒砂 地山ブロック、5YR6/6橙色粘質シルトブロック混じる
16. 7.5YR6/6橙色細粒砂 地山ブロック(小)わずか混じる
17. 7.5YR6/6橙色細粒砂 2.5YR6/6橙色粘質シルト混じる
18. 2.5Y7/3浅黄色細粒砂 7.5YR6/6橙色細粒砂との斑土 地山ブロック含む
19. 10YR6/6にぶい黄橙色粘質シルト 地山ブロック斑土状に混じる
20. 7.5YR7/6橙色粘質シルト 地山ブロック多く混じる
21. 7.5YR7/6橙色細粒砂 2.5Y7/3浅黄色中粒砂混じる
22. 7.5YR7/6橙色粘質シルト 地山ブロック(中)多く混じる

0 (1/100) 5m

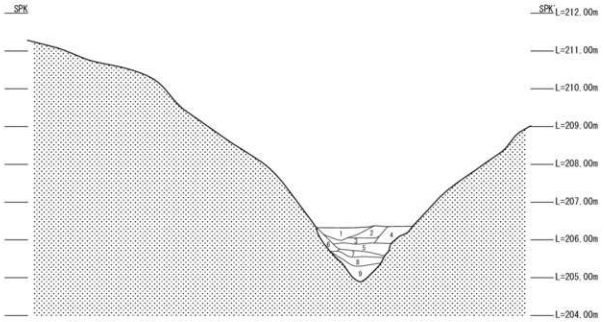
東堀
Iライン南北ベルト



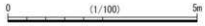
1. 表土
2. 10YR7/6明黄褐色細粒砂 締まり弱い
3. 2.5YR7/4浅黄色中粒砂 2.5Y7/1灰白色
地山ブロック(大)含む 締まり弱い
4. 2.5Y8/1灰白色中粒砂 締まり弱い
5. 10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂 7.5YR6/8橙色粘質細粒砂
ブロック混じる 締まり弱い
6. 10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂 灰白色地山ブロック(大)(小)と
細粒砂の斑土 7.5YR6/8橙色粘質細粒砂 ブロック混じる 締まり弱い
7. 7.5YR5/8明褐色粘質シルト 2.5Y7/1灰白色地山ブロック(中)混じる
8. 10YR7/3にぶい黄橙色粘質シルト 2.5Y7/1灰白色地山ブロック(小)混じる
9. 7.5YR5/8明褐色粘質シルト 10YR7/3にぶい黄褐色中粒砂との互層
10. 7.5YR7/6橙色細粒砂 2.5Y7/1灰白色地山ブロック(小)
7.5YR6/8橙色粘質細粒砂ブロック多く混じる 締まり弱い
11. 10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂 2.5Y7/1灰白色地山ブロック(小)
7.5YR6/8橙色粘質細粒砂ブロック混じる 締まり弱い
12. 7.5YR7/6橙色細粒砂 2.5Y7/1灰白色地山ブロック(小)
7.5YR5/8橙色粘質細粒砂 ブロック混じる 締まり弱い
13. 7.5YR6/8橙色細粒砂(粘質) 2.5Y7/1灰白色地山ブロック(小)多く混じる
14. 2.5Y8/3浅黄色粘質シルト 2.5Y7/1灰白色地山ブロック(小)混じる
15. 10YR8/3浅黄橙色細粒砂 2.5Y7/1灰白色地山ブロック(大)多く混じる
16. 2.5Y7/3浅黄色粘質シルト 2.5Y7/1灰白色地山ブロック(大)多く混じる
17. 5YR7/6橙色粘質シルト 2.5Y7/1灰白色地山ブロック(大)多く混じる
18. 10YR6/4にぶい黄橙色粘質シルト
19. 10YR7/3にぶい黄橙色粘質シルト 5YR7/6橙色粘質シルトブロック
2.5Y7.1灰白色地山ブロック(小)混じる
20. 10YR7/6明黄褐色シルト 一部鉄分により赤色

第63図 07A区SPI・SPJ(1:100)

西堀
ベルト

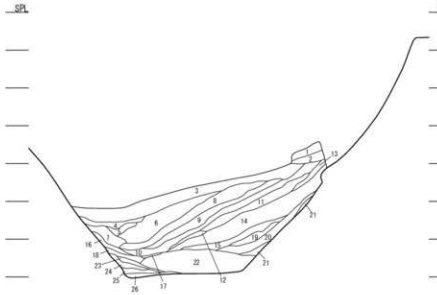


1. 10YR7/3にぶい黄橙色粗粒砂 10GY8/1明緑灰色中粒砂混じる
2. 2.5Y7/4浅黄色中粒砂 10GY6/1緑灰色シルトブロック混じる
3. 2.5Y7/3浅黄色粗粒砂
4. 10YR7/4にぶい黄橙色粗粒砂 地山ブロック(小)斑状に混じる
5. 10YR6/3にぶい黄橙色中粒砂 沈鉄、地山ブロック(中)非常に多く混じる
6. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂
7. 10GY7/1明緑灰色中粒砂 沈鉄多い
8. 10GY7/1明緑灰色中粒砂 沈鉄非常に多い
9. 10GY7/1明緑灰色中粒砂 沈鉄7・8より少ない



第64図　07A区SPK(1:100)

東堀

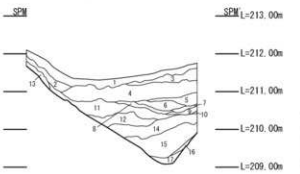


1. 表土
2. 10YR8/1灰白色 根多い
3. 10YR6/4にぶい黄橙色中粒砂(粘質)
4. 7.5YR7/4にぶい橙色細粒砂(粘質) 2.5Y7/4浅黄色中粒砂混じる
5. 7.5YR7/4にぶい橙色細粒砂(粘質) 2.5Y8/1灰白色 地山ブロック(小)との斑土 2.5Y7/4浅黄色中粒砂混じる
6. 2.5Y7/4浅黄色中粒砂 地山ブロック(小)わずかに混じる
7. 7.5YR7/4にぶい橙色細粒砂(粘質) 2.5Y8/1灰白色 地山ブロック(大)との斑土
8. 7.5YR7/6橙色中粒砂 地山ブロック(中)混じる
9. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂 地山ブロック(小)わずかに混じる
10. 5YR7/6橙色中粒砂(粘質) 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂との斑土 地山ブロック(小)混じる
11. 2.5Y7/4浅黄色細粒砂 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂混じる
12. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂 地山ブロック(小)混じる
13. 2.5Y7/4浅黄色細粒砂 地山ブロック(小)多く混じる
14. 5YR7/6橙色中粒砂(粘質) 地山ブロック(小)多く混じる
15. 5YR6/1褐灰色細粒砂(粘質) 地山ブロック(小)多く混じる 炭化物混じる
16. 5YR6/4にぶい橙色粘質シルト 2.5Y8/1灰白色 地山ブロックとの斑土
17. 5YR6/4にぶい橙色粘質シルト
18. 5YR6/4にぶい橙色粘質シルト 下方に2.5Y8/1灰白色粘質シルト混じる
19. 10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂(粘質) 地山ブロック(小)、炭化物わずかに混じる
20. 7.5YR7/4にぶい橙色細粒砂(粘質) 下方に地山ブロック(中)多く混じる炭化物わずかに混じる
21. 2.5Y8/1灰白色粘質シルト
22. 2.5Y8/1灰白色地山ブロック(大)と5YR7/4にぶい橙色中粒砂の斑土
23. 5YR6/4にぶい橙色粘質シルト 地山ブロック(小)わずかに混じる
24. 5YR6/8橙色粘質シルト 2.5Y8/1灰白色 地山ブロック(小)との斑土
25. 5YR7/4にぶい橙色粘質シルト 地山ブロック(中)多く混じる
26. 5Y7/1灰白色粗粒砂締まりあり

0 (1/100) 5m

第65図　07A区SPL(1:100)

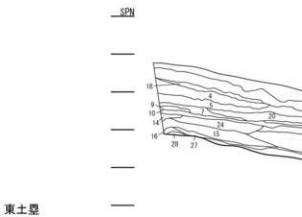
n2ライン(東の堀)



1. 表土
2. 10YR6/3にぶい黄橙色中粒砂
3. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂
4. 2.5YR6/6橙色細粒砂
5. 2.5Y8/1灰白色中粒砂 締まり弱い
6. 5YR7/4にぶい橙色中粒砂 2.5Y8/1灰白色細粒砂との互層
7. 2.5Y8/1灰白色細粒砂 5YR7/4にぶい橙色中粒砂との斑土
8. 5YR7/6橙色中粒砂 地山ブロック(小)混じる
9. 2.5Y8/1灰白色中粒砂
10. 5YR7/4にぶい橙色中粒砂 地山ブロック(小)混じる
11. 7.5YR7/4にぶい橙色細粒砂 地山ブロック(大)多く混じる
12. 5YR7/6橙色細粒砂 地山ブロック(大)混じる
13. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂 地山ブロック(中)混じる
14. 5YR6/8橙色中粒砂 地山ブロック(中)混じる
15. 5YR6/4にぶい橙色細粒砂 地山ブロック(小)混じる
16. 5YR6/8橙色粘質シルト
17. 5YR7/1明褐灰色粘質シルト

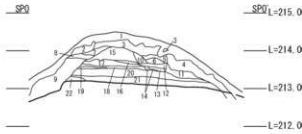
0 (1/100) 5m

18ライン2



1. 表土
3. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂
4. 2.5YR6/6橙色細粒砂
5. 2.5Y8/1灰白色中粒砂 締まり弱い
7. 2.5Y8/1灰白色細粒砂 5YR7/4にぶい橙色中粒砂との斑土
9. 2.5Y8/1灰白色中粒砂
10. 5YR7/4にぶい橙色中粒砂 地山ブロック(小)含む
14. 5YR6/8橙色中粒砂 地山ブロック(中)含む
15. 5YR6/4にぶい橙色細粒砂 地山ブロック(小)含む
16. 5YR6/8橙色粘質シルト
18. 2.5Y8/1灰白色中粒砂 2.5YR6/6橙色細粒砂ブロック含む
19. 7.5YR7/2明褐灰色中粒砂 地山ブロック(大)多く含む
20. 10YR7/2にぶい黄橙色中粒砂
21. 7.5YR7/3にぶい橙色中粒砂
22. 5YR7/6橙色中粒砂 地山ブロック(小)少量含む
23. 5YR7/4にぶい橙色中粒砂 地山ブロック(小)含む
24. 5YR7/6橙色中粒砂 地山ブロック(小)少量含む
25. 7.5YR7/4にぶい橙色中粒砂
26. 7.5YR7/4にぶい橙色中粒砂 5YR7/6橙色中粒砂との互層 地山ブロック(小)含む
27. 5YR4/1褐灰色細粒砂 炭化物多く含む
28. 5YR7/4にぶい橙色細粒砂
29. 5YR5/1褐灰色細粒砂 10YR7/6明黄褐色中粒砂との互層 炭化物含む
30. 10YR6/6明黄褐色中粒砂 地山ブロック(小)わずか含む
31. 10YR4/1褐灰色細粒砂 10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂との互層
32. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂 地山ブロック(小)含む
33. 5YR5/8明黄褐色中粒砂 地山ブロック(小)含む
34. 5YR4/1褐灰色中粒砂 10YR7/1灰白色中粒砂との互層
35. 10YR7/1灰白色中粒砂
1～16. SG-n2ライン(東の堀)土層断面図と同一層

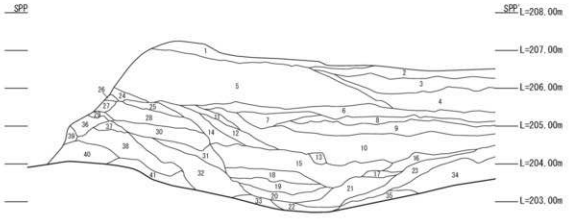
東土塁
ベルト



1. 表土
2. 5YR6/8橙色中粒砂 締まりなし
3. 2.5Y8/3淡黄色細粒砂～10YR6/4にぶい黄橙色 締まりなし
4. 10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂 締まりなし
5. 2.5Y8/3淡黄色細粒砂
6. 2.5Y8/2灰白色細粒砂
7. 2.5Y8/1灰白色中粒砂 風化花崗岩
8. 5YR6/8橙色～2.5Y8/1灰白色中粒砂 締まりなし
9. 5YR6/8橙色～10YR8/4淡黄橙色中粒砂 締まりなし
10. 2.5YR8/3淡黄色細粒砂 締まりなし
11. 2.5Y7/4浅黄色シルト 締まりなし
12. 2.5Y8/1灰白色細粒砂 締まりなし
13. 2.5YR7/6橙色中粒砂 締まりなし
14. 2.5Y7/4浅黄色シルト 10G7/1明緑灰色粘土ブロック混じる
15. 風化花崗岩粗粒砂締まりなし
16. 2.5Y7/4浅黄色シルト 風化花崗岩との互層
17. 風化花崗岩中粒砂 締まりなし
18. 10G6/1緑灰色粘土
19. 風化花崗岩細粒砂
20. 2.5Y7/4浅黄色シルト
21. 10G6/1緑灰色～2.5Y7/4浅黄色シルト
22. 風化花崗岩中粒砂締まりなし

第66図　07A区SPM・N・O(1:100)

北西土塁

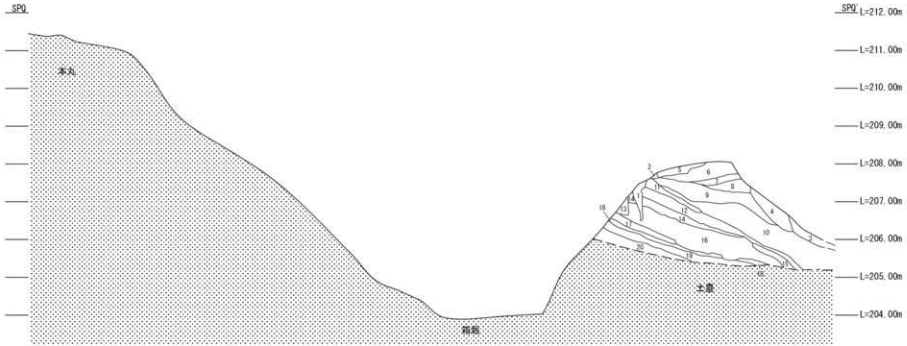


1. 7.5YR6/6橙色シルト 地山ブロック(中)混じる
2. 10YR7/4にぶい黄橙色 地山ブロック(中)混じる
3. 7.5GY7/1明緑灰色シルト 沈鉄斑点状に見られる
4. 2.5Y8/2灰白色中粒砂 地山ブロック(大)混じる
5. 7.5YR6/8橙色シルト 2.5GY6/1オリーブ灰色シルトとの斑土 地山ブロック(中)混じる
6. 7.5GY7/1明緑灰色中粒砂 地山ブロック(小)わずか混じる
7. 10GY6/1緑灰色地山ブロック 地山ブロック(大)と2.5Y8/2灰白色中粒砂の斑土
8. 10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂 沈鉄斑点状に見られる
9. 10GY6/1緑灰色細粒砂～シルト地山ブロック(小)多く混じる
10. 10GY5/1緑灰色細粒砂～シルト地山ブロック(小)多く混じる
11. 7.5GY6/1緑灰色細粒砂～シルト沈鉄が斑点状に見られる
12. 7.5GY6/1緑灰色細粒砂 2.5GY5/1オリーブ灰色シルトとの互層下方に地山ブロック(小)混じる
13. 7.5GY7/1明緑灰色中粒砂
14. 7.5GY6/1緑灰色細粒砂 2.5GY5/1オリーブ灰色シルトとの互層斜め堆積
15. 7.5GY6/1緑灰色細粒砂～シルト部分的に中粒砂 地山ブロック(小)混じる
16. 5GY7/1明オリーブ灰色細粒砂 地山ブロック(小)混じる
17. 7.5GY6/1緑灰色細粒砂～シルト
18. 10G6/1緑灰色細粒砂部分的に中粒砂混じる
19. 5BG6/1青灰色中粒砂～細粒砂
20. 7.5Y5/2灰オリーブ色粘質シルト
21. 7.5GY6/1緑灰色シルト 10GY6/1緑灰色細粒砂との互層
22. N3/暗灰色粘質シルト 腐植土層
23. N2/黒色粘質シルト 腐植土層
24. 7.5GY6/1緑灰色細粒砂
25. 5BG6/1青灰色細粒砂 7.5GY6/1緑灰色シルトとの斑土 地山ブロック(小)斑点状に混じる
26. 5Y5/2灰オリーブ色シルト 地山ブロック(小)斑点状に混じる
27. 2.5Y4/1黄灰色シルト 地山ブロック(小)斑点状に混じる
28. 10YR6/4にぶい黄橙色シルト 7.5GY6/1緑灰色中粒砂との斑土 地山ブロック(小)混じる 沈鉄線状に見られる
29. 5Y5/1灰色細粒砂 沈鉄線状に見られる
30. 10GY6/1緑灰色中粒砂 2.5Y6/6明黄褐色中粒砂 7.5GY6/1緑灰色シルトとの斑土 炭化した植物根混じる
31. 7.5GY6/1緑灰色シルト 腐植土多く混じる
32. 7.5GY6/1緑灰色シルト 地山シルト(小)わずか混じる 炭化した植物根混じる
33. 7.5GY7/1明緑灰色細粒砂 2.5Y7/4浅黄色シルトとの互層
34. 5Y6/4オリーブ黄色シルト 地山ブロック(小)わずか混じる
35. 5Y6/4オリーブ黄色シルト 5Y4/1灰色中粒砂との斑土
36. 2.5Y5/1黄灰色細粒砂 風化花崗岩との斑土
37. 5G6/1緑灰色シルト 地山ブロック多く混じる
38. 7.5GY6/1緑灰色シルト 5G6/1緑灰色中粒砂 地山ブロックを大量に含む
39. 10BG7/1明青灰色細粒砂 10Y6/2オリーブ灰色細粒砂混じる 沈鉄あり
40. 10Y6/2オリーブ灰色シルト 10GY6/1緑灰色中粒砂ブロックあり
41. 10Y6/2オリーブ灰色シルト～中粒砂

第67図　07A区SPP(1:100)

0　(1/100)　5m

ベルト



1. 表土(竹根痕)
2. 7.5YR6/3橙色中粒砂 表土混じる
3. 7.5Y6/3オリーブ黄色中粒砂
4. 10YR7/4にぶい黄橙色中粒砂 2.5YR8/2灰白色中粒砂との斑土 地山ブロック多く混じる
5. 7.5YR6/6橙色中粒砂地山ブロック(中)多く混じる
6. 10YR8/3浅黄橙色中粒砂 10YR7/6明黄褐色中粒砂との斑土 地山ブロック(大)多く混じる
7. 10YR7/6明黄褐色中粒砂 地山ブロック(中)混じる
8. 2.5YR8/3淡黄色中粒砂 10YR7/6明黄褐色中粒砂との斑土 地山ブロック(小)多く混じる
9. 7.5YR7/6橙色中粒砂 地山ブロック(小)多く混じる
10. 10YR7/3にぶい黄橙色中粒砂
11. 7.5YR7/6橙色中粒砂 地山ブロック(小)混じる
12. 7.5YR6/6橙色中粒砂
13. 2.5Y7/4浅黄色中粒砂
14. 7.5YR6/6橙色中粒砂(粘質地山ブロック(小)多く混じる)
15. 7.5YR6/6橙色中粒砂(粘質2 5YR8/3淡黄色中粒砂との斑土地山ブロック混じる)
16. 2.5Y6/2灰黄色中粒砂 地山ブロック多く混じる(埋め立てられたものか、複数の土色が複雑に混じる)
17. 10YR7/4にぶい黄橙色粘質シルト 地山ブロック多く混じる
18. 5YR6/8橙色粘質シルト
19. 10YR7/4にぶい黄橙色粘質シルト
20. 7.5YR6/8黄橙色粘質シルト

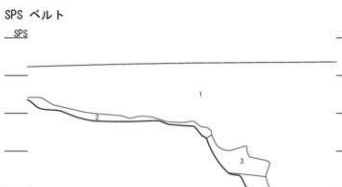
第68図　07A区SPQ(1:100)

0　(1/100)　5m

n2ライン(盛土)

1. 7.5G Y6/1緑灰色粘土ブロック 10YR6/2灰黄褐色シルト混じる。
2. 2.5YR5/6明赤褐色シルト 5G Y8/1明緑灰色粘土ブロック非常に多く混じる。
3. 2.5YR5/8明赤褐色粘質シルト 地山ブロック(小)混じる。
4. 5YR6/4にぶい橙色粘質シルト 地山ブロック混じる。
5. 5YR5/8明赤褐色粘質シルト
6. 5YR6/4にぶい橙色粘質シルト
7. 7.5YR4/3褐色粘質シルト
   ～7.5YR6/6橙色
8. 7.5YR5/6明褐色粘質シルト
9. 5YR5/8明赤褐色粘質シルト
10. 10YR6/6明黄褐色粘質シルト
11. 2.5YR5/8明赤褐色粘質シルト 地山ブロック(小)斑点状に混じる、締りあり。

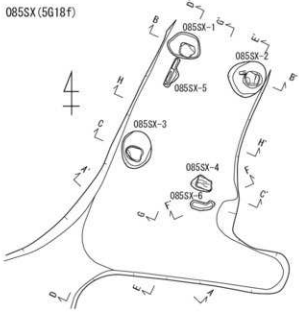
SPS ベルト

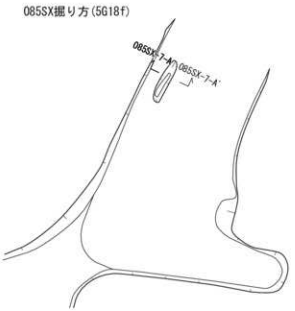


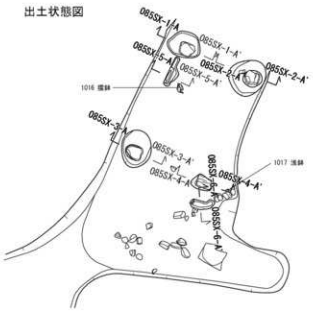
1. 盛土
2. 旧表土
3. 7.5Y6/3オリーブ黄色粗粒砂 2.5YR6/8橙色粗粒砂のブロック混入
4. 7.5Y4/2灰オリーブ粗粒砂
5. 10BG1/6青灰色粗粒砂

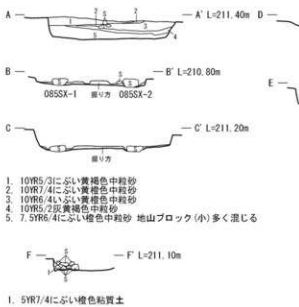
0 (1/100) 5m

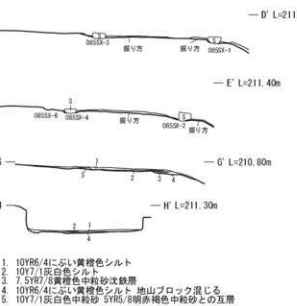
第69図　07A区SPR・SPS(1:100)

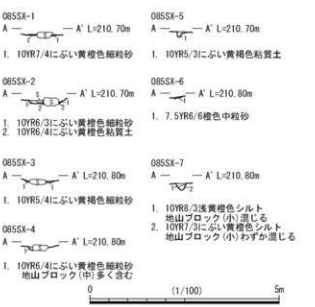






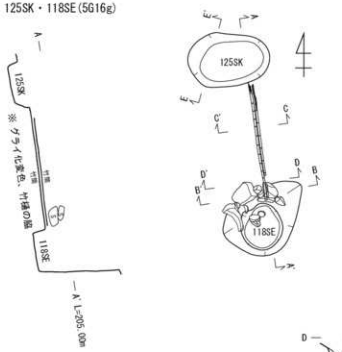






第70図　07A区085SX(1:100)

125SK・118SE(5G16g)



125SK・118SE掘り方(5G16g)

D — 118SE — D' L=205.40m

1. 2.5GY6/1オリーブ灰色粗粒砂沈鉄見られる
2. 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂
2.5GY6/1オリーブ灰色粗粒砂との斑土沈鉄非常に多く見られる
3. 10BG6/1青灰色粗粒砂7.5YR5/6明褐色粗粒砂(沈鉄層)との斑土
4. 10BG6/1青灰色中粒砂沈鉄見られる
5. 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂沈鉄多く見られる
6. 10GY5/1緑灰色中粒砂地山ブロック含むグライ化
7. 10GY6/1緑灰色粗粒砂
8. 風化花崗岩沈鉄多く見られる
9. 2.5Y7/4浅黄色細粒砂
10. 7.5YR6/8橙色シルト沈鉄層状に見られる風化花崗岩あり
11. 2.5Y7/4浅黄色細粒砂

E — 125SK — E' L=205.20m

1. 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト
10GY6/1緑灰色中粒砂層状に混じる
2. 10GY6/1緑灰色中粒砂
10GY5/1緑灰色シルトとの互層
3. 10GY5/1緑灰色シルト

C — 118SE — C' L=204.80m

1. 10BG7/1明青灰色シルト～中粒砂
2. 7.5YR6/8橙色細粒砂
2.5Y8/3淡黄色細粒砂との互層(沈鉄の濃淡の違い)
3. 2.5Y8/3淡黄色細粒砂沈鉄層あり
4. 2.5Y8/3淡黄色中粒砂沈鉄層あり
5. 10BG6/1青灰色シルト

B — 118SE — B' L=205.90m

※ 破線は投影線

第71図　07A区125SK・118SE(1:100)

第３章　出土遺物

第１節　出土陶磁器の概要

桑下城跡出土遺物は古代の須恵器片から近現代の陶磁器まで出土した。

製品の破片については調査区内すべて取り上げカウントしたが、土師質の皿、鍋釜類と窯道具（匣鉢、挟み皿）と近現代の陶磁器についてカウントは実施しなかった。

調査により出土した陶磁器の総破片数は 8,894 点（第３表）であった。

古代の須恵器、中世の山茶碗、灰釉陶器、輸入陶磁器も含むが、08 区で新発見の山茶碗窯、上品野Ｅ窯跡に関わる遺物が多く、山茶碗 411 点となった。

出土破片の多い順に、擂鉢 3,910 点、天目茶碗 912 点、端反皿 871 点、甕 672 点、鍋・釜 578 点、灯明皿 299 点、平碗 154 点、丸皿 145 点、徳利 142 点、緑釉皿 124 点、鉢 96 点、腰折皿 84 点、折縁皿 61 点、壺 48 点、大鉢（皿）46 点、茶壺 35 点、筒形容器 33 点、小鉢（皿）24 点、瓶 23 点、稜皿 22 点、丸碗 20 点、蓋 18 点、茶入 11 点、卸皿 8 点、水滴 8 点、耳付水注 7 点、小天目・小杯 7 点、瓶子 6 点、仏餉具 6 点、長石釉（志野）皿 5 点、仏花瓶 5 点、桶 5 点、香炉 5 点、燭台 5 点、双耳小壺 4 点、口広有耳壺 4 点、鉄緑皿 3 点、深鉢 3 点、花瓶 2 点、四耳壺 2 点、浅鉢 2 点、稜花皿 1 点、輪花皿 1 点、内禿皿 1 点、卸目皿 1 点、手水鉢 1 点、建水 1 点、水指 1 点、と中国陶磁器が 15 点である。

狛犬の鼻の一部（1188）も出土。不明器種として（393,532,1003）がある。

この他に須恵器が坏蓋（329）、坏（487）等の 24 点、灰釉陶器が３点、山茶碗が 411 点出土した。

100 点以上出土した器種は、擂鉢 3,910 点、天目茶碗 912 点、端反皿 871 点、甕 672 点、鍋・釜 578 点、灯明皿 299 点、平碗 154 点、丸皿 145 点、徳利 142 点、緑釉皿 124 点、である。擂鉢と鍋・釜と甕は、形状そのものが大形のため突出した数字になっているが、個体数は少ない。擂鉢は口縁部個体数 133 個と底部個体数 94.6 個である。端反皿は口縁部個体数 54.8 個と底部個体数 61.1 個、天目茶碗は口縁部個体数 31.6 個と底部個体数 70.6 個である。

実測可能なものを出来るだけ図示したが、藤澤編年では前期Ⅲ . Ⅳ段階から大窯第４段階までの遺物が出土しその中心は後期Ⅳ新段階から大窯３段階（15 世紀末から 16 世紀後葉）までで（第２表）ある。

特徴的な遺物として、

大窯第１段階の鎬蓮弁文丸碗（366.367.397.398.408.832.859.1067）（第 73 図）、灰釉稜花（鍔）皿（87）、

大窯第２段階の銅緑釉丸皿（274.531）、灰釉輪花丸皿（598）、

大窯第３段階の銅緑釉稜皿（1）、灰釉の流し掛け鉄釉丸皿（596.597）、焼締稜皿（263.264）碁笥底、

大窯第４段階も僅かであるが黄瀬戸の灰釉大皿（400）黄瀬戸の灰釉鉢（411）、擂鉢（429）が出土。

桑下東窯跡出土の皿と同じ印花文が桑下城跡出土丸皿と匣鉢に見られる。桑下東窯跡出土の端反皿の糸巻（桑下東窯跡出土遺物番号 228.356）印花文と同じ印花文が丸皿 158（第 73 図）に、そして端反皿の花菱（桑下東窯跡出土遺物番号 3.227）印花文と同じ印花文が、匣鉢 781（第 73 図）の底部内面に見られた。匣鉢に印花文のある例は他にはない。

茶入れ（第72図）は16点（62.63.161.186.203.204.217.237.241.461.835.1004.1031.1061～1063）、薄手に作られているが灰釉の茶入（461）は厚手である。中国産（186）かと思われる茶入も見られる。

本来の用途と違い転用された製品もある。丸皿（525.530）の内面に銅が付着していたことから、鍛冶場があったことが窺える。また匣鉢（786）の内面全体には煤が付着した例もある。

狛犬の鼻の一部（1188）、瓦質風呂の口縁（417）が出土。両面硯（728）は使用された痕跡もなく、あまり見られない器種である。不明器種として（393.532.1003）がある。

中国陶磁（第73図）は青磁が6点、白磁が4点、青花5点が出土。

龍泉窯の青磁碗4点（355.651.737.874）で737は15世紀前半、651と874は15世紀後半、355は15世紀、青磁稜花皿（1058）は15世紀後半、青磁盤（498）は15世紀。

景徳鎮窯の白磁端反り皿（652.735.842）は15世紀、福建省の白磁皿（843）は15世紀。

青花皿（28）は玉取獅子か、青花碗（156.168.297.998）で端反碗（156.297）も出土している。

藤澤氏は、大窯が15世紀末から17世紀初頭にかけての120年130年ほど、戦国から織豊期を、大窯1段階から第4段階までの四段階に、さらに各段階を前後二時期に細分されている。古瀬戸後Ⅳ期古段階が1440年から1460年、古瀬戸後Ⅳ新段階が1460年から1480年、大窯第1段階が1480年から1530年、大窯第2段階が1530年から1560年、大窯第3段階が1560年から1590年、大窯第4段階が1590年から1610年と考えられている。

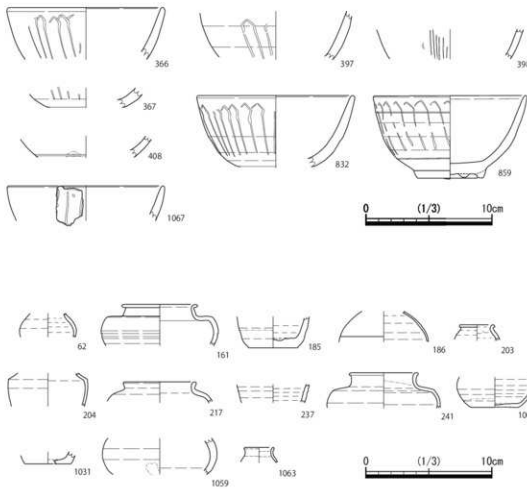
図示した製品637点は、05区より5点、09区より197点、08区より96点、07区より339点で、出土遺物量からもみても07区本丸と09区9曲輪に遺物が集中していることが明らかである。

藤澤編年による時期別の構成（第2表）は、後期Ⅳ段階45点（7%）、後期Ⅳ新段階が111点（18%）、大窯1段階が245点（39%）、大窯2段階が145点（23%）、大窯3段階が46点（7%）で、大窯4段階が9点（1%）である。出土点数の多い隆盛した時期は平成21年度09区では大窯2段階、平成20年度08区では大窯1段階、平成19年度07区では大窯1段階である。

桑下城跡の4調査区からは江戸時代から現代にいたる陶磁器（図59～図67）が多く出土している。とりわけ05調査区からは多く出土している。

腰錆小碗（1079.1082.1093.1116）、尾呂茶碗（1169.1170）、広東碗（1121.1157～1159）、絵瀬戸の中皿（1120）、摺絵の型紙皿（1133.1176）等が出土。

現代の湯呑み茶碗で高台底部（1134）に「上品野小學校」と朱で書かれている。外面に漢詩が刻まれた（1136）湯呑み茶碗も出土。



第72図　縞蓮弁文丸碗、茶入実測図

第2表　時期別出土点数表

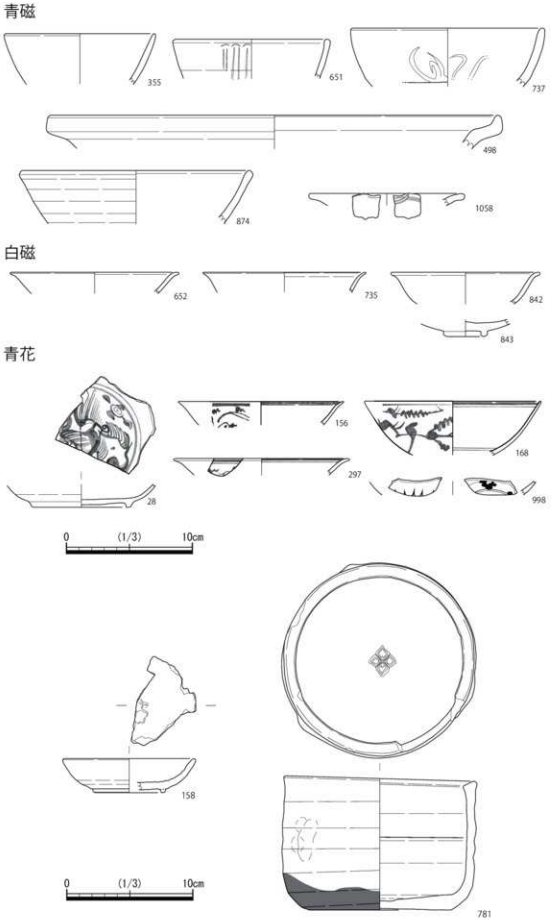
調査区	時期									
	古瀬戸（191点29.98%）						大窯（446点70.02%）			
	前期Ⅲ.Ⅳ	中期 Ⅰ.Ⅱ	後期 Ⅰ	後期Ⅲ	後期Ⅳ	後期Ⅳ新	1期	2期	3期	4期
平成16　05区			Ⅰか Ⅱ 1	1 Ⅲか Ⅳ 1				1	1	
平成21　09区	1	3	1 Ⅰか Ⅱ 3	4 Ⅲか Ⅳ 7	11 後期 6	26	48	64	21	2
平成20　08区		中期 2	1	Ⅲか Ⅳ 2	2 後期 1	22	52	6	4	4
平成19　07区				Ⅲか Ⅳ 8	21 後期 4	63	145	75	20	3
合計 637点	1 0.16%	5 0.78%	6 0.94%	23 3.61%	45 7.06%	111 17.43%	245 38.46%	146 22.92%	46 7.22%	9 1.41%

＊遺物実測図の時期別

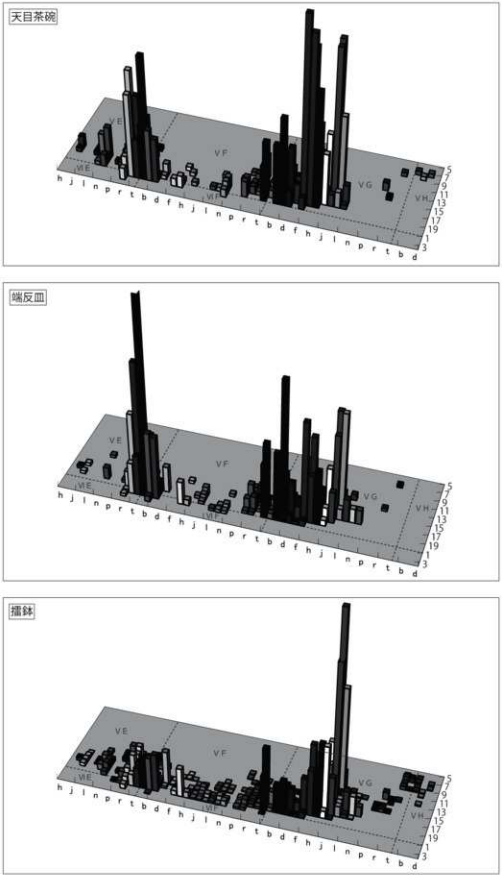
青磁

白磁

青花



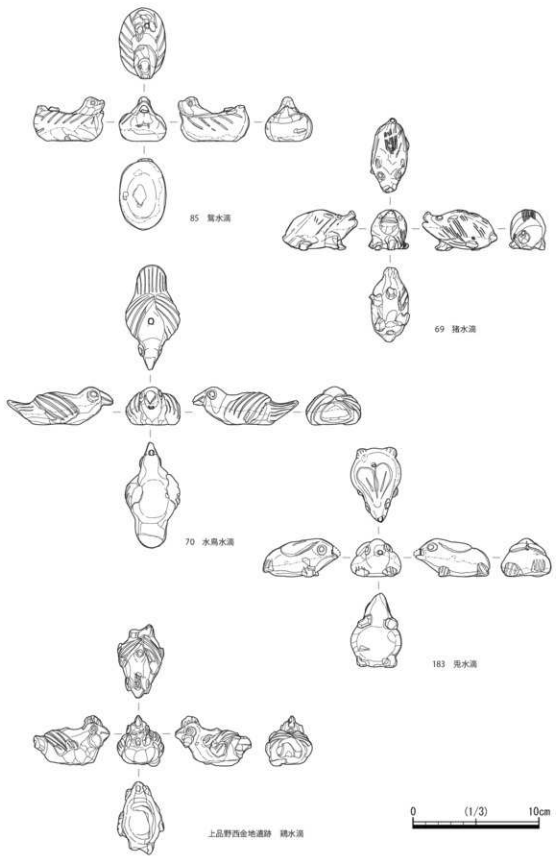
第 73 図　中国陶磁器実測図（上段）・印花文丸皿と匣鉢の実測図（下段）



第 74 図　器種別出土状況図

第３表　桑下城跡出土遺物破片表

	器種	破片数	%	口縁部個体数	底部個体数
碗	平碗	154	1.73%	5.75	16.6
	天目茶碗	912	10.25%	31.69	70.6-
	丸碗	20	0.22%	0	2.82
	小天目・小杯	6	0.07%	0	2.82
	小計	1092	12.28%		
皿	緑釉皿	124	1.39%	10.09	11.54
	腰折皿	84	0.94%	5.28	7.54
	丸皿	79	0.89%	5.83	5.25
	：大皿	33	0.37%	0.58	1.42
	：中皿	13	0.15%	0.42	0.92
	：小皿	20	0.22%	1.33	1.25
	端反皿	871	9.79%	54.83	61.14
	輪皿	22	0.25%	0.67	1.17
	梅花皿	1	0.01%	0.75	0
	輪花皿	1	0.01%	0.06	1
	折縁皿	61	0.69%	2.42	1.17
	内禿皿	1	0.01%	0	0.25
	灰緑釉皿	3	0.03%	0.25	0.58
	長石釉皿	5	0.06%	0.25	0.33
	折皿	8	0.09%	0.25	0.58
	折十皿	1	0.01%	0	0
	小計	1327	14.92%		
瓶・壺	瓶子	6	0.07%	0.83	1.25
	仏花瓶	5	0.06%	0.58	0.83
	花瓶	2	0.02%	0.5	0.25
	瓶	23	0.26%	0.25	0.58
	徳利	142	1.60%	1.17	5.42
	耳付水注	7	0.08%	1.33	0.83
	茶壺	35	0.39%	0.17	0.08
	小壺	20	0.22%	0.17	0.42
	壺	48	0.54%	0.08	0.25
	茶入	11	0.12%		
	双耳小壺	4	0.04%	0	0
	口広有耳壺	4	0.04%	0.75	0.99
	四耳壺	2	0.02%	0	0.17
	小計	317	3.56%		
鉢	鉢	96	1.08%	2.03	1.08
	大鉢（皿）	46	0.52%	1.33	0.67
	小鉢（皿）	24	0.27%	1.83	2.07
	手水鉢	1	0.01%	0	0.17
	浅鉢	2	0.02%	0.08	0
	深鉢	3	0.03%	0.33	0
	擂鉢	3910	43.96%	133.03	94.6
	小計	4082	45.90%		
鍋釜	鍋・釜	578	6.50%	9.7	16.32
その他	蓋	18	0.20%	1.5	0
	筒形容器	33	0.37%	2.42	1.17
	鉢	5	0.06%	0	0.5
	建水	1	0.01%	0.25	0
	水指	1	0.01%	0.41	0.83
	水滴	8	0.09%		
	香炉	5	0.06%	0.75	0.99
	仏飯具	6	0.07%	0.33	1.83
	燭台	5	0.06%	0.08	0.33
	灯明皿	299	3.36%	20.58	28.82
	小計	951	10.69%		
瓦	瓦	672	7.56%	3	3.5
	小計	672	7.56%		
	須恵器	24	0.26%	0.75	0.08
	灰釉陶器	3	0.03%	0.08	0.08
	山茶碗	411	4.62%	20.8	17.24
	輸入陶磁器	15	0.17%		
	小計	453	5.09%		
	合計	8894			



第 75 図　出土水滴実測図

第 2 節　04 区 09 区出土遺物

（巻頭図版 8、図 1 ～図 29、図 62 ～図 65、図版 51 ～図版 76、図版 101 ～図版 104）

1. 04 区出土遺物

丘陵の西端部の調査区で畑として改変はうけていたが、8 箇所の平場、8 曲輪を確認した。古瀬戸後期から大窯期にかけての遺物と近世から近代の遺物が出土している。近世から近代の遺物が多く、廃城後、平場が利用されていたことが窺われる。曲輪は中馬街道を意識して南側と西側にのみ築かれている。古瀬戸後期から大窯期にかけての遺物は少ない。瓶子の口縁（4）は後期Ⅰ．Ⅱ段階、平碗（2）は後期Ⅲ段階、碗形鉢（3）は後期Ⅲ．Ⅳ段階、鉄緑釉の稜皿（1）は大窯 3 段階、腰折皿（5）は大窯 2.3 段階、の 5 点である。近世から近代の遺物がほとんどで、廃城後、平場が利用されていたことが窺われる。

2. 09 区出土遺物

調査区内に大小の 9 ヶ所の平場、9 輪を確認した。隣り合う調査区から続く大溝、柵列、通路状遺構、上面が水平に据えられた巨石、石垣、石列などを検出した。9 曲輪では、築城当初面、焼土面、その後の整地面、の 3 面 3 時期を確認し 3 面から井戸、石組みの溝、柱穴など多くの遺構を検出した。

その他の遺物として縄文時代の石鏃（519 ～ 521）、旧石器時代の細石核（517.518）が出土。

（1）1 曲輪　北東端の曲輪。江戸後期の擂鉢（1137）が伏せた状態で出土。

（2）3 曲輪　丘陵頂部東側の曲輪。

739SX　157SD の石の下から大窯 2 段階期の灰釉丸皿（8）、小杯（9）が出土。なお周辺から大窯 1 段階の仏花瓶（10）、大窯 2 段階の印花のある丸皿（11）、天目茶碗（12）が出土。

（3）4・5 曲輪　丘陵頂部西側の曲輪で南西端が 5 曲輪。

330SD　338SD と重なる部分、溝の片側（東側）に土留めとしての石組みが見られ、4 曲輪で改修が行われたことを示す遺構で、大窯 3 段階擂鉢（21）が出土。

338SD　曲輪中央を貫く大溝で、平成 16 年度 04 調査区から続く。大窯 3.4 段階の燭台（22）が出土。

534SA　曲輪中央から東へ大溝（338SD）の南辺に沿うように約 13 mの長さで続く柵列で 8 本の柱穴 361SP・367 SP・372 ～ 375 SP・377 SP・523SP を検出、柱 375SP から古瀬戸Ⅳ段階の瓶子（24）が根石とともに出土。

536SA　大溝（338SD）の北辺ラインに沿うように約 7.5 mの長さで続く柵列である。338SD の東に 4 本の柱穴 363SP・364SP・366SP・381SP が認められ、364SP から土師質の内耳鍋（23）と大窯 1.2 段階の筒型容器（285）が出土。

（4）8 曲輪　　丘陵の南側の狭い範囲で 2 面検出した。

第 1 面　東側の 9 曲輪との間に石垣（395SW）が築かれている。

386SX　曲輪面積の 3 分の 1 近くを占める長径約 2 m・短径約 1.2 mの楕円形を呈し、多量の中礫、大礫にまじり大窯期の挟み皿（38）、大窯 1 段階の鉄釉反皿（39）、大窯 2 段階の灰釉丸皿（40）、土師質内耳鍋（41）が出土。

395SW　9 曲輪との境を遮断するように南北方向に築かれた幅約 3.8 m・最大高約 1.5 mを測る石垣である。石垣の下から大窯 1 段階の天目茶碗（154）が出土。

396SD　東西方向に約 2.5 m、西端は土坑状の溜まりとなる。多量の中礫～大礫で埋まり礫に交じり、古瀬戸中期Ⅰ.Ⅱ段階の広口壺（43）、大窯期の焼台（42）、甕（44）などが出土。上層からは近世と近代の遺物も出土した。

第２面

410SK　８曲輪西南端の 410SK からは狛犬の鼻片（1188）が出土。

（5）９曲輪

丘陵南東側の曲輪で、平坦面は東西約 25 m、南北約 10 m、250㎡程の広さである。３面を検出した。曲輪中央部分で焼土や炭化物、被熱した石が出土。火災後の整地面（第１面）、焼土が広がる面（第２面）、築城当初と考えられる面（第３面）の３面である。第 111 図参照。

第１面　曲輪中央部分で溝、石組み溝、柱穴等を検出した。石組み石の中には被熱痕が見られ、焼土や炭化物が混入した斑土を確認する。火災後の整地面で、出土遺物は天目茶碗、茶入、水滴などの大窯製品の他、茶臼（S-44）、鉄製刀子（M-5）、ガラス製数珠玉（S-12）、中国産青花碗（168）が出土。

417SD　432SD の西端から直角に南北方向へと延びる区画溝。416SK（417SD 西隣で検出した土坑）より出土した水指（59）と同一個体の水指が出土。

432SD　曲輪南部の東西方向から南北方向へと直角に折れ曲がる区画溝。焼土と炭化物の埋土中より大窯３段階期の天目茶碗（60）と大窯 1.2 段階の鉄釉小瓶（61）が出土。

435SD　曲輪中央を南北方向に走る石組みの溝で、部分的に３段に積まれている箇所も見られる。溝より茶入（63）、古瀬戸後期の合子（64）、大窯１段階の灰釉筒型香炉（65）、灰釉豆皿（66）、大窯２段階の鉄釉稜皿（67）、土師皿（68）、猪水滴（69）、水鳥水滴（70）の遺物が出土。

416SK　長径約 80㎝・短径約 40㎝の楕円形を呈し 417SD の水指（59）と同一個体片が出土。

433SK　短径約 50㎝（長径は撹乱に切られて不明）の楕円形を呈する。大窯期の茶入（62）が出土。

461SX　直径約 40㎝の円形を呈する。大窯２段階期の灯明皿（1180）が出土。

493SK　長径約 1.3 m・短径約１mの楕円形を呈し礫とともに大窯２段階の擂鉢（76）が出土。

469SE　長径約２m、短径約 1.6 mの楕円形を呈し、深さは 50㎝を測る井戸で、大窯２段階の擂鉢２点（71.72）と大窯３段階天目茶碗（73）古瀬戸後期段階の小天目茶碗（74）が出土。

504SE　北東部の石組み井戸。石組みに大窯期の焼台も使われていた。井戸の中より大窯期の古瀬戸後期Ⅲ段階の天目茶碗（80）、大窯２段階の碁笥底鉄釉丸皿（78）、灯明皿（79）が出土。

第２面　曲輪北側の斜面を削り、南側を１m以上盛土する平場造成を行っている。曲輪中央に掘立柱建物の柱穴と、これを取り囲むように区画溝が巡っており、２間×３間の掘立柱建物が想定される。区画溝と建物が重複する 42㎡程の範囲に炭化物と焼土面が広がっている。

区画溝

572SD　北東より南西方向に斜めに走る溝で、長さ約７m・幅約 30㎝を測る。溝の中に焼土塊が多く見られ、焼土塊は壁の一部で、ある。溝の底部から古瀬戸後期Ⅲ.Ⅳ段階の鐙水滴（85）、古瀬戸後期Ⅳ新段階の天目茶碗（86）と大窯１段階の灰釉稜花（鍔）皿（87）・徳利（88）・端反皿（89）が、匣鉢（90）や、鍍金された銅製飾り金具（M-7）が出土した。

南側の焼土面からから大窯２段階の小天目茶碗：豆天目（199）と 大窯３段階（200）の小天目茶碗が、他に水滴（201）や鍬形台（M-8）も出土し、周辺からは鉄製の角釘（M-13 ～ M-17）が出土している。

573SD　中央を南北方向に走る溝で、大窯２段階の鉄釉端反皿（1182）が出土した。

574SD　L字状の区画溝で、匣鉢（91）が出土した。

土坑

571SK　東濃産山茶碗（83）と大窯期の匣鉢（84）が出土した。

606SK　大窯期の鉄釉蓋（98）が出土した。

581SX　大小の礫とともに古瀬戸後Ⅳ新か大窯1段階の鍋（96）、大窯1段階の鉄釉内耳鍋（97）・大窯2段階の鉄釉端反皿（94）大窯2段階校半の天目茶碗（92）が出土した。

第3面　出土遺物は第1面・第2面の大窯段階の製品に対して、この面では平碗、直縁大皿、耳付水注、卸目付大皿、天目台など古瀬戸後Ⅳ期のものが目立つ。

697SX　曲輪中央南端に位置し、長径約3.5 mの半円形を呈する大型土坑である。拳大前後の花崗岩礫が多く詰め込まれた状況で、多数の遺物が出土した。主な出土遺物は古瀬戸Ⅰ.Ⅱ期の古瀬戸皿（111）、古瀬戸後Ⅳ期の平碗（102.104）・灰釉天目茶碗（103）・腰折皿（106）・緑釉小皿（107）・仏餉具（109）・燭台（110）・内耳鍋（112）・鉄釉四耳壺（113）・四耳壺（114）、古瀬戸後期Ⅳ段階の灰釉天目茶碗（103）、東濃産で生田段階の小皿（108）が出土した。

第3節　08区出土遺物

08年度調査区は桑下城跡の本丸部分の西隣に当たる範囲である。調査区内に平坦面が14箇所の14曲輪を確認した。主要な遺構は土塁とこれに付随する高まり、「番小屋跡」と推定した竪穴状遺構が3基、そして庭園状遺構があり、その他に同時期と思われる溝、土坑、建物柱穴がある。古代の竪穴住居1棟と土坑が確認されている。

1. 土塁

土塁は尾根の北側縁に沿って東西方向に約15.5m、幅7～8mの規模が確認された。盛土により構築されており、残存する最も高い部分で基盤層から0.7mを測る。土塁盛土内からは大窯3段階前半の擂鉢（356）が出土した。

2. 竪穴状遺構

184SX　櫓跡とした高い盛土の西隣に接している。掘込みの平面形は隅丸の三角形状を呈し、上端で一辺が5m前後あり、床面となる平場は四角形に近い形状となる。床面の面積は6.4㎡程度である。埋土や床面からは遺物は出土していないが、同じグリット5F17qの検出で古瀬戸後期段階の瓶子.梅瓶の口縁（340）と灰釉丸碗（341）が出土した。

192SX　掘込みは上端で4×2mの規模をもち、長方形に近い形状を呈する。床面もほぼ同様の形状で面積は7.8㎡程度である。大窯1段階の灰釉腰折皿（335）が出土した。

247SX　土塁のある尾根を北側の背にして、北～東の辺は斜面を削り込むように造られている。掘込み上端で直径約4.2m、平面の形状は六角形に近い不整形を呈し、床面の平面形も同様で9㎡程度の面積があり、古瀬戸後期段階の瓶子（340）、後期Ⅲ.Ⅳ段階の四耳壺（342）、大窯1段階の灰釉丸碗（341）、双耳釜（343）、後期Ⅳから大窯1段階の鉄釉褒（344）、匣鉢（345）が出土した。

3. その他の遺構

157SD

土塁のさらに西側に続く一段低い尾根上で長さ約 50m の範囲が確認された。現況の尾根の中央を縦断するようにほぼ直線的に延びており、東端のみ北へ湾曲して土塁付近で終息する。瀬戸・美濃産陶器（古瀬戸後期Ⅰ段階の平碗（323）、大窯 1.2 段階の鉄釉小瓶（324）、後期Ⅳ新段階から大窯 1 段階の内耳鍋（325）、大窯 1 段階の擂鉢（326）、常滑産甕（327）須恵器坏（328）が出土した。177SD と接合関係のある近世焙烙片も出土している。

4. 庭園状遺構

尾根の南側へ下った位置にあたる曲輪群であり、尾根との標高差は現況で約 8m を測る。奥行のやや狭い細長い平坦面が階段状に連なる部分では導水部分をもつ湧水施設があり、接続する下段の曲輪で築山、池の痕跡とみられる遺構を確認したことなどから、ここでは「庭園状遺構」とする。なおこの曲輪は調査範囲外に続き、現況では 320㎡前後の比較的広い平坦面をなしている。南側に広がる曲輪には、溝で囲まれた礫混じりの盛土部分と一段凹む範囲があり、それぞれを築山（132SX）と池（133SG）の痕跡と推定した。築山は石組み溝全体を含む長軸 4m 前後の楕円形の範囲が考えられる。

147SD　大窯２段階の碁笥底の鉄釉丸皿（308）、大窯４段階の鉄釉大皿（309）、が出土した。

132SX　大窯１段階から３段階の擂鉢（304、305）、が出土した。

133SG　大窯１段階から２段階の擂鉢（306）、灰釉皿（307）が出土した。石組内の盛土から大窯２段階の擂鉢（311）や大窯期の甕の破片が出土した。

262SP　大窯１段階の天目茶碗（310）が出土した。

グリット 6F1g から大窯１段階の仏花瓶（313）、端反皿（314）、鉄釉の縁釉挟み皿（317）大窯２段階の天目茶碗（316）、灯明皿（315）が出土した。

143SE　明治から大正期の銅版転写の磁器大皿（1176）、手描染付の飯茶碗（）が出土しており、極めて新しい時代に利用された痕跡が認められる。

5. 竪穴住居（古代）

166SI…方形竪穴住居の一部と思われる。遺存していたのは北側の隅と壁溝が含まれる 4.5 × 4.2m 程度の範囲で、須恵器坏蓋（329）、蓋（330）が出土している。なお、瓦塔については別項を設けた。

第４節　07 区出土遺物

本丸北部分と本丸を囲む堀、本丸北東方向にある平場と東に続く斜面を調査した。本丸の西と北東部分は堀掘削時に出た地山ブロックにより大規模に埋め立てられていた。造成が行われた時期は地山ブロック層より下から大窯２段階の遺物が出土していないことから、大窯１段階～大窯２段階と考えられる。

1. 本丸遺構

（1）礎石建物 : 085SX

本丸中央北端で検出した１間×１間の礎石建物である。柱間は東西２m、南北３m を測る。礎石（S-50.

S-51）は周囲より一段下がった状態で検出した。北側直下が堀であることと段が北側全面、南東隅、南西隅に見られないことから、建物は北側に開口する門と考えられる。

遺物としては、古瀬戸後期Ⅲ．Ⅳ段階の鉄釉耳付水柱（1023）、大窯１段階の天目茶碗（1015）、端反皿（1019）、浅鉢（1017）や大窯2.3 段階の擂鉢（1016）、筒形容器（1025）が出土した。

（2）掘立柱建物

本丸中央から南西部にかけて 86 基のピットを検出した。これらの多くは掘立柱建物の柱穴と思われるが、建物を復元できたものは２軒（A.B）のみである。

A 本丸北西部で検出した１間× 4 間の東西に長い掘立柱建物である。

009P から大窯２段階の擂鉢（566）、挟み皿（565）が出土、018P から大窯１段階の稜皿（567.568）と、土師皿（569）が出土した。 022P から陶丸（570）、058P から大窯１段階の天目茶碗（571）が出土した。

B 本丸中央で検出した１間× 1 間以上の南北に長い掘立柱建物である。

柱穴 066P から匣鉢蓋（573）、建物を取り囲む 007SD から大窯２段階の天目茶碗（557）が出土した。

（3）井戸：088SE

本丸中央で検出した直径３．０m、深さ４．７mの円形をした素掘りの井戸である。

遺物は天目茶碗（983 ～ 985.992 ～ 997）、端反皿（987.1007.1008）、丸皿（988.1009）、稜皿（989）、灯明皿（1006）、卸目付大皿（982）、茶入（1004）、小杯（986）、擂鉢（961 ～ 968.1002）、擂鉢形小鉢（1001）、筒形容器（969.970）、釜（971）、蓋（1005）、狛犬（1003）、挟み皿（974.975）、匣鉢（976 ～ 979）、常滑産甕（927.990.1010）、内耳鍋（972）、土師皿（973）、中国産青花皿（998）、角釘（M-9）が出土している。多くは大窯１段階～大窯２段階のものであるが、大窯３段階のもの天目茶碗(985.997)、鉄釉稜皿（989）碁笥底が含まれている。

（4）大型土坑

001SX

本丸西側で検出した長軸 2.5 m、短軸1ｍの不定形をした浅い土坑である。被熱痕が見られる拳大の礫がまとまって出土した。大窯 1.2 段階の徳利（507）、古瀬戸後期Ⅳ新段階の徳利（508）、土師皿（509）が出土した。

004SX

本丸中央で検出した長軸 4.2 m、短軸 2.3 m、深さ 30㎝の楕円形をした大型土坑である。088SE との境は不明瞭である。大量の大型の礫が廃棄された状態で出土した。礫は被熱痕のあるものが多い。遺物は天目茶碗（513 ～ 516）、端反皿（524）、丸皿（525 ～ 530）、灯明皿（523）、銅緑釉丸皿（531）、徳利（538）、擂鉢（517 ～ 522）、筒形容器（533.534）、釜（540）、手水鉢（539）、甕（535.536）、匣鉢（542）、焼台（1064）、内耳鍋（537）などが出土している。多くは大窯１段階から大窯２段階のものであるが、大窯３段階の擂鉢（522）、鉄釉丸皿（529）、筒形容器（534）も含まれている。

005SX

本丸東側で検出した長軸残存長 2.8 m、短軸 2.2 mの不定形をした大型土坑である。大型の礫とともに大窯２段階の丸皿（545）が出土した。

006SX

本丸中央で検出した長軸 2.6 m、短軸 2 m、深さ 15㎝の方形をした土坑である。遺構の東端で大型の礫と遺物がまとまって出土した。礫は底から浮いた状態で出土しているが、遺物は底に張り付いた状態で出土している。遺構の北端から東端にかけての下層にはL字状に折れ曲がる浅い溝（007SD）があり、遺物は 007SD に伴うものの可能性もある。

遺物は天目茶碗（547.548.550）、丸碗（549）、腰折皿（551.552）、端反皿（553）、緑釉挟み皿（554）、土師皿（555.556）など、古瀬戸後Ⅳ新段階から大窯 1 段階のものである。古瀬戸後Ⅳ新段階は鉄釉盤（546）、天目茶碗（547.548）腰折皿（551.552）である。

008SX

本丸中央で検出した長軸残存長 5 m、短軸 1.8 m、深さ 30㎝の不定形をした土坑である。遺構の北端で大型の礫が廃棄された状態で出土した。

遺物は大窯 1 段階の稜花皿（558）、擂鉢（560）と大窯 2 段階の天目茶碗（559）と匣鉢（561 ～ 564）が出土している。

071SX

本丸中央北端で検出した長軸 5 m、短軸 3.6 m、深さ 60㎝の楕円形をした本丸整地土上に築かれた大型土坑である。被熱痕が見られる人頭大の礫とともに大量の遺物が出土した。

遺物は古瀬戸後期Ⅳ新段階の灰釉天目茶碗（583）と大窯 2 段階の天目茶碗（584 ～ 587）、鉄釉稜皿（592）、灰釉丸皿（593）、輪花丸皿（598）、擂鉢（600.602）、大窯 3 段階の天目茶碗（588.589）、鉄釉丸皿（596.597）、擂鉢（603.604）、などが出土している。挟み皿（574）から釜（608）まで古瀬戸後Ⅳ新～大窯 3 段階と時期幅があるが、大窯 2 段階～ 3 段階の割合が高い。

087SX

004SX の下層で検出した長軸 2.6 m、短軸 0.6 mの楕円形をした土坑である。遺物は擂鉢、匣鉢の破片と大窯 1 段階の甕（536）が出土している。

（5）その他の遺構

002P

本丸西側で検出した直径 0.5 m、深さ 0.6 mの円形のピットである。検出面で古瀬戸後Ⅳ新段階の擂鉢（510）、大窯 1.2 段階の徳利（507）、大窯 2 段階の擂鉢（511）が出土した。さらに掘り下げると、底部中央から大窯 2 段階の完形天目茶碗（512）が伏せた状態で出土した。

064SX

本丸中央で検出した直径約 0.5 m、深さ 0.2 mの円形のピットである。ピットの上層で炭化物と焼土ブロックの広がりを検出した。遺物は大窯 1 段階の天目茶碗（572）が出土した。

2. 堀

本丸を囲む堀は場所と形状の違いにより、西堀、北西堀、北堀、北東堀、東堀に分けた。

西堀：薬研堀

全長約 18 m、幅約 10 m、本丸からの深さ約 6 mを測る薬研堀である。盛土の下から先行する堀の跡（08

A区 299SD）などを検出している。5G15b・16b、5G17a・17b、5G18a、5G19a。

北西堀：箱堀

全長約 16 m、本丸と対岸の土塁を結んだ幅約 16 m、堀底の幅約 2 m、本丸からの深さ約 8 mを測る箱堀（北箱堀）である。堀底が西側堀より約 1 m低く、段差の部分には流れ落ちる水により穴ができていた。穴から漆器椀（W-1）が出土した。5G15c・15d・15e・15f。

遺物として、古瀬戸後期段階の天目台（609）と大窯 1 段階の天目茶碗（630）、浅鉢（631）内耳鍋（632）、灰釉端反皿（633.634）と大窯 2 段階の天目茶碗（629）と大窯 3 段階の鉄釉稜皿（610）、擂鉢（612）が出土。挟み皿（616）、匣鉢（614.615）、漆器椀（W-1 ～ 3）、杓子（W-5）、建築部材（W-7 ～ W-14）なども出土している。

北堀

北部が調査区外のため全長、幅、深さとも不明である。北水堀。検出した堀底の長さ約9.5 m、幅約 4.5 m、対岸からの深さ約 3 mを測る。

5G13h.i.j。5G14f.g.h.i.j、5G15f.g.h.i.j、5G16g.h.i.j、5G13h.i.j。

遺物として、古瀬戸後期Ⅲ . Ⅳ段階の合子蓋（767）、古瀬戸後期Ⅳ段階の平碗（776）と古瀬戸後期Ⅳ新段階の天目茶碗（768）、挟み皿（761.788）、片口鉢（625）と古瀬戸後期Ⅳ新段階から大窯 1 段階の鍋（620）、釜（760）、大窯 1 段階の天目茶碗（769）、緑釉挟み皿（619.757）、端反皿（626.627.777.792）、灰釉丸皿（778.1186）、鉄釉深鉢（756）、擂鉢（770）、双耳徳利（790）と大窯 2 段階の天目茶碗（617）擂鉢（772）と大窯 2 段階から 3 段階の擂鉢（771）と大窯 3 段階の天目茶碗（618）、筒形容器（621）が出土し、匣鉢（622.758.759.764 ～ 766.781 ～ 787）、匣鉢蓋（762.763）、土師皿（774.775）、土師内耳鍋（780）、漆器椀（W-20 ～ 23.27）、曲物（W-28）、下駄（W-29）、陽物（W-30）、杭（W-15 ～ 19.31）、建築部材（W-37.44.45）なども出土している。

北東堀：箱堀

北堀との境は不明瞭であるが、全長約 12 m、本丸と対岸の土塁を結んだ幅約 9 m、堀底の幅約 3 m、本丸からの深さ約 6.3 mを測る箱堀である。SX106 グリット 5G15i.j、5G16i.j も含む。堀底は東から西に向かって階段状に 2 段下がっている。

遺物として、2 段目の対岸寄りで和鏡『菊花双鶴鏡』（M-2）が出土している他、

古瀬戸前期Ⅲ Ⅳ段階の四耳壺（850）。

古瀬戸後期Ⅳ段階の天目茶碗（799）、鉄釉緑釉小皿（793.814.816）。

古瀬戸後期Ⅳ新段階の天目茶碗（869.870）、腰折皿（815.854.882）、仏花瓶（852）、擂鉢（809.906.907）、

古瀬戸後期段階の合子蓋（794）。

古瀬戸後期Ⅳ新段階から大窯 1 段階の釜（795.837.858.901）、擂鉢（803）、

大窯 1 段階の天目茶碗（833.860 ～ 863.871 ～ 873.875 ～ 877）、蓮弁文丸碗（832.859）、灰釉丸碗（868）、小天目茶碗（878）、灰釉緑釉挟み皿（817 ～ 820.855.883）、灰釉端反皿（628. 824 ～ 830.884 ～ 890）、鉄釉丸皿（821 ～ 823）、鉄釉稜皿（892）、片口（880）、灰釉小壺（624）、茶入（835）、徳利（839）、擂鉢（807.810.908 ～ 910）、甕（899）。

大窯１段階から大窯２段階の丸碗（800）、鉄釉小壺（836）、徳利（896）、筒形容器（881）、擂鉢（812）、甕（844 ～ 847）。

大窯２段階の天目茶碗（834.864.865.914）、鉄釉丸皿（893）、灰釉丸皿（894）灯明皿（895.913）、擂鉢（808.811.867.911.912）。

大窯３段階の天目茶碗（866）、大窯４段階の黄瀬戸片口鉢（802）。

大窯段階の深鉢（813）、耳付水注（897）、茶壺の蓋（898）、徳利（840）、甕（848.900）、挟み皿（798.853.856.857.902）、匣鉢（804.849.903 ～ 905.915）、焼台（806）、が出土した。

その他に白磁皿（842.843）、青磁碗（874）の輸入陶磁器。石臼（S-48）、漆碗（W-24 ～ 26）箸（W-76.77）、箆（W-41）、横槌（W-42）、鋤状木製品（W-43）、柄杓（W-78）、曲物（W-79 ～ 82）、桶底板（W-94）、板（W-93.95）杭（W-50.51.61）、楔（W-72）、柱（W-49.56.57）建築部材（W-46 ～ 48.53 ～ 55.62 ～ 71.83 ～ 86）、などが出土している。特に木製品は最下段に集中して出土した。

東堀：薬研堀

本丸の東側にある薬研堀である。南東部が調査区外のため全長、幅、本丸からの深さとも不明である。5G16k.l、17k.l.m。

古瀬戸後期Ⅳ段階の腰折皿（667）、花瓶（678）。

古瀬戸後期Ⅳ新段階の擂鉢（677）、古瀬戸後期段階の祖母懐茶壺（650）。

大窯１段階の天目茶碗（664.673.674）印花の見られる灰釉端反皿（639.640.684）鉄釉端反皿（668）、灰釉端反皿（669.670.680 ～ 683.690）、鉄釉丸皿（641）、鉄釉稜皿（642）、鉄釉深鉢（666）、擂鉢（646.695 ～ 697）、半筒手水鉢（698）、仏飾具（676）、灯明皿（638）、甕（654）。

大窯１段階．大窯２段階の菊印花の端反皿（644）か、小瓶（645）、甕（653）。

大窯２段階の天目茶碗（675.688）、碁笥底の鉄釉丸皿（643）、擂鉢（647.648）。

大窯段階の浅鉢（649）、輸入陶磁器の青磁碗（651）、匣鉢（655 ～ 663.685.692.694.699.700）、挟み皿（687）、土師皿（635 ～ 637）、鉄鏃（M-1）などが出土している。

3. 本丸北部分

（1）本丸北曲輪：104SX

出土遺物として、最上面（104SX-A、検出１）で、炭化物の広がりと人頭大の焼けた石に混じり、古瀬戸後期Ⅲ．Ⅳ段階の小壺（745）、古瀬戸後期Ⅳ段階の口広有耳壺（749）。

古瀬戸後期Ⅳ新段階の天目茶碗（744）緑釉小皿（751）、腰折皿（752）。

大窯１段階の端反皿（753）、内耳型擂鉢（704）、深鉢（731）。

大窯第１段階から大窯第２段階の桶（740）、大窯第２段階の丸皿（738.739）。

大窯段階の両面硯（728）、と土師皿（725）、白磁皿（735）が出土している。

しかし、二・三面目（104SX-B.C）で二面Ｂより、古瀬戸後期Ⅲ．Ⅳ段階の鉄釉耳付水注（711）古瀬戸後期Ⅳ段階の四耳壺（706）、古瀬戸後期Ⅳ新段階の平碗（714）、腰折皿（720）、匣鉢（729）、尾張型 12 型式の山茶碗（730）が、

三面Ｃより、古瀬戸後期Ⅳ段階の口広有耳壺（709）、瓶子（710）、仏飾具（743）、壺（750）と、古瀬戸後期Ⅳ新段階の平碗（741.742）、緑釉小皿（736）と、大窯１段階．大窯２段階の筒形容器（754）

匣鉢（755）、など古瀬戸、大窯製品に混じり近世の徳利（1171）が出土しており、上層は近世以降の堆積と考えられる。

最終面（104SX-D）の遺物は、古瀬戸後期Ⅲ .Ⅳ段階の口広有耳壺（708）、古瀬戸後期Ⅳ段階の口広有耳壺（707）、古瀬戸後期Ⅳ新段階の平碗（712.713.715）、灰釉縁釉小皿（717.718）、大窯第 1 段階の丸碗（723.724）、匣鉢（732）など古瀬戸後Ⅳ新段階から大窯 1 段階に限られ、この面が曲輪の可能性が高いが、堀との明確な境を見つけることはできなかった。

また、特殊な遺物として、104SX － B.C から一字一石経（第 79 図：図 70）思われる「氏」(S-1)、「悉」(S-2)、「多」(S-3)、「那」(S-4）などの墨書のある拳大の石が 10 個出土した。

(2) 井戸 :118SE

本丸の門跡直下で検出した直径約 1.1 m、深さ約 0.9 mの円形の井戸である。井戸の北部分のみ石組みを施していた。石組みの下には通水用に長さ約 3.3 mの竹樋が 2 列埋められており、井戸の水が長軸約 2.2 m、短軸約 1.4 m、深さ約 0.8 mの楕円形の土坑（125SK）に注ぐ構造になっていた。118SE からの遺物の出土はなかったが、125SK から古瀬戸後期Ⅳ新段階の擂鉢（921.922）、大窯 3 段階の徳利（920）、常滑産甕（928）、匣鉢（923 ～ 926）が出土している。

(3) 溝 : 119SD

104SX 下層で検出した長辺約 9 m、短辺約 1.5 m、深さ約 0.8 ～ 1.1 mの長方形の溝である。中央約 4 m分が窪む。125SK に近く関連する遺構の可能性があるが性格は不明である。出土遺物としては、直縁大皿（917）、土師皿（918）、挟み皿（919）が出土している。

(4) 本丸北東曲輪

北堀の東側斜面で、竪堀を検出したため、ここも城内であったことがわかった。この竪堀は北堀掘削時に出た地山ブロックで埋められており、東堀が掘られたことにより城外となったと思われる。平坦部で検出した遺構は、供養碑（003SZ）やそれに伴う集骨土坑（123SK）など近現代のものであり、この空間には建物等は建っていなかったようである。

竪堀は長さ約 20 m、幅約 2 m、深さ約 2.5 mの薬研堀で、出土遺物は古瀬戸後期Ⅳ新段階の擂鉢（936）、桶（937）、大窯 1 段階の端反皿（938）、古瀬戸後期Ⅳ新段階から大窯 1 段階の釜（942）、土師皿（939 ～ 941）、匣鉢（943 ～ 948）が出土しており、竪堀が埋められた時期、つまり北堀が掘削された時期は大窯 1 段階のころと考えられる。

(5) 東斜面

北東曲輪の東斜面はなだらかな傾斜をしており、築城に伴う改変は受けていないものと思われる。110SD より古瀬戸後期Ⅳ新段階から大窯 1 段階の天目茶碗（931）、古瀬戸後期Ⅳ新段階の平碗（930）、擂鉢（934）と大窯 1 段階の仏飴具（932.933）と匣鉢（935）などの遺物が出土した。

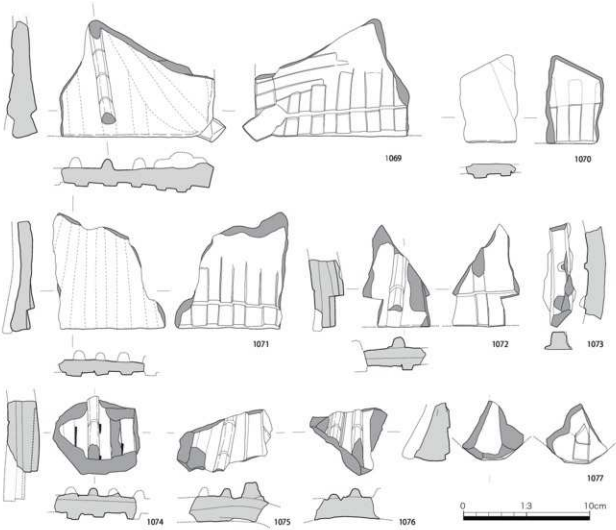
第 5 節　瓦塔［第 76 図：図版 50］

瓦塔は古代の仏教信仰関連遺物で、須恵質の屋蓋部や軸部などからなる部品を積み上げて多層塔としたもので、東海地域では、8 世紀～ 9 世紀前半の寺院・官衙・集落・窯業遺跡で出土する。特に 8 世紀後半～ 9 世紀初頭の猿投窯で量産されたものについては猿投窯型として美濃須衛窯型などと区分される。

桑下城跡では、9 点の瓦塔破片が出土している。全て屋蓋部で、軸部、相輪部は確認されていない。猿投窯型 B 類に分類され、以下に破片ごとに解説する。

1069 は、屋蓋部隅の破片である。丸瓦列・隅降棟は棒状粘土を貼付けたもので、大半が剥離している。1 列のみある丸瓦列は断面が丸く、半裁竹管状の工具でナデ、整形している。そしてほぼ等間隔に節を入れることで丸瓦 1 枚ずつを表現している。転じて裏面には垂木表現がある。いわゆる二軒であるが垂木だけでなく野地も段差があるタイプである。これらはヘラで切り込みを入れて欠き取る方法で表現されており、余剰の切り込み線が一部に残る。丸瓦列と垂木はほぼ対応している。隅垂木は野地から角柱状の突起が出ているのみであるが、1077 を参照すると二軒表現の小さな隅垂木表現が剥離したものと思われる。

1070 も屋蓋部だが、野地の剥離が進み、丸瓦列や垂木のほとんどが滅失している。野地が一枚の粘土



第 76 図　08 区出土瓦塔実測図

板でなく軒先に向かって幾重にも付加したものであることが理解される。1071 は屋蓋部で丸瓦列が欠損している。

1072 の屋蓋部片は丸瓦列と垂木がともに残存しているが、他の破片に比べてその間隔がやや広がっており、丸瓦列の節も明瞭な段がつくほど入れられているのが特徴である。可能性として 1069 ～ 1071 などとは別に一揃の瓦塔があったことも考慮しておきたいが、冒頭で述べたように瓦塔が複数部品で構成される特殊な須恵器であり、焼成具合も近いことから、各部品間の差異である可能性の方が高いと考えられる。

1073 は隅降棟である。野地から剥離した状態である。角棒状をしており 2 か所の小突起がある。おそらく稚児棟の表現であろう。

1074 は屋蓋部片で丸瓦整形時の半裁竹管状工具の食い込みが各所にみられる。

1075 は隅降棟とその周辺の破片である。1070 と同様に幾重も粘土板を重ねて野地とした痕跡がある。1076 も 1075 に近い破片である。これらの丸瓦列の方向だけをみると六角あるいは八角塔を想起する向きもあろうが、屋蓋部全体の傾斜角度も加わるためにこのような丸瓦列の配置になるのである。

1077 は屋蓋部隅の小片である。隅降棟や野地に貼付けた隅垂木の突起状表現は欠損している。しかし裏面には 1069 で確認できなかった隅垂木が残存しており、小さいながらも二軒をヘラ削り出しで表現している。

第 6 節　金属製品［第 77・78 図：図 68　図版 41 ～ 44］

鉄鏃（第 79 図：図 68　M-1）

M-1 は刃幅の広さから広根鏃。関は鈍角に開き、刃の平面形は菱形状を呈する。07A　東堀 N061

和鏡（巻頭図版 2・3　第 77 図：図 68　M-2　図版 41・42）

M-2 は白銅鏡の『菊花双鶴鏡』

本丸北側の北東堀の埋土下部から、幅の狭い縁を下に、鏡面が西南側（菊亀甲形鈕が上を向く正位置から、90 度左の、反時計回りに、真横に向きを変えた位置）で出土した。周囲に土坑などの掘込んだ痕跡は見られなかった。本丸から投げ込まれたのか、土塁を崩す時に一緒に入れられたのか、堀が埋没する過程で埋まっている。

径 11.3cm　身内径 11.1cm　縁の幅 1cm。重さ 386.8 g。銅合金の一種である青銅（銅、錫、鉛の合金）製品。鏡全体が光沢のある黒色を帯びている。蛍光 X 線の分析では錫の成分が多い。錫が多いことから（錫鍍金）より黒味が増したのか。仔細は第 4 章第 5 節　金属製品を参照。

文様は背面に菊亀甲形の鈕と、鶴が二羽、鈕上方で向かい合って嘴を接して、鶴が飛んでいる双鶴文と画面を菊で埋め尽くしている。菊花が 31 個、八重菊が 15 個の総計 46 個の菊花文が左右対象に配置され、蕾、茎、葉も見られる。それぞれの文様が非常にシャープで細密に表現されており、花弁が鎬立つようになっていることから、鋳型への文様施刻において先の鋭利な筐、鉄筐を用いたことが窺われる。

ほとんどが三重ね菊（菊花・八重菊・菊花）で八重菊を真ん中に配するのが基本で、双鶴の上の菊花二箇所が二重ね菊花、右側は菊花に菊花、左側は八重菊の上に菊花である。八重菊 15 個の内 3 個に、萼が中央に見える裏菊があり、圏線内側の紐左下 1 個と、圏線外側の菊亀甲形紐左上に 2 個見られる。

鋳上げる時の湯口が鈕の右側の縁にある。気泡痕等が見られ、鏡面からは湯口より下に流れ、左右に広がる様子が観察できる。鈕孔内の紐は同定の結果植物繊維であった。仔細は第 4 章第 4 節を参照。

鏡面には光沢があり鮮明に物が写るが、出土状況時より全体にくすみ、光沢が失われつつある。

和鏡の愛知県内出土例は今回が 47 例目となる。室町時代は 11 例目である。

久保智康氏（京都国立博物館）より「熊野速玉大社の古神宝中の鏡で、明徳元年（1390）に足利義満と諸国守護らが熊野十二社と摂社阿須賀宮に調進した神宝類が速玉大社に伝わっており、その中に鏡十八面がある。十八面の一面に『菊唐草双鶴鏡』径 11.7㎝があり、八重菊を配した重ね菊で菊の花弁が鎬立ち、シャープで細密に表現されている等、桑下城出土鏡と類似点が多いことから、同じ工房の、京都の足利氏に関係のある工房で、14 世紀中頃に製作されたのではないか」とのご教授を受けた。

刀子類（図 68　M-3 ～ M-5）

M-3 は銅製の柄部で、現存長さ 10.6㎝　柄長 9.4㎝、柄最大厚さ 0.4㎝を測る。本丸北側 104SX 07A 5G17i。

M-4 は銅製の柄部で折り曲げられ、現存長さ 4.9㎝を測る。09 区 6F1a　9 曲輪。

M-5 は刃子、全体の形状は不明。現存長さ 22.5㎝を測る。09 区 5F20a　9 曲輪。

簪（第 78 図：図 68　M-6　図版 44）

M-6 は先端部がＬ字状に折れ曲がった簪か。現存長さ 12㎝、重さ 4 ｇを測る。上端は丸く、上端より下に 1.4㎝部分が窪む。銅製で一部に金箔が残る。08B　9 曲輪 5F18s　検出 2。

金具（第 78 図：図 68　M-7　図版 44）

M-7 は銅製品の金具で引き手か。鎹に割りピンがつながっている。一部に金箔が残る。全長 6㎝、14 ｇを測る。09 区 5E20t 572SD　9 曲輪 2 面。

鍬形台（巻頭図版 3　第 77・78 図：図 68　M-8　図版 43）

M-8 は銅製品、毛彫りによる精緻な唐草文が中央からほぼ対象となるように描かれた鍬形台。全長 16.1㎝、先端幅 3.2㎝、立物の孔幅 1.9㎝、48.5 ｇを測る。主成分は銅である。09 区 5F20a 9 曲輪

やや開いたＵ字形で、裏側の中央上端（Ｕ字形の内側）に幅 1.9㎝、奥行き 0.8㎝を測る前立を着装するための切り込みがある。眉庇に沿わせるため中央より全体が湾曲している。そして両端は鍬形が差し込みやすいように内側に折り曲げられた形状となった祓立孔。

鍬形台には七ヶ所の孔が見られる。

留め金具孔は三ヶ所、左側は縦 0.5㎝、横 0.4㎝の四角形、中央は前立を固定するための孔で、縦 0.6㎝横 0.5㎝の長方形、右側は径 0.4㎝の円形である。

鍬形にあいている孔のハート型の形状は猪目といわれるが、鍬形台には逆さハート型の形状をした縦 3㎜、横 5㎜の孔が両端の二ヶ所にある。逆さハート型孔と対になるのか、逆さハート型の外側に径 2㎜の小さな孔が二ヶ所あるが、右側の孔は腐食により塞がっている。

鍬形と鍬形台の出土例として、京都市『法住寺殿跡』、豊岡市『宮内堀脇遺跡』、福井市『一乗谷朝倉氏遺跡』、三田市『三田城跡』、那覇市『首里城跡 京の内跡』の 5 遺跡がある。

角釘（図 68　M-9 ～ M-17）

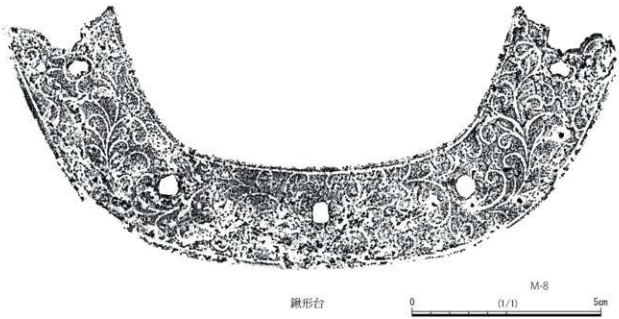
M-9 は扁平になった頭部が残る角釘、現存長さ 4.2㎝を測る。本丸東。07A 区 5G19h 088SE。

M-10 は頭部が欠損した角釘、現存長さ 5.4㎝を測る。本丸西。07A 区 5G20d 045SX。

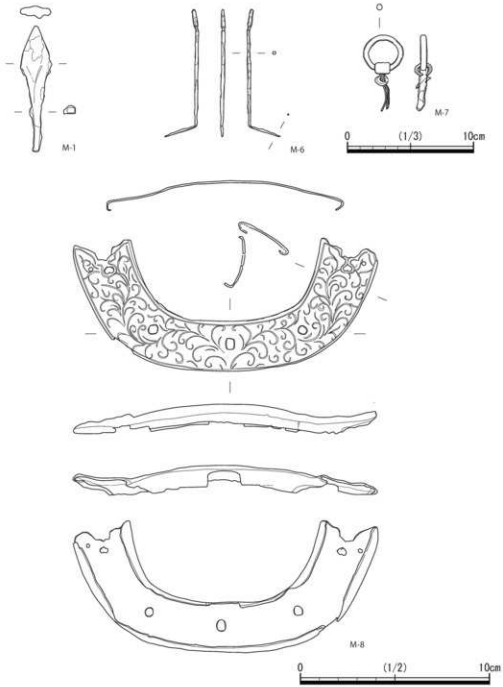
M-11 は頭部が側面より叩かれ扁平な三角状に薄くなる。現存長さ 5㎝、角 0.3㎝× 0.4㎝を測る。07B 区 5G15t。

M-12 は頭部が残る角釘、現存長さ 3.3㎝、角 0.4㎝× 0.4㎝を測る。本丸西側。08B 区 219SD 5G19c。

和鏡『菊花双鶴鏡』



第 77 図　菊花双鶴鏡と鍬形台の拓影



第78図　鉄鏃、簪、金具、鍬形台実測図

M-13 は先端を欠損するがやや太い角釘。現存長さ 8.7㎝、角 0.6㎝× 0.6㎝を測る。09 区 5E19t 9 曲輪 2 面。

M-14 は頭部が残るやや太い角釘。現存長さ 7.2㎝、角 0.5㎝× 0.6㎝を測る 09 区 5E20t　9 曲輪　2 面。

M-15 は頭部の残る角釘の上半部で、現存長さ 3㎝、角 0.4㎝× 0.5㎝を測る。09 区 5F20a　9 曲輪 2 面。

M-16 は角釘の下半部で現存長さ 5.8㎝、角 0.4㎝× 0.5㎝を測る。09 区 5F20a　638SP　9 曲輪 2 面。

M-17 は頭部が欠損した角釘で現存長さ 8㎝、角 0.4㎝× 0.5㎝を測る。　09 区 6F1a　9 曲輪 1 面。

貨幣（図 68　M-18・M-19）

M-18 は寛永通宝　二枚重なる　径 2.3㎝　07A 区。

M-19 は寛永通宝　径 2.4㎝　09 区 5E15p　4 曲輪北斜面。

第７節　石製品［第 79・80 図、図 69 ～図 75　図版 47 ～ 49］

一字一石経（第 79 図：図 69　S-1 ～ 10　図版 47）

一字一石経は小石一つに一字ずつ経典を書き写したもので、経典は『法華経』が多いとされ、『阿弥陀経』『般若心経』『華厳経』などもある。

07A 区 104SX 上面より出土。本丸北側の法面で 119SD の南側で 5G17h に集中して出土した。小石一点一点を取り上げて文字の有無を確認する作業を繰り返し、いずれの一字一石経も文字面が下側で、10 点出土した。文字の判読不能が S-9、S-10 の２点である。判読できた８点（S-1 ～ 8）の文字から『法華経』『妙法蓮華経　序品第一』を書き写した可能性が高いと考えられる。なお経典の該当した箇所（最初の文章部分）を抜粋した。

S-1 は「氏」該当無し。花崗岩。

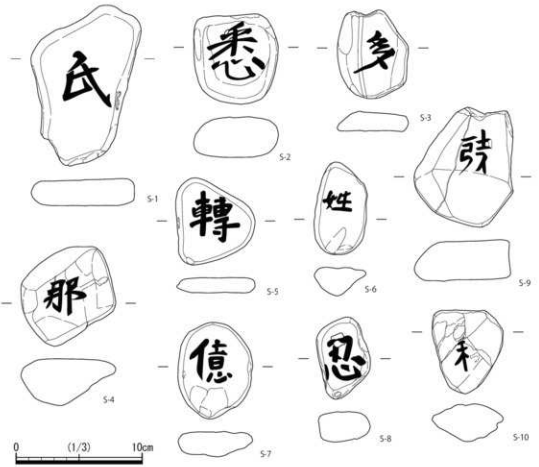
S-2 は「悉」七箇所。悉見彼佛。國界荘厳。（悉く彼の仏の国界の荘厳を見るや。）花崗岩。

S-3 は「多」九箇所。離婆多。（離婆多。）花崗岩。

S-4 は「那」一番多い十四箇所。　那提迦葉。（那提迦葉。）砂岩。

S-5 は「轉」一箇所。供養諸成佛。轉次而授記。（相継いで成仏することを得　転次して授記す。）

ホルンフェルス。



第 79 図　一字一石経実測図

S-6は「姓」二箇所。又同一姓。(又同じく一姓にして。)花崗岩。

S-7は「億」八箇所。及千億事。(千億の事に及べり。)花崗岩。

S-8は「忍」三箇所。又見佛子。住忍辱力。(また、仏子の　忍辱の力に住して。)花崗岩。

S-9は文字が不明である。「發」か？　砂岩。

S-10は文字が不明である。「称」か？　泥岩。

水晶玉珠（図69　S-11　図版49）

S-11は高さ2㎝、横巾2.2㎝、重さ12.946ｇ。底部に径3㎜の孔がある。07区5G15K斜面より出土。

ガラス数珠玉（図69　S-12　図版49）

S-12は緑色を呈し、半分に割れ高さ1.1㎝、横巾1.4㎝、重さ2.155ｇ。09区5E20tの9曲輪より出土。

五輪塔（図70　S-13）

S-13は五輪塔の地輪部分か。花崗岩。07A区表採。

台石（第80図：図70　S-14.15）

S-14は片側の一部に被熱［トーン部分］を受けた痕跡が見られる。台石か。花崗岩。07A区5G20d本丸001SX。

S-15は長方形状の台石か。表面が鉄分の付着により薄い茶褐色を呈する。砂岩。07A区5G19h本丸088SE。

砥石（図70　S-16）

S-16は砥石（荒砥）の破片か。平な面［トーン部分］が二面あり、面積の広い面が特に滑らかである。ホルンフェルス。07A区5G20d本丸001SX

細石核（図70　S-17.18）

S-17は下呂石。09区5F20aの9曲輪中央二面より出土。

S-18はチャート。09区5F18bの3曲輪南側の斜面言い換えれば9曲輪北東側斜面三面より出土。

石鏃（図70　S-19～21）

S-19はチャート。09区6F1Cの9曲輪489SD二面より出土。20はチャート。09区5E19qの7曲輪400SK三面より出土。21はチャート。09区6F1bの9曲輪489SD二面より出土。

凹石（図71　S-22.25.26）

S-22は上下面に凹みがあり、左側面は被熱を受ける。花崗岩。09区5E17pの4曲輪338SD三面より出土。

S-25は上面に凹みがあり、片側縁辺部には叩打痕が見られる。鉄分付着のため表面が褐色になる。花崗岩。09区5E15tの2曲輪北斜面三面より出土。

S-26は上下面に凹みがあり、下方縁辺部に叩打痕が見られる。全面被熱のため表面が淡紅色になる。花崗岩。09区6E1tの9曲輪。

擦り石（第80図：図71　S-23.24）

S-23は全面被熱［トーン部分］を受けた小石。下面は平で擦り石の破片か。花崗岩。09区5E17oの4曲輪338SP。

S-24は擦り石か。反対側が平になり、一部被熱［トーン部分］する。花崗岩。09区5E20qの7曲輪399SK。

礎石（図71　S-27.28）

S-27は14.7㎝巾の正方形を呈した両面平らな礎石か。上面中央が被熱[トーン部分]により淡紅色になる。

花崗岩。09 区 6F1a の 9 曲輪。

S-28 は両面が平らな円礫で礎石か。花崗岩。09 区 5E20t の 9 曲輪 246SP 一面 。

砥石（第 80 図：図 71　S-29・図 72　S-30 ～ 37、図版 48・49）

S-29 は仕上段階に用いた仕上砥か。よく使用されそれぞれの面が研磨により滑らかで一部に光沢［トーン部分］が現れる。側面の一部に被熱の痕が見られることから、熱を受け割れたようで 7 片を接合したが全体の大きさは不明。根石として転用されていた。砂岩。08 区。246SP。

S-30 は小形の仕上砥か。断面が三角状を呈し、底面が研磨により滑らかで、研磨面の反対側の頂部には 3㎜から 1㎜巾の刻みが数条見られる。上下が欠損のため全長は不明である。全体が被熱により淡紅色になる。一部に煤が付着［トーン部分］する。凝灰岩。09 区 6F1b の 9 曲輪三面。

S-31 は小石を半分に割り片面を研磨面にする中砥か。反対側に自然面が残る。泥岩。08B 区 5F19g 7 曲輪。

S-32 は上下二面が研磨面の仕上砥、小破片のため全体は不明。近代か。凝灰岩。05 区 5E18i 1 曲輪

S-33 は短冊形仕上砥の下方部分、上面は研磨により窪み、擦痕が見られる。三側面は滑らかで下面は未調整のままである。被熱により全体が淡紅色になる。凝灰岩。09 区 5E20t の 9 曲輪 572SD。

S-34 は撥形仕上砥、上巾 3.4㎝、最大長 8.6㎝、下巾 2.8㎝、厚さ 1.8㎝を測る。上端が中広となり上端裏側は欠損している。三側面は滑らかで右側面は自然面が残る。泥質凝灰岩。07A 区 5G15k 斜面。

S-35 は短冊形仕上砥、上下の端部が欠損のため全長は不明。厚さが 5㎜と薄い。図の反対面がより滑らかな面である。両側面に斜めの一条沈線が等間隔で上面側と下面側よりそれぞれ刻まれ×状の文様となる。泥質凝灰岩。09 区 6F1a の 9 曲輪一面。

S-36 は短冊形仕上砥の下端部片、上面下半部と下面が欠損のため総じて薄く、本来の厚さは不明。泥質凝灰岩。07A 区 5G17i の本丸北東側の法面 104SX-C。

S-37 は三角形状をした扁平の中砥か、図の斜め部分には自然面が残る。上面は滑らかで擦痕が見られる。泥岩。08B 区 5F18r 9 曲輪。

不明石器（図 72　S-38.39）

S-38 は扁平な楕円形小石、全面光沢が見られる程研磨されたようで、珪質岩からトロンミルに使用された研磨石か。09 区 5F20t の 9 曲輪 435SD。

S-39 は扁平な楕円径の小石、全面研磨されたようで光沢が見られる。砂岩。扁平になっていることからトロンミルに使用された研磨石か。09 区 5F20t の 9 曲輪 670SP。

砥石（図 72　S-40.41）

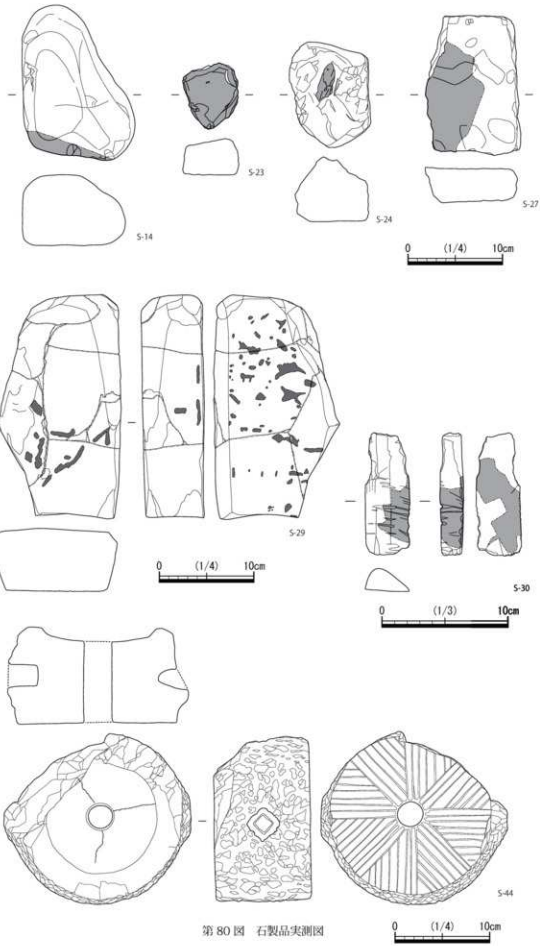
S-40 は仕上砥の破片、上面が滑らかな面である。泥岩。09 区 5F19b。

S-41 は厚さ 2㎜と薄い仕上砥、欠損のため全体は不明。上下面ともに滑らかな面で上面には擦痕が見られる。泥岩。07A 区 5G19i の本丸東南。

硯（図 72　S-42.43　図版 49）

S-42 は長方硯の右側上半部である。縁部分は欠損し、陸と海の部分と硯側に墨痕が見られる。凝灰質泥岩。08A 区 5F18e の 4 曲輪。

S-43 は未成品か。長方硯の上半分で両端の角と海部分の硯側が欠損、陸部分の硯側との段差もほとんどなく、墨痕も見られない。裏面には海部分か刻線が山なりに刻まれている。泥岩。08B 区 5F19・20t の本丸の西南 219SD。



第 80 図　石製品実測図

茶臼（第80図：図73　S-44　図版48）

S-44は上臼で、高さ10.4cm、臼面径17.1cm、上面の縁帯最大巾2.6cm、供給孔径2.8cm、くぼみ上縁より最深値－1.7cm、挽木孔は1.6cmの正方形を菱形◇に2箇所、挽木孔台座は8mm程盛り上がり縁帯巾7mmである。全体の1/4が欠損。側面は小さなくぼみででこぼこ状態である。臼面は8分画で、図下の台座より、右まわりに1分画に溝が8溝・7溝・7溝・9溝・7溝・6溝・6溝・7溝と刻まれており、6溝が2分画、7溝が4分画、8溝が1分画、9溝が1分画と、1分画ごとの溝が一定ではない。一部被熱と煤付着が見られる。重さ5.5kg玄武岩。09区5F19aの9曲輪。

石臼（図73　S-45.46・図74　S-47.48・図75　S-49　図版48）

S-45は上臼の破片、もの入れ孔径3cm 3mmの一部を含む、6溝確認できる。高さ6.5cm。縁帯巾4.5cm、上縁より最深値－2.4cm、花崗岩。09区9曲輪表土。

S-46は上臼の破片、高さ6.8cm、縁帯巾2.6cm、上縁より最深値－2cm、5溝と6溝で8分画か。花崗岩。09区9曲輪表土。

S-47は下臼の完形品で臼面中央が盛り上がる。臼面径32.4cm、側面最大高さ8cm、最小高さ6cm、軸受け孔は臼面側径3cm、下方の底面側が4.5cmで下方部分が広くなっている。臼面は8分画で、図下より右周りに1分画に溝が　7溝、6溝、5溝、4溝、5溝、5溝、5溝、5溝と刻まれており、4溝が1分画、5溝が5分画、6溝が1分画、7溝が1分画である。5溝が5分画と一番多い。重さ16.7kg。花崗岩。08B区表土。

S-48は下臼で1/2が残存。臼面径36.6cm、側面最大高さ10cm、最小高さ9.5cm、軸受け孔は臼面側が欠損のため上端部分がはっきりしないが径2.8cm、底面側3.8cmで下方部分が広くなっている。心棒金具の錆が軸受け孔に見られる。臼面は図下より右周りに1分画に溝が　5溝?、6溝、5溝、4溝、4溝?と刻まれており、8分画か。下面中央部分（トーン部分）と側面（矢印の範囲）に煤が付着している。側面部の煤付着部分を上に、突き刺さったかのような状況で土塁北側より出土。現存部重さ13.7kg。花崗岩。07A区5G17k。

S-49は下臼の完形品で臼面中央が盛り上がる。臼面径34.4cm、側面最大高さ5.5cm、最小高さ4.2cm、軸受け孔は臼面側径3cm×2.5cmの楕円形、底面側の下方が5cmと下方部分が広くなる。臼面は8分画で、図下より右周りに1分画に溝が　6溝、5溝、6溝、5溝、6溝、5溝、6溝、7溝と刻まれており、5溝が3分画、6溝が4分画、7溝が1分画である。5溝が4分画と一番多い。重さ14.2kg。花崗岩。09区9曲輪。

礎石　07A区本丸唯一の礎石建物085SXの4本柱の西側2本の礎石である。図未掲載。

S-40は西北の085SX-1で最大長43cm、最大幅32cm、最大厚さ14cmを測る。花崗岩。07A区5G18f。

S-51は西南の085SX-3で最大長44cm、最大幅33cm、最大厚さ13cmを測る。花崗岩。07A区5G18f。

第8節　木製品［第81・82図：図76～図89　図版44～46］

07A調査区の本丸北側（北西堀箱堀と北東の106SX）より出土したものがほとんどで96点出土。

08調査区より杭（遺物番号W-97）、柱（W-98）の2点と09調査区より柱の3点（W-99～101）である。

本丸をとりまく堀は西堀（薬研堀）、北西堀（箱堀）、北堀（水堀）、北東堀（主に106SX）、東堀（薬研堀）

となる。なお樹種同定の仔細については第 4 章第 1 節を参照。図○、図版○は別冊図版篇を参照。

漆器椀（第 81 図：図 76　W-1 ～ 4　図版 45）

W-1、漆器椀　大振りの椀で黒漆地に朱漆による文様が描かれる。内側も黒漆。本丸西側の薬研堀より出土。口径 15.4㎝、底径 7.8㎝、器高 10.2㎝を測る。樹種はクリ。07A 5G15c

W-2、漆器椀　大振りの椀で黒漆地に朱漆による文様が描かれる。内側は朱漆。本丸北側の箱堀より出土。口径 14.1㎝、底径 7.6㎝、器高 10.5㎝を測る。樹種はクリ。07A 5G16F

W-3、漆器椀　高台の低い小形の椀で、黒漆地に朱漆による文様が描かれる。内側は朱漆。本丸北側の箱堀より出土。底径 6.6㎝、現存器高 4.7㎝を測る。樹種はクリ。07A 5G15e

W-4、漆器椀片　本丸北側の箱堀より出土。黒地に朱漆による文様。内面朱漆。現存器高 2.9㎝を測る。樹種はクリ。07A 5G15e

杓子（第 81 図：図 76　W-5　図版 46）

W-5、杓子　柄の部分が短く、方面に斜めに切った痕跡が見られる。　本丸北側の箱堀より出土。最大長さ 19.9㎝、最大幅 8.8㎝、厚み 0.5㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G15e

不明（第 82 図：図 76　W-6　図版 44）

W-6、不明木製品　組み物か。下駄と間違えるような平な面と足のような面があり、両端が切断され、下駄を製作中の未完成品でもなさそうである。上足の形状は真ん中が盛り上がった丘状になっている。下足の形状は平である。本丸北側の箱堀より出土。最大長さ 12.5㎝、最大幅 7.6㎝、厚み 5.2㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G15e

床板（第 82 図：図 76　W-7　図版 44）

W-7、床板　本丸北側の箱堀より出土。平な面と中央部分に丸味が残った面の見られる板。平面が下か。丸太を半裁し両端を削っている。片側側面に 0.8㎝幅、奥行き 0.7㎝の釘孔？がある。厚い板材から床板としたが板葺き屋根板材とも考えられる。最大長さ 106㎝、最大幅 25.6㎝、厚み 7.8㎝を測る。樹種はマツ属複維管束亜属。07A 5G15c

板葺き板（図 77　W-8 ～ 12）

W-8、板葺き板　本丸北側の箱堀より出土。薄い板。板目。最大長さ 50.1㎝、最大幅 4㎝、厚み 0.5㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G15e

W-9、板葺き板　柾目の薄い板。本丸北側の箱堀より出土。最大長さ 34.3㎝、最大幅 5.6㎝、厚み 0.2㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G15e

W-10、板葺き板　本丸北側の箱堀より出土。板目の薄い板。最大長さ 24.7㎝、最大幅 6㎝、厚み 0.4㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G15e

W-11、板葺き板　本丸北側の箱堀より出土。板目の薄い板。下方が細くなっている。上端中央がやや窪む、同様な形状が 10 にも見られる。最大長さ 23.3㎝、最大幅 4㎝、厚み 0.4㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G15e

W-12、板葺き板　本丸北側の箱堀より出土。板目の薄い板。最大長さ 18.2㎝、最大幅 3㎝、厚み 0.3㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G15f

部材（図 77　W-13）

W-13、部材　角材で側面に釘痕が見られる。本丸北側の箱堀より出土。最大長さ 16.9㎝、最大幅 4.7㎝、厚み 2.7㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16f

板（図 77　W-14）

W-14、板　本丸北側の箱堀より出土。上下が切断された正方形状の板、板材の切れ端か。最大長さ11.4㎝、最大幅 13㎝、厚み 1.1㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G14f

杭（図 77　W-15・16、図 78　W-17 ～ 19）

W-15、杭　本丸北側の水堀より出土。丸木。最大長さ 44.7㎝、最大幅 3.9㎝を測る。樹種はモミ属。07A 5G15g

W-16、杭　本丸北側の水堀より出土。丸木。最大長さ 86.1㎝、最大幅 4.3㎝を測る。樹種はモミ属。07A 5G15g

W-17、杭　本丸北側の水堀より出土。丸木。最大長さ 14㎝、最大幅 4.5㎝を測る。樹種はマツ属複維管束亜属。07A 5G15g

W-18、杭　本丸北側の水堀より出土。丸木。最大長さ 39.3㎝、最大幅 5㎝を測る。樹種はマツ属複維管束亜属。07A 5G15g

W-19、杭　本丸北側の水堀より出土。丸木。木元に小枝が残ることから、枝を丁寧に払わず、急ごしらえの杭のようである。最大長さ 72㎝、最大幅 6.4㎝を測る。樹種はマツ属複維管束亜属。07A 5G15g

漆器椀（図 79　W-20 ～ 26　図版 45）

横木取りがほとんどである。20 の一点のみが縦木取りである。

W-20、漆器椀　本丸北側の水堀より出土。口径 14㎝、現存器高 4.9㎝を測る。樹種はクリ。07A 5G15g

W-21、漆器椀　本丸北側の水堀より出土。口径 14㎝、現存器高 4.3㎝を測る。樹種はクリ。07A 5G15g

W-22、漆器椀　本丸北側の水堀より出土。口径 16㎝、器高 5.9㎝を測る。樹種はサワグルミ。07A 5G15g

W-23、漆器椀　本丸北側の 106SX より出土。口径 15㎝、現存器高 7.8㎝を測る。樹種はカツラ。07A 5G15h

W-24、漆器椀　本丸北側の 106SX より出土。口径 15㎝、現存器高 7.6㎝を測る。樹種はカツラ。07A 5G15i

W-25、漆器椀片　本丸北側の 106SX より出土。胴部片。現存器高 2.7㎝を測る。樹種はクリ。07A 5G15j

W-26、漆器椀片　本丸北側の 106SX より出土。胴部片。現存器高 4.4㎝を測る。樹種はクリ。07A 5G15j

W-27、漆器椀片　本丸北側の水堀より出土。高台部片。現存器高 1㎝を測る。樹種はクリ。07A 5G16g

曲物（図 79　W+-28）

W-28、曲物（側片と底板）本丸北側の 106SX より出土。枘杓の一部か。底板には桜皮による綴じが四箇所見られ径 10.6㎝、厚さ 0.9㎝を測る。側片にも桜皮による綴じ部分が残る。樹種はヒノキ。07A 5G14h

下駄（第 81 図：図 79　W-29　図版 46）

W-29、連歯下駄　本丸北側の 106SX より出土。一本の連歯下駄で後ろ歯が減っている。鼻緒を通す孔が3つ穿かれる。指部分の減り具合から右足か。全長 21.8㎝、最大幅 9.8㎝、厚さ 2.9㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G13h

陽物（第 81 図：図 79　W-30　図版 46）

W-30、本丸北側の 106SX より出土。全長 12.6㎝、最大幅 2.2㎝を測る。樹種はツブラジイ。07A 5G15h

小杭（図 79　W-31）

W-31、本丸北側の 106SX より出土。全長 17.1㎝、最大幅 1.6㎝を測る。樹種はマツ属複維管束亜属。07A 5G14h

角柱状木っ端（図 79　W-32 ～ 34）

W-32、本丸北側の 106SX より出土。角柱状端切れ。全長 4.8㎝、最大幅 5.9㎝、厚さ 2.9㎝を測る。樹種はクリ。07A 5G14h

W-33、本丸北側の 106SX より出土。角柱状端切れ。全長 5.3㎝、最大幅 4.3㎝、厚さ 2.3㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G14h

W-34、本丸北側の 106SX より出土。角柱状端切れ。全長 2.2㎝、最大幅 5.1㎝、厚さ 1.5㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G14h

板（図 80　W-35 ～ 37）

W-35、組物の板か。柾目。本丸北側の 106SX より出土。側面に釘孔が四箇所見られる。全長 27.2㎝、最大幅 10.3㎝、厚さ 3㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G14h

W-36、鋭角に切られた組物板か。柾目。本丸北側の 106SX より出土。側面に釘孔が一箇所見られる。全長 19㎝、最大幅 10㎝、厚さ 1.7㎝を測る。樹種はマツ属複維管束亜属。07A 5G14i

W-37、床板の断片か。本丸北側の 106SX より出土。両端が削られ、片面は半裁された面を削り、平な面をつくりだしている。一方の面は丸味が残る。側面には窪みとなった削りの痕が三箇所見られる。全長 36.3㎝、最大幅 19.1㎝、厚さ 11.4㎝を測る。樹種はマツ属複維管束亜属。07A 5G14j

竹杭（図 80　W-38）

W-38、竹杭か。本丸北側の 106SX より出土。柄杓などの受け台とすると片側が平でなければ置けず、斜めでは可能性が低いと思われる。樹種はタケ亜科。全長 12.9㎝、最大径 6.2㎝を測る。07A 5G15h

組物板（図 80　W-39）

W-39、組物板か。本丸北側の 106SX より出土。柾目。上端の一方の角が切り取られている。両面ともに斜め方向の刻み痕が無数に見られる。全長 22.3㎝、最大幅 10.1㎝、厚さ 2.5㎝を測る。樹種はマツ属複維管束亜属。07A 5G15i

板材（図 81　W-40）

W-40、板葺き用板か。板目の細い板。本丸北側の 106SX より出土。板目。全長 22.3㎝、最大幅 10.1㎝、厚さ 2.5㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G15h

箆（第 81 図：図 81　W-41　図版 46）

W-41、箆。丸い先端になるほど平に薄く削ずられた箆。握る部分が少しくぼんでいる。本丸北側の 106SX より出土。樹種はヒノキ。全長 32.6㎝、最大幅 3.5㎝、厚さ 1.9㎝を測る。07A 5G15i

横槌（第 82 図：図 81　W-42　図版 46）

W-42、横槌。先端が枝に分かれる Y 部分を利用した横槌で、敲部分は両面とも平に削られている。豆などの穀物類に利用された民俗例がある。本丸北側の 106SX より出土。全長 36.4㎝、最大幅 6.7㎝、厚さ 3.9㎝を測る。樹種はコナラ属アカガシ亜属。07A 5G15i

鋤状板（第 81 図：図 81　W-43）

W-43、角スコップのような形状で鋤状板。柾目。下端は両面から削られ鋭角な刃部分を持ち、上半分（全体の 2/3）は刃部分の幅より細くなっている。下端部分の形状は桶組井戸の板材下端に類似しており、湿

地などに打ち込み易くするためか。柄と考えられる部分が細くなっているが板では折れやすく、土留めなどに使用された補強材の一つか。本丸北側の 106SX より出土。全長 76.7㎝、最大幅 11.2㎝、厚さ 1.8㎝を測る。樹種はスギ。07A 5G15i

板葺き用板（図 82　W-44 ～ 48）

板葺き用の板材か。厚みが 0.3㎝～ 0.6㎝と薄く長い板である。

W-44、本丸北側の 106SX より出土。一番大きな板。追柾目。全長 98.9㎝、最大幅 8.9㎝、厚さ 0.3㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G15h

W-45、本丸北側の 106SX より出土。板目。全長 54.8㎝、最大幅 7.7㎝、厚さ 0.5㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G15h

W-46、本丸北側の 106SX 東堀より出土。板目。全長 51.5㎝、最大幅 4.4㎝、厚さ 0.6㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

W-47、本丸北側の 106SX 東堀より出土。板目。全長 53.6㎝、最大幅 8.2㎝、厚さ 0.4㎝を測る。樹種はスギ。07A 5G16j

W-48、本丸北側の 106SX 東堀より出土。板目。全長 49.5㎝、最大幅 8.5㎝、厚さ 0.4㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

丸木柱（図 83　W-49）

W-49、丸木柱の一部。本丸北側の 106SX より出土。全長 80㎝、最大幅 9㎝、厚さ 9.6㎝を測る。樹種はコナラ属コナラ節。07A 5G15j

杭（図 83　W-50 ～ 51）

W-50、小枝を切り落とした痕のみられるやや歪んだ杭。本丸北側の 106SX より出土。全長 70.4㎝、最大幅 7.3㎝、厚さ 6.5㎝を測る。樹種はマツ属複維管束亜属。07A 5G15j

W-51、本丸北側の 106SX より出土。全長 60.5㎝、最大幅 5.7㎝、厚さ 6㎝を測る。樹種はキリ。07A 5G15j

曲物底板（図 83　W-52）

W-52、曲物の底板の一部か。両端が斜めに切断される。板目。本丸北側の 106SX より出土。全長 20.4㎝、最大幅 1.9㎝、厚さ 0.4㎝を測る。樹種はスギ。07A 5G15j

板葺き用板（図 83　W-53、図 84　W-54・55）

W-53、先端が斜めに切られた板。板目の長い薄板。本丸北側の 106SX 東堀より出土。全長 76.5㎝、最大幅 9.7㎝、厚さ 0.4㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

W-54、下部が欠損。下方部分が薄く、斜めの刻み痕が見られる。板目。本丸北側の 106SX 東堀より出土。全長 45㎝、最大幅 7.2㎝、厚さ 0.5㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

W-55、上下部ともに欠損。本丸北側の 106SX 東堀より出土。板目。全長 36.3㎝、最大幅 7.3㎝、厚さ 0.5㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

柱材（図 84　W-56・57）

W-56、両端ともに削られ、柱を切り落とした残りか。上端は黒く焦げている。本丸北側の 106SX より出土。全長 34㎝、最大幅 12.7㎝、厚さ 9.5㎝を測る。樹種はクリ。07A 5G15i

W-57、柱の下部か。上部は削られ角柱となるが欠損している。本丸北側の 106SX 東堀より出土。全長 46.7㎝、最大幅 17.6㎝、厚さ 18.6㎝を測る。樹種はマツ属複維管束亜属。07A 5G16j

杭（図 85　W-58・59）

W-58、両側を削り鋭角とするが片側のみを削った杭。本丸北側の水堀より出土。全長 27.6㎝、最大幅 3.7㎝を測る。樹種はモミ属。07A 5G16g

W-59、杭としたが丸木柱の可能性もある。上端が鉈で刻まれたような鋭角な凸凹状態が見られ側面には釘痕がある。本丸北側の水堀より出土。全長 15.5㎝、最大幅 6.1㎝、厚さ 5.7㎝を測る。樹種はマツ属複維管束亜属。07A 5G16g

楔（図 85　W-60・61）

W-60、先端が細くなった三角形状の断面を呈する。桶などの楔か。本丸北側の 106SX より出土。全長 7.5㎝、最大幅 2㎝、厚さ 1㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16i

W-61、先端が細く長い三角形状の断面を呈する。本丸北側の 106SX より出土。全長 11.8㎝、最大幅 1㎝、厚さ 1.2㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16i

板材木っ端（図 85　W-62 ～ 71）

W-62、切断された板材の木っ端で片面には刻み痕が見られる。本丸北側の 106SX より出土。全長 7.4㎝、最大幅 5.5㎝、厚さ 1㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16i

W-63、板材の木っ端で真ん中に釘痕が見られる。本丸北側の 106SX より出土。全長 8.2㎝、最大幅 5㎝、厚さ 1.2㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16i

W-64、厚い板材の木っ端。本丸北側の 106SX より出土。全長 3.4㎝、最大幅 3.9㎝、厚さ 1.5㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16i

W-65、本丸北側の 106SX 東堀より出土。全長 5.8㎝、最大幅 5.9㎝、厚さ 1㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

W-66、本丸北側の 106SX 東堀より出土。全長 4㎝、最大幅 5.4㎝、厚さ 1.7㎝を測る。樹種はスギ。07A 5G16j

W-67、本丸北側の 106SX 東堀より出土。全長 6.9㎝、最大幅 2.7㎝、厚さ 1㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

W-68、本丸北側の 106SX より出土。全長 22.3㎝、最大幅 2.9㎝、厚さ 1.1㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16i

W-69、本丸北側の 106SX より出土。全長 23.2㎝、最大幅 1.4㎝、厚さ 0.9㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16i

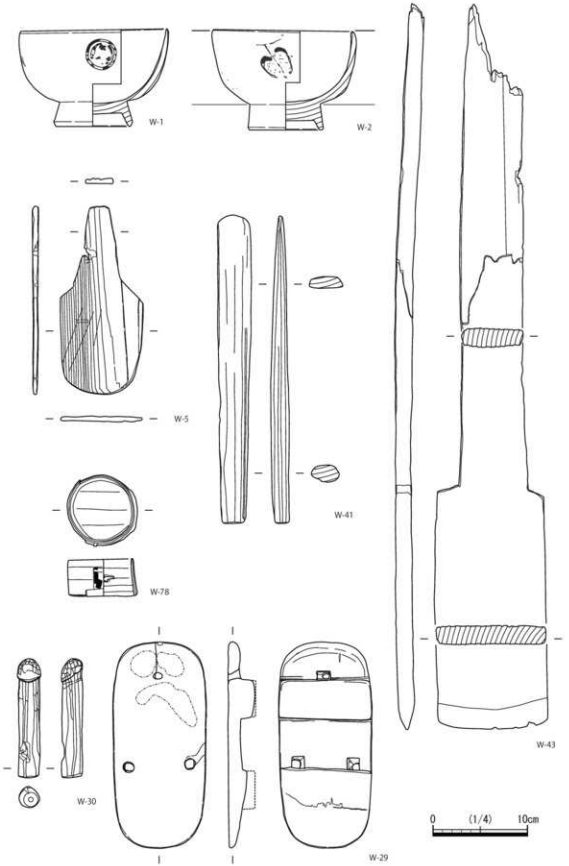
W-70、上部に細い釘痕。本丸北側の 106SX より出土。全長 21㎝、最大幅 1.3㎝、厚さ 1.1㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16i

建具の部材（図 85　W-71）

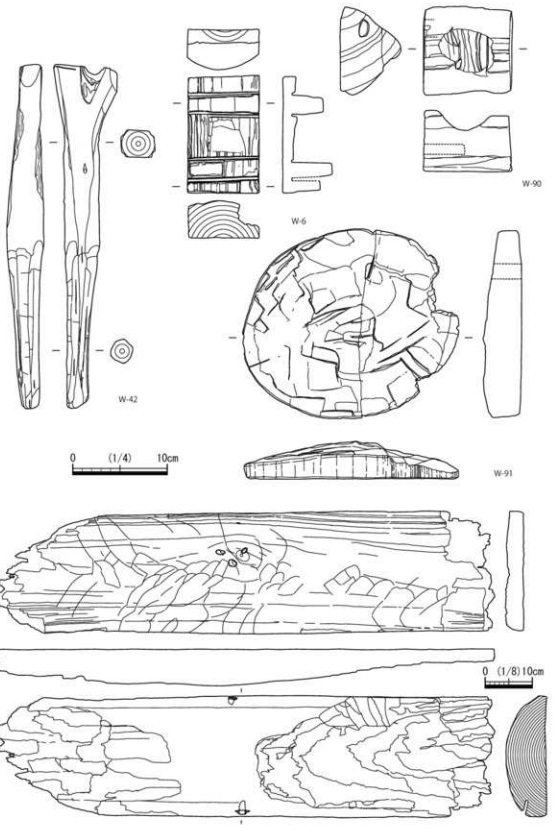
W-71、両面が丁寧に削られ、建具の部材か。下端部分が炭化しており、薪として燃やされたようである。本丸北側の 106SX 東堀より出土。全長 11.4㎝、最大幅 2.7㎝、厚さ 1.1㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

楔（図 85　W-72）

W-72、片面の中央部分が盛り上がり、上端に差し込みの凹みがあり、両面が丁寧に削られた建具の一部を再利用した楔か。本丸北側の 106SX 東堀より出土。全長 12.9㎝、最大幅 3.5㎝、厚さ 1.3㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j



第 81 図　木製品実測図（1）



第 82 図　木製品実測図（2）

角棒の木っ端（図 85　W-73 ～ 75）

W-73、本丸北側の 106SX 東堀より出土。全長 12㎝、最大幅 2.7㎝、厚さ 2.5㎝を測る。樹種はクリ。07A 5G16j

W-74、本丸北側の 106SX 東堀より出土。全長 8.5㎝、最大幅 3.5㎝、厚さ 1.9㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

W-75、本丸北側の 106SX 東堀より出土。全長 3.7㎝、最大幅 2.8㎝、厚さ 3.1㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

箸（図 86　W-76・77）

W-76、本丸北側の 106SX 東堀より出土。現存長 13.5㎝、最大幅 0.4㎝、厚さ 0.3㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

W-77、本丸北側の 106SX 東堀より出土。現存長 7.3㎝、最大幅 0.7㎝、厚さ 0.56㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

柄杓（図 86　W-78　図版 46）

W-78、柄が欠損しているが湯水を汲む円筒形の曲物部分で、黒漆の柄杓。本丸北側の 106SX 東堀より出土。口径 6.8㎝、底径 7㎝、器高 3.9㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

曲物の破片（図 86　W-79 ～ 82）

W-79、曲物の底板。桜皮の綴じの一部が残る。本丸北側の 106SX 東堀より出土。現存長 9.5㎝、最大幅 6.6㎝、厚さ 0.8㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

W-80、曲物の側板。曲げる部分の刻みが見られる。本丸北側の 106SX 東堀より出土。現存長 16.3㎝、最大幅 5.6㎝、厚さ 0.4㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

W-81、曲物側板の綴じた片側の幅が細くなった部分。本丸北側の 106SX 東堀より出土。現存長 9.6㎝、最大幅 2.7㎝、厚さ 0.4㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

W-82、曲物側板の曲げる部分の刻みにそって折れている。本丸北側の 106SX 東堀より出土。現存長 5.5㎝、最大幅 2.8㎝、厚さ 0.3㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

板葺き用材（図 86　W-83 ～ 86）

W-83、上端部が斜めに切られていることから折敷の底板の可能性もある。本丸北側の 106SX 東堀より出土。板目。最大長 14㎝、最大幅 4.2㎝、厚さ 0.6㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

W-84、本丸北側の 106SX 東堀より出土。板目の薄板。最大長 24.5㎝、最大幅 1.8㎝、厚さ 0.3㎝を測る。樹種はスギ。07A 5G16j

W-85、本丸北側の 106SX 東堀より出土。板目の薄板。最大長 16.4㎝、最大幅 3.2㎝、厚さ 0.4㎝を測る。樹種はスギ。07A 5G16j

W-86、本丸北側の 106SX 東堀より出土。板目の薄板。最大長 29.1㎝、最大幅 3.3㎝、厚さ 0.4㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

W-87、上端が斜めに切断された厚めの柾目板。桶板の可能性もある。本丸北側の 106SX 東堀より出土。最大長 21.6㎝、最大幅 7.3㎝、厚さ 0.6㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16j

杭（図 86　W-88・89）

W-88、小枝の真っすぐな部分を利用し下端を削った簡易な杭。本丸北側の 106SX 東堀より出土。全長 26.3㎝、最大幅 2.1㎝を測る。樹種はツバキ属。07A 5G16j

W-89、小枝を利用した簡易な杭。本丸北側の 106SX 東堀より出土。全長 12.4㎝、最大幅 1.2㎝、厚さ 1.1㎝を測る。樹種はヒサカキ。07A 5G16j

三角部材（第 82 図：図 87　W-90　図版 44）

W-90、みかん割された断面が三角形をした部材で頂部には削り込まれた凹みと、切り落とされた片側側面に横幅 2㎝×縦 1㎝、奥行き 4.5㎝の孔が見られる。本丸北側の 106SX 東堀より出土。全長 9.4㎝、最大幅 6.5㎝を測る。樹種はクリ。07A 5G16j

円形台（第 83 図：図 87　W-91　図版 44）

W-91、丸太を輪切りにして台に利用したものか。下面は切り取られたままの平な面。上面は芯の部分が盛り上がった形状で削った工具痕が残る。右欠損部分に孔が見られる。本丸北側の 106SX 東堀より出土。最大径 22.3㎝、最小径 20㎝、最大厚み 4㎝を測る。樹種はコナラ属クヌギ節。07A 5G16j

角柱（図 87　W-92）

W-92、角柱の上半部の木っ端。上端が丸みを帯びる。本丸北側の 106SX 東堀より出土。最大長 8.1㎝、最大幅 6.6㎝、厚さ 5.7㎝を測る。樹種はマツ属複維管束亜属。07A 5G16j

桶部材（図 87　W-93・94）

W-93、桶の底板一部、上端が斜めに切られ端部は面取りが施されている。本丸東側の東堀より出土。最大長 12.6㎝、最大幅 6.6㎝、厚さ 0.6㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16k

W-94、桶の底板、片側が丸く切られ、端部は面取りが施されている。真っすぐな片側の側面には木釘の痕が 4 箇所見られる。本丸東側の東堀より出土。最大長 39.3㎝、最大幅 9.7㎝、厚さ 1.8㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16k

建築部材（図 87　W-95）

W-95、下部がやや細く、片面には斜めの刻みと真ん中部分に断面三角状の浅い凹みが見られる。本丸東側の東堀より出土。最大長 30.2㎝、最大幅 5.8㎝、厚さ 2.7㎝を測る。樹種はヒノキ。07A 5G16k

杭（図 88　W-96・97）

W-96、片側を削り鋭角部分を造り出した杭。本丸北側の 119SD より出土。全長 49.2㎝、最大幅 4㎝を測る。樹種はナシ亜科。07A　119SD 5G15h

W-97、二股になった片側は切り落とされ、下半部が欠損、上半部は焼失している。両側を削り鋭角とするが片側のみを削った杭。現存長 44.7㎝、最大幅 9.4㎝を測る。樹種はマツ属複維管束亜属。08A 143SE 5F20h

柱（図 88　W-98　図 89　W-99 ～ 101）

W-98、丸太の下端部分で、上部分も切り倒されたのか削った痕が見られる。現存長 19.4㎝、最大幅 13.5㎝を測る。樹種はマツ属複維管束亜属。08A 区庭園池 133SG の北側、231SP　6F1g

W-99、上下とも欠損している。現存長 52.6㎝、最大幅 12.2㎝を測る。樹種はコナラ属コナラ節。09 区 9 曲輪 543SP　5F20a

W-100、上下とも欠損している。現存長 33.8㎝、最大幅 11.7㎝を測る。樹種はクリ。09 区 9 曲輪 612SP　5F20b

W-101、丸太の破片。現存長 38.3㎝、最大幅 5㎝を測る。樹種はコナラ属コナラ節。09 区 9 曲輪 620SP　5F20b

第４章　自然科学分析

第１節　木製品の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

瀬戸市上品野町に所在する桑下城跡は、水野川と蟹川にはさまれた標高約 210 mの丘陵上に立地する平山城である。出土した木製品の樹種同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は 106SX、東堀切、西堀切などから出土した下駄、漆器、曲物、杓文字、柄杓などの木製品と、杭材や板材、加工材などの加工木、計 106 点である。

木取りの確認後、これらの試料から剃刀を用いて３断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

3. 結果

針葉樹はマツ属複維管束亜属、モミ属、スギ、ヒノキの４分類群、広葉樹はサワグルミ、クリ、ツブラジイ、コナラ属アカガシ亜属（以下アカガシ亜属と呼ぶ）、コナラ属クヌギ節（以下クヌギ節と呼ぶ）、コナラ属コナラ節（以下コナラ節と呼ぶ）、カツラ、ツバキ属、ヒサカキ、ナシ亜科、キリの 11 分類群、その他タケ亜科があり、計 16 分類群が確認された。結果の一覧を第８表に示す。

ヒノキが最も多く、全体の約半数を占める。クリが 16 点とマツ属複維管束亜属が 14 点、スギが６点みられた他は、いずれも３点以下であった。樹種構成を第４表に示す。

第４表　樹種構成

樹種	計
マツ属複維管束亜属	14
モミ属	3
スギ	6
ヒノキ	51
サワグルミ	1
クリ	16
ツブラジイ	1
コナラ属アカガシ亜属	1
コナラ属クヌギ節	2
コナラ属コナラ節	3
カツラ	2
ツバキ属	1
ヒサカキ	1
ナシ亜科	2
キリ	1
タケ亜科	1
計	106

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を第 83 図～第 85 図に示す。

（1）モミ属　Abies　マツ科　第 83 図　1a-1c(No.15)

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織でじゅず状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、１分野に１～４個存在する。

モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミ・シラベ・トドマツなど約５種ある。材は、柔軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく保存性が低い。

（2）マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科　第 83 図　2a-2c(No.7)

仮道管、垂直・水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、

放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、靱性は大である。

(3) スギ　Cryptomeria japonica (L.f.) D.Don　スギ科　第83図　3a-3c(No.85)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急か穏やかで、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは、暖帯・温帯下部に生育する常緑高木である。材は、比較的軽軟で切削加工は容易、割裂性は大きい。

(4) ヒノキ　Chamaecyparis obtusa (Siebold et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　第83図　4a-4c(No.35)、5c(No.62)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に2個存在する。

ヒノキは、福島県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は、加工容易で割裂性は大きく、耐朽性・耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

(5) サワグルミ　Pterocarya rhoifolia Siebold et Zucc.　クルミ科　第83図　6a-6c(No.22)

径が中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、1～2列幅である。

サワグルミは温帯から暖帯に分布する落葉高木で、山地の川沿いの砂礫地に生育する。材は軽軟で、乾燥・加工は容易であるが、割れやすく保存性は低い。

(6) クリ　Castanea crenata Siebold et Zucc.　ブナ科　第84図　7a-7c(No.21)、8a(No.90)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。道管放射組織間壁孔は柵状となる。

クリは、温帯下部から暖帯に分布する落葉高木である。材は、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

(7) ツブラジイ　Castanopsis cuspidata (Thunb.) Schottky　ブナ科　第84図　9a-9c(No.30)

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きいが接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性で、集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯に分布する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性および乾燥は中庸だが、耐久性は著しく低い。

(8) コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　第84図　10a-10c(No.42)

円形でやや大型の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシ、ハナガガシ、ツクバネガシ、アラカシなど8種がある。イチイガシ以外は木材組織からは識別困難なため、イチイガシを除いたアカガシ亜属とする。材は、きわめて堅硬および強靱で、水湿に強い。

(9) コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　第84図　11a-11c(No.91)

（10）コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　第84図　12a-12c(分写No.67)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は、全体的に重硬で加工困難である。

（11）カツラ　Cercidiphyllum japonicum Siebold et Zucc. ex Hoffm. et Schult.　カツラ科　第85図　13a-13c(No.23)

角張った道管が、ほぼ単独で年輪内に均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段状で、30段程度となる。放射組織は1～3列幅で、平伏細胞と方形細胞からなる異性である。

カツラは温帯から暖帯に分布する落葉高木である。材は、軽軟で靭性があり、加工は容易である。

（12）ツバキ属　Camellia　ツバキ科　第85図　14a-14c(No.88)

小径でほぼ単独の道管が、晩材に向けてやや径を減じながら均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は10段程度の階段状である。放射組織は方形もしくは直立細胞が上下に2～4細胞連なる異性で2列幅程度、多列部が単列部と同じ大きさである。円形に著しくふくれた大型の結晶が単列部に認められる。

ツバキ属は、温帯から暖帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキ、サザンカ、チャノキなどがある。材は、切削加工および割裂は困難であるが、強靱で耐朽性は大きく、重硬・緻密な有用材である。

（13）ヒサカキ　Eurya japonica Thunb.　ツバキ科　第85図　15a-15c(No.89)

小径の道管がほぼ単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段状で、40段以上となる。放射組織は1～4列幅で、上下に直立もしくは方形細胞が数個連なる異性である。

ヒサカキは、暖帯～亜熱帯に生育する常緑低木または小高木である。材の強さは中庸、割裂は困難である。

（14）ナシ亜科　Subfam. Maloideae　バラ科　第85図　16a-16c(分写No.96-2)

小径の道管がおおむね単独で均等に分布する散孔材である。軸方向柔組織が短線状となる。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織および放射組織中に大型の結晶が連なる。放射組織は異性で、1～3列幅となる。

ナシ亜科にはサンザシ属、ビワ属、カナメモチ属、ナナカマド属、リンゴ属など12の属が存在する。

（15）キリ　Paulownia tomentosa (Thunb.) Steud.　ゴマノハグサ科　第85図　17a-17c(No.51)

大型の道管が年輪のはじめに並び、晩材部では徐々に径を減じる半環孔材である。軸方向柔組織は翼状となる。木部繊維の壁厚は、極めて薄い。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、4～6列幅程度である。

キリは、温帯に分布する落葉高木である。材は、軽軟で加工容易であるが、耐湿性や耐久性に富む。

（16）タケ亜科　Subfam. Bambusoideae　イネ科　第85図　18a(No.38)

柔細胞と維管束で構成される単子葉類で、維管束が柔細胞中に散在する不斉中心柱である。二次肥大成長を行わないため木本とはいえないが、高木化するために木材のように用いられる。割裂性が非常に大きい。

タケ・ササの仲間で12属が含まれるが、稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。

4. まとめ

木製品は、横槌、木鉢、漆器類、陽物、輪切り台以外は、すべてヒノキを中心とする針葉樹であった。工具、履き物、容器類の器種別の樹種構成を第５表、食事具、祭祀具、雑具の器種別の樹種構成を第６表に示す。

工具では、横槌はアカガシ亜属であった。アカガシ亜属の材は非常に重硬および強靱なため、農工具の柄としてよく利用される。クサビはすべてヒノキであった。容器類では、漆器にクリとカツラが利用されており、木鉢はサワグルミであった。曲物底板、桶、桶板はヒノキであった。漆器に用いられていた樹種のうち、クリは重硬で加工困難な材であり、カツラは比較的軽軟で加工容易な材である。木鉢に利用されていたサワグルミも、軽軟で加工容易な材である。食事具では、シャモジの１点がスギであった他は、ヒシャク、シャモジ、ヘラ、曲物側板１、箸、串はすべてヒノキであった。祭祀具では、板材がヒノキ、陽物がツブラジイであった。雑具では、曲物側板２がヒノキ、台がクヌギ節、柱・床板がマツ属複維管束亜属とクリであった。

愛知県内では、春日井市の清洲城下町遺跡において、主に戦国時代の木製品の樹種同定が行われている。清洲城下町遺跡では、井戸枠、曲物、卒塔婆、人形、折敷、箸、へら、楔、箱、板など、漆器以外の木製品のほとんどが針葉樹で、中でもヒノキ属が多く検出されている（植田・堀木、2002）。
桑下城跡でも、清洲城下町遺跡と同様に木製品にヒノキが多用されており、周辺の木材利用傾向と一致している。

板材や加工材など加工木の樹種構成を第７表に示す。太板、細板、薄板などの板材には、針葉樹が多く利用されていた。ヒノキが多いが、スギとマツ属複維管束亜属も利用されており、広葉樹のクリの利用もみられた。また、角材ではマツ属複維管束亜属、スギ、ヒノキ、クリがあり、板材と類似した木材利用傾向であった。

第５表　工具・履き物・容器類の樹種構成

樹種／器種	工具		履き物		容器類						計
	横槌	クサビ	下駄	不明組物	木鉢	漆器	漆椀	曲物底	桶	桶板	
ヒノキ		3	1	1				1	1	1	8
サワグルミ					1						1
クリ						8	1				9
コナラ属アカガシ亜属	1										1
カツラ						2					2
計	1	3	1	1	1	10	1	1	1	1	21

第６表　食事具・祭祀具・雑具の樹種構成

樹種／器種	食事具						祭祀具		雑具				計
	ヒシャク	シャモジ	ヘラ	曲物側板1	箸	串	板材	陽物	曲物側板2	台	柱・床板		
マツ属複維管束亜属											2		2
スギ		1											1
ヒノキ	3	1	1	1	1	1	1		2				11
クリ											1		1
ツブラジイ								1					1
コナラ属クヌギ節										1			1
計	3	2	1	1	1	1	1	1	2	1	3		17

杭は、マツ属複維管束亜属、モミ属、コナラ節、ツバキ属、ナシ亜科、キリ、タケ亜科であった。加工材ではマツ属複維管束亜属、クリ、クヌギ節、コナラ節がみられた。その他、枝材はマツ属複維管束亜属とヒサカキであった。杭材および加工材、自然木と思われる枝材は、マツ属複維管束亜属が最も多く、

クリ、クヌギ節、コナラ節、ツバキ属、ヒサカキ属、ナシ亜科、キリといった広葉樹も点数は少ないものの多種類確認されたが、木製品および板材で多用されていたヒノキはみられなかった。

杭材には、周辺に生育していた樹木が利用されることが多く（島地・伊東，1988）、周辺植生を反映していると思われる。

ツバキ属やヒサカキは常緑性の広葉樹で低木～小高木、ナシ亜科やキリは落葉性の広葉樹で小高木～高木となり、いずれも常緑広葉樹林帯に分布する樹木である。しかし、マツ属複維管束亜属やクヌギ節、コナラ節は主に二次林を構成する樹種であるため、当時の遺跡周辺には自然植生に加えて二次林が存在したと推測される。木製品に多用されていたヒノキは杭材や加工材では確認されていないため、遺跡から離れた場所で採取された可能性がある。

第７表　板材・加工材の樹種構成

樹種／器種	板材												杭					
	太板	細板	薄板	加工薄板材	長い薄板	特大板材?	板材	板片	角材	竹杭	杭	木杭	木杭?	加工材	枝	計
マツ属複維管束亜属	1					1	1		1		3	1	1	2	1	12
モミ属											2	1				3
スギ			3	1					1							5
ヒノキ	2	1	12		1		3	6	7							32
クリ							2		3					1		6
コナラ属クヌギ節														1		1
コナラ属コナラ節												1		2		3
ツバキ属												1				1
ヒサカキ															1	1
ナシ亜科												2				2
キリ												1				1
タケ亜科										1						1
計	3	1	15	1	1	1	6	6	12	1	5	7	1	6	2	68

引用文献

島地謙、伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．259p，雄山閣出版．

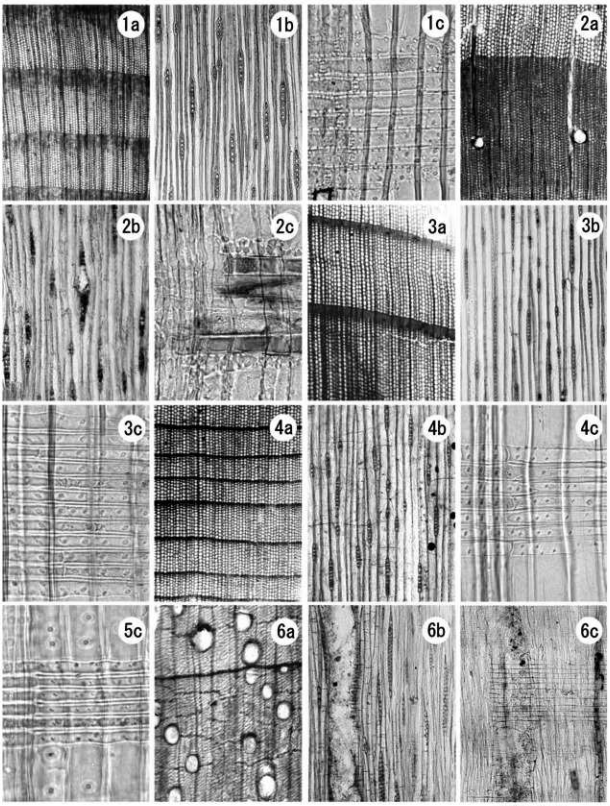
植田弥生・堀木真美子（2002）清洲城下町遺跡出土木製品の樹種同定．愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター編「清洲城下町遺跡Ⅷ」：302-322，愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

遺物番号	器種	樹種	木取り	調査区	グリッド	遺構	分写番号
W-1	漆器椀	クリ	横木取り	07A	-	西堀	1
W-2	漆器椀	クリ	横木取り	07A	-	-	2
W-3	漆器椀	クリ	横木取り	07A	-	-	8
W-4	漆椀椀	クリ	不明	07A	5G5e	西堀	16
W-5	杓子	ヒノキ	板目	07A	-	-	92
W-6	不明	ヒノキ	半割？	07A	-	-	22
W-7	床板	マツ属複維管束亜属	板目	07A	5G15c	西箱堀	80
W-8	板材	ヒノキ	板目	07A	5G15e	西堀	118-4
W-9	板材	ヒノキ	柾目	07A	5G15e	西堀	118-2
W-10	板材	ヒノキ	板目	07A	5G15e	西堀	118-1
W-11	板材	ヒノキ	板目	07A	5G15e	西堀	118-3
W-12	板材	ヒノキ	板目	07A	5G15f	西堀	122
W-13	部材	ヒノキ	角材（柾目）	07A	5G16f	西堀	36
W-14	板	ヒノキ	柾目	07A	5G14f	検出	98
W-15	杭	モミ属	丸木	07A	-	検出Ⅰ	68-2
W-16	杭	モミ属	丸木	07A	5G15g	検出Ⅰ	68-1
W-17	杭	マツ属複維管束亜属	丸木	07A	-	-	70-2
W-18	杭	マツ属複維管束亜属	丸木	07A	-	-	70-1
W-19	杭	マツ属複維管束亜属	丸木	07A	-	-	69
W-20	漆器椀	クリ	縦木取り	07A	-	-	3-1
W-21	漆器椀	クリ	横木取り	07A	-	-	3-2
W-22	漆器椀	サワグルミ	横木取り	07A	-	106SX	17
W-23	漆器椀	カツラ	横木取り	07A	-	-	6
W-24	漆器椀	カツラ	横木取り	07A	-	-	5
W-25	漆器椀片	クリ	横木取り	07A	5G15j	106SX	15
W-26	漆器椀片	クリ	横木取り	07A	-	-	10
W-27	漆器椀片	クリ	横木取り	07A	5G16g	106SX	9
W-28	曲物	側板・底板：ヒノキ	側板・底板：柾目	07A	-	106SX	19
W-29	連歯下駄	ヒノキ	板目	07A	-	106SX	24
W-30	陽物	ツブラジイ	丸木	07A	-	106SX	23
W-31	小杭	マツ属複維管束亜属	丸木	07A	5G14h	106SX	51
W-32	角柱	クリ	角材（板目）	07A	5G14h	106SX	50-1
W-33	角柱	ヒノキ	角材（追柾目）	07A	5G14h	106SX	50-2
W-34	角柱	ヒノキ	角材（柾目）	07A	5G14h	106SX	50-3
W-35	板	ヒノキ	柾目	07A	5G14h	106SX	34
W-36	板	マツ属複維管束亜属	柾目	07A	5G14i	104SX	39
W-37	床板	マツ属複維管束亜属	丸木	07A	-	106SX	76
W-38	竹杭	タケ亜科	-	07A	-	106SX	38
W-39	板材	マツ属複維管束亜属	柾目	07A	-	106SX	32
W-40	板材	ヒノキ	板目	07A	-	106SX	110
W-41	ヘラ	ヒノキ	芯去削出	07A	-	106SX	25
W-42	横槌	コナラ属アカガシ亜属	芯持削出	07A	-	-	93
W-43	鋤状板	スギ	柾目	07A	-	106SX	28
W-44	板材	ヒノキ	追柾目	07A	-	106SX	107
W-45	板材	ヒノキ	板目	07A	-	106SX	105
W-46	板材	ヒノキ	板目	07A	5G16j	106SX	64-1
W-47	板材	スギ	板目	07A	-	東堀	103
W-48	板材	ヒノキ	板目	07A	-	東堀	116
W-49	丸木柱	コナラ属コナラ節	丸木	07A	-	106SX	78
W-50	杭	マツ属複維管束亜属	丸木	07A	-	106SX	79
W-51	杭	キリ	丸木	07A	-	-	94
W-52	曲物	スギ	板目	07A	5G15j	106SX	91
W-53	板材	ヒノキ	板目	07A	-	東堀	73
W-54	板材	ヒノキ	板目	07A	-	東堀	72-1
W-55	板材	ヒノキ	板目	07A	-	東堀	72-2
W-56	柱	クリ	丸木	07A	-	106SX	71

第８表　出土木製品の樹種同定結果（1）

遺物番号	器種	樹種	木取り	調査区	グリッド	遺構	分写番号
W-57	柱	マツ属複維管束亜属	丸木	07A	-	東堀	77
W-58	杭	モミ属	丸木	07A	5G16g	106SX	97-1
W-59	杭	マツ属複維管束亜属	丸木	07A	5G16g		97-2
W-60	楔	ヒノキ	角材（板目）	07A	5G16i	106SX	43
W-61	楔	ヒノキ	角材	07A	5G16i	106SX	59
W-62	板材木っ端	ヒノキ	追柾目	07A	5G16i	106SX	41-6
W-63	板材木っ端	ヒノキ	板目	07A	5G16i	106SX	41-4
W-64	板材木っ端	ヒノキ	角材（板目）	07A	5G16i	106SX	41-5
W-65	板材木っ端	ヒノキ	角材（板目）	07A	5G16j	106SX	65-5
W-66	板材木っ端	スギ	角材（追柾目）	07A	5G16j	106SX	65-3
W-67	板材木っ端	ヒノキ	角材（板目）	07A	5G16j	106SX	65-1
W-68	板材木っ端	ヒノキ	板目	07A	5G16i	106SX	41-3
W-69	板材木っ端	ヒノキ	角材	07A	5G16i	106SX	41-2
W-70	板材木っ端	ヒノキ	角材	07A	5G16i	106SX	41-1
W-71	建築部材	ヒノキ	角材（追柾目）	07A	5G16j	106SX	65-2
W-72	楔	ヒノキ	柾目	07A	5G16i	106SX	60
W-73	角棒木っ端	クリ	角材	07A	5G16j	106SX	29-3
W-74	角棒木っ端	ヒノキ	角材（板目）	07A	5G16j	106SX	65-4
W-75	角棒木っ端	ヒノキ	角材	07A	5G16j	106SX	29-4
W-76	箸	ヒノキ	芯去削出	07A	5G16j	106SX	54
W-77	箸	ヒノキ	芯去削出	07A	5G16j	106SX	53
W-78	柄杓	側板・底板：ヒノキ	側板・底板：柾目	07A	-	東堀	18
W-79	曲物底板	ヒノキ	柾目	07A	5G16j	106SX	21
W-80	曲物側板	ヒノキ	柾目	07A	5G16j	106SX	66-2
W-81	曲物側板	ヒノキ	柾目	07A	5G16j	106SX	55
W-82	曲物側板	ヒノキ	柾目	07A	5G16j	106SX	66-1
W-83	板材	ヒノキ	板目	07A	-	東堀	74
W-84	板材	スギ	板目	07A	5G16j	106SX	64-3
W-85	板材	スギ	板目	07A	5G16j	106SX	64-4
W-86	板材	ヒノキ	板目	07A	5G16j	106SX	64-2
W-87	板材	ヒノキ	柾目	07A	-	東堀	115
W-88	杭	ツバキ属	丸木	07A	5G16j	東堀	96-1
W-89	杭	ヒサカキ	丸木	07A	-	東堀	75
W-90	三角部材	クリ	みかん割り	07A	5G16j	106SX	29-1
W-91	台	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	07A	-	東堀	26
W-92	角柱木っ端	マツ属複維管束亜属	角材	07A	5G16j	106SX	29-2
W-93	桶底板	ヒノキ	柾目	07A	-	東堀	62
W-94	桶底板	ヒノキ	板目	07A	-	東堀	27
W-95	建築部材	ヒノキ	板目	07A	-	東堀	33
W-96	杭	ナシ亜科	丸木	07A	-	119SD	95
W-97	杭	マツ属複維管束亜属	丸木	08A	-	143SE 最下層	139
W-98	柱	マツ属複維管束亜属	丸木	08A	6F1g	131SP	140
W-99	柱	コナラ属コナラ節	半割？	10	5F20a	543SP、 9曲輪	147
W-100	柱	クリ	丸木	09	5F20b	612SP、 9曲輪	146
W-101	柱	コナラ属クヌギ節	丸木	11	5F20b	620SP、 9曲輪	148
	ヒシャク	ヒノキ	柾目	07A	5G14h	106SX	20
	加工材	コナラ属コナラ節	柾目	07A	-	西堀切本 サンプル	67
	木杭	ナシ亜科	丸木	07A	5G16j	-	96-2
	板材	クリ	板目	07A	-	東堀	124
	板材	クリ	板目	07A	-	東堀	125

出土木製品の樹種同定結果（2）

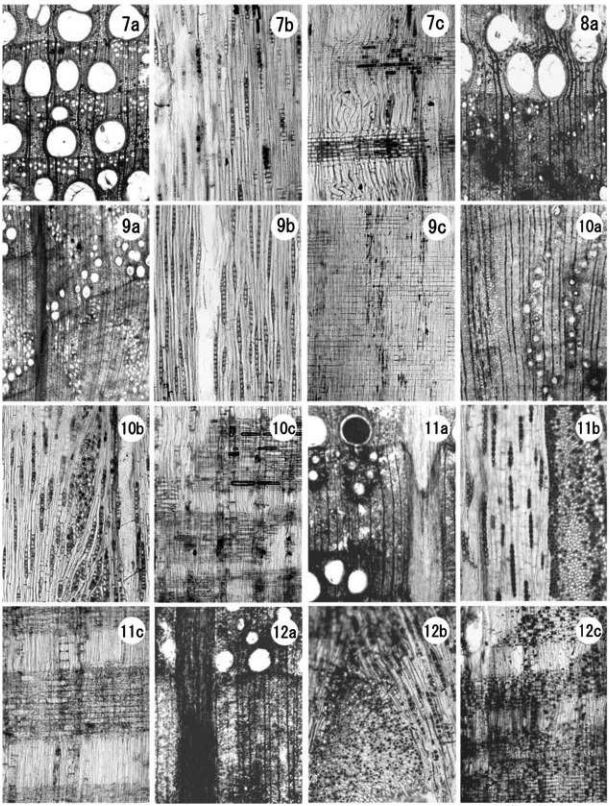


第 83 図　出土木製品の光学顕微鏡写真（1）

1a-1c. モミ属（№ 15）　2a-2c. マツ属複維管束亜属（№ 7）　3a-3c. スギ（№ 85）

4a-4c. ヒノキ（№ 35）　5c. ヒノキ（№ 62）　6a-6c. サワグルミ（№ 22）

a：横断面（スケール =500μm）、b：接線断面（スケール =200μm）、c：放射断面（スケール =1c-5c：50μm、6c：200μm）



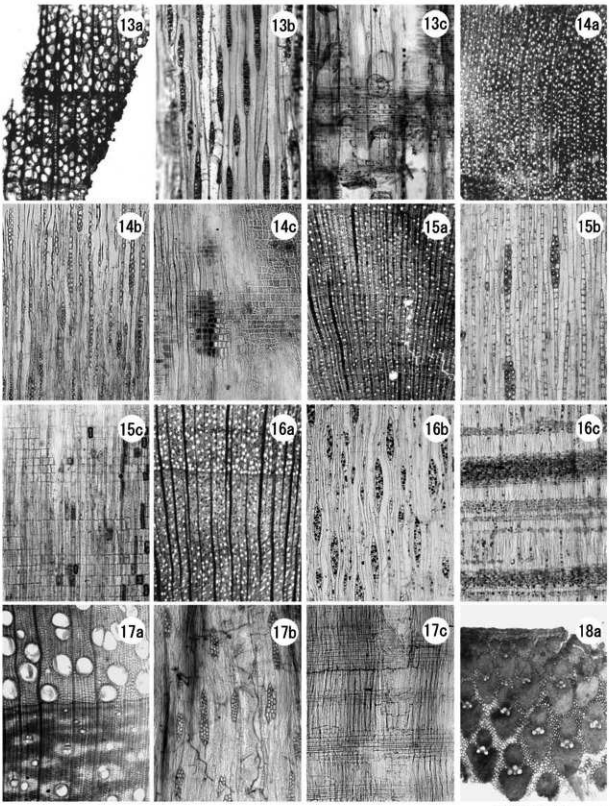
第 84 図　出土木製品の光学顕微鏡写真（2）

7a–7c. クリ（№ 21）　8a. クリ（№ 90）　9a–9c. ツブラジイ（№ 30）

10a–10c. コナラ属アカガシ亜属（№ 42）　11a–11c. コナラ属クヌギ節（№ 91）

12a–12c. コナラ属コナラ節（分写№ 67）

a: 横断面（スケール =500μm）、b: 接線断面（スケール =200μm）、c: 放射断面（スケール =200μm）



第85図　出土木製品の光学顕微鏡写真（3）

13a–13c．カツラ（№23）　14a–14c．ツバキ属（№88）　15a–15c．ヒサカキ（№89）

16a–16c．ナシ亜科（分写№96–2）　17a–17c．キリ（№51）　18a．タケ亜科（№38）

a：横断面（スケール＝500μm）、b：接線断面（スケール＝200μm）、c：放射断面（スケール＝200μm）

第 2 節　炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

桑下城跡は瀬戸市上品野町に所在する戦国時代の平山城である。ここでは、土坑や堀などから出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料について AMS 法による放射性炭素年代測定を行っている（第 5 節　放射性炭素年代測定参照）。

2. 試料と方法

試料は、07A 区の 088SE、004SX、071SX、106SX、東堀切、西堀切の各遺構、検出 I 、表土および 07B 区の 111SX から検出された炭化材 16 点である。なお、1 試料から複数の樹種が確認された場合、試料番号の後ろに補助番号を付けた。

最初に実体顕微鏡で試料の横断面を観察して大まかな分類群に分けるとともに、木取りの確認と径の計測を行った。その後、手もしくはカッターナイフを用いて 3 断面 (横断面・接線断面・放射断面) を採取した。直径 1cm の真鍮製試料台に試料を両面テープで固定し、銀ペーストを塗布して乾燥させた後、金蒸着して走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-5900LV 型）で樹種の同定と写真撮影を行った。径は直径もしくは半径を計測したが、破片や割材で芯のないものに関しては長軸と短軸の計測を行った。

No.	調査区	グリッド	遺構	樹種	木取り	径（mm）
1-1	2SKJ07A		088SE	ハギ属ヤマハギ節	丸木	直径 12
1-2	2SKJ07A		088SE	ガマズミ属	丸木	直径 7
2	2SKJ07A		004SX	アカガシ亜属	割材	18 × 8
3-1	2SKJ07A	5G18g	071SX	イヌシデ節	破片	4 × 4
3-2	2SKJ07A	5G18g	071SX	マツ属複維管束亜属	半截	直径 12
4-1	2SKJ07A	5G14h	106SX	コナラ節	ミカン割り・半截	半径 16
4-2	2SKJ07A	5G14h	106SX	モチノキ属	ミカン割り	半径 14
5	2SKJ07A	5G15i	106SX	コナラ節	半截	直径 25
6-1	2SKJ07A	5G16i	106SX	ガマズミ属	ミカン割り	直径 12
6-2	2SKJ07A	5G16i	106SX	イヌシデ節	割材	15 × 6
7	2SKJ07A	5G15i	106SX	コナラ節	ミカン割り	半径 22
8-1	2SKJ07A	5G13m	検出 I	サクラ属	破片	8 × 6
8-2	2SKJ07A	5G13m	検出 I	シラキ	破片	8 × 7
8-3	2SKJ07A	5G13m	検出 I	ナシ亜科	破片	6 × 5
8-4	2SKJ07A	5G13m	検出 I	イヌシデ節	破片	10 × 9
9	2SKJ07A	5G16g	検出 I	エゴノキ属	丸木	直径 35
10	2SKJ07A	5G18g	検出 I	ヒノキ科	ミカン割り	53 × 22
11-1	2SKJ07A	5G15j	東堀	シラキ	丸木	直径 25
11-2	2SKJ07A	5G15j	東堀	マツ属複維管束亜属	丸木	直径 24
12-1	2SKJ07A	5G16j	東堀	イヌシデ節	破片	17 × 6
12-2	2SKJ07A	5G16j	東堀	クリ	ミカン割り	半径 30
13	2SKJ07A	5G16f	西堀	アセビ	丸木	直径 33
14	2SKJ07A	5G18c	表土	ヒノキ科	割材	32 × 22
15-1	2SKJ07A	5G18i	表土	マツ属複維管束亜属	割材	26 × 26
15-2	2SKJ07A	5G18i	表土	クリ	割材	10 × 7
16	2SKJ07B	5H8d	111SX	マツ属複維管束亜属	破片	3 × 2

第 9 表　炭化材の樹種同定結果

3. 結果

26 試料を同定した結果、マツ科マツ属複維管束亜属、ヒノキ科ヒノキ属、カバノキ科クマシデ属イヌシデ節、ブナ科コナラ属コナラ節、アカガシ亜属、クリ、バラ科サクラ属、ナシ亜科、マメ科ハギ属ヤマハギ節、トウダイグサ科シラキ、モチノキ科モチノキ属、ツツジ科アセビ、エゴノキ科エゴノキ属、スイカズラ科ガマズミ属の計 14 分類群が確認された。樹種同定結果一覧は表 1 に示す。

以下に同定の根拠となった木材組織の特徴を示し、写真を第 86 図～第 88 図に示す。

(1) マツ属複維管束亜属　Pinus Subgen. Dploxylon　マツ科　第 86 図 1a-1c(No.3-2)

仮道管、垂直・水平樹脂道、放射柔組織、放射仮道管からなる針葉樹。早材から晩材への移行はやや急で晩材部は広く、大型の樹脂道が存在する。分野壁孔は窓状で、放射仮道管は内側へ向かって鋸歯状の突起がみられる。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、靱性は大である。建築・器具・楽器・土木・船などに利用される。

(2) ヒノキ科 Cupressaceae　第 86 図 2a-2c(No.14)

仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹であるが、材の腐朽により分野壁孔の形が確認できなかったため、これ以上の同定は困難であった。

(3) クマシデ属イヌシデ節　Carpinus sect. Eucarpinus　カバノキ科　第 86 図 3a-3c(No.12-1)

散孔材で、やや小型から中庸の道管が単独もしくは数個が放射方向に複合する。軸方向柔組織は晩材部で 1 列幅の接線状のものが確認できる。道管の側壁は対列壁孔、放射組織は 1 ～ 3 列の同性であり、また集合放射組織がみられる。穿孔は単一である。

クマシデ属イヌシデ節は本州・四国・九州・朝鮮などの低山地や人里近くに多く分布する落葉中高木である。イヌシデ節にはイヌシデ、クマシデ、アカシデがあり、いずれも炭材としてよく用いられる。

(4) コナラ属コナラ亜属コナラ節　Quercus subgen. Quercus sect. Prinus　ブナ科　第 86 図 4a-4c(No.4-1)

環孔材で、大型の道管が年輪界に沿って 1 ～ 3 列並ぶ。晩材部では薄壁で角ばった小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単一で、放射組織は同性、単列と広放射組織の 2 種類がある。

温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、材は建築・家具・器具・薪炭などに用いられる。

(5) アカガシ亜属　Cyclobalanopsis　ブナ科　第 86 図 5a-5c(No.2)

円形でやや大型の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材。柔細胞が接線方向に 1 ～ 3 細胞幅の独立柔組織をつくる。道管の壁孔は柵状で、穿孔は単一である。単列同性の放射組織と広放射組織がある。

アカガシ亜属は暖帯に生育する常緑高木である。材はきわめて堅硬・強靱で、水湿に強く、器具・船舶・車両・機械などに用いられる。

(6) クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　第 86 図・第 87 図 6a-6c(No.12-2)

環孔材で、大型の道管が年輪界に 2 ～ 3 列集まり、仮道管が道管の周りを厚く取り囲む。晩材部では小道管が火炎状に配列している。道管の穿孔は主に単一で、放射組織は単列同性である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木で、材は耐朽性・耐湿性に優れ、保存性が高い。建築・家具・器具・土木などに利用される。

(7) サクラ属　Prunus　バラ科　第 87 図 7a-7c(No.8-1)

散孔材でやや小型の道管が単独あるいは放射方向・斜線方向に複合する。道管に着色物質を含むこと

もあるが炭化材試料では確認できない。穿孔は単一で、放射組織は1～7細胞幅の異性である。

サクラ属は温帯に生育する落葉または常緑の高木または低木である。

(8) ナシ亜科　Maloideae　バラ科　第87図 8a-8c(No.8-3)

小径の道管がおおむね単独で均等に分布する散孔材で、柔細胞が短く線状に並ぶ。道管は単一である。柔細胞および放射組織中に大型の結晶が連なっているのが認められる。放射組織は異性で1～3細胞幅である。

ナシ亜科にはサンザシ属、ビワ属、カナメモチ属、ナナカマド属、リンゴ属など12の属が存在する。

(9) ハギ属ヤマハギ節　Lespedeza sect.Macrolespedeza マメ科　第87図 9a-9c(No.1-1)

半環孔材で、道管は材部で大きさをやや減じて数個複合する。軸方向柔細胞は周囲状から翼状、または成長輪界状に並ぶ。道管の穿孔は単一で、放射組織は2～4細胞幅程度で異性である。接線断面において軸方向柔細胞および低い放射組織が層界状構造である。

ハギ属ヤマハギ節は、主に温帯から暖帯に分布する落葉の低木から半低木で、日当たりの良い山地などに生育する。

(10) シラキ Sapium japonicum Pax et K. Hoffm　トウダイグサ科　第87図 10a-10c(No.8-2)

中型の道管が単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材。軸方向柔細胞は短接線状もしくは線状で、道管の穿孔は単一である。放射柔細胞はほぼ単列で、平伏細胞・方形細胞・直立細胞が混在する異性である。

シラキは温帯下部から暖帯に分布する落葉小高木で、日当たりの良い山腹に生育する。材はやや重硬であるが、切削加工は困難ではない。薪炭、小細工物、小器具材などに利用される。

(11) モチノキ属 Ilex　モチノキ科　第87図・第88図 11a-11c(No.4-2)

小型の道管が放射方向に数個複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は横棒の多い階段状で、道管要素にはらせん肥厚が明瞭である。道管相互壁は対列から階段状で、放射組織は多列で、ほぼ同性である。

モチノキ属は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木または低木である。日本には23種があるが、大きく常緑性のモチノキ亜属と落葉性のウメモドキ亜属に分けられる。

(12) アセビ　Pieris japonica D.Don　ツツジ科　第88図 12a-12c(No.13)

散孔材で、小型で角張った道管が接線方向もしくは斜線状に配列する。道管のらせん肥厚は明瞭で、穿孔は単一のものと階段状の2種類が存在する。放射組織は1～3列幅で異性である。

アセビは温帯から暖帯の山地に分布する常緑低木である。

(13) エゴノキ属　Styrax　エゴノキ科　第88図 13a-13c(No.9)

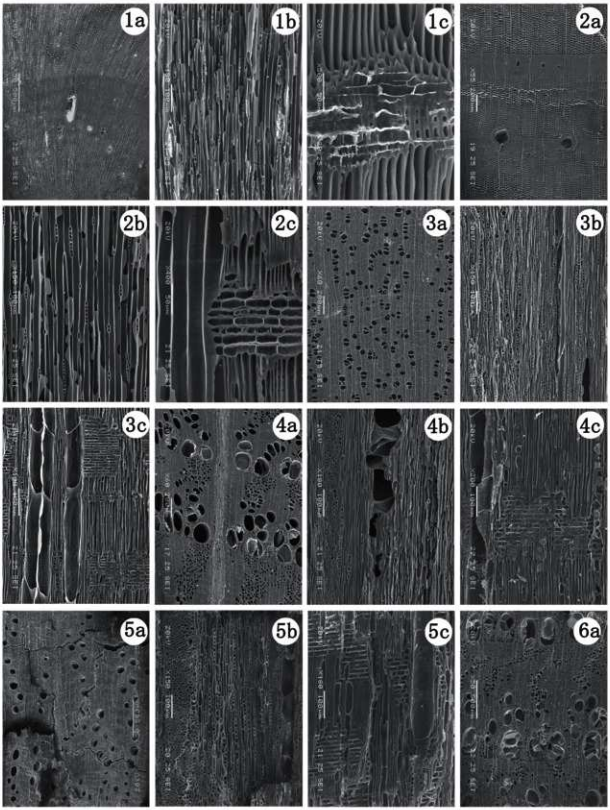
道管が放射方向に数個複合して散在する散孔材であるが、晩材部で道管が小型になり、数も減る。軸方向柔細胞は短接線状で、道管の穿孔は階段状である。放射組織は1～4列程で異性である。

エゴノキ属は暖帯から温帯に分布する落葉または常緑の高木あるいは低木で、山地に多く生育する。日本にはエゴノキ・ハクウンボク・コハクウンボクの3種がある。材はやや重硬・緻密で、器具材・燃料などに用いられる。

(14) ガマズミ属　Viburnum　スイカズラ科　第88図 14a-14c(No.6-1)

単独で小型の道管が散在する散孔材である。道管の穿孔は階段状で、横棒の数は多い。放射組織は1～4列幅で細胞高が高く、異性である。

ガマズミ属は温帯から熱帯に分布する落葉または常緑の高木または低木で、日本にはカンボク・オオカメノキ・ヤブデマリ・ガマズミなど16種ある。

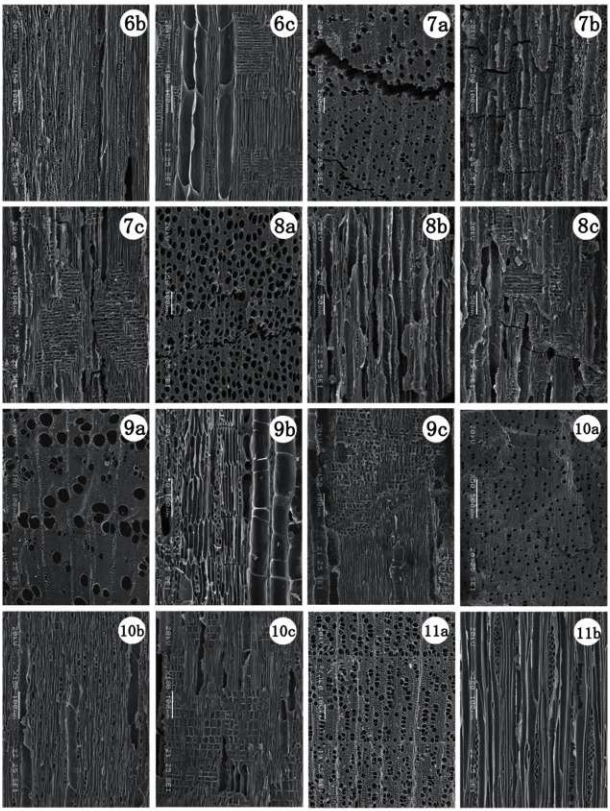


第 86 図　出土材の顕微鏡写真（a: 横断面 ,b: 接線断面 ,c: 放射断面）

1a-1c. マツ属複維管束亜属（№ 3-2）　　2a-2c. ヒノキ科（№ 14）

3a-3c. クマシデ属イヌシデ節（№ 12-1）　　4a-4c. コナラ属コナラ節（№ 4-1）

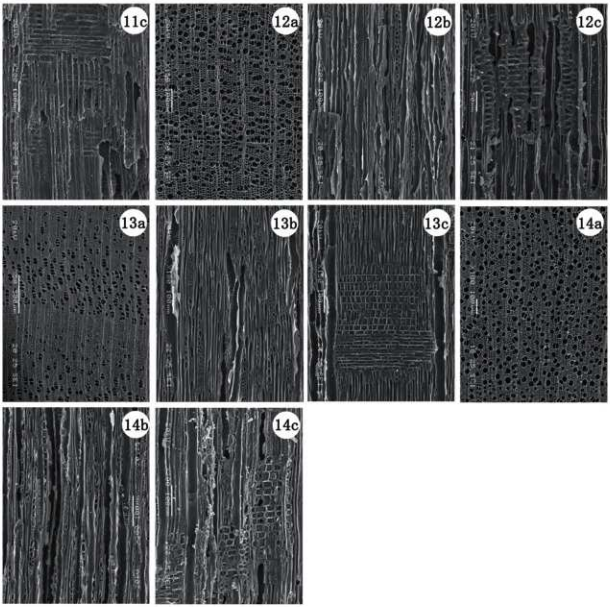
5a-5c. アカガシ亜属（№ 2）　　6a. クリ（№ 12-2）



第 87 図　出土材の顕微鏡写真（a: 横断面 ,b: 接線断面 ,c: 放射断面）

6b-6c. クリ（№ 12-2）　7a-7c. サクラ属 (№ 8-1)　8a-8c. ナシ亜科 (№ 8-3)

9a-9c. ヤマハギ節（№ 1-1）　10a-10c. シラキ（№ 8-2）　11a-11b. モチノキ属 (No.4-2)



第 88 図　出土材の顕微鏡写真（a: 横断面 ,b: 接線断面 ,c: 放射断面）

11c. モチノキ属 (No.4-2)　　12a-12c. アセビ (№. 13)

13a-13c. エゴノキ属 (№. 9)　　14a-c. ガマズミ属 (№. 6-1)

4. まとめ

木取りは丸木か割材もしくは破片であった。丸木はいずれも径が小さく ,小径木か枝材であると思われる。木取りや出土したグリッドおよび遺構別の樹種の傾向は特にみられなかった。針葉樹がマツ属複維管束亜属とヒノキ科がみられた他はすべて広葉樹であり、クマシデ属イヌシデ節、ブナ科類、サクラ属、ナシ亜科、シラキ、エゴノキ属などの中～高木類が多いが、ハギ属ヤマハギ節、アセビ、ガマズミ属などの潅木が数点みられた。これらはいずれも山地に多く生育するものである。材が炭化した経緯および用途は不明であるが、いずれも径が小さいことや潅木がみられることから、遺跡周辺の植生を反映していると推測される。

第 3 節　大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

1. はじめに

桑下城跡は瀬戸市上品野町に位置し、水野川と蟹川に挟まれた標高約 210m の丘陵上に立地する平山城である。ここでは、中世の本丸の北部分と本丸を囲む堀から得られた大型植物遺体を同定し、当時の植生について検討した。

第 10 表　出土大型植物遺体（括弧は破片を示す）

	地区	2SKJ07A									
	グリッド	5G14h		5G18j			6G16i	5G16g		5G18k	
	遺構	106SX						井戸石下竹樋周辺 118SE		東堀切 No.39	
	部位/No.	83	84	87	88	89	90	106	85	86	104
分類群	時期	中世									
クロマツ	球果	1		1				1			1
オニグルミ	核				(1)				(1)		
モモ	核					1					
フジ属	芽					(1)					
エゴノキ	核		4							2	
コウホネ属	種子		2			3					
昆虫			(2)								

2. 試料と方法

試料は、発掘調査中に目視で取り上げられた大型植物遺体 10 試料である。試料の内訳は、A 区 106SX（本丸北側の堀）出土の 7 試料、118SE（井戸石下竹樋周辺）出土の 2 試料、東堀切 No.39 出土の 1 試料である。試料の時期は中世で、106SX の時期は 16 世紀前半である。

大型植物遺体の同定は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

同定の結果、針葉樹のクロマツ球果 1 分類群と、広葉樹のオニグルミ核とモモ核、フジ属芽、エゴノキ核の 4 分類群、草本植物のコウホネ属種子 1 分類群の計 6 分類群が得られた（第 10 表）。大型植物遺体以外には、昆虫が得られたが、同定の対象外とした。

以下、得られた大型植物遺体を遺構別に記載する。

106SX（本丸北側の堀）：クロマツが 3 点と、オニグルミが破片 1 点、モモが 1 点、フジ属が破片 1 点、エゴノキが 4 点、コウホネ属が 5 点得られた。

118SE（井戸石下竹樋周辺）：オニグルミが破片 1 点とエゴノキが 2 点得られた。

東堀切 No.39：クロマツが 1 点得られた。

次に、大型植物遺体の記載を行い、第 89 図に写真を示して同定の根拠とする。

(1) クロマツ　Pinus thunbergii Parl.　球果　マツ科

茶褐色で、上面観は円形、側面観は狭卵形。種鱗はくさび形で、木質化しており、硬い。露出部は菱形状。図版に示した球果の大きさは、高さ 67.9mm、幅 37.1mm と高さ 63.6mm、幅 35.9mm、高さ 43.3mm、幅 19.5mm。

(2) オニグルミ　Juglans mandshurica Maxim. var. sieboldiana (Maxim.) Makino　核　クルミ科

いずれも半割で出土した。褐色で、側面観は広卵形。緻密で硬い。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。No.88 が長さ 29.9mm、幅 25.6mm、残存厚 13.1mm、No.85 が長さ 33.2mm、幅 25.5mm、残存厚 13.5mm。

(3) モモ　Amygdalus persica L.　核　バラ科

淡褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。片側側面に動物食痕の孔があく。長さ 25.6mm、幅 18.5mm、残存厚 15.8mm。

(4) フジ属　Wisteria sp.　芽　マメ科

黒褐色で鈍い光沢を持つ。長卵形で下端が膨らみ、縦方向の隆起 (筋) が発達する。長さ 6.9mm、幅 2.7mm。図版には示していない。

(5) エゴノキ　Styrax japonica Siebold et Zucc.　核　エゴノキ科

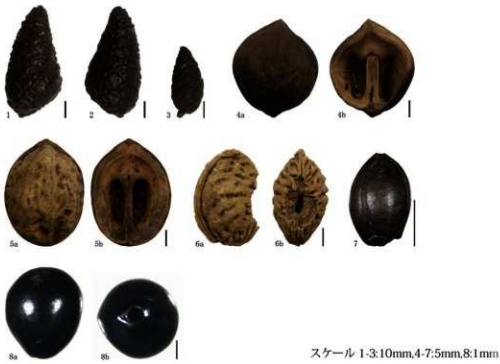
暗褐色で、上面観は円形、側面観は倒卵形になる。下端に大きな着点がある。頂部から 3 本の浅い溝が走る。表面には細かい網目模様があり、厚く硬い。長さ 9.2mm、幅 7.0mm。

(6) コウホネ属　Nuphar spp.　種子　スイレン科

黒褐色で、ゆがんだ倒卵形。一端に円形の着点がある。表面は平滑で光沢がある。長さ 5.0mm、幅 4.5mm。

4. 考察

中世の遺構から取り上げられた大型植物遺体を同定した結果、16 世紀後半の本丸北側の堀である



第 89 図　出土大型植物遺体

1. クロマツ球果 (No.104)、2. クロマツ球果 (No.87)、3. クロマツ球果 (No.83)、4. オニグルミ核 (No.88)、5. オニグルミ核 (No.85)、6. モモ核 (No.90)、7. エゴノキ核 (No.84)、8. コウホネ属種子 (No.84)

106SX からは栽培植物のモモ、野生植物のクロマツとオニグルミ、フジ属、エゴノキ、コウホネ属が得られた。井戸石下竹樋周辺 118SE からは、野生種のオニグルミとエゴノキが得られた。東堀切 No.39 からはクロマツが得られた。

各遺構から得られた種実は共通する分類群も多く、遺構周辺には針葉樹で高木のクロマツと、落葉樹で高木のオニグルミとエゴノキが生育していたと推定される。106SX からは抽水植物のコウホネ属が得られており、池のように水が溜まる場所があったと推定される。またコウホネ属は庭園の池で観賞用に栽培される場合がある。同様に、栽培植物であるモモや野生植物であるフジ属も観賞用として庭園に植栽される場合がある。

今回の試料は、発掘調査時に取り上げられた大型植物遺体のみであったが、残存状態が非常に良好であった。堆積物中に含まれると予想される微細な種実を検討すれば、当時のより詳細な景観が推定可能になると考えられる。

第 4 節　和鏡鈕孔内の紐の素材同定

小林和貴[1]・佐々木由香[2]・能城修一[3]・鈴木三男[1]
[1] 東北大学植物園・[2]（株）パレオ・ラボ・[3] 森林総合研究所

1. はじめに

愛知県瀬戸市上品野町に位置する桑下城跡から出土した和鏡の鈕孔内に残っていた紐の繊維素材の同定を行った。鏡は「菊花双鶴鏡」とよばれる白銅鏡で、本丸北東側の箱掘の埋土下部から突き刺さった状態で出土した。

2. 方法

出土紐の外形をデジタルマイクロスコープ（ハイロックス　KH-7700）で観察、撮影、計測した。資料の一部をカミソリで切り取り、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡（SEM）で観察した。光学顕微鏡観察は、以下の二つの方法で行った。

1）試料をほぐしてガムクロラール（アラビアゴム 40 g、抱水クロラール 50 g、グリセリン 20ml、蒸留水 50ml）で封入して永久プレパラートにし、繊維側面の観察と繊維幅の計測を行った。

2）試料をアセトン系列で脱水した後にエポキシ樹脂（Agar Low Viscosity Resin）に包埋し、回転式ミクロトーム（Microm　HM350）で切片（厚さ 10-20μm）を作製した。切片をトルイジンブルー染色した後に PARA mount-N で封入して永久プレパラートにし、繊維断面の観察を行った。

SEM 観察に際しては、切り取った試料をデシケーター内で乾燥させた後にイオンスパッタ（日立 E-1030）を用いて白金パラジウム（Pt-Pd）でコーティングし、東北大学大学院生命科学研究科に設置されている SEM（日本電子　JSM-5800LV）を用いて観察と撮影を行った。

なお、この素材を同定するにあたり、絹と、綿（実から直接取ったもの）、アサの茎、市販の麻紐、市販のアサの靭皮繊維、市販のジュート紐、カラムシの茎、市販のカラムシ紐、アカソの茎、市販のアカソ紐、イラクサ、コウゾ、シナノキなどの靭皮繊維についても同様に SEM 観察と光学顕微鏡観察（第 91 図）を行った。作製したプレパラートは、AIC-51 の番号を付して東北大学植物園に保管されている。

3. 結果および考察

和鏡鈕孔内に残っていた紐は、残存長 8.7mm、直径 1.9mm で、緩く右撚りされている（第 90 図 1-1a-b）。白色の細長い繊維からなり、遺物切片を見る限りほとんどの繊維が単独で撚られており、束状に集合したものは見られない。繊維断面は丸みを帯びた多角形～楕円形をしており、厚壁の細胞壁を持ち、細胞内腔は認められるが扁平で線状に見えるものが多い（第 90 図 1-2）。繊維幅は 6.4 ～ 27.2㎛（平均 16.8㎛）である。繊維表面には、一本の繊維でも平滑な部位と多数の筋状の形態が認められ、部分的に節がみられる（第 90 図 1-3a-b, 4a-c）。本来は平滑な表面を持つ繊維が、紐の作製や遺物化の過程で変形および劣化した可能性が考えられる。

以上の観察結果から、出土した紐の素材は、絹や獣毛などの動物繊維ではなく、植物繊維である。断面の形状や、繊維自体に撚りが見られない点から綿ではない。これまでに報告されている鏡の紐素材には、アサ（徳王遺跡，弥生時代後期後半；正倉院宝物，奈良時代）や、カラムシ（那珂八幡古墳，古墳時代前期初頭；正倉院宝物，奈良時代）、コウゾまたはカジノキ（石原亀甲遺跡，弥生時代後期後半；汐井掛 186 号木棺，弥生時代後期後半；神蔵古墳，古墳時代前期後葉）などがある（布目，1988；佐藤ほか，1994）。これらの現生資料とも比較検討を行ったが（図版 2-5a-b, 6a-b, 7a-b）、いずれの可能性も考えられ、同定はできなかった。

4. おわりに

和鏡の鈕孔内に残っていた紐の繊維素材の同定を行った結果、絹などの動物繊維や綿ではない植物繊維であることが明らかになったが、劣化および変形しており植物の同定はできなかった。

謝辞

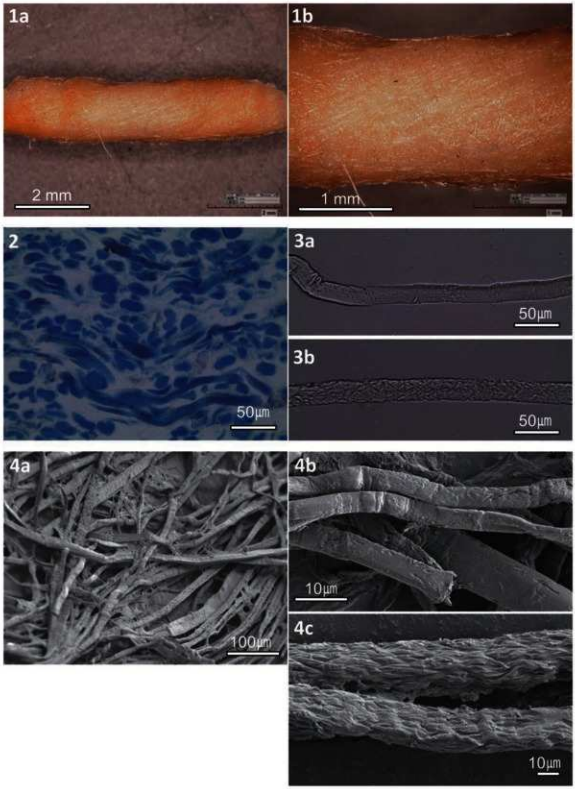
試料採取にあたり、愛知県埋蔵文化財センター樋上昇氏にご協力いただいた。また、国立歴史民俗博物館永嶋正春教授と東北大学植物園小川とみ氏には、現生資料をご提供いただいた。記して感謝申し上げる。なお、本稿は平成 21-24 年度科学研究費補助金基盤研究（A）「東アジアの新石器時代遺跡出土編組製品等素材の考古植物学研究拠点の形成と展開」（代表 鈴木三男）の研究成果の一部である。

引用文献

愛知県埋蔵文化財センター（2008）桑下城跡．愛知県埋蔵文化財センター年報．平成 19 年度，30-37．

布目順郎（1988）絹と布の考古学．367p，雄山閣．

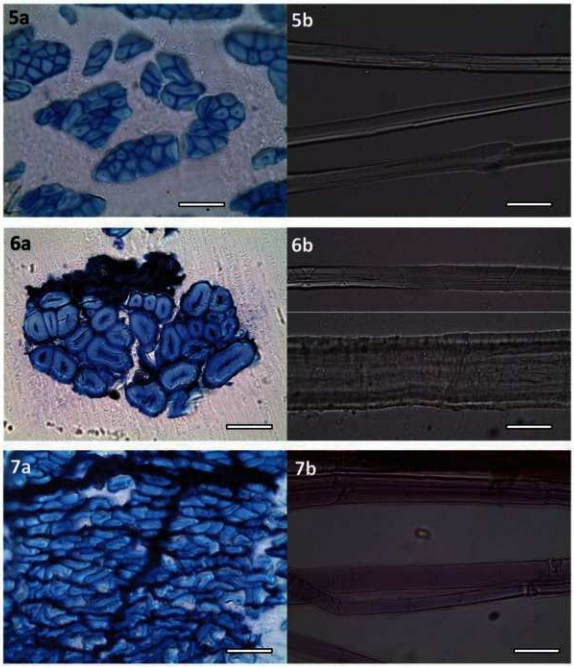
佐藤昌憲・小西　孝・川口　浩・切畑　健・橋本甫之（1994）正倉院の繊維材質調査報告．正倉院紀要，16，1-26．



第 90 図　和鏡鈕孔内に残っていた紐

1a-1b：紐の全体像 (a) と一部拡大像 (b)．2：紐の横断面（トルイジンブルー染色）．

3a-3b：紐素材繊維の光学顕微鏡による側面観．4a-4c：紐素材繊維の走査型電子顕微鏡像．



第 91 図　現生植物繊維の光学顕微鏡像

5a-5b：アサ靭皮繊維の断面 (a) と側面 (b)．6a-6b：カラムシ靭皮繊維の断面 (a) と側面 (b)．7a-7b：コウゾ靭皮繊維の断面 (a) と側面 (b，サフラニン染色)．(スケール＝ 50 μm)

第５節　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani

1. はじめに

愛知県瀬戸市に位置する桑下城跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第 11 表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

なお、暦年較正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

ウィグルマッチング法

試料の年代を得る上での問題は ^{14}C 年代値から暦年較正を行う際に較正曲線に凹凸があるため単一の測定値から高精度の年代を決定するのが難しいという点である。ウィグルマッチング法では複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと、較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって高精度で信頼性のある年代値を求めることができる。

測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1 年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の ^{14}C 年代値から暦年較正を行い、得られた確率分布を年輪幅だけずらしてすべてを足し合わせることにより最外年輪の確率分布を算出する。この確率分布より年代範囲を求める。

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行い、PLD-12923 ～ 12934 を用いてウイグルマッチング法により最外試料の暦年代を求めた。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎 . 日本先史時代の ^{14}C 年代 , 3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-12923	調査区：2SKJ07A 試料 No.4 グリッド：5G14h その他： 遺構：1065X 080116	試料の種類：炭化材 (モチノキ属) 状態：dry 試料の性状：最外年輪 -5 年目 ウィグルマッチング	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N) 処理時の知見 :900℃ 4h 燃焼
PLD-12924	調査区：2SKJ07A 試料 No.4 グリッド：5G14h その他： 遺構：1065X 080116	試料の種類：炭化材 (モチノキ属) 状態：dry 試料の性状：11-15 年目 ウィグルマッチング	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N) 処理時の知見 :900℃ 4h 燃焼
PLD-12925	調査区：2SKJ07A 試料 No.5 グリッド：5G15i その他： 遺構：1065X 080122	試料の種類：炭化材 (コナラ節) 状態：dry 試料の性状：最外年輪 -5 年目 ウィグルマッチング	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N) 処理時の知見 :900℃ 4h 燃焼
PLD-12926	調査区：2SKJ07A 試料 No.5 グリッド：5G15i その他： 遺構：1065X 080122	試料の種類：炭化材 (コナラ節) 状態：dry 試料の性状：11-15 年目 ウィグルマッチング	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N) 処理時の知見 :900℃ 4h 燃焼
PLD-12927	調査区：2SKJ07A 試料 No.6 グリッド：5G16i その他： 遺構：1065X 080125	試料の種類：炭化材 (ガマズミ属) 状態：dry 試料の性状：最外年輪 -5 年目 ウィグルマッチング	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N) 処理時の知見 :900℃ 4h 燃焼
PLD-12928	調査区：2SKJ07A 試料 No.6 グリッド：5G16i その他： 遺構：1065X 080125	試料の種類：炭化材 (ガマズミ属) 状態：dry 試料の性状：11-15 年目 ウィグルマッチング	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N) 処理時の知見 :900℃ 4h 燃焼
PLD-12929	調査区：2SKJ07A 試料 No.6 グリッド：5G16i その他： 遺構：1065X 080125	試料の種類：炭化材 (ガマズミ属) 状態：dry 試料の性状：21-25 年目 ウィグルマッチング	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N) 処理時の知見 :900℃ 4h 燃焼
PLD-12930	調査区：2SKJ07A 試料 No.7 グリッド：5G15i その他： 遺構：1065X 080130	試料の種類：炭化材 (コナラ節) 状態：dry 試料の性状：最外年輪 -5 年目 ウィグルマッチング	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N) 処理時の知見 :900℃ 4h 燃焼
PLD-12931	調査区：2SKJ07A 試料 No.7 グリッド：5G15i その他： 遺構：1065X 080130	試料の種類：炭化材 (コナラ節) 状態：dry 試料の性状：11-15 年目 ウィグルマッチング	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N) 処理時の知見 :900℃ 4h 燃焼
PLD-12932	調査区：2SKJ07A 試料 No.7 グリッド：5G15i その他： 遺構：1065X 080130	試料の種類：炭化材 (コナラ節) 状態：dry 試料の性状：21-22 年目 ウィグルマッチング	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N) 処理時の知見 :900℃ 4h 燃焼
PLD-12933	調査区：2SKJ07A 試料 No.9 グリッド：5G16g その他： 遺構：検出 1 080219	試料の種類：炭化材 (エゴノキ属) 状態：dry 試料の性状：最外年輪 -5 年目 ウィグルマッチング	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N) 処理時の知見 :900℃ 4h 燃焼
PLD-12934	調査区：2SKJ07A 試料 No.9 グリッド：5G16g その他： 遺構：検出 1 080219	試料の種類：炭化材 (エゴノキ属) 状態：dry 試料の性状：6-10 年目 ウィグルマッチング	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N) 処理時の知見 :900℃ 4h 燃焼

第 11 表　測定試料および処理

第 12 表　試料 No.4 の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-12923 試料 No.：4	-25.83 ± 0.14	334 ± 19	335 ± 20	1497AD(18.1%)1527AD　1616AD(13.1%)1633AD 1555AD(37.0%)1602AD	1482AD(95.4%)1639AD
PLD-12924 試料 No.：4	-25.55 ± 0.13	359 ± 19	360 ± 20	1470AD(43.9%)1520AD　1593AD(24.3%)1619AD	1457AD(51.4%)1525AD　1558AD(44.0%)1632AD
		最外試料年代		1492AD(38.4%)1528AD　1611AD(23.7%)1631AD 1585AD(6.1%)1593AD	1480AD(45.4%)1533AD　1569AD(50.0%)1637AD

第 13 表　試料 No.5 の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-12925 試料 No.：5	-24.98 ± 0.18	311 ± 19	310 ± 20	1522AD(53.4%)1574AD　1626AD(14.8%)1642AD	1496AD(2.0%)1505AD　1616AD(21.7%)1646AD 1512AD(71.7%)1602AD
PLD-12926 試料 No.：5	-24.91 ± 0.13	319 ± 19	320 ± 20	1522AD(55.3%)1591AD　1620AD(12.9%)1636AD	1493AD(75.8%)1603AD　1615AD(19.6%)1644AD
		最外試料年代		1528AD(55.8%)1575AD　1631AD(12.4%)1642AD	1521AD(77.7%)1602AD　1625AD(17.7%)1646AD

第 14 表　試料 No.6 の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

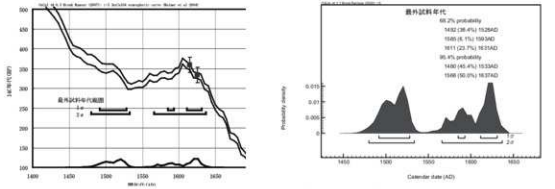
測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-12927 試料 No.：6	-26.51 ± 0.17	330 ± 19	330 ± 20	1512AD(11.7%)1529AD　1617AD(13.4%)1634AD 1544AD(43.0%)1601AD	1488AD(76.2%)1604AD　1609AD(19.2%)1640AD
PLD-12928 試料 No.：6	-27.70 ± 0.16	322 ± 19	320 ± 20	1520AD(8.7%)1530AD　1619AD(12.9%)1635AD 1538AD(46.6%)1593AD	1492AD(76.3%)1603AD　1615AD(19.1%)1643AD
PLD-12929 試料 No.：6	-27.14 ± 0.14	345 ± 18	345 ± 20	1490AD(27.8%)1522AD　1609AD(15.7%)1629AD 1573AD(24.8%)1603AD	1469AD(98.1%)1529AD　1543AD(57.3%)1635AD
		最外試料年代		1521AD(19.9%)1543AD　1627AD(12.6%)1639AD 1574AD(33.6%)1603AD	1504AD(31.1%)1549AD　1557AD(64.3%)1643AD

第 15 表　試料 No.7 の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

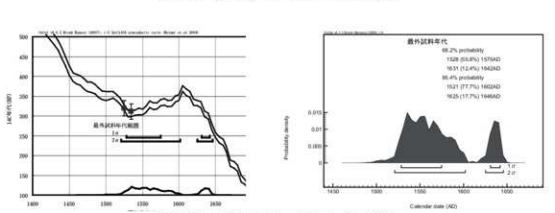
測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-12930 試料 No.：7	-27.33 ± 0.24	310 ± 20	310 ± 20	1522AD(51.9%)1574AD　1626AD(14.6%)1642AD 1585AD(1.7%)1587AD	1496AD(2.2%)1506AD　1616AD(22.0%)1646AD 1512AD(71.2%)1602AD
PLD-12931 試料 No.：7	-28.11 ± 0.15	308 ± 19	310 ± 20	1523AD(53.6%)1573AD　1628AD(14.6%)1643AD	1513AD(72.4%)1601AD　1616AD(23.0%)1647AD
PLD-12932 試料 No.：7	-26.53 ± 0.28	307 ± 20	305 ± 20	1522AD(53.0%)1574AD　1628AD(15.2%)1643AD	1498AD(0.9%)1503AD　1616AD(23.2%)1648AD 1512AD(71.2%)1601AD
		最外試料年代		1540AD(68.2%)1575AD	1532AD(90.5%)1595AD　1638AD(4.9%)1646AD

第 16 表 試料 No.9 の放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果

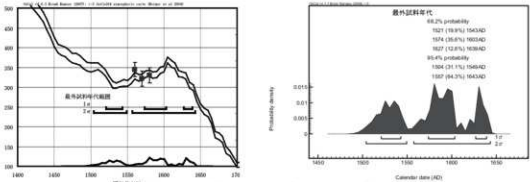
測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-12933 試料 No.：9	-25.31 ± 0.13	328 ± 20	330 ± 20	1514AD(10.8%)1529AD　1617AD(13.2%)1634AD 1543AD(41.2%)1600AD	1490AD(76.1%)1603AD　1610AD(19.3%)1641AD
PLD-12934 試料 No.：9	-27.34 ± 0.15	362 ± 20	360 ± 20	1468AD(45.0%)1519AD　1594AD(23.2%)1619AD	1454AD(54.2%)1524AD　1558AD(41.2%)1632AD
		最外試料年代		1491AD(36.1%)1527AD　1597AD(3.7%)1602AD 1580AD(7.9%)1590AD　1611AD(20.6%)1630AD	1477AD(42.5%)1530AD　1569AD(52.9%)1637AD



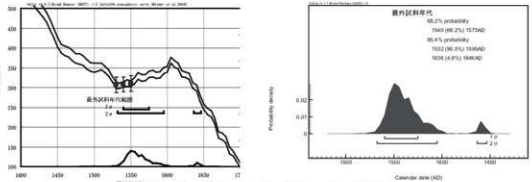
第 92 図　試料 No.4：ウィグルマッチング結果



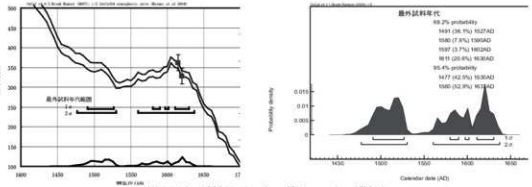
第 93 図　試料 No.5：ウィグルマッチング結果



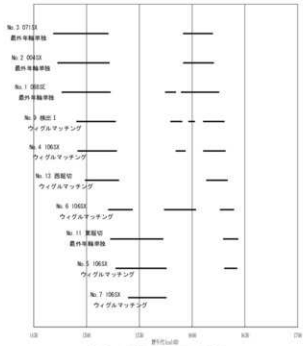
第 94 図　試料 No.6：ウィグルマッチング結果



第 95 図　試料 No.7：ウィグルマッチング結果



第 96 図　試料 No.9：ウィグルマッチング結果



参考　暦年較正結果の比較

第 6 節　土器付着物および漆器塗膜の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
藤根　久・伊藤　茂・尾嵜大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani

1. はじめに

桑下城跡は、瀬戸市上品野町に所在する戦国時代の城跡である。ここでは、桑下城跡から出土した釜等の土器付着物および漆器塗膜について加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料は、各土器の付着物についてはメス等を用いて必要量を採取した。また、漆器塗膜については、採取後、木胎部分を削り取った。各試料は、調製した後（第 17 表）、加速器質量分析計（コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第 17 表　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ [ ] 遺物No	試料データ	前処理
PLD-13016	調査区：07A 遺構：004SX(5G19g) 試料 No. 仮 675 [537]	試料の種類：土器付着物 器種：内耳鍋 部位：外面胴部？	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :0.1N, 塩酸 :1.2N)
PLD-13017	調査区：07A 遺構：071SX(5G18g) 試料 No. 仮 701 [608]	試料の種類：土器付着物 器種：鍋 部位：外面胴下部	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N)
PLD-13018	調査区：07A 遺構：106SX 試料 No.22(7)	試料の種類：漆器塗膜（赤色） 器種：漆器椀 部位：内面	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N) 処理時の知見 :900℃ 5h 焼
PLD-13019	調査区：07A 遺構：071SX(5G18g) 試料 No. 仮 706 [580]	試料の種類：土器付着物（スス状） 器種：匣鉢 部位：外面口縁部	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :0.1N, 塩酸 :1.2N)
PLD-13020	調査区：07A 遺構：071SX(5G18g) 試料 No. 仮 711 [607]	試料の種類：土器付着物 器種：鍋 部位：外面胴下部	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N)
PLD-13021	調査区：07A 遺構：106SX(5G14k) 試料 No. 仮 731 [773]	試料の種類：土器付着物（スス状） 器種：内耳鍋 部位：外面胴部	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :0.1N, 塩酸 :1.2N)
PLD-13022	調査区：07A 遺構：106SX 試料 No. 仮 732 [780]	試料の種類：土器付着物 器種：内耳鍋 部位：外面胴部	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N)
PLD-13023	調査区：07A 遺構：106SXA 試料 No. 仮 733 [779]	試料の種類：土器付着物 器種：内耳鍋 部位：外面胴中～下部	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N)
PLD-13024	調査区：07A 遺構：不明 試料 No.126(4)	試料の種類：漆器塗膜（黒色） 器種：漆器椀 部位：外面	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N) 処理時の知見 :900℃ 5h 焼

3. 結果

第 18 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第 98 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

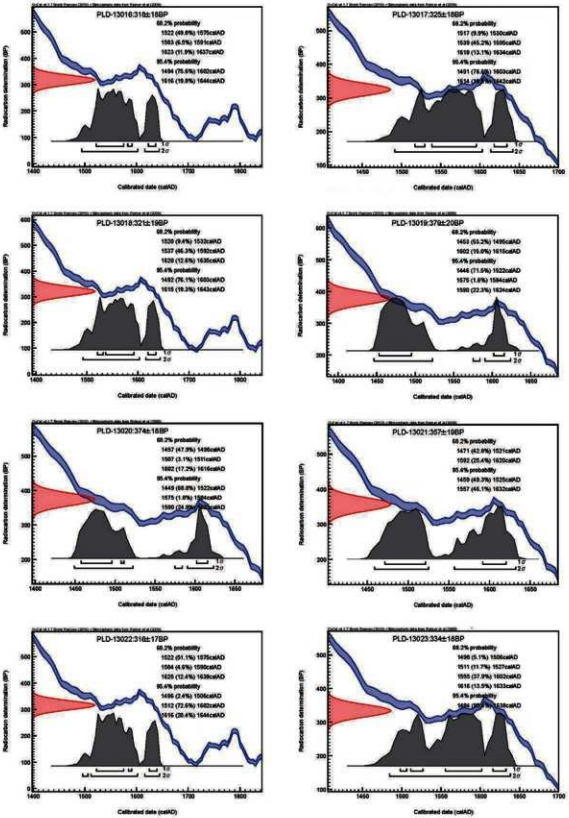
^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第 18 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-13016 試料 No. 仮 675	-26.89 ± 0.11	318 ± 18	320 ± 20	1522AD(49.8%)1575AD 1583AD(6.5%)1591AD 1623AD(11.9%)1637AD	1494AD(75.6%)1602AD 1616AD(19.8%)1644AD
PLD-13017 試料 No. 仮 701	-27.09 ± 0.10	325 ± 18	325 ± 20	1517AD(9.9%)1530AD 1539AD(45.2%)1595AD 1618AD(13.1%)1634AD	1491AD(76.6%)1603AD 1614AD(18.8%)1642AD
PLD-13018 試料 No.22(7)	-28.67 ± 0.14	321 ± 19	320 ± 20	1520AD(9.4%)1532AD 1537AD(46.3%)1592AD 1620AD(12.6%)1635AD	1492AD(76.1%)1603AD 1615AD(19.3%)1643AD
PLD-13019 試料 No. 仮 706	-27.14 ± 0.24	379 ± 20	380 ± 20	1453AD(53.2%)1495AD 1602AD(15.0%)1615AD	1446AD(71.5%)1522AD 1575AD(1.6%)1584AD 1590AD(22.3%)1624AD
PLD-13020 試料 No. 仮 711	-26.52 ± 0.13	374 ± 18	375 ± 20	1457AD(47.9%)1496AD 1507AD(3.1%)1511AD 1602AD(17.2%)1616AD	1449AD(68.8%)1522AD 1575AD(1.8%)1584AD 1590AD(24.8%)1623AD
PLD-13021 試料 No. 仮 731	-26.59 ± 0.11	357 ± 19	355 ± 20	1471AD(42.8%)1521AD 1592AD(25.4%)1620AD	1459AD(49.3%)1525AD 1557AD(46.1%)1632AD
PLD-13022 試料 No. 仮 732	-26.71 ± 0.14	316 ± 17	315 ± 15	1522AD(51.1%)1575AD 1584AD(4.6%)1590AD 1625AD(12.4%)1639AD	1496AD(2.4%)1506AD 1512AD(72.6%)1602AD 1616AD(20.4%)1644AD
PLD-13023 試料 No. 仮 733	-28.79 ± 0.18	334 ± 18	335 ± 20	1498AD(5.1%)1506AD 1511AD(11.7%)1527AD 1555AD(37.9%)1602AD 1616AD(13.5%)1633AD	1484AD(95.4%)1638AD
PLD-13024 試料 No.126(4)	-29.97 ± 0.14	334 ± 19	335 ± 20	1497AD(18.1%)1527AD 1555AD(37.0%)1602AD 1616AD(13.1%)1633AD	1482AD(95.4%)1639AD



第 97 図　各土器付着物および漆器塗膜の暦年較正図

4. 考察

各試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。

いずれの試料も戦国時代（16 世紀）の遺物であるが、年代範囲の古い順に並べて示した（第 97 図）。

その結果を見ると、対象とした土器付着物および漆器塗膜の放射性炭素年代測定結果は、大きく 4 パターンの確率分布に区分される。

最も古い年代範囲を示したのは、071SX(5G18g) から出土したから出土した皿鉢 (No. 仮 706) の口縁部外面付着物 (PLD-13019) で、2 σ 暦年代範囲において 1446-1522 cal AD(71.5%)、1575-1584 cal AD(1.6%)、1590-1624 cal AD(22.3%) であり、15 世紀中頃～ 16 世紀前半、16 世紀後半、16 世紀末～ 17 世紀前半の年代範囲を示した。

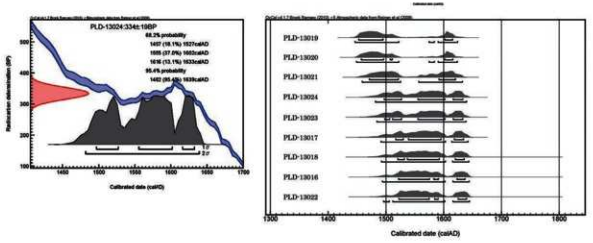
一方、新しい年代範囲を示したのは、106SX から出土した内耳鍋 (No. 仮 732) の胴部外面付着物 (PLD-13022) で、2 σ 暦年代範囲において 1496-1506 cal AD(2.4%)、1512-1602 cal AD(72.6%)、1616-1644 cal AD(20.4%) であり、15 世紀末～ 16 世紀初頭、16 世紀前半～ 17 世紀初頭、17 世紀前半～中頃の年代範囲の確率を示した。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎 . 日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会 .

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150. 原稿



第 98 図　漆器椀 (試料 No.126(4)) の塗膜の暦年較正図とマルチプロット図

第７節　皿付着物について

堀木真美子

1. はじめに

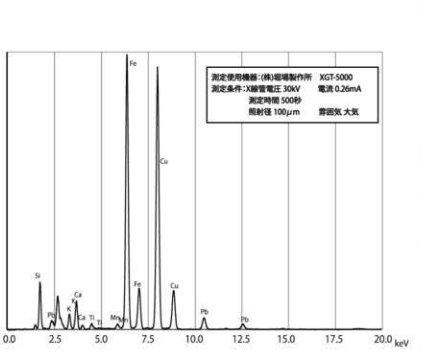
瀬戸市上品野町に位置する桑下城より、茶褐色の物質が付着した陶器片が出土した。この陶器片に付着する茶褐色の物質について、蛍光Ｘ線分析装置を用いて化学組成の分析を行った。

2. 分析資料と測定条件

分析資料は、桑下城跡より出土した皿片２点004SX-20（520）、004SX（530）と、岡崎市滝町古窯より出土した黒色物質の付着する陶器片（563）１点の、合計３点である。各試料毎に異なる３カ所に測定点を設定し、定性分析を行った。次いで、主な元素について、元素マッピングを行った。分析装置は（株）堀場作所製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置 XGT-5000XII を用いた。定量分析はスダンダードレスによるファンダメンタルパラメータ法によって行い、酸化物の合計が100％になるように規格化した。測定条件は、励起電圧：30kV、計測時間：500s、Ｘ線管球：Rh、測定雰囲気：大気中、Ｘ線照射径：100 μ m である。マッピングの回数は３回。

3. 分析結果

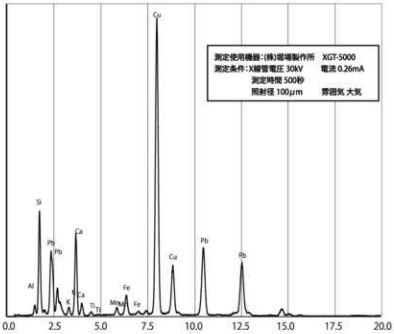
検出された元素は、Si(ケイ素)、Mg（マグネシウム）、Al（アルミニウム）、P（リン）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ba（バリウム）,Ti（チタン）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Cu（銅）、Pb（鉛）である。また銅と鉛などの元素マッピングの結果を、第 99 図～ 101 図に示す。



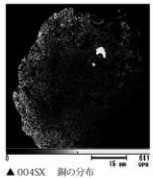
第 99 図　004SX-20　スペクトル図と元素分布

4. まとめ

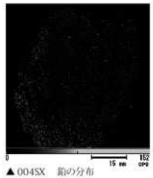
分析結果より、桑下城跡　004SX-20（520）に付着する茶褐色の物質では、主に銅と鉛、鉄が検出された。また004SX（530）でも銅と鉛が主に検出された。滝町古窯の試料では、銅や鉛が検出されず、主にマンガンとカルシウムが検出された。これらのことから、桑下城跡の試料に付着する物質は、銅や鉛の溶融した物であると推測される。



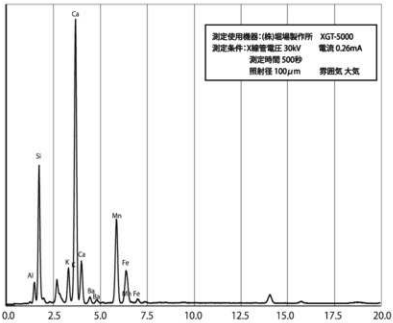
第 100 図　004SX　スペクトル図と元素分布



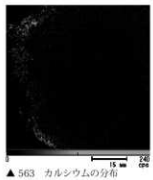
▲ 004SX　銅の分布



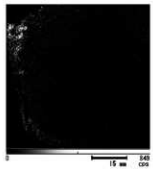
▲ 004SX　鉛の分布



第 101 図　滝町古窯　563　スペクトル図と元素分布



▲ 563　カルシウムの分布



▲ 563　マンガンの分布

第 8 節　金属製品について

堀木真美子

1. はじめに

瀬戸市上品野町に位置する桑下城からは多数の金属製品が出土している。これらのうち鏡などの特殊な金属製品について、蛍光 X 線を用いた非破壊での成分分析を行った。

2. 分析資料と測定条件

分析資料は、桑下城跡より出土した金属製品 6 点（001,051,115,135,184,185）である（第 19 表）。これらの金属製品の表面より、色調や部位を考慮しながら複数の測定点を設定し、定性分析を行った。

分析装置は（株）堀場作所製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 XGT-5000XII を用いた。測定条件は、001 和鏡と 051 鍬形では、励起電圧：30kV、計測時間：500s、X 線管球：Rh、測定雰囲気：大気中、X 線照射径：100 μ m である。その他の試料は、励起電圧：50kV、計測時間：500s、X 線管球：Rh、測定雰囲気：大気中、X 線照射径：100 μ m である。

第 19 表　分析試料一覧

No.	M	
001	1	和鏡　鏡面
051	8	鍬形台　表面
115	5	小刀　緑色部分 / 茶色部分 / 刃部分
135	6	箙　塗膜部分 / 地金部分
184	3	小刀　黒色部分 / 褐色部分
185	7	飾り金具　金色部分 / 緑色部分 / 灰色部分

3. 分析結果

検出された元素は、Al（アルミニウム）、Si（ケイ素）、P（リン）、S（硫黄）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Cr（クロム）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、Ni（ニッケル）、Cu（銅）、As（ヒ素）、Rb（ルビジウム）、Ag（銀）、Sn（錫）、Au（金）、Hg（水銀）、Pb（鉛）である（第 20 表）。各測定点につき 1 点のスペクトル図を示す。また、合金の種類を特定するために、スタンダードレスにおける FP 法で定量分析を行った（第 102 ～ 107 図）。

第 20 表　分析結果

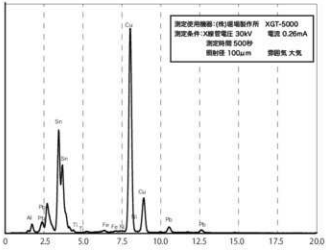
No.	測定箇所															
001	和鏡　鏡面	Al,				Ti,		Fe,	Ni,	Cu,			Sn,		Pb
051-05	鍬形台　表面	Al,	Si,	P,	K,			Fe,		Cu,	As,				Pb
051-06	鍬形台　表面	Al,	Si,	P,	K,			Fe,		Cu,	As,	Ag,			Pb
115-2	小刀　緑色部分	Al,	Si,					Fe,		Cu,	As				
115-6	小刀　茶色部分	Al,	Si,	P,		Ca,		Fe,		Cu,				Au,	Pb
115-8	小刀　刃部分	Al,	Si,	P,	K,	Ca,	Ti,	Fe,		Cu,		Rb,			
135-A1	箙　塗膜部分	Al,	Si,			Ca,	Ti,	Fe,		Cu,	As,			Au,	Hg
135-A5	箙　地金部分		Si,				Cr,	Fe,		Cu,					Pb
184-2	小刀　黒色部分	Al,	Si,		K,	Ti		Fe,		Cu,	As,				Pb
184-5	小刀　褐色部分	Al,	Si,	S,	K,	Ti,	Cr,	Mn,	Fe,	Cu,	As,				Pb
185-1	飾り金具　金色部分		Si,					Fe,		Cu,		Rb,		Au,	Hg
185-3	飾り金具　緑色部分	Al,	Si,	P,	S,	Ca,	Ti,	Fe,		Cu,					Hg
185-5	飾り金具　灰色部分	Al,	Si,	P,	K,	Ca,	Ti,	Fe,		Cu,		Rb,		Au	

第 21 表　定量分析結果

No.	測定箇所	Al	Si	P	S	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	Ni	Cu	As	Rb	Ag	Sn	Au	Hg	Pb
001	和鏡	2.7	-	-	-	-	-	0.1	-	-	0.2	0.1	24.5	-	-	-	69.0	-	-	3.5
051-05	鍬形台	9.7	23.8	1.3	-	0.3	-	-	-	-	0.3	-	9.2	2.4	-	-	-	-	-	0.2
051-06	鍬形台	17.7	19.9	2.1	-	0.0	-	-	-	-	0.5	-	49.0	2.5	-	8.1	-	-	-	0.2
115-2	小刀　緑色	1.5	2.1	-	-	-	-	-	-	-	0.5	-	85.6	0.3	-	-	-	-	-	-
115-6	小刀　茶色	1.6	3.3	4.2	-	-	0.1	-	-	-	7.6	-	80.5	-	-	-	-	0.8	-	2.1
115-8	小刀　刃部	1.6	8.5	0.9	-	0.3	0.3	0.1	-	-	78.8	-	9.7	-	0.1	-	-	-	-	-
135-A1	箙　塗膜	7.0	9.8	-	-	-	0.1	0.0	-	-	0.4	-	75.7	0.2	-	-	-	6.0	0.8	-
135-A5	箙　地金	-	1.0	-	-	-	-	-	0.0	-	0.0	-	97.6	-	-	-	-	-	-	1.4
184-2	小刀　黒色	15.6	26.0	-	-	0.2	-	0.1	-	-	0.8	-	56.4	0.7	-	-	-	-	-	0.2
184-5	小刀　褐色	20.3	34.4	-	0.2	1.0	-	0.7	0.0	0.0	7.7	-	34.9	0.6	-	-	-	-	-	0.1
185-1	飾り金具　金色	-	0.7	-	-	-	-	-	-	-	0.2	-	95.5	-	0.1	-	-	2.3	3.2	-
185-3	飾り金具　緑色	5.8	11.0	1.2	0.2	-	0.1	0.1	-	-	0.7	-	80.4	-	-	-	-	-	0.3	-
185-5	飾り金具　灰色	16.6	22.6	0.7	-	0.4	0.1	0.2	-	-	1.2	-	56.4	-	0.1	-	-	1.7	-	-

A.001 和鏡（第 102 図）

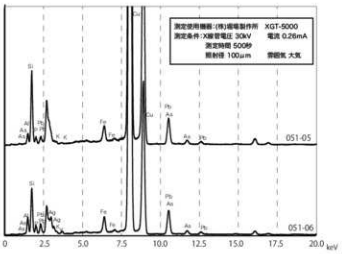
鏡面部分の 3 カ所について測定を行った。主な成分は錫、銅である。少量のアルミニウムと微量のチタン、鉄、ニッケルが検出されている。測定点間でのスペクトルに大きな違いは見られなかった。定量分析の結果では、銅 24.5%、錫 69.0%となる。今回分析を行った和鏡と類似する鏡は、文様の構成や意匠から、熊野速玉大社に所蔵されている 18 面の鏡に含まれている。これら熊野速玉大社の鏡は明徳元（1390）年に将軍足利義満と諸国守護らが熊野十二社に調進した神宝類の一部で、京都の 工房で製作されたと考えられており、桑下城出土の鏡も京都の同じ工房で製造されたのではないかと推測される。この熊野速玉大社の鏡については、そのうちの 1 点である「桐唐草双鳳鏡」について、西山ほか（2004）で蛍光 X 線分析装置による成分分析が行われている。測定箇所は鏡背 3 カ所と鏡面 3 カ所である。この「桐唐草双鳳鏡」は白っぽい金色を呈する。成分分析の結果、銅と錫の比がおよそ 6：4 であり、1%程度の鉄と 2%程度の鉛が含まれていた。また鏡面からは水銀が検出されている。この分析値と桑下城跡の鏡の分析結果を比較すると、桑下城跡の鏡は銅と錫の比が 3：7 となっている。一般に和鏡には、青銅から白銅が使用されており、これらは錫よりも銅を多く含む合金である。しかし桑下城跡の鏡は、錫が 7 割を占めていた。これは、桑下城跡の鏡の場合、鏡面だけが測定点となっていること、鏡面に物が映るほど保存状態が良好であったことから、鏡面のための錫メッキが残存しており、そのため錫の含有量が多くなったと推測される。



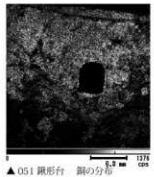
第 102 図　001 和鏡　鏡面のスペクトル図

B.051 鍬形台（第 103 図）

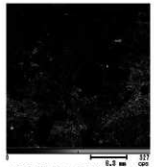
鍬形台の表面、中心部分 6 カ所を測定した。いずれのカ所においても、銅が多く検出され、次いで珪素、アルミニウム、ヒ素、リン、鉄、カリウムが検出された。中心部分の測定点（051-06）で銀が検出された。他の測定点では検出できなかった。1 測定点から銀が検出されたことから、銀の象嵌の有無確認のために元素分布を調べた。しかし明確な模様を確認することは出来なかった。



第 103 図　051 鍬形台　表面のスペクトル図と元素分布



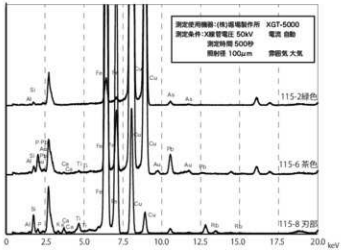
▲ 051 鍬形台　銅の分布



▲ 051 鍬形台　鉄の分布

C.115 小刀（第 104 図）

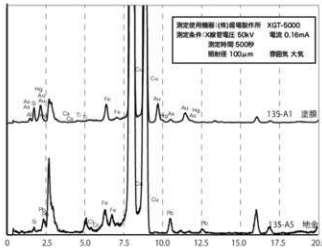
色調の違う部分と刃部の各 2 カ所ずつ、計 6 カ所の測定を行った。緑色および茶色の測定点では、銅が主に検出された。また茶色部分では、金が検出されている。刃部では、銅ではなく、鉄が主に検出されている。このことから、鉄の小刀が銅の鞘に納められていたものと推測する。また鞘には金で装飾がなされていたものと思われる。



第 104 図　115 小刀　表面のスペクトル図

D.135 簪（第 105 図）

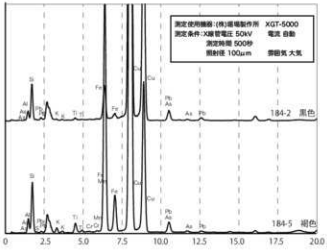
細長い棒状の試料で、表面に塗膜状の物質が観察できたので、塗膜状部分と心材部分の計 5 カ所を測定した。いずれの測定点でも銅が多く検出された。塗膜状の部分では金と水銀が、心材部分では鉛が、それぞれ検出された。このことから、銅の心材に金メッキが施されていたと推測する。



第 105 図　135 簪　表面のスペクトル図

E.184 小刀（第 106 図）

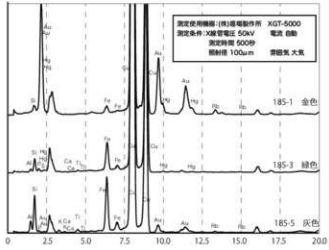
板状の物質。黒色部分と褐色部分で合計 6 カ所の測定点を設定。すべての点において、銅が多く検出された。褐色部分では鉄が多く検出されている。



第 106 図　184 小刀　表面のスペクトル図

F.185　飾り金具（第 107 図）

リング状をなす部分と棒状の部分をつなぐ円筒形の部品。この部品の表面に金色の部分があることから、金色および緑色、灰色の部分をそれぞれ 2 カ所ずつ、計 6 カ所の測定を実施。いずれの測定点も銅が多く検出された。金色と灰色の部分では金と水銀が検出された。また灰色部分ではアルミニウムが多く検出された。これらのことから、銅を心材にし、金メッキを施したものと推測される。



第 107 図　185 飾り金具　表面のスペクトル図

第５章　総括

第１節　山頂造立瓦塔の系譜　―桑下城跡出土瓦塔について―

永井　邦仁

1. 桑下城跡出土の瓦塔

本項では、桑下城跡で出土した瓦塔について、丘陵頂部というその造立された立地に注目して評価を考察する。あわせて、瀬戸市品野地区における古代集落の動態の中でどのように位置づけられるかも検討しておきたい。

まず、出土瓦塔について再確認しておくと、桑下城跡平成 20 年度の発掘調査区（08B 区）から出土し、破片数は屋蓋部のみ 9 点であった。屋蓋部は、丸瓦列を一つずつ棒状粘土で表現するもので節を入れて一枚分を示す。そして垂木は野地とともに２段となる二軒を表現している。焼成は須恵質であり窯で生産されたものである。これらの特徴は、当該資料が猿投窯型瓦塔（永井 2009）の屋蓋部であることを示している。なお瓦塔片どうしでは焼成具合が異なっているものや微細な形状の差異があるが、これは別個の屋蓋部品であるためで、類型的には一つである。

猿投窯型瓦塔は軸部上端にある組物表現の形状によって新旧関係を推量できるが、当該資料には軸部片が含まれていないのでそれは困難である。ただし、屋蓋部裏面が垂木表現とともに二段に削り出している点は、比較的後出する瓦塔にみられることから、ここでは 8 世紀後葉～ 9 世紀初頭という時期を推定しておきたい。また、瓦塔出土分布に重複する位置にある竪穴建物 166SI からは、猿投窯須恵器編年 O-10 号窯期の無台箱形杯が出土しており、この時期と考えてもよいだろう。

2. 山頂造立瓦塔の系譜

桑下城跡瓦塔の造立位置

桑下城跡では、古代の竪穴建物 166SI とその後背斜面で瓦塔が出土した。その分布範囲は約 800㎡に及んでいる。瓦塔は建物内もしくは地表面に造立されるものであるから、それが廃絶すると周辺へ拡散する傾向にある。さらに当該遺跡の場合、斜面地であることと、築城のために大規模な造成を実施していることから、より拡散し落下した破片もあったことと思われる。したがって、出土分布のより上位に瓦塔が造立されていた可能性が指摘でき、竪穴建物を見下ろす尾根線近くの位置が考えられる。ともあれ瓦塔と若干の建物や土器を伴うだけの、およそ集落と表現しがたい特殊な景観が奈良時代後半のこの地に存在したことが確認される。このことについて類例をももとに検討しよう。

東海地域において瓦塔造立が認められる遺跡は、寺院・官衙・集落が中心であるが、少数ながら丘陵頂部の場合がある。愛知県岡崎市・真福寺東谷遺跡と静岡県浜松市（旧三ヶ日町）・宇志遺跡である。

真福寺東谷遺跡

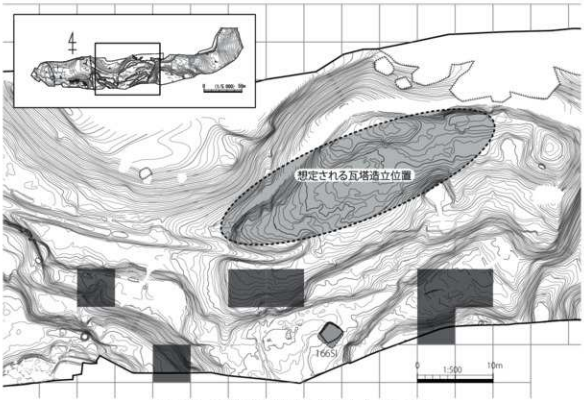
真福寺東谷遺跡は、矢作川中流域左岸の丘陵地に立地する、山上の古代寺院遺跡である。遺跡は、矢作川河岸段丘の平坦地から東へ約 1km の真福寺川の谷をさかのぼった北岸の丘陵頂部にあり、標高は約 129m である。小谷を挟んだ西の丘陵頂部には天台宗真福寺が所在し、白鳳時代の塑像仏頭が伝えられている。当該地点は川との高低差が 40 ～ 50m あり、山頂部を志向した立地が明確である。遺構は、

溝に囲まれた東西約 14.5m、南北約 15.5m の方形区画があり、遺物の出土状況から、この区画に当初は瓦塔と瓦葺きの覆屋があったと想定される。軒瓦は、平地にある古代寺院(北野廃寺)のものの後出型式(ほぼ同笵)であり、8 世紀前半にその強い影響下に成立した寺院と評価されている(愛知県史編さん委員会 2011)。瓦塔は、量産化が進行する猿投窯型の先行型式と考えられ、東海地域でも初期段階に位置づけられこれも 8 世紀前半と考えられる(永井 2010)。したがって真福寺東谷遺跡では瓦塔造立と瓦葺き建物造営が同時進行であったとみられ、これだけでも山頂に重厚な景観を想定することが可能である。ただし、瓦塔は比較的早く倒壊してしまったとみられ、区画溝下層からは瓦塔と瓦のみが出土し、その上層に 8 世紀後半以降の須恵器・灰釉陶器が出土している。つまり、寺院造営の早期段階に瓦塔が造立され諸堂の整備はそれに後続したものと考えられる。

真福寺東谷遺跡の古代寺院は、先述のように北野廃寺との強い有機的関係があり、共に三河国造氏族によって造営された可能性が高い(永井 2011)。彼らの拠点は、8 世紀前半段階までは矢作川右岸の岡崎市・小針遺跡と目されるが、同後半以降はそれに比較して縮小傾向にある。この現象については、台地から低地への集落移転が考えられるとともに、真福寺のある矢作川左岸へ比重を移した可能性についても考慮しておきたい。すなわち、真福寺川を下った段丘端部には生平遺跡があり、8 世紀後半～ 9 世紀前半の須恵器・灰釉陶器が卓越する。同様の遺跡として前田遺跡も挙げられよう。これらの集落遺跡から真福寺までは約 1km の距離であり、集落と寺院の有機的関係は未だ状況証拠的なものしかないが、日常的な往来が可能な範囲にある点には注目しておきたい。

宇志遺跡

宇志遺跡は、浜名湖北岸に注ぐ宇志川がつくる谷地形の最奥部に位置する。この谷の西側には宇利山川・釣橋川などが合流するさらに大きな谷地形があり、現在の三ヶ日中心地はその浜名湖岸の低地に立地する。その中心地北側の丘陵地南端には三河地域の系譜とみられる古代の軒瓦が出土する楠木遺跡や、川を挟ん



第 108 図　桑下城跡瓦塔出土分布図(グリッドで表示)

で摩訶耶寺という真言宗寺院がある。平坦地の面積からみて、おそらくこちらの谷が中心的な居住地であったと思われる。地元では、宇志遺跡周辺が摩訶耶寺の前身（真萱寺）所在地と伝えられており、奈良・平安時代の時点では楠木遺跡と約 1.5km 離れた山中の宇志遺跡が関わりを持っていたと考えてよいだろう。

さて宇志遺跡は、南東および南西方向から延びてきた山稜が北端谷奥で閉じる位置にあり、南西方向に突き出した小尾根の上に立地する。標高は約 125m である。この位置は約 1km 南の東名高速道路付近からでも視認でき、視覚的には開けた位置関係にあるといえる。ただしこのあたりの谷底は礫が地表を覆っているところで、現在はミカン畑にはなっているが、かなり荒蕪した印象である。一方東名高速道路から南側ではやや開けて水田地帯となっている。これらがそのまま古代の景観であったわけではないが、現在の集落や水田耕作地加えて姫街道（東海道脇往還）のある地点と宇志遺跡の位置は約 1.5km まで離れており、古代において日常移動が行える限界だったのではないかと推測する。

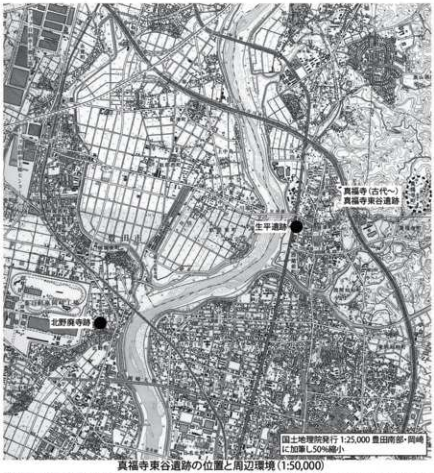
先述のように宇志遺跡の背後標高約 230m の地点には真萱寺跡と伝える平場があり、両者は斜面で隔てられている。下方の宇志遺跡は、上下二段の平場で構成されており、上段は後の改変も考慮せねばならないが比較的広く、下段平場は半ばから下へ石組みの参道があってどちらかといえば狭い。その下段の南東隅に築かれた一辺約 4m の基壇とその周辺で瓦塔片が集中的に出土しており、昭和 33 年（1958）の発掘調査以来その上に瓦塔が造立されていたものと考えられている（後藤 2003）。現在は基壇の上に燻し瓦製の復元瓦塔がある。基壇周辺では後に灰釉陶器も出土しており、黒笹 90 号窯期とみられる。後続する時期の遺物については不明であるが、中世段階に伝真萱寺跡へ移転した可能性も考えると、その存続範囲は 9 ～ 10 世紀前半と見積もることができよう。

この見通しは瓦塔の形態で想定される時期からも支持される。すなわち宇志遺跡の瓦塔は、軸部組物表現が繊細さと複雑さを増しながら省略を進めた猿投窯型 B 2 類の最終形態といってよいからである。当該瓦塔に先行すると思われる静岡県磐田市・見附端城遺跡出土瓦塔が猿投窯の K-14 号窯期（9 世紀前葉）と考えられるので、宇志遺跡瓦塔が 9 世紀半ば近くまで時期が下る可能性があり得る。ともあれ瓦塔の造立を手始めに「真萱寺」の造営が進められたと考えることができよう。

山頂瓦塔造立の系譜

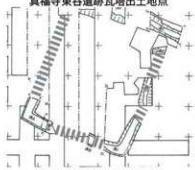
以上 2 つの山頂瓦塔造立遺跡についてみたが、共通点の第一は、山麓集落との距離が 1 ～ 2km 程度と近く、時には麓からも視認しうる位置ということである。そして共通点の第二は、瓦塔造立を先頭に山上の寺院諸堂の整備が開始されていることである。その意義は開発に伴う地鎮的行為など種々想定されようが、筆者は、当時の人々が瓦塔造立という「造塔」行為に、寺院造営まるごと一つを象徴していたからではないかと考えている。それが 8 世紀前半と 9 世紀半ばのいずれも東海地域でみられるということは、この地域では、古代における寺院造営のスタンスが一貫していたことを窺わせるのである。

翻って、桑下城跡出土の瓦塔について以上の所見と比較する。桑下城跡では古代から中世を通じて、瓦塔以外に寺院が存在は認められない。築城時に削平された可能性もあろうが、諸堂完成となればもう少し痕跡があるはずで、施設は瓦塔と竪穴建物 1 棟でほぼ完了しているとみるべきである。しかしながら灰釉陶器片が出土していることから、9 世紀代以降もこの地への干渉はわずかながら続いていたとみられる。逆に瓦塔を遡る時期の遺物は古墳時代初め頃の土師器高杯のみで、ほぼ未開拓に近い状態であったと言ってよいだろう。したがって寺院創設には至らなかったものの、瓦塔造立がこの地へ人々が踏み込む先頭にあったと考えられるのである。



真福寺東谷遺跡の位置と周辺環境（1:50,000）

真福寺東谷遺跡瓦塔出土地点


真福寺東谷遺跡方形区画溝

宇志遺跡の位置と周辺環境（1:50,000）

宇志遺跡瓦塔出土地点

宇志遺跡遠景（南から）

宇志遺跡復元瓦塔

第 109 図　三河・遠江における山中瓦塔造立の事例

3. 上品野地区における古代集落の動態のなかで

そして共通点の第一について、桑下場跡の所在する瀬戸市品野町における古代集落の動態を概観しながら考えてみよう。

品野町は、周囲を山地・丘陵地に囲まれた盆地地形（品野盆地）が特徴である。そして水野川沿いの幅広の谷地形でもある上品野地区（上品野・中品野）と、同川と南の谷地形（中品野鳥原）からきた鳥原川との合流点より下流の下品野地区（下品野）とに大別される。これまでに上品野地区では上品野西金地遺跡・上品野蟹川遺跡・上品野遺跡、下品野地区では品野中部遺跡・落合橋南遺跡・品野西遺跡が発掘調査されている。

上品野地区の古代集落

上品野地区では、丘陵端部に立地する古代集落が、いわば盆地縁辺に分散するようにして展開する。上品野西金地遺跡は桑下城跡の東方に位置し、丘陵斜面の下端に位置する。戦国時代以降の集落が中心だが、灰釉陶器も出土し掘立柱建物の一部がこの時期に相当すると考えられる。灰釉陶器は O-53 号窯期以降であり、須恵器の出土はほとんどないことから、概ね 10 世紀以降に成立した集落と考えられる（早野 2013）。

上品野蟹川遺跡は、桑下城跡の西方に広がる品野川氾濫原に面した低地遺跡である。当センターと瀬戸市教育委員会で発掘調査され、旧河道が検出され木製品や須恵器・灰釉陶器が出土した。その時期は概ね 6 世紀代と 8 世紀末～ 9 世紀代に分かれ、木製品は案（机天板）などがあり後者の時期に相当するのであろう。そして最も注目されるのが多数の墨書土器である。「文室門」・「山寺」などが底部外面に記されており前者は K-14 号窯期、後者は K-90 号窯期のいずれも灰釉陶器椀である（武部 2006）。当該遺跡では K-14 号窯期段階の小規模な竪穴建物（00ASB01）1 棟が検出された程度で、集落施設は調査区から若干山側（北側）にその中心があると思われるが、墨書内容は明らかに寺院の存在を示しており、桑下城跡瓦塔との関連も考えられる。

上品野遺跡は品野川左岸に位置する。上品野蟹川遺跡同様に低地から斜面地下端までの遺跡である。ここでは古墳時代初頭の次に 8 世紀末～ 10 世紀の集落が展開する。ただしその規模は大きくないようである。1 棟検出された竪穴建物（97B 区 SB04）は O-10 号窯期である。またその付近の溝（98ASD01）からは「吉」と墨書された灰釉陶器が数個体出土している（川添 2004）。竪穴建物とは時期が異なるが、内容が吉祥句であることから集落内の祭祀に関わるものと考えられる。したがって灰釉陶器の時期である O-53 号窯期も集落があったとみることができ、他の遺物出土状況をみてもむしろ 9 ～ 10 世紀代に中心があるものと考えられる。

下品野地区の古代集落

一方下品野地区では、盆地の平坦部に古代集落が立地する傾向がある。品野西遺跡は、8 世紀代に比重があるといえる。柱掘方および平面形の明瞭な掘立柱建物や、一辺 9m 規模の大型竪穴建物が検出されており建物群の密度も濃い（岡本 1997）。軒瓦も出土しており、それらの建物群が寺院か豪族居宅か判断できないものの、地域内で中核的な集落であることは間違いなさそうである。しかしこの遺跡では、K-14 号窯期（9 世紀前半）の灰釉陶器の出土が「激減」（岡本 1997）する。その後、K-90 号窯期～ O-53 号窯期の灰釉陶器は若干出土し墨書土器もあるが、建物も少なく規模が縮小している。つまり上品野地区の集落遺跡と対照的な消長をみせる点に特徴がある。

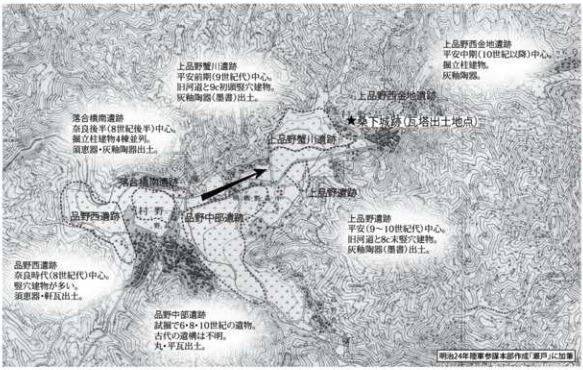
品野西遺跡の東側には落合橋南遺跡や品野中部遺跡があり、前者では 8 世紀後半以降の須恵器や 9 世

紀前半の灰釉陶器が出土し、並列する掘立柱建物４棟も検出されている（松澤 1997・河合 1998）。ここでの最盛期が品野西遺跡からやや遅れる点に注目しておきたい。また品野中部遺跡では、落合橋南遺跡に接する地点で丸・平瓦が出土し（岡本 2006）、遺構については不明な点が多いものの６世紀代の須恵器・土師器の他に８・10 世紀代の遺物も出土している。この遺跡は、瓦の出土など品野西遺跡に似る点に注目できよう。ともあれこの２遺跡は品野西遺跡に近い時期・構成をみせるのが特徴で、いわば一連のものであったと評価できる。

品野盆地の古代集落東遷

以上各遺跡の比較から、８世紀後半から９世紀前半にかけて、下品野地区からより奥地の上品野地区への集落の移動と分散が進行したという見方が成り立つ。当該期に平野部よりも山間部での小規模集落が多数出現する事象については、三河地域で広く認められる（永井 2005）。ここに紹介した品野盆地の東西における集落動態もそれと同じ軌跡が観察されるのであるが、加えて発掘調査でより具体像があきらかになったことも重要である。その一点は、上品野蟹川遺跡のような寺院機能に専従する一角が存在していることである。このような寺院機能は、同時展開する他の集落ではみられないことから、一定範囲に点在する小規模集落群の紐帯の中で、仏教信仰の場として意図的につくられたものと考えられる。つまり一見各個に集落が山間部へ拡散していったようにみえるものの、信仰を初めとする地域の諸機能を分担あるいは集約しつつ、全体で開拓に当たっていたとみることができるのである。その本格化は墨書土器によれば９世紀代に入ってからであるが、瓦塔が造立された８世紀後半にその萌芽を認めてもよいと思われる。当該瓦塔に地域史的な意義を見出すとすればまさにこの一点にある。

加えてより広域における品野盆地の位置づけも考慮すると、尾張地域から東濃地域へと抜ける交通路の充実による山間部から平野部への物流の活発化も、集落の東遷に関わって進展したことと思われる。そしてそのことが、特に中世以降窯業地として広範な消費地を背景に生産を続け得た基礎になったのではない



第 110 図　上品野地区の主要古代集落遺跡とその東遷

だろうか。ただし、当該地域における古代の生業については未だあきらかではなく、例えば三河では、賀茂郡（足助）の漆や、額田郡（京ヶ峰）・幡豆郡（八ツ面山）の雲母など、いずれも地域外（主に都）に需要のある物産が考えられるものの、未だ決定的な痕跡を見出したわけではないし、途中からの窯業生産への転換もあり得る。その意味ではやはり瓦塔から桑下城までの道程は遠いが、一方で桑下城機能時における品野盆地の景観の検討も深化しており（蔭山2012）、今後の課題もより明確化してきたと考えられる。

参考文献

岡本直久　1997『品野西遺跡』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告書第13集

岡本直久　2006「瀬戸市内出土の古瓦―品野中部遺跡及び若宮遺跡出土遺物の整理報告―」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第13輯

蔭山誠一　2012「桑下城のある景観と歴史」『考古学フォーラム』21

河合君近　1998『落合橋南遺跡Ⅱ』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告書第17集

川添和暁　2004『上品野遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第132集

後藤健一　2003「瓦塔遺跡」『静岡県の古代寺院・宮衙遺跡』静岡県文化財調査報告書第57集

武部真木　2006『上品野蟹川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第142集

永井邦仁　2005「古代の足助」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』6

永井邦仁　2010「真福寺東谷遺跡」『愛知県史資料編考古4　飛鳥～平安時代』

永井邦仁　2011「北野廃寺は三河国造の寺か」『考古学フォーラム』20

早野浩二　2013『上品野西金地遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第173集

松澤和人　1997『落合橋南遺跡Ⅰ』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告書第14集

第2節　09区9曲輪について

伊奈　和彦

桑下城の廃城後の状況が描かれた「春日井郡上品野村古城絵図」（蓬左文庫蔵）［巻頭図版1］によると「本丸」の西側、「侍屋敷之地」北側部分は、単に「芝」となっており、従来は城域外と考えられてきた。（愛知県中世城館調査報告Ⅰ尾張地区1991福島）

しかし、平成16年度調査（04調査区）では「芝」部分の西端に曲輪と考えられる平場を確認し（樋上2005年報）、平成19年度調査（07調査区）では、在地領主の居館を侵攻勢力が大規模改修して本丸部分を造成したとの知見を得るに至った。（宇佐見2008年報）　更に平成20年度調査（08調査区）では本丸西側に曲輪群を確認し、それらが城の大規模造成以前の形状を残していることを明らかにした。（武部・小澤2009年報）　こうして前述の古城絵図にある「芝」部分は城に伴う「屋敷地」であり、在地領主の居館の一部と推定されるようになった。（考古学フォーラム21　2012小澤）　ただし、08調査区で検出された「庭園遺構」以外には、「屋敷」、あるいは「居館」を想起させる決定的な遺構は希薄であり、あくまでも推定の域にとどまらざるを得なかった。

平成21年度調査（09調査区）では、これらの推定を補完し、確信させるような成果が得られたので考察を試みることとする。

平成21年度調査における09調査区は、08調査区の西側、04調査区の東側にあたり、これらの調査区と同様に「屋敷地」と推定される位置に展開している。当初、曲輪と考えられる平場は9ヵ所確認でき、上位より1曲輪から9曲輪として調査を進めたが、調査の結果、曲輪は7箇所との結論に達した。(詳細は「第2章第2節」を参照)　特に調査区南に位置し平坦部の面積が約250㎡を測る9曲輪では多くの遺構と遺物を検出して「屋敷地」との認識を得たが、9曲輪北側の尾根上に位置する1～5曲輪は「屋敷地」ではなく、本丸につながる武者走り部分だったようである。よって、古城絵図にある「芝」部分の全てが「屋敷地」ではないことも判明した。6・7曲輪も建物が建っていた痕跡は見当たらず、調査区の南側に展開する9曲輪のみが「屋敷地」の痕跡を濃厚にとどめていた。

9曲輪では調査の結果、少なくとも2度の造成・改修が行われ、3段階の時期(第111図)があったことを確認した。それぞれ、火災後の整地面(第1面)、大規模に造成された面(第2面)、築城当初と考えられる面(第3面)を捉えた。

築城当初と考えられる第3面では、8曲輪と9曲輪を隔てる石垣(395SW)は存在せず、両曲輪を貫くように走る溝(392SD)を検出した。また、この溝を検出した面で、両曲輪にまたがる柵列(430SAや431SA)も検出しており、この時期には8曲輪と9曲輪は一つの曲輪であったことがわかった。この曲輪の東側は南方向へと大きく落ち込んでおり、西側は平坦に岩盤が続いている。東側部分の落ち込みを除いた平坦な面は東西約17m・幅約2～4mを測り、帯曲輪を想起させる。実際この部分では、溝(392SD)と柵列(430SAや431SA)を検出した程度で、建物を想定させるような遺構は検出できなかった。どうやら築城当初はこの曲輪は居住空間ではなかったようである。

この面での出土遺物は、平碗、直縁大皿、卸目付大皿、四耳壺、天目台など古瀬戸後Ⅳ古段階から古瀬戸後Ⅳ新段階のものが大半を占め、大窯1段階より後の遺物は出土していない。よって、この面は古瀬戸後Ⅳ古段階から大窯1段階の間の時期に相当すると考えられる。

次に第2面であるが、第3面で見られた帯曲輪のような平場を分断するように石垣(395SW)が構築されている。石垣には裏込石がなく、平行を意識した石の組み方がされているので古い時期の石垣の特徴を有している。この石垣よりも西側(8曲輪)は若干の盛土が見られるのみであるが、東側(9曲輪)では大規模な平場の拡張工事が行われたことがわかった。曲輪南東部は1m以上盛土がされ、盛土は曲輪北側の斜面を削って行われていた。削られた斜面は切り立っており、防御機能を持たせる意味もあったのかもしれない。

この造成工事に関係すると思われる遺構を第3面で検出している。第3面9曲輪部分の地山が南東方向へ急激に落ち込む辺りで検出した約3mの石列(725SW)は、9曲輪部分と8曲輪部分にまたがる前述の溝(392SD)を南北方向に切っているので、曲輪を改変する際(土盛りによる平場拡張。第2面の造成。)に設置されたものだと考えられる。盛土がこの石列から先の東南方向への大きな落ち込み部分を埋めるように為されていることから考えると、この石列は造成工事の際に土を入れる位置の目印として並べられたものなのかもしれない。

こうして造成された250㎡程の曲輪中央部分に焼土と炭化物の広がりを検出し、この面で火災が起きたことがわかった。　焼土の広がりの北と西部分でL字状に曲がる溝(574SD)、東側部分で南北方向の溝(573SD)、中央部分で軸線の異なる溝(572SD)を検出した。丁度焼土の広がりを囲うように溝が巡らされており、建物に伴う区画溝だとわかる。また、溝に囲まれた内側の焼土や炭化物が広がる部分で柱穴と考えられる複数のピットを検出した。この部分に柱穴や土坑が集中しており、2間×3間の掘立柱建

物が想定される。これらのことから、この曲輪が「屋敷地」として造成されたことが分かる。

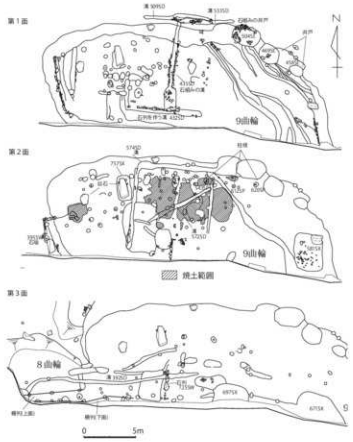
建物はどのようなものであったのだろうか。焼土塊に「すさ」が含まれていることから、土壁の建物が燃えたようである。おそらく土蔵のような建物だったのだろう。また、西側の区画溝（574SD）から50cm 程西に長辺２ｍ・短辺 80cm程の長方形を呈する巨石が地山を掘り込んで据えられていた。上面を水平に保つよう底部に石が挟み込まれており、何らかの意図があって据えられたことがわかる。さらにこの巨石の南西約３ｍの位置に、長径約１ｍ・短径約 80cmを測る楕円形の巨石がやはり上面を水平に保つよう地山を掘り込んで据えられている。この２つの石は、想定される建物の近くに据えられていることから、庭石などを想起させる。

曲輪中央部分の軸線の異なる溝（572SD）はどのような機能を持っていたのか不明であるが、溝の中は焼土塊が多数埋まっており、底部からは鴟形水滴や匣鉢、鍍金された銅製金具などが出土した。またこの溝周辺の焼土や炭化物集積部分からは小天目茶碗や兜の一部である鍬形台が出土している。この場所から武具である鍬形台が出土した意味は大きい。燃えた建物が土蔵であったならば、武具などを収納していたのかもしれない。何より重要なことは、鍬形台の出土がこの場所が単なる屋敷地ではなく、城の一部としての「屋敷地」あるいは「居館」であったことの裏づけとなるからである。

なお、この面が機能していた時期であるが、出土遺物から類推すると大窯１・２段階に相当する時期であったと考えられる。

最終段階の第１面では、曲輪中央で南北方向に走る石組みの溝（435SD）、曲輪南部では東西方向から南北方向へと直角に折れ曲がる溝（432SD）を検出した。更に曲輪北端の斜面裾付近で東西方向に走る溝（533SD と 509SD）を検出し、533SD は西端部分で石組みの溝（435SD）と接していた。

これらの溝の周辺には複数の柱穴と考えられるピットも確認できることから、溝は区画溝であり、建物が建っていたと推定できる。435SD の石組みに使われている石の中には被熱したものが見られ、焼土や炭化物が混じる斑土も確認できるので、この面は火災が起こった後に整地された面だと捉えることができる。つまり、第２面で「屋敷」が火災に遭い、焼失した後に整地されて建物が再建され、引き続き「屋敷地」として機能したことを物語っている。曲輪の北東部分には３基の井戸も確認でき（第２面の時期にも存在したか）、生活空間があったことを窺わせる。出土遺物は鳥形水滴、猪形水滴、合子、小天目茶碗、茶入、水滴などの大窯２・３段階の製品の他、茶臼、鉄製刀子、ガラス製数珠玉、中国産染付碗などが出土しており、文化的な雰囲気すら感じさせる。



第 111 図　９曲輪遺構変遷図

以上のように、平成21年度の09調査区9曲輪を中心とした調査結果から、本丸より西側は城域外ではなく、これまでの調査で想定されてきた「屋敷地」が確実に存在したことが証明された。9曲輪は、古瀬戸後Ⅳ古段階から大窯3段階の時期まで機能していたことがわかったが、当初から「屋敷地」であったわけではなく、大窯1段階から2段階の間の時期に大規模な造成工事を行って新たに造られた「屋敷地」であったことも明らかとなった。

9曲輪が築城当初の帯曲輪状の平場だった時期には、在地領主の「屋敷」ないし「居館」は調査区外（古城絵図にある「侍屋敷之地」辺りか）にあったのかもしれない。これについては今後の調査を待つことにしたい。

第3節　中世・戦国期の陶磁器搬入品について

武部　真木

桑下城跡の付近には上品野E窯跡（窖窯）、桑下窯跡（古瀬戸）、桑下東窯跡（大窯）などの窯跡が確認されており、山茶碗・小皿と古瀬戸、大窯製品が多量に出土した。窯での焼成品を除くとその他の遺物は極端に少くなる。ただ山城の発掘調査ではこうした出土状況の方がむしろ一般的であり、桑下城についても城の機能時に外部から持ち込まれた可能性が高い資料を抽出し改めて検討を加える必要があろう。ここでは搬入品と考えられる土器・陶磁器類の分布状況についてまとめておきたい。

搬入遺物としたものは貿易陶磁、瓦器、常滑産陶器、土師器などがあり、大まかなエリアに区切って配列したものが第112・113図である。戦国期以前の時期の資料は平成19年度07A区、すなわち後の本丸付近となる範囲と平成21年度09年調査区の居住域となった曲輪付近で出土している。貿易陶磁のうち前者では白磁3点（碗、皿）、青磁3点（碗、鉢）があり、後者では青磁稜花皿1点がある。常滑産陶器広口壺・甕類の図化された6点はいずれも常滑編年10型式（15世紀後半）に収まるものであり、また土師質の羽釜と非ロクロ成形の土師皿は平成21年度09年調査区に分布する。

戦国期の資料の分布範囲も概ね本丸付近と平成21年度09調査区の9曲輪に集中してみられる。

青花4点（碗、皿）、中国産かと思われる茶入1点は平成21年度09年調査区から出土。

出土した土師質鍋類はすべて半球形内耳鍋である。土師皿の図化資料のほとんどは本丸付近から出土している。手捏ねは1点のみであり、他はすべてロクロ成形である。口径は12cm前後と7～8cmの法量があり、ほぼ平らな底部から端部まで直線的に開く、比較的短い体部をもつ形状であり、清洲城下町遺跡出土のロクロ成形土師器皿B類、E類、F類に分類される形状に近い。「本丸下層」とした資料は本丸周囲に大型の堀が掘削されるなどの大改築以前の時期を示す資料である。出土状況からしても一括性が高いものであり、出土した土師皿は清洲城下町B類、小型のものはF類に相当すると考えられる。

清洲城下町編年（*註）においてロクロ成形土師器皿B類は大窯2段階以降にみられなくなり、代わって体部が丸みを帯びるC類が現れる。これにしたがえば「本丸下層」の土師皿は概ね大窯第1段階に併行する時期と考えられる。

（*註 鈴木正貴編,1995『清洲城下町遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集）

搬入品の分布は本丸付近と平成 21 年度 09 年調査区 9 曲輪に限定される。これらの場所は、少なくとも 15 世紀後半から戦国期にかけての中心的な居住空間に近いエリアであったと考えられる。特に土師器皿には本丸の付近で集中して使用されたことがうかがわれ、上面で検出された庭園遺構とともに付近に会所的な空間が存在した可能性を補強する資料となっている。

桑下城の東側に桑下東窯跡があり、桑下城跡からも窯道具類や窯道具が付着した製品等が出土した。

使用した製品と未使用製品の区別ができないかと観察による使用痕の有無作業を、実測した製品すべてについて口縁部、胴部、底部の各部位内外面について実施した。平成 22 年度に小澤、木下、小島、山田の 4 名で検討し、各部位で 2 名が認めたものについてのみ使用痕ありと認定したのが第 22 表である。

何らかの使用痕が認められた陶器資料が 57 点見られた。出土遺物全体からすると、極端に少ない微々たる量となる。05 区で 3 点、09 区で 18 点、08 区で 8 点、07 区で 28 点である。これらの出土地点は 09 年調査の 9 曲輪と 07 年調査の本丸周辺に多く、先に分析した搬入遺物の分布域とほぼ同様の傾向を示していることがわかる。使用痕が認められた器種を多い順に擂鉢が 16 点、天目茶碗が 11 点、端反皿が 6 点、縁釉皿 3 点、丸皿 3 点の順である。このうち使用痕が明瞭な擂鉢 16 点に限定してみると、主に本丸上面とその周囲の堀から出土しており、しかも大窯第 2、3 段階の時期の資料が多いことが指摘できる。大窯第 2 段階以降の桑下東窯跡は操業規模をかなり縮小していたと考えられるため、桑下城の本丸エリアの方は継続的にというよりも、むしろ活動が活発化していたとみることも可能である。

区	曲輪	No.	器種：遺構	時期
05	5E18i	3	碗形鉢（平縁タイプ）	Ⅲ・Ⅳ
	1 曲輪	1092	丸碗	大1
	5 曲輪	1095	天目茶碗	大2
09	2 曲輪	7	灰釉丸皿	大2
	5 曲輪	30	小天目茶碗	大1
	9 曲輪	49	灰釉丸皿	大1～2
	3 曲輪	57	鉄釉蓋 402SA 北斜面	大
		61	鉄釉小瓶 432SD	大1～2
		64	合子 435SD	後期
		101	灰釉端反皿 675SP	大1
	9 曲輪	123	鍋	Ⅳ新～大1
		138	天目茶碗	大2
		236	鉄釉水滴	大1・2
		240	小天目茶碗（豆）	Ⅲ・Ⅳ
		255	擂鉢	大2
		270	鉄釉片口鉢 北側	大1・2
	4 曲輪	271	擂鉢 北側	大2
		290	天目茶碗	大4
		293	天目茶碗 斜面	後Ⅳ新
		294	天目茶碗 表土	大3

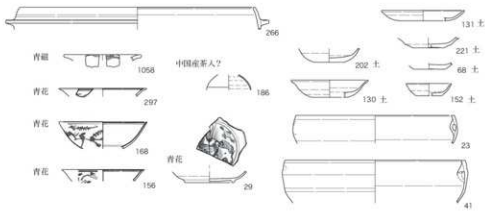
区	曲輪	No.	器種：遺構	時期
09	9 曲輪	1182	鉄釉端反皿 573SD	大2
	5G20b	337	茶壺 本丸西南	大
	西堀	354	擂鉢 219SD	大2～3
	西堀	391	灰釉縁釉扶皿 219SD	大1
08	5G20b	427	擂鉢 本丸西南	大1
	11 曲輪	471	擂鉢	大3
	10 曲輪	484	腰折皿	Ⅳ新
	5 曲輪	489	擂鉢	Ⅳ新
	9 曲輪	493	腰折皿	Ⅳ新
07		512	天目茶碗 002P	大2
		513	天目茶碗 004SX	大2
		522	擂鉢 004SX	大3
	本丸	529	鉄釉丸皿 004SX	大3
		577	皿鉢 071SX	
		604	擂鉢 071SX	大3
		607	鍋 071SX	Ⅳ新～大1
	北堀	627	灰釉端反皿	大1
	西堀	633	灰釉端反皿 高台	大1
	東堀	642	鉄釉稜皿	大1
	北堀	772	擂鉢	大2

区	曲輪	No.	器種：遺構	時期
07		793	鉄釉縁釉小皿	Ⅳ
		808	擂鉢 106SX	大2
		809	擂鉢 106SX	Ⅳ新
		812	擂鉢 106SX	大1～2
	北東堀	814	鉄釉縁釉小皿	Ⅳ
		816	鉄釉縁釉小皿	Ⅳ新
		820	灰釉縁釉扶み皿	大1
		867	擂鉢 106SX	大2
		880	鉄釉片口深鉢 106SX	大1
	堅堀	938	灰釉端反皿	大1
		962	擂鉢 088SE	大2
		968	擂鉢 088SE	大3～4
	本丸	983	天目茶碗 088SE	大1
		986	小杯 088SE	大2
		997	天目茶碗 088SE	大3
		1006	灯明皿 088SE	大1
	北東堀	1028	灰釉端反皿	大1

擂鉢	16 点	縁釉小皿	3 点
天目茶碗	11 点	丸皿	3 点
端反皿	6 点	縁釉扶み皿	2 点

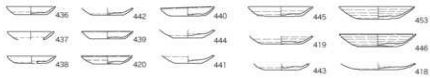
第 22 表　使用痕が認められた陶片

09 調査区

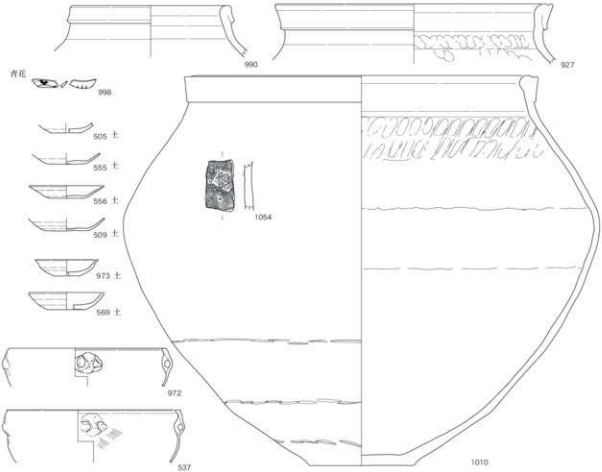


本丸下層

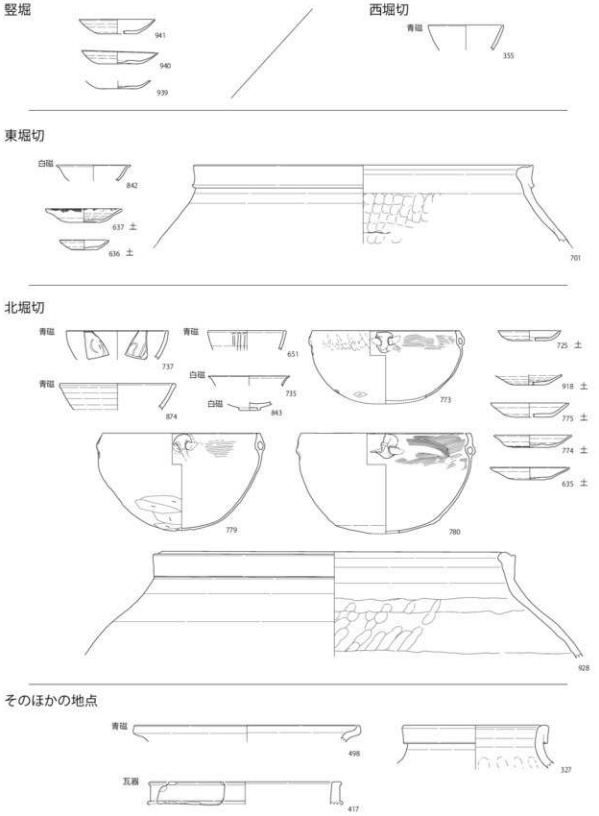
すべて土師皿
298SX
301SX
302SK



本丸上層



第 112 図　中世に搬入された遺物（1）（S=1/6）



第 113 図　中世に搬入された遺物（2）（S=1/6）

第４節　桑下城今昔　古城絵図と発掘調査

小澤　一弘

1. 春日井郡上品野村古城絵図

桑下城は、近世の城館絵図「春日井郡上品野村古城絵図」（蓬左文庫蔵）に見られる。絵図（巻頭図版 1）には廃城後の状況が描かれ、本丸の西側は芝と書かれ曲輪は見られず、芝の南側には侍屋敷「畠」とあり、丘陵部分は「畑」丘陵下は「畠」と区別され、侍屋敷と細長く東に突き出た形の芝の部分が丘陵下と考えられる。蓬左文庫蔵の絵図作成は正保年間にはじまり、慶安もしくは承応年間（1645 ～ 1654）の初期には完了したと推測されている。現在も本丸推定地の南側麓には「城前」の地名が残る。

「春日井郡上品野村古城絵図」について、『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ』に「尾張国城絵図考」で桑下城の先駆的な研究があり、地籍図と古城絵図により、本丸やその付近の曲輪群は各地籍のラインで読み取る事ができ、侍屋敷は、地籍図で既に水田と化している字「榎下」の部分まで伸びていると報告された。

「上品野村古城絵図」（第 114 図）には桑下城との記載はなく「此城名古屋より東北道法六里」とあり、名古屋より 23.56km に位置している。絵図に記載された掘割や土塁は、堀が「本丸」北側、土塁は東側に三ヶ所、曲輪か平場が 6 ヶ所（A ～ F）、虎口は南西隅に描かれている。曲輪の線が切れた箇所は、本丸東堀「から堀」沿いの「土居」と、その南側の「土居」二ヶ所の三ヶ所に見られ、切れた箇所は出入り口のようである。「本丸」西側は「芝」になっている。その「芝」の南側は「侍屋敷之地」とある。

記載された文字は、大、中、小、極小の四種類の大きさにより記されている。

1 は一番大きな文字で「芝」「本丸」「から堀」「畑」「侍屋敷之地」「畠」の記載、

2 は、普通の大きさの文字で本丸付近の「芝」「畠」の記載、

3 は 2 より小さい小振りの文字で「此間○間○尺」の距離表示の記載、

4 は一番小さな小文字での距離表示の記載がある。

一番大きな文字の 1 は「本丸」や曲輪、「から堀」等の大規模な痕跡を残した部分に記載される。普通の文字の 2 は本丸東と西の「芝」、本丸南の「芝」「畠」に見られることから、本丸北と南の本丸範囲を示しているようである。本丸南東の「畠」は 2 の普通の大きさの文字であるのに対し、本丸以外の「畠」は 1 の大きな文字で記載される。3 と 4 はそれぞれの曲輪や堀の中の規模や距離を記載している。

2. 絵図に記載された距離

絵図には「此間○間○尺」と距離が記載される。書かれた方向 : 記載距離 : m の順で書き改める。

堀部分の記載を、本丸北側の堀について西から、

西南の「岸高三間壱尺 5.75m」、西北の「中五間 9.09m 深サ三間 5.45m」、

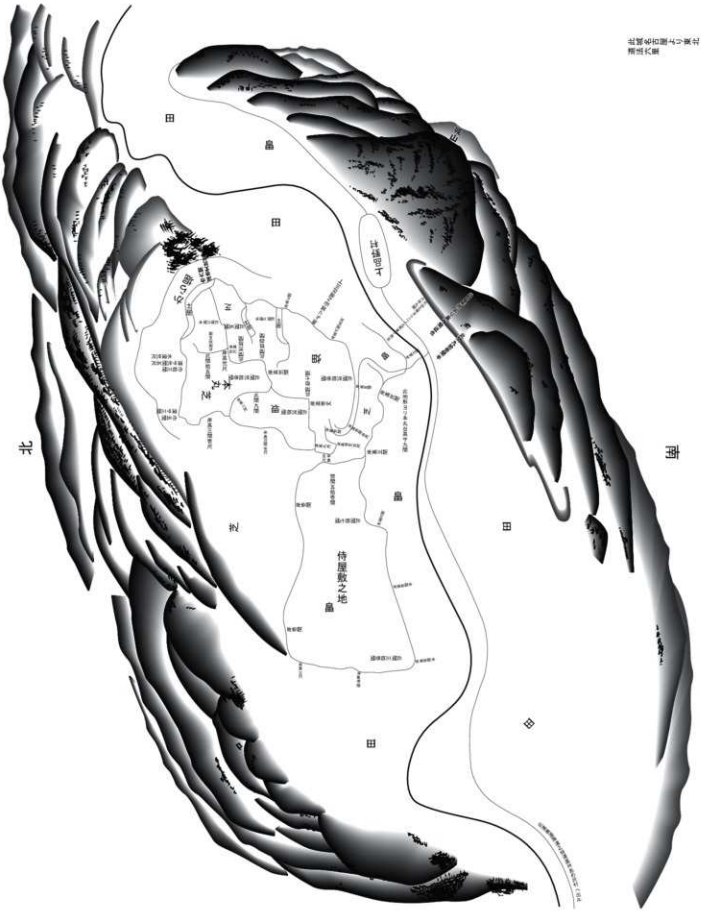
北池の「中拾三間 23.63m 深サ弐間五尺 5.15m 水深弐尺 60.6㎝」、

「から堀」西東の「中六間 10.90m 深壱丈弐尺 3.63m」である。

「本丸　芝」部分を A として、記載は、

南北の「此間弐拾壱間 38.18m」、東西 . 南の「岸高弐尺 60.6㎝」、北の「此間拾五間 27.27m」、

B として西東の小文字で「此間拾五間 27.27m」、南北の小文字で「此間六間半 11.81m」



第 114 図　上品野村古城絵図（蓬左文庫）トレース図

「芝」部分Cの記載は、「土居」北から二番目真ん中の上で南北の「此間五間 9.09m」、
北南の小文字「岸高四尺 1.21m」、西東の「此間弐拾間 36.36m」、
Dとして「土居」南の西東「此間拾四間 25.45m」、南北「此間七間半 13.63m」、西北南「岸高弐間 3.63m」、なおCとDは同じ曲輪の可能性もある。
「畑」西側部分Eの記載は、東西「此間九間 16.36m」、南北「此間弐拾間 36.36m」、
東西「岸高弐間壱尺　3.93m」、北東「岸高八尺 2.42m」
「畑」南側部分Fの記載は、西東「此間拾七間 30.90m」、南北「此間弐拾壱間 38.18m」、
北南「岸高壱丈 3.03m」、北南で小文字「岸高壱間 1.81m」、北南で小文字「岸高九尺 2.72m」
「畑」の東部分の記載は、西東で「是より城山之根迄三丁 3273m」、西東の小文字で「岸高七間 12.72m」、西東の小文字で「岸高六間五尺 12.42m」
「畠」東部分の記載は、西東小文字で「岸高三尺 90.9cm」
「芝」部分の記載は、北南小文字で「岸高五間 9.09m」、北南小文字で「岸高壱間壱尺 2.12m」、
北南小文字で「岸高壱丈弐尺 3.63m」、東西小文字で「岸高五尺 1.51m」
「畠」部分の記載は、東西「此地形ヨリ本丸台高サ九間 16.36m」、北南「岸高弐間 3.63m」、
北南「岸高三間 5.45m」
「侍屋敷之地」「畠」部分の記載は、西東小文字で「岸高三間 5.45m」、北南小文字で「岸高壱間半 2.72m」
北南西小文字で「岸高壱間半 2.72m」、東西の西小文字で「岸高壱間 1.81m」、東西の西小文字で「岸高三尺 90.9cm」、北南の東「岸壱間 1.81m」、北南の西「岸壱間 1.81m」、東西の東「惣間五拾壱間 92.72m」、南北の東「此間拾七間 30.90m」、南北の西「此間三拾壱間 56.36m」

3. 絵図記載の距離からみた規模

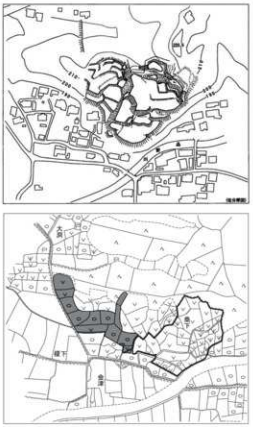
桑下城の規模を絵図より読み取ると、
Aは本丸北西側で、北側が本丸のほぼ真ん中を境に東西 27m27cm、南北 38m18cm、と南東部分の岸高 60cmである。Bは東西 27m27cm、南北 11m81cmである。
Cは東西 36m36cm、南北 9m9cmである。Dは東西 25m45cm、南北 13m63cmである。
Eは西側で東西 16m36cm、南北 36m36cmで、Aとの岸高は 2m42cm、西側からの岸高は 3m93cmある。
Fは東西 30m90cm、南北 38m18cm、Dとの岸高は 3m63cm、Eとの岸高は東が 3m3cm、西が 2m72cm、
周りの岸高は北東が 12m72cm、南東が 12m42cm、南が 9m9cmである。虎口周辺は西が 1m51cm、
南が 3m63cm、1m81cm、2m12cmである。
城の南北はA38m18cmとF38m18cmで 76m36cm、東西は南側がE16m36cmとF30m90cmで 47m26cm、北側はAとBが共に 27m27cmで 54m54cmとなる。南北が 76m36cm、東西は北側が 54m54cm、南側が 47m26cmで、北側がひろく、南側が 7m28cm程狭くなっている。東側は地形をそのまま利用しているようで、岸高が西に比べ、12m72cmと 12m42cmと高くなっている。

発掘調査該当部分は、北側の堀について、西堀の西側が巾 9m90cm深さ 5m45cm、北池が巾 23m63cm、深さ 5m15cm、水深 60cmである。位置が土居の南端付近で調査区外になるが、「から堀」の東堀は巾 10m90cm、深さ 3m63cmで、本丸西側は岸高 5m75cm、本丸のほぼ真ん中を境に東西 27m27cm、と小文字で西東 27m27cmである。

なお侍屋敷は東西 92m72㎝、南北西側 56m36㎝、南北東側 30m90㎝、岸高は北西が 1m81㎝、北東が 1m81㎝、西側は北 90㎝、南が 1m81㎝、南側は西から 2m72㎝、2m72㎝、5m45㎝、5m45㎝である。

4. 地籍図

地籍図（第 115 図）は、愛知県公文書館が所蔵する 1884（明治 17）年調製の字分全図を用いて作図し、地目は記号化し、○は宅地、∨は畑地、Ψは藪・草生、∧は山林である。地籍図から北側堀の形状は見いだせないが、大きな谷部分の山林地目の一部が堀になっているようである。南北に繋がる複数の広い区画の東側と西側にはおおきな違いが見られる。西側では無印部分が境となりＬ字形の区画が二区画見られ、西側から区画が連なる連郭式の曲輪にも見える。地形の制約もあるが細かな区画が複数集まった東側とＬ形に囲まれた比較的大きな区画とに分けられる。



第 115 図　桑下城周辺縄張図と地籍図

5. 桑下城の発掘調査

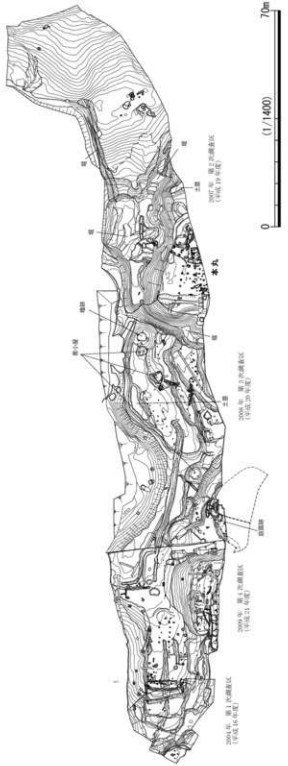
桑下城について、福島克彦氏が『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ』に、「城郭遺構は上品野の北背後の丘陵上に位置する。丘陵の突端部をはずし、やや奥まったところに立地している点に特色がある。そのため東西両端を明確な堀切で遮断し突端に築かなかった弱点を克服している。また北の水堀がふたつの堀切をつないでいる。以上の形態から推定して基本的に主郭を中心とする館城という正確が濃厚である。そして南斜面は急斜面出あるが帯曲輪が段々に築かれていること、さらに北側面を堀で遮断していることなどから南の上品野村を強く意識した立地、構造といえよう。なお上品野村には城前という字名が残っている。品野城と桑下城が上品野村をはさむかたちで立地していることがわかる遺構形態から勘案して館城＝桑下城、詰めの城＝品野城と理解すべき出あろう。」と考察され、佐分清親氏原図の縄張り図（第 115 図）が掲載されている。

桑下城跡の発掘調査箇所（第 116 図）を古城絵図と地籍図（第 115 図）を参考にすると、調査範囲は西側の城域外と主郭部分の北部、城の背後に面した城の裏手部分（第 114 図）に相当する。基本的な防御施設の有無からすると、城の東限が堀切で画された主郭部分、西限は尾根頂部の土塁を伴う部分までと推定され、それ以西は、北向き斜面が緩やかな自然地形のままで、防御施設の無い「屋敷」と考えられる。4 次に亘る調査から、桑下城の全貌を明らかにすることはできなかったが、新たな知見が得られた。

（1）防御施設

桑下城の防御施設は平成 19 年度 07 区主郭の周囲が顕著で西・北・東側を画する堀切が見られる。主郭中央北側には主郭より低い突出したテラス状平坦面が見られ、平坦面の周囲は北側と東側の形状が崩れ、テラス状平坦面を挟み北側の堀は北西箱堀と北東箱堀に区別できる。西堀（薬研掘）は上端幅 8m、深さ 3.1m である。北側の北西堀（箱堀）は東西 16m × 4m40㎝、で堀の底部が西堀の薬研堀の底より約 80

㎝程低い。主郭と箱堀底の比高差 8m を測る。本丸側法面の傾斜角度は 45 度を測る。この角度は自然の状態で崩れない最大の角度とされる。北東堀（箱掘）は主郭側に弧状を呈した堀で東堀（薬研堀）までの間に三段の段があり南側が高い。東堀（薬研掘）は調査区外に続くが、現状では幅約 7m 主郭との比高差約 6m を測る。東堀（薬研堀）の主郭側には土塁が見られる。



第 116 図　調査区（04・07 ～ 09）全体図 (1:1400)

主郭の周りの遺構は城の最終段階の姿で、当初はどのような規模であったのか、主郭西縁の約 2m の整地層の下からは、別の軸線方向をもつ溝（300SD）とピット列が確認されている等、改修を繰り返したものと思われる。主郭の北東側に土塁の一部が残り、その他遺構の配置等から北・西側にも土塁を巡らせていた可能性が高いが主郭の東側は判然としない。主郭平場より標高が高い北東方向の尾根に竪堀（最大幅 3m70㎝深さ 1m20㎝）が見られ、尾根を遮断し城の防衛施設としている。竪堀（西斜面）の反対側（東斜面）の低い谷を挟み桑下東窯跡の平場へと繋がっていくことから主郭の遮断機能は西側に比べ厳重とはいえない。

桑下城の防御施設は主郭の周囲が顕著で西・北・東側を画する堀切が見られる。主郭中央北側には主郭より低い突出したテラス状平坦面が見られ、平坦面の周囲は北側と東側の形状が崩れ、テラス状平坦面を挟み北側の堀は北西堀（箱堀）と北東堀（箱掘）に区別できる。西堀切（薬研掘）は上端幅 8m、深さ 3.1m である。北側の北西堀（箱掘）は東西 16m × 4m40㎝、で堀の底部が西堀の薬研堀の底より約 80㎝程低い。主郭と箱堀底の比高差 8m を測る。北東堀（箱掘）は主郭側に弧状を呈した堀で東堀（薬研掘）までの間に三段の段があり南側が高い。東堀（薬研掘）は調査区外に続くが、現状では幅約 7m 主郭との比高差約 6m を測る。東堀（薬研堀）の主郭側には土塁が見られる。

主郭の周りの遺構は城の最終段階の姿で、当初はどのような規模であったのか、主郭西縁の約 2m の整地層の下からは、別の軸線方

向をもつ溝とピット列が確認されている等、改修を繰り返したものと思われる。主郭の北東側に土塁の一部が残り、その他遺構の配置等から北・西側にも土塁を巡らせていた可能性が高いが主郭の東側は判然としない。主郭平場より標高が高い北東方向の尾根に竪堀（最大幅 3m70㎝深さ 1m20㎝）が見られ、尾根を遮断し城の防衛施設としている。竪堀（西斜面）の反対側（東斜面）の低い谷を挟み桑下東窯跡の平場へと繋がっていくことから主郭の遮断機能は西側に比べ厳重とはいえない。

（2）曲輪

調査区からは、丘陵西端から尾根南側斜面にかけて、削平整形された平坦面曲輪が連続して主郭を含め？曲輪が検出された。利用頻度の高い空間、あるいは恒常的な居住空間として利用を伺わせる曲輪は、平成 19 年度 07 区主郭と丘陵西寄りで尾根南斜面を長方形に削り込み整形した平成 21 年度 09 区 9 曲輪との二例のみで、搬入品である常滑産陶器壺・甕類、土師器皿、土師器鍋、貿易陶磁器などが散漫に分布し、重複する遺構群が確認されている。平成 21 年度 09 区は古瀬戸前期Ⅲ . Ⅳ段階から大窯 4 期段階までの全時期に、平成 19 年度 07 区は古瀬戸後期Ⅲ段階から大窯 4 期段階までの遺物が出土している。

平成 19 年度 07 区主郭の範囲は東西 43m を測ることから南北も同規模の方形に近い形状と推定される。調査範囲は面積の 1/2 に満たない北側部分であり、最終段階の平坦面には 1 間× 4 間の掘立柱建物跡、溝、土坑、井戸があり、このうち北東寄りで確認された 090SX 土坑は周囲に大型の石材や拳前後の円礫が散乱し、庭園を構成するために搬入された石材と想定している。北辺周縁は特に遺構の密度が低く、唯一確認された 1 × 1 間の特殊な形状の礎石建物跡は、北側の低いテラス状平坦面と関係あると考えられ、平坦面に片面石組の井戸があり竹樋が通され、土坑に流れるように設置されていた。北東堀では土塁の崩落土などの堆積層の下より箸、漆椀、柄杓、杓子、篦、陽物形、下駄など木製品が出土しており、生活の場として日常的に利用されていたことが窺われる。また保存状態が極めて良い、鏡面が映る白銅鏡 1 点が出土している。鏡の直径は 11.3cm、鏡背の文様から「菊花双鶴鏡」で 14 世紀代に京都の工房で製作されたものと思われる。

次に西側屋敷地平成 21 年度 09 区の 9 曲輪は平坦面が 25m × 10m 程度と規模は然程大きくはないが整った形状をしており、東側、西側はそれぞれ土塁、石積などで明確に区切られている。整地層が確認でき、溝や建物跡等から少なくとも 3 段階に分けられる。建物跡は 2 段階に区画溝と 2 間× 3 間？の掘立柱建物を検出し、区画溝と建物跡とほぼ重複する 42㎡程度の範囲に炭化物の集積層を確認した。こちらの曲輪では使用痕のみられる碗、皿、擂鉢類のほか茶入、動物形水滴（猪、兎、鳥）、特異な遺物として鍬形台 1 点が出土した。

そのほか、西側曲輪平成の東側下段にやや広い平坦面があり、調査範囲内では築山、池、井戸からなる小規模な庭園遺構の一部が検出されている。

6. 出土遺物

存続時期を出土遺物の時期別（第 2 表）より、後期Ⅳ段階 45 点（7%）、後期Ⅳ新段階が 111 点（18%）、大窯 1 段階が、245 点（39%）、大窯 2 段階が 145 点（23%）、大窯 3 段階が 46 点（7%）で、大窯 4 段階が 9 点（1%）で、出土点数が多い段階は後期Ⅳ新段階から大窯 2 段階で、降盛した時期は大窯 1 段階となる。平成 21 年度 09 区では大窯 2 段階、平成 20 年度 08 区では大窯 1 段階、平成 19 年度 07 区では大窯 1 段階と、調査区により降盛段階の違いがみられた。

09 区は古瀬戸前期Ⅲ . Ⅳ段階から大窯 4 期段階までの全時期全段階に、07 区は古瀬戸後期Ⅲ段階から大窯 4 期段階までである。09 区が古瀬戸前期段階、07 区が古瀬戸後期段階に初歩的な関わりが始まり、古

瀬戸後Ⅳ期段階頃から主郭と09区9曲輪の付近で造成と居住が、大窯1～2段階にかけて降盛期を迎えた。

例えば主郭部分の大改修以前の面で出土した土師器皿は、淡褐色で砂粒を殆ど含まない径12cmのロクロ糸切り技法であり、同時期の尾張に類似する形態を求めることができる。清洲城下町遺跡では類似する資料が16世紀前半に比定されており、この時期以降に最終時の主郭の姿が形成されたといえる。

主郭最終面で検出された遺構群（井戸・土坑）には大窯3段階の遺物が含まれるが、既に主体となる量ではない。したがって丘陵上の空間利用としては、遅くても古瀬戸後Ⅳ新段階には桑下城跡の屋敷地と主郭（下層）で活動が始まっている。その後に隣接する桑下東窯跡の操業が始まり、窯業生産の終了と城域での居住の停止が、ほぼ同じ時期であったと推定される。戦国時代には桑下東窯跡、西窯跡（大窯1・2段階）が操業していることから、桑下城跡との関連が注目される。

藤澤編年の時期区分は、

古瀬戸後期Ⅳ古段階（1440～1460）、古瀬戸後期Ⅳ新段階（1460～1480）、
大窯第1段階（1480～1530）、大窯第2段階（1530～1560）、
大窯第3段階（1560～1590）、大窯第4段階（1590～1610）である。

瀬戸市域においては古瀬戸後Ⅳ古段階の空白期を経て、後Ⅳ新段階に新たに築かれた窯は、以前とは異なる立地、集落に近い場所が選択されている。大窯初期の窯跡も同様の立地を選択し、多くが古瀬戸窯跡と近い場所に連続するように築かれている。このような分布の群構成より、藤沢良祐氏は『瀬戸市史4』において「第1類型」の周辺には（推定も含めて）中世城館が存在すること、周辺村落も含め急激に減少する大窯3段階後半が「信長の統一期」に対応すると考えられることなどから、古瀬戸後Ⅳ新段階にはじまる窯業生産の導入に在地領主層の関与が想定されると指摘された。

瀬戸市域でこのような窯跡群は、水野地区（昔田1,2,3号窯）、瀬戸地区（朝日窯、朝日下窯）、上品野地区（桑下窯、西窯1,2号窯と桑下東窯）の3地点にコンパクトにまとまっており地域の中核となる集落付近にあったと考えられる。そして中世城館（第　表）は、水野地区では一色山城（磯村氏）・シド山城（水野氏）、瀬戸地区では馬ケ城・瀬戸城（加藤氏）、上品野地区では品野城・桑下城（長江氏）といった各城館の在地領主の名が見られ、城主が立地する村落に対しなんらかの支配権を持っていたことは疑う余地のないことである。

7. 文献史料の桑下城と品野城

戦国期にかけて品野一帯は尾張（織田氏）と三河（松平氏）の国境として常に緊張した土地で、品野城は両氏の抗争の城として知られているが、文献史料に見られる桑下城と品野城について、

桑下城は、江戸時代より城跡として、寛文年間（1661～1673年）に作成された『寛文村々覚書』に

「一　桑下古城跡壱ヶ所　東西三拾間南北四拾間　先年松平内膳家老、永井民部居城之由、今は柴山」

と記されている。

品野城は、宝暦2年（1752）に尾張藩によって編纂が完成した『張州府志』に

「在上品野村。或作科野。其一在村東南山。東西二十間。南北八間餘。松平内膳正家重居此。
若有随筆曰。享禄二年。清康君出兵尾州。大戦勝之。取品野城。賜松平家重。又家忠日記曰。
永禄元年三月。松平監物家次守品野城。織田信長使兵圍之。四面構寨。七日夜家次出兵劫寨。
大敗斬主将數人。尾州軍解圍退散。其後城亦廢矣。」

西暦	年号	内容	地名	時期
1467 〜69	応仁年中 文明頃	品野城主 長江氏の保護により品野窯中興の祖 十右衛門基村 開窯『陶器辞典』 落合城主 長江修理進利景、桑下に移る		古瀬戸後Ⅳ古期 1440〜1460
1477	文明九年	守護所下津の城 焼ける　織田敏定清須城へ		古瀬戸後Ⅳ新段階 1460〜1480
1481	文明十三年	伊勢神宮の門前町の山田に「瀬戸物や」		
1482	文明十四年	品野の城主 長江（永井）民部、今村の城主松原広長と戦い勝利		
1483	文明十五年	守護　所波義良よしすけ　尾張国下津に下る		
1495	明応四年	船田合戦　美濃国 美濃守護職土岐氏を巡る争い清須方敗北		
1518	永正十五年	定光寺禅堂帳『科野長江修理進』科野に有力者 長江氏	科野	大窯第1段階 1480〜1530
1524	大永四年	織田信貞 津島の領主		
1529	享禄二年頃	松平清康（家康の祖父）が攻略 シナ野の郷を奪取⇒落城 松平信定（清康の叔父）にシナ野の郷与る桜井松平家『三河物語』 松平信定 － 松平清定 － 松平家次 － 松平忠吉		
1532	天文元年	清須方織田家と対抗できる力もつ　天文四年（1535）守山崩れ	シナ野	
1549	天文十八年	安城城陥落		
1550	天文十九年	以降尾張国内に今川軍勢が進出		
1552	天文二十一	今川軍は岩崎まで進出　織田信秀病気没		
1553	天文二十二	伊勢神宮の門前町の山田に「瀬戸物座」		
1558	永禄元年	科野城家次 織田信長の攻撃受ける　（今川氏支配）⇒撃退 今川義元 父子 ⇒松平家次に感状を 地誌『因幡志』寛政七年（1795） 「越越氏所蔵」とし「今川義元感状写」尾州科野城 「於尾州科野城合戦夜討謀略、 永禄元年四月朔日 今川義元 花押 越越五藤次殿」	科野城	大窯第2段階 1530〜1560
1559	永禄二年	『武徳編年集成』 岩倉城攻略 岩倉織田方敗北		
1560	永禄三年	桶狭間の戦い 今川義元 死 ［今川氏、品野城を放棄］		
1563	永禄六年	信長が瀬戸に出した 制札 瀬戸物は瀬戸の村へ諸郷の商人が買いにくる		大窯第3段階 1560〜1590
1572	元亀三年	尾張美濃の商人司伊藤惣十郎を任命 諸郷商人、座商人 商人司に統合か		
1573	天正元年	信長が久尻村における開窯を許可		
1582	天正十年	本能寺の変　織田信長 死		
1606	慶長十一年	清洲藩主松平忠吉が春日井郡上品野村を吉田平内に与えた 『上林沂洄丁之部二』	上品野村	大窯第4段階 1590〜1610
1610	慶長十五年	尾張の国拳行が窯屋を瀬戸窯に召還⇒名古屋城築城		
1645 〜 1654	正保 承応　期	古城絵図（蓬左文庫） 桑下城　春日井郡上品野村古城絵図 品野城　春日井郡上品野山城絵図	上品野村	 品野地区の城
1670	寛文　頃	『寛文村々覚書』　上品野村　中品野村　下品野村 上品野村の項 「桑下古城跡壱ケ所　東西三拾間南北四拾間　先年松平内膳家老 永井民部居城之由　今は芝山」	上品野村	品野城 桑下城 × 山崎城 中品野村 竹村孫七郎長方 （織田家臣）
1741	寛保元年	『武徳編年集成』　織田信長の攻撃が二回あった。その時の城主 永禄元年 科野の城主 松平家次　永禄二年城主松平信一		× 落合城 下品野村 戸田.長江.桜木
1792	寛政四年	春日井郡上品野村絵図　「絵図面別紙之覚」 品野城を桜井内膳正の居城 桑下城跡を内膳正の屋敷 桜井内膳正源信定の家老を長江刑部、長江民部		× 阿弥陀ヶ蜂城 下品野村 永井（長江）民部 少輔利景
1792 〜 1822	寛政四年 〜 文政五年	『尾張掬行記』 村絵図では 桑下城跡を城根 といい桜井内膳正源信定の屋敷跡	上品野村	×片草城？ 片草村 桜井十郎か

第 23 表　桑下城関連年表

享禄２年 (1529) に松平清康が品野城を松平家重に与えたことや、永禄元年 (1558) に織田信長の攻撃により松平家次が敗れて、廃城になったことが記されている。

『尾陽雑記』では、「永禄元年戊午三月尾州科野城に、駿河より松平勘四郎大将にて三百の勢を竜。」とあり、城主を松平勘四郎信一とし、『張州府志』とは異なっている。

寛政４年 (1792) に作成された「春日井郡上品野村絵図」付載の「絵図面別紙之覚」には

「一、古城跡森壱ヶ所東西五十間南北六十間秋葉権現森高山是ハ桜井内膳正御居城之由伝へ候

一、城根と申所内膳正御屋敷之由申伝へ只今御見取畑也

一、桜井内膳正源信定家老長江刑部長江民部申伝候」

とあり、品野城を桜井 (松平) 内膳正の居城とし、城根をその屋敷と記している。この城根が桑下城と考えられる。また、『寛文村々覚書』にある桑下城主の永井民部をここでは長江刑部、長江民部としている。

桑下城と品野城に関係する文献史料は宇佐見守氏により検討され、織田氏と松平氏の抗争について、織田氏側の史料には見ることができず、松平氏側も江戸時代になって作成された徳川氏の創業史に多く記載されている。品野城、桑下城が記録に登場するのは江戸時代以降に編纂された地誌類に限られ、品野城については徳川創業史や大名・旗本の系譜集に記され、桑下城については地誌類や村絵図にのみ記載されるという相違が認められる。品野城の呼称について、今川義元の感状に認められる科野城は、元来「科野城」、「科野の城」として一連の城として品野城と桑下城を捉えていた。品野城と桑下城が近世に至って別々の城跡と認識されるようになり、山城で遺構の残りが明確に認識できる山城の品野城が「科野の城」となったと考察された。

長江氏は定光寺に残る『祠堂帳』に「科野長江修理進」の名があり、永正 15 年（1528）に科野（品野）の有力者として長江氏がいたことは明らかである。

品野城は『張州府志』にはじめて記載され、この地を攻略した松平清康（家康祖父）より松平内膳（信定）に与えられ、桑下城はその家老永井（または長江）民部の居城とされている。

永禄年間の織田・今川の戦いについての確実な史料は実は明らかでない。

しかし、寛政７年（1795）成立の地誌『因幡志』に船越氏所蔵の「今川義元感状写」がみられる。

「於尾州科野城合戦夜討謀略、殊首数五十余級討取候事、粉骨之至令感喜候、

仍太刀一腰金帛進入之候也、永禄元年四月〇日　今川義元　花押　船越五藤次殿」

永禄元年（1558）に科野城で合戦があり、科野（品野）城の武将船越五藤次に送られた感状で、このとき桑下城は今川方の城として織田と戦ったと考えられ、織田方との戦いは永禄元年、二年、三年にもあったとされ、永禄三年（1560）の戦いで、織田信長の総攻撃に会い、品野三城（品野城、桑下城、落合城）が焼き払われ、廃城になったと言われているが、このことを江戸時代の資料で確認することはできない。桑下城で焼土層が確認されたのは平成 21 年度 09 区の９曲輪のみである。

品野城跡の発掘調査は行われていないが、土塁、虎口、横堀、堀切などの痕跡をよく留めており、建保年間（1213 ～ 1219）の築造とされ、後に桑下城と同様の終焉をたどったとみられている。『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ』で福島克彦氏は、桑下城を館城、品野城を詰めの城として、二つの城を関連して捉えるとされている。

8. 発掘調査と史料から見た桑下城

「春日井郡上品野村古城絵図」に廃城後の状況が描かれた。「本丸」の西側は「芝」と書かれ曲輪はない。

しかし平成 20 年度 08 調査区と平成 21 年度 09 区の発掘調査によって、「本丸」西側部分より、削平整形された平坦面曲輪や腰曲輪や帯曲輪が検出され「春日井郡上品野村古城絵図」には全く描かれていなかった遺構群が出現したのである。

「本丸」の西側、平成 20 年度 08 調査区では、14 曲輪とした 14 ヶ所の平坦面がある。西堀切の対岸に櫓跡と推定される高まりがあり、櫓について本丸との間に架けられた木橋の橋台との指摘もある。尾根上の北縁に沿って東西方向に土塁の痕跡が残り、櫓跡の西で、床面積 6.4㎡と 7.8㎡の竪穴状遺構が、西南にも 9㎡の 3 基検出された。眺望の開けた位置に配置され、番小屋あるいは作業小屋と推定している。尾根上を幅 1m 深さ 1m30cm規模の溝が東西方向に掘削されているが、城館の時期の早い段階に埋められていた。曲輪縁辺ではなく、土塁や曲輪の壁に沿う方向で複数のピット列が検出され、これらを柵列でなく建物跡とするならば、床面の一方を段の上にさしかける「掛け造り」のような形が想定できる。西南側曲輪の東側下段のやや広い平坦面より築山、池、井戸からなる小規模な庭園遺構の一部が検出されている。

平成 21 年度 09 区調査区では 9 曲輪とした 9 ヶ所の平坦面がある。そのなかの 9 曲輪は丘陵西側で南斜面を長方形に削り込み整形しており、桑下城で唯一焼土層を確認した曲輪でもある。平坦面が東西 25m ×南北 10m 規模で、東側、西側はそれぞれ土塁、石積などで明確に区切られている。整地層が確認でき、溝や建物跡等から少なくとも 3 段階に分けられる。建物跡は 2 段階に区画溝と 2 間× 3 間？の堀立柱建物を検出し、区画溝と建物跡とほぼ重複する 42㎡程度の範囲に炭化物の集積層を確認した。9 曲輪では使用痕のみられる碗、皿、擂鉢類のほか茶入、動物形水滴（猪、兎、鳥）、中国産染付碗、鍬形台が出土し質量とも他の曲輪を圧倒している。区画溝と石組み溝、建物跡から屋敷地として利用されていたことが窺える。

「春日井郡上品野村古城絵図」に描かれていなかった遺構群について、発掘成果をふまえ地籍図（第　図）を改めて見ると、南北に繋がる複数の広い区画の東側「本丸」（主郭）と西側に広がる区画との違いが指摘できる。西側では無印部分が境となる L 字形の区画が二区画、西側から区画が連なる連郭式の曲輪のように見られる。細かな区画が複数集まった東側（主郭）と西側 L 形に囲まれた比較的大きな規則的な区画の二つである。

「春日井郡上品野村古城絵図」に描かれた「本丸」主郭部分は平成 19 年度 07 調査区で、調査は主郭北側で本丸の北西端一部と周囲を巡る西・北・東側の堀部分である。「本丸」北側の堀は北西堀（箱堀）と北東堀（箱堀）に区別できる。西堀（薬研掘）は上端幅 8m、深さ 3.1m である。北側の北西堀（箱堀）は東西 16m × 4m40cm、で堀の底部が西堀の薬研堀の底より約 80cm程低い。主郭と箱堀底の比高差 8m を測る。北東堀（箱掘）は主郭側に弧状を呈した堀で東堀（薬研堀）までの間に三段の段があり南側が高い。東堀（薬研掘）は調査区外に続き、現状では幅約 7m 主郭との比高差約 6m を測る。東堀（薬研堀）の主郭側には土塁が見られる。

遺構は城の最終段階の姿で、当初はどのような規模であったのか、主郭西縁の約 2m の整地層の下からは、別の軸線方向をもつ溝とピット列が確認されていることから、改修を繰り返したものと思われる。主郭の北東側に土塁の一部が残る。地籍図では細かな地目の区画が南北に繋がった東部分である。

「春日井郡上品野村古城絵図」に詳しく描かれている北側の堀について、平成 19 年度 07 区調査から得られた数値〈 〉と比較すると、深さと岸高の高さに関する数値に誤差が少なく、距離について誤差が大きい。

西堀の西側が巾 9m90cm、深さ 5m45cm、〈櫓台から巾上場 8m40cm、深さ 5m50cm〉北池が巾 23m63 cm、深さ 5m15cm、水深 60cm〈巾南北 17m、東西 22m、最深部は本丸北との比高差 7m60cm〉である。〈北

西堀（箱堀）は下場底部分の東西 16m、巾 4m40㎝、主郭との比高差 7m10 ㎝）、

位置が土居の南端付近で調査区外になるが、から堀の東堀は巾 10m90㎝、深さ 3m63㎝〈巾 7m、主郭との比高差 6m〉で、本丸西側は岸高 5m75㎝〈5m50㎝〉、本丸のほぼ真ん中を境に東西 27m27㎝、と小文字で西東 27m27㎝であることから北側の東西が 54m54㎝、〈43m〉となる。

調査から得られた距離と絵図の距離との誤差は、計測した地点の違いもある。「春日井郡上品野村古城絵図」が書かれた時から、堀と曲輪は崩落や開墾等により形状が変化した。そして発掘調査によって得られた距離は遺構掘削時の距離ということもある。

主郭部分と西側部分の様相の違いが発掘調査からも明らかになった。

発掘調査前、桑下城は上品野町の北丘陵地、西端丘陵の地形を利用した南に突き出た南北の広い部分にあったと思われていたが、西端丘陵全体を利用して築かれた城であった。

西側から築き始められ、その後、丘陵の中腹を切り込んで、屋敷地を造成し、居館に発達していったようである。平成 21 年度 09 区調査区 9 曲輪や平成 20 年度 08 調査区の庭園遺構の一部が見られた曲輪などに居館機能が頃間見られる。地籍図に表現された西側地目のＬ字状に囲まれ規則的に並んだ二区画部分である。

主郭部分は細かな地目が雑然と集合した状況である。この主郭部分の細かな地目が大改修された結果なのか、廃城後の開墾によるものか現状ではっきりしない。

大規模な改修を窺わせる部分は絵図にも見られる。北側の堀部分で、西北東の三方に堀を巡らせているが西側の堀が途中で終わっている。この西堀は、堀掘削以前に、西側に続く溝があったことから、堀の掘削が新しいことが明らかになった。大改修は本丸に集中しており、大規模な堀を加え、高い土塁をめぐらし、礎石建ちの建物（門？）を構えている。本丸部分の大改修により、従来の館として構成された曲輪群と整合しない変化が生じたのである。西堀の南部分と平成 20 年度 08 区の南側の本丸と接する曲輪にみられる。従来の館群を含めた全域を本格的な城として改修していれば、このようなことはなかったと考えられる。一方で全域に本格的な改修をする財力と国境の城として改修期間が取れなかったとも考えられる。また本丸の大規模な堀が、完成後どれほど機能したのか、意図的に埋め戻されたことが土層より判明している。土塁が崩され意図的に堀に投棄され堀が埋まり城として役割を終えたのである。

9. 在地領主長江氏

古城絵図に描かれた城であるにも関わらず、城主の系譜について、確かな史料は見当たらない。古城絵図も「上品野村古城絵図」で城の名称の記載はない。桑下城が記録に現れるのが江戸時代以降に編纂された地誌類である。寛政七年（1795）の地誌『因幡志』の中に「船越氏所蔵」「今川義元感状写」が桑下城に関連する史料の中で唯一信憑性の高い史料とされる。

少ない史料を年表（第 23 表）にすると、在地領主長江氏の存在は、定光寺祠堂帳に科野の有力者として長江氏の名が見える。在地領主から桜井松平家の家臣として桑下城に関わりがあったようで、春日井郡上品野村絵図「絵図面別紙之覚」には桜井内膳正源信定の家老を長江刑部、長江民部とある。織田氏と松平氏の攻防の中で長江氏は在地領主から家老へと代わるが、在地の長として影響力をそのまま保持していたと考えられる。

歴史事象を鑑みながら改めて桑下城の盛衰を俯瞰する。

桑下城は在地領主長江氏の居館（庭園遺構）として上品野の北側丘陵にあった。勢力拡大に伴い丘陵の中腹を切り込んで造成し、屋敷地を拡大し館域へと変わっていった。出土点数が多い時期は後期Ⅳ新（1460～1480）段階から大窯２（1530～1560）段階で、隆盛した時期は大窯１（1480～1530）段階となる。常滑産の甕は常滑編年10型式で15世紀第３四半期頃である。いづれにしても城の成立が15世紀後半以降と考えられる。

尾張と三河の境界の城で織田氏との攻防があり、その一端が永禄元年（1558）四月の今川義元感状写に見られる。織田氏に備え、今川氏から派遣された城監が、永禄元年前後に、主郭を中心とする城へ大改修をし、西・北・東側に堀を掘削した。西側の曲輪と主郭を中心とした新たにつくられた南北曲輪との不整合な部分にそれが見られる。

永禄三年（1560）桶狭間の戦い以降に桑下城は尾張と三河の境目の城としての役割を終え破却された。堀の埋土観察より、主郭北側の大規模な堀へ主郭側より土塁の土が大量投棄されて埋められていたことがわかる。

そして江戸時代には古城絵図に描かれた状況になっていたのである。絵図に主郭西側が「芝」としか描かれなかったのは、館と城を明確に区別し、在地領主の居館は西側と認識されていたからで、裏返せば西側は城でないとの認識があったからと言えよう。

本稿を草するにあたり　宇佐見守、坂本範基、武部真木、藤澤良祐、の各氏から御教示と御協力をいただきました。末筆ながら記して謝意を表する次第である。

参考・引用文献

井上喜久男「美濃窯の研究(一)-15～16世紀の陶器生産-」『東洋陶磁　第15・16号』東洋陶磁学会　1988
「美濃桃山陶の成立と展開」『東洋陶磁　第36号』　東洋陶磁学会　2007
宇佐見守「文献資料からみた桑下城と品野城」『研究紀要第10号』愛知県埋蔵センター　2009
千田嘉博「遺跡と史料から考える中世城館」『愛知県史のしおり』県史編さん室　2009
藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館　1986
「大窯期工人集団の史的考察—瀬戸・美濃系大窯を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告第46集』国立歴史民俗博物館　1992
「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第10輯』2002
『瀬戸窯跡群』　同成社　2005
『中世瀬戸窯の研究』　高志書院　2008
『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ（尾張地区）』愛知県教育委員会　1991
『元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会　2002
『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第164集　桑下東窯跡』愛知県埋蔵文化財センター　2011
『張州雑誌　第十二巻』　愛知県郷土資料刊行会　1976
『瀬戸市史　陶磁史篇二』　瀬戸市　1981
『瀬戸市史　陶磁史篇四』　瀬戸市　1993
『愛知県史　別編窯業２　中世・近世　瀬戸』愛知県　2007
『愛知県史　資料編10　中世3』愛知県　2009
『愛知県史研究　第13号』　愛知県　2009
『徳川家康の源流　安城松平一族』安城市歴史博物館　2009
『考古学フォーラム21号』　考古学フォーラム　2012

第 24 表　瀬戸・美濃の城館と窯跡

城跡の資料評価（遺構○／不明ー）	城館所在地区	城館跡	城館との最短距離(km)	窯跡	窯の操業期間 古瀬戸後IV新	大窯1	大窯2	大窯3	大窯4	城館からの方位	備考
○調査	瀬戸/上品野	桑下城跡	0.05	桑下窯跡	○					南	同丘陵
○調査	瀬戸/上品野	桑下城跡	0.05~0.10	桑下東窯跡		●	●			東	同丘陵、谷を挟んで隣接
○調査	美濃/妻木	妻木城士屋敷跡	0.05~0.10	御殿窯跡					●	東	隣接する丘陵斜面
ー	美濃/小名田	光包館跡	0.05~0.10	小名田窯下1号窯跡		●	●			北	川を挟んだ対岸
ー	美濃/小名田	光包館跡	0.05~0.10	小名田窯下6号窯跡		●	●			北	川を挟んだ対岸
ー	美濃/小名田	光包館跡	0.05~0.10	小名田窯下6号窯跡		●				北	
ー	美濃/小名田	光包館跡	0.05~0.10	小名田窯下5号窯跡				●		北	川を挟んだ対岸
ー	美濃/小名田	光包館跡	0.05~0.10	小名田窯下2号窯跡					●	北	川を挟んだ対岸
ー	瀬戸/上水野	一色城跡	0.10	小金山		●				西	同丘陵
ー	瀬戸/瀬戸	瀬戸城跡	0.10	菊畑窯跡	○					西	
○	瀬戸/下品野	山崎城跡	0.10	円六窯跡		●				北	同丘陵
ー	瀬戸/下品野	落合城跡	0.20	勘助窯跡			●	●		南南西	谷を挟んで隣接
○調査	瀬戸/上品野	桑下城跡	0.25	西窯2号窯跡	○					西	谷を2つ挟む丘陵
○調査	瀬戸/上品野	桑下城跡	0.25	西窯1号窯跡		●	●			西	谷を2つ挟む丘陵
ー	瀬戸/下半田川	桑川城跡	0.25	日向窯跡			●			東	蛇ヶ洞川を挟んだ対岸
ー	瀬戸/下半田川	桑川城跡	0.35	休場窯跡			●			南東	蛇ヶ洞川を挟んだ対岸
ー	瀬戸/上水野	一色城跡	0.40	水北A・B窯跡	○					南西	丘陵を1つ挟む
ー	美濃/小名田	光包館跡	0.40	白山社窯跡		●				西南西	
ー	瀬戸/赤津	赤津城跡	0.50	赤津口窯跡			●	●		北東	
ー	瀬戸/下品野	落合城跡	0.50	落合窯跡				●		西	1つ丘陵を挟む
ー	瀬戸/瀬戸	瀬戸城跡	0.50	寺本窯跡	○	●		●		西南西	
ー	瀬戸/瀬戸	瀬戸城跡	0.50	夕日3・4号窯跡		●	●			西	
ー	瀬戸/瀬戸	瀬戸城跡	0.50	王子沢窯跡			●			西南西	
ー	美濃/小名田	光包館跡	0.50	尼ヶ根1号窯跡				●	●	北	
ー	美濃/小名田	光包館跡	0.50	尼ヶ根2号窯跡				●		北	
ー	美濃/小名田	光包館跡	0.50	尼ヶ根4号窯跡					●	北	
ー	瀬戸/上水野	一色城跡	0.60	昔田2号窯跡	○					東南東	水野川を挟んだ東丘陵
ー	瀬戸/上水野	一色城跡	0.60	昔田3号窯跡	○					東南東	水野川を挟んだ東丘陵
ー	瀬戸/上水野	一色城跡	0.60	昔田1号窯跡		●				東南東	水野川を挟んだ東丘陵
ー	瀬戸/上水野	シンド山城跡	0.60	曽野A窯跡				●		東北東	水野川を挟んだ東丘陵
○	藤岡/飯野	追鶴跡	0.75	半済寺窯跡	○	●				東南東	
○	藤岡/飯野	追鶴跡	0.80	窯坂窯跡		●	●			南東	
ー	瀬戸/瀬戸	瀬戸城跡	0.90	朝日窯跡	○	●				南西	
ー	瀬戸/瀬戸	瀬戸城跡	0.90	朝日下窯跡	○	●				南西	
ー	瀬戸/瀬戸	瀬戸城跡	0.90	経塚山西窯跡		●	●	●		南西	
○調査	美濃/妻木	妻木城士屋敷跡	0.90	妻木窯下1・2・3号窯跡				●	●	北西	
ー	美濃/定林寺	土居館跡	0.90	定林寺東洞1号窯跡				●	●	北	
ー	美濃/定林寺	土居館跡	0.90	定林寺東洞4号窯跡					●	北	
ー	美濃/定林寺	土居館跡	0.90	定林寺西洞1号窯跡					●	北	
○	美濃/細野	細野城跡	0.90	細野窯跡			●	●		西	
ー	美濃/元屋敷	大富館跡	1.00	大富西窯跡			●	●		北西	
ー	美濃/元屋敷	大富館跡	1.00	大宮西窯跡			●	●		北西	
ー	瀬戸/[illegible]	定光寺城跡	1.00	月山窯跡				●		北	
ー	瀬戸/赤津	赤津城跡	1.10	凧山A窯跡			●	●		東	赤津川を挟んだ対岸
ー	瀬戸/赤津	赤津城跡	1.10	白山社窯跡				●		東北東	赤津川を挟んだ対岸
○	美濃/妻木	妻木城跡	1.20	妻木窯下1・2・3号窯跡				●	●	北西	最寄りでない
○調査	美濃/妻木	妻木城士屋敷跡	1.25	グミノ木洞窯跡			●	●		北北西	
○	藤岡/飯野	追鶴跡	1.25	釜下窯跡			●	●		東	
ー	瀬戸/下半田川	桑川城跡	1.25	そうれ2号窯跡			●			北東	市之倉町の盆地
ー	美濃/元屋敷	大富館跡	1.30	赤サバ窯跡			●	●		西	
ー	美濃/元屋敷	大富館跡	1.30	隠居表窯跡			●	●		西	
ー	美濃/元屋敷	大富館跡	1.30	元屋敷北窯跡			●	●		西	
ー	美濃/元屋敷	大富館跡	1.30	隠居西窯跡					●	西	
ー	美濃/元屋敷	大富館跡	1.30	元屋敷東1号窯跡					●	西	
ー	美濃/元屋敷	大富館跡	1.30	元屋敷東2号窯跡					●	西	
ー	美濃/元屋敷	大富館跡	1.30	元屋敷東3号窯跡					●	西	
ー	美濃/土岐口	猿山城跡	1.65	藤四郎窯跡			●	●		北西	高山城跡から2.3km
○	美濃/丸山	久々利城跡	1.80	浅間東					●	南	千村氏陣屋跡から南南東1.75km
○	美濃/丸山	久々利城跡	1.80	浅間西					●	南	千村氏陣屋跡から南南東1.75km
ー	美濃/多治見	多治見国長邸跡	1.90	生田7号窯跡			●	●		東	
ー	美濃/元屋敷	大富館跡	2.00	丸石東窯跡			●	●		西南西	
○	美濃/丸山	久々利城跡	2.10	若林窯跡					●	東南東	
○	美濃/丸山	久々利城跡	2.15	大萱窯下窯跡			●	●		東南東	
○	美濃/丸山	久々利城跡	2.25	岩ヶ根窯跡					●	東南東	
○	美濃/元屋敷	高山城跡	2.25	深沢窯跡			●	●		西	
○	美濃/丸山	久々利城跡	2.35	向林窯跡					●	東南東	
○	美濃/丸山	久々利城跡	2.40	牟田洞窯跡					●	東南東	
ー	美濃/多治見	多治見国長邸跡	2.70	滝呂日影1号窯跡			●	●		南東南	滝呂の盆地
○	美濃/丸山	久々利城跡	2.90	中表窯跡			●	●		南東	
○	美濃/丸山	久々利城跡	2.90	中裏窯跡					●	南東	
○	美濃/細野	細野城跡	2.90	柿野1号窯跡			●	●		南西	南西の別の盆地
○調査	美濃/妻木	妻木城士屋敷跡	3.30	陶ヶ丘1号窯跡			●	●		西	笠原の盆地
○調査	美濃/妻木	妻木城士屋敷跡	3.40	妙土窯跡			●	●		西北西	笠原の盆地
ー	美濃/元屋敷	大富館跡	3.50	高根窯沢窯跡					●	北西	光包館跡から同距離
ー	美濃/元屋敷	大富館跡	3.50	高根西窯跡					●	北西	光包館跡から同距離
ー	美濃/元屋敷	大富館跡	3.50	高根一の沢窯跡					●	北西	光包館跡から同距離
ー	美濃/小名田	光包館跡	3.50	高根窯沢窯跡					●	北東	大富城跡からも同距離
ー	美濃/小名田	光包館跡	3.50	高根西窯跡					●	北東	大富城跡からも同距離
ー	美濃/小名田	光包館跡	3.50	高根一の沢窯跡					●	北東	大富城跡からも同距離
○	美濃/丸山	久々利城跡	3.60	由右衛門窯跡					●	南東	
○	美濃/丸山	久々利城跡	3.60	山之神窯跡					●	南東	

参考・引用文献目録

A．発掘調査報告書

『妙土窯跡発掘調査報告書』　笠原町教育委員会　1976
『平安窯跡研究調査報告　第 13 輯　法住寺殿跡』　財団法人古代学協会　1984
『一乗寺朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅴ　第 29 次 7・78 次調査』　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館　1995
『暁窯跡　第 3・4・5 号窯跡の調査』　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　1995
『兵庫県文化財調査報告　第 194 冊　三田城発掘調査報告書』　兵庫県教育委員会　2000
『国指定史跡小長曽陶器窯跡』　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2002
『元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書』　土岐市教育委員会　2002
『下石西山窯跡発掘調査報告書』　土岐市教育委員会財団法人土岐市埋蔵文化財センター　2004
『尉屋田Ａ窯跡』　財団法人瀬戸市文化振興財団　2009
『兵庫県文化財調査報告　第 365 冊　宮内堀脇遺跡Ⅰ』　兵庫県教育委員会　2009
『沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 49 集　首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）』
　沖縄県立埋蔵文化財センター　2009
『愛知県埋蔵文化財調査報告書　第 164 集　桑下東窯跡』
　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2011
『愛知県埋蔵文化財調査報告書　第 164 集　上品野Ｅ窯跡』
　公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

B．論文等

井上喜久男　「美濃窯の研究（一）-15 ～ 16 世紀の陶器生産 -」『東洋陶磁　第 15・16 号』　東洋陶磁学会　1988
　『尾張陶磁』　ニュー・サイエンス社　1992
　「近世の瀬戸・美濃」『東洋陶磁史 ―その研究と現在― 』　東洋陶磁学会　2002
　「美濃桃山陶の成立と展開」『東洋陶磁　第 36 号』　東洋陶磁学会　2007
宇佐見　守　「文献資料からみた桑下城と品野城」『研究紀要　第 10 号』
　財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター　2009
小澤　一弘　「桑下東窯跡と桑下城 - 大窯と城館 - 」『考古学フォーラム 21 号』考古学フォーラム　2012
畠山　誠一　「桑下城のある景観と歴史」『考古学フォーラム 21 号』考古学フォーラム　2012
久保　智康　「鏡と鏡箱の関係をさぐる」『週刊朝日百科　日本の国宝 39 号』　朝日新聞出版　1997
　「鏡と製作と流通をめぐる諸問題」『月刊考古学ジャーナル 10 月号 No.507』　2003
鈴木　正貴　「桑下城跡における庭園遺構の可能性」『考古学フォーラム 21 号』考古学フォーラム　2012
末永　雅雄　「三尾銅から鏃形への連想」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』　関西大学　1983
中井　均　「中世城館と生産遺跡」『考古学フォーラム 21 号』考古学フォーラム　2012
服部　英雄　「昭和 30 年代・遺尾平野と周辺の中世城館」『九州大学大学院比較社会文化研究科紀要 16』　九州大学　2010
藤澤　良祐　「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要Ⅴ』　瀬戸市歴史民俗資料館　1986

　「大窯期工人集団の史的考察 ―瀬戸・美濃系大窯を中心に― 」
　『国立歴史民俗博物館研究報告　第 46 集』 国立歴史民俗博物館　1992
　「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第 10 輯』　2002
　「瀬戸・美濃大窯の生産と流通」『戦国時代の考古学』　高志書院　2003
　『中世瀬戸窯の研究』　高志書院　2008

C．その他

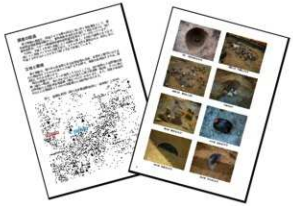
『張州雑誌　第十二巻』　愛知県郷土資料刊行会　1976
『瀬戸市史　陶磁史篇二』　瀬戸市　1981
『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ（尾張地区）』　愛知県教育委員会　1991
『瀬戸市史　陶磁史篇　四』　瀬戸市　1993
『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』　愛知県　2007
『美濃の古陶』　光琳社　1976
『日本やきもの集成３』　平凡社　1980
『陶磁器の文化史』　国立歴史民俗博物館　1998
『列島に拡がる大窯製品 －東日本の様相 - 』　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　1999
『列島に華開く大窯製品 －西日本の様相 - 』　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2000

『瀬戸大窯とその時代』　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2001
『シンポジュウム　「戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品－東アジア的視野から－」資料集』
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2001
『土岐市収蔵品図録Ⅱ　―収蔵品にみる美濃窯の歴史―』　土岐市美濃陶磁歴史館　2004
『土に眠る和鏡　―尾張・三河の出土例から―』　名古屋市見晴台考古資料館　2004
『愛知県史研究　第13号』　愛知県　2009
『徳川家康の源流　安城松平一族』　安城市歴史博物館　2009
『考古学フォーラム21号』　考古学フォーラム　2012
『「戦国陶磁」を探る－中世と桃山の狭間－』　愛知県陶磁資料館　2012

D. 桑下城発掘調査関連

『平成16年度年報』　愛知県埋蔵文化財センター　2005
『平成19年度年報』　愛知県埋蔵文化財センター　2007　「桑下城現地説明会資料」　2007
『平成20年度年報』　愛知県埋蔵文化財センター　2008　「桑下城現地説明会資料」　2008
『平成21年度年報』　愛知県埋蔵文化財センター　2009　「桑下城現地説明会資料」　2009
新聞記事　2008年2月7日（木）　読売新聞　朝刊　全国版　中日新聞　朝刊　県内版、
2月8日（金）　読売新聞　朝刊　歴史
2月17日（日）読売新聞　朝刊　毎日新聞　朝刊
NHK　TV『歴史秘話ヒストリア』第72回「つらい時こそ一歩前へ　徳川家康の決断」平成23年4月20日放送

桑下城跡 2008　現地説明会資料



桑下城跡 07　現地説明会資料

遺構一覧表

04 調査区

調査区	遺構№	グリッド	断面形	埋土	長軸（上端）	長軸（下端）	短軸（上端）	短軸（下端）	深さ	平面形	方位	備考
II SKJ05	SK01	Ⅳ E18n	箱形	図参照	1.33		0.97		0.41	円形	不明	
II SKJ05	SK02	Ⅳ E18i	皿型	褐色シルト質極細粒砂	1.24		0.79		0.11	不整形	N17° E	焼土・炭化物を多く含む
II SKJ05	SK03	Ⅳ E18i	U字形	にぶい黄褐色シルト質極細粒砂	0.37		0.24		0.08	円形	N28° E	
II SKJ05	SK04	Ⅳ E18i	U字形	にぶい黄褐色シルト質極細粒砂	0.36		0.33		0.24	円形	N43° E	
II SKJ05	SK05	Ⅳ E18i	U字形	にぶい黄褐色シルト質極細粒砂	0.53		0.31		0.12	円形	N36° W	
II SKJ05	SK06	Ⅳ E18i	U字形	にぶい黄褐色シルト質極細粒砂	0.49		0.39		0.10	円形	N50° E	
II SKJ05	SK07	Ⅳ E16m	U字形	暗褐色シルト質極細粒砂	0.55		0.40		0.80	円形	N5° E	
II SKJ05	SD01	Ⅳ E16m・16n	V字形	図参照	3.80		1.49		0.87	直線	W0° S	
II SKJ05	SD02	Ⅳ E15l・15m	箱形	図参照	2.63		0.32		0.14	直線	W22° S	
II SKJ05	SD03	Ⅳ E17i・17j・18j	皿形	図参照	10.98		1.43		0.54	弧状	—	
II SKJ05	SD04	Ⅳ E17n・18n	V字形	図参照	11.67		1.45		0.73	弧状	—	
II SKJ05	SX01	Ⅳ E18n	箱形	図参照	7.45		2.91		0.67	不整形	W3° N	
II SKJ05	SX02	Ⅳ E17j・17k・17l・17m	箱形	図参照	17.90		2.04		0.42	溝状	—	整地土

09 調査区

調査区	遺構№	グリッド	断面形	埋土	長軸（上端）	長軸（下端）	短軸（上端）	短軸（下端）	深さ	平面形	方位	備考
SKJ09	157SD	5F16b～5F16e		平成20年度の土色に準ずる	-12.76		-1.73		-0.84			3曲輪（3面）平成２０年度から続く溝
SKJ09	317SP	5E18o		7.5YR5/6 明褐色土	0.36		0.32		0.33			5曲輪（3面）
SKJ09	318SK	5E18p		7.5YR5/6 明褐色土	1.52		1.32		0.46			5曲輪（3面）
SKJ09	319SP	5E18p		7.5YR4/6 褐色土	0.37		0.33		0.22			5曲輪（3面）
SKJ09	320SD	5E16n～5E16s		セクション図参照	-25.81		-2.27		-1.05			4曲輪（0面）
SKJ09	321SD	5E16n～5E18n	○	セクション図参照	-14.9		-1.27		-0.88			4曲輪（3面）
SKJ09	322SD	5E17n		10YR4/4 褐色土	2.65		-0.48		-0.11			4曲輪（3面）
SKJ09	323SP	5E16n		7.5YR5/6 明褐色土	0.56		0.43		0.11			4曲輪（3面）
SKJ09	324SP	5E16n		7.5YR5/6 明褐色土	-0.37		0.29		0.14			4曲輪（3面）
SKJ09	325SP	5E16n		7.5YR4/6 褐色土	0.49		0.41		0.11			4曲輪（3面）
SKJ09	326SP	5E16o		7.5YR5/6 明褐色土	0.37		-0.28		0.11			4曲輪（3面）
SKJ09	327SP	5E16o		7.5YR5/6 明褐色土	0.25		0.23		0.15			4曲輪（3面）
SKJ09	328SP	5E16n		7.5YR5/6 明褐色土	0.47		0.27		0.11			4曲輪（3面）
SKJ09	329SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	330SD	5E16o～5E18o	立面	セクション図参照	-10.91		-0.63		-0.35			4曲輪～5曲輪石列（3面）
SKJ09	331SK	5E16o	○	セクション図参照	-1.71		1.64		-1.54			4曲輪（3面）
SKJ09	332SP	5E16o		10YR5/6 黄褐色土	0.22		0.18		0.06			4曲輪（3面）
SKJ09	333SD	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	334SP	5E17o		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.22		0.21		0.04			4曲輪（3面）
SKJ09	335SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	336SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	337SP	5E17n		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.34		-0.25		0.41			4曲輪（3面）
SKJ09	338SD	5E17m～5E17r		セクション図参照	-21.83		-3.24		-1.06			4曲輪（3面）
SKJ09	339SP	5E17n		7.5YR4/6 褐色土	0.29		-0.27		0.2			4曲輪（3面）
SKJ09	340SP	5E17n		7.5YR4/6 褐色土	0.36		0.29		0.1			4曲輪（3面）
SKJ09	341SP	5E18n		7.5YR4/6 褐色土	0.27		0.23		0.29			4曲輪（3面）
SKJ09	342SP	5E16o		7.5YR4/6 褐色土	0.41		0.26		0.12			4曲輪（3面）
SKJ09	343SP	5E16o		10YR5/8 黄褐色土	0.4		0.33		0.14			4曲輪（3面）
SKJ09	344SK	5E16o		10YR4/6 褐色土	0.93		-0.71		0.72			4曲輪（3面）
SKJ09	345SK	5E16o		10YR5/6 黄褐色土	1.04		0.87		0.18			4曲輪（3面）
SKJ09	346SK	5E16o		10YR4/6 褐色土	0.83		0.62		0.22			4曲輪（3面）
SKJ09	347SP	5E16o		7.5YR4/6 褐色土	0.38		0.35		0.23			4曲輪（3面）
SKJ09	348SP	5E16o		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.52		0.35		0.06			4曲輪（3面）
SKJ09	349SP	5E16o		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.33		0.23		0.06			4曲輪（3面）
SKJ09	350SP	5E16p		7.5YR5/6 明褐色土	0.41		0.29		0.08			4曲輪（3面）
SKJ09	351SK	5E16p		7.5YR5/8 明褐色土	1.66		0.88		-0.68			4曲輪（3面）
SKJ09	352SK	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	353SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	354SK	5E16p		7.5YR5/6 明褐色土	0.88		0.57		0.11			4曲輪（3面）
SKJ09	355SD	5E16p		10YR5/6 黄褐色土	1.51		-0.3		-0.23			4曲輪（3面）
SKJ09	356SK	5E16r		10YR5/6 黄褐色土（拳大の石を含む）	-0.62		-0.25		0.24			4曲輪（3面）
SKJ09	357SX	5E16r		10YR5/6 黄褐色土	-1.21		-0.84		0.49			4曲輪（3面）
SKJ09	358SX	5E16q		10YR5/6 黄褐色土（炭化物を含む）	4.69		-0.64		-1.25			4曲輪（3面）
SKJ09	359SX	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	360SD	5E16o		10YR5/6 黄褐色土（炭化物を含む）	-1.46		-0.58		0.22			4曲輪（3面）
SKJ09	361SP	5E17p		7.5YR5/6 明褐色土	0.32		0.3		0.22			5曲輪（柵列534SA）3面
SKJ09	362SP	5E17q		10YR6/6 明黄褐色シルトと10YR6/4にぶい黄橙砂の崩土	0.28		0.27		0.1			4曲輪（3面）
SKJ09	363SP	5E17q	○	セクション図参照	0.6		0.49		0.82			4曲輪（柵列536SA）3面

遺構一覧表

調査区	遺構№	グリッド	断面形	埋土	長軸（上端）	長軸（下端）	短軸（上端）	短軸（下端）	深さ	平面形	方位	備考
SKJ09	364SP	5E17r		10YR4/3 にぶい黄褐色土（炭化物を含む）	0.45		0.35		0.63			4 曲輪（柵列 536SA)3 面
SKJ09	365SP	5E17r		10YR4/4 褐色土と 10YR6/6 にぶい黄橙色サバ土の斑土	0.33		0.27		0.16			4 曲輪（3 面）
SKJ09	366SP	5E17s		10YR5/8 黄褐色土	0.52		0.47		0.42			4 曲輪（柵列 536SA)3 面
SKJ09	367SP	5E17s		10YR5/8 黄褐色土	0.48		0.45		0.75			4 曲輪（柵列 534SA)3 面
SKJ09	368SP	5E17s		10YR4/3 にぶい黄褐色土（7.5YR5/6 明褐色土ブロックを含む）	0.37		0.34		0.11			4 曲輪（3 面）
SKJ09	369SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	370SK	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	371SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	372SP	5E17s		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.5		0.41		0.8			4 曲輪（柵列 534SA)3 面
SKJ09	373SP	5E17r	○	セクション図参照	0.54		0.42		0.68			4 曲輪（柵列 534SA)3 面
SKJ09	374SP	5E17r		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.45		0.43		0.74			4 曲輪（柵列 534SA)3 面
SKJ09	375SP	5E17q		10YR5/6 黄褐色土	0.71		0.59		0.62			4 曲輪（柵列 534SA)3 面
SKJ09	376SP	5E18q		7.5YR5/6 明褐色土	0.21		0.2		0.22			4 曲輪（3 面）
SKJ09	377SP	5E17q	○	セクション図参照	0.41		0.37		0.71			4 曲輪（柵列 534SA)3 面
SKJ09	378SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	379SP	5E17s		10YR4/4 褐色土	0.35		0.29		0.43			4 曲輪（柵列 535SA)3 面
SKJ09	380SP	5E17s		10YR5/8 黄褐色土	0.55		0.5		0.44			4 曲輪（柵列 535SA)3 面
SKJ09	381SP	5E17s		7.5YR4/6 褐色土（風化花崗岩粒を多く含む）	0.85		0.53		0.45			4 曲輪（柵列 536SA)3 面
SKJ09	382SK	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	383SK	6F1d		10YR5/8 黄褐色粗粒砂	0.59		-0.57		0.23			東小土塁（3 面）
SKJ09	384SK	6F1d		7.5YR5/8 明褐色粗粒砂	1.87		-0.62		-0.42			東小土塁（3 面）
SKJ09	385SA	5F17c ～ 5F20d	○	セクション図参照	-12.24		-2.3		-0.42			東小土塁（0・3 面）
SKJ09	386SX	6E1q	○	セクション図参照	4.36		-2.49		-0.26			8 曲輪（2 面）
SKJ09	387SK	6E1r		10YR4/6 褐色土	0.64		-0.46		0.27			8 曲輪（3 面）
SKJ09	388SK	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	389SK	6E1r	○	7.5YR4/6 褐色土	0.59		0.5		0.51			8 曲輪（3 面）
SKJ09	390SP	6E1r	○	10YR4/6 褐色土（風化花崗岩粒を含む）	0.53		-0.35		0.6			8 曲輪（柵列 430SA)3 面
SKJ09	391SP	6E1q		10YR5/6 黄褐色土	0.24		0.23		0.23			8 曲輪（3 面）
SKJ09	392SD	6E1q ～ 5E20t		7.5YR6/6 橙色粗粒砂（上半）7.5YR5/6 明褐色粗粒砂（下半）	-17.4		-0.5		0.28			8 曲輪～ 9 曲輪（3 面）
SKJ09	393SP	6E1r		7.5YR5/8 明褐色土	0.26		0.25		0.38			8 曲輪（柵列 431SA)3 面
SKJ09	394SW	5E20r ～ 6E1r	立面	-	-8.51		-		-0.65			7 曲輪（南斜面石垣）0 面
SKJ09	395SW	5E20q	立面	-	3.71		-		-1.3			8 曲輪（東斜面石垣）1・2 面
SKJ09	396SD	5E20r		10YR7/6 明黄褐色砂	-5.81		-1.67		0.43			8 曲輪（2 面）
SKJ09	397SD	5E20r・6E1r		7.5YR5/6 明褐色土	-2.68		-0.62		0.15			8 曲輪（3 面）
SKJ09	398SX	5E20o			-1.55		0.5		0.09			8 曲輪（3 面）
SKJ09	399SK	5E19o	○	セクション図参照	1.1		1.04					7 曲輪（3 面）
SKJ09	400SK	5F19b・5F19c	○	セクション図参照	1.13		0.62		-1.1			7 曲輪（3 面）
SKJ09	401SX	5F18c・5F19c			7.65		4.73		1.33			9 曲輪（北東側テラス）0 面
SKJ09	402SA	6E1q	○	セクション図参照	5.43		1.59		0.66			9 曲輪（テラス部北斜面）0 面
SKJ09	403SP	6E1q		10YR4/6 褐色土	0.37		0.29		0.57			8 曲輪 386SX 内（柵列 431SA)3 面
SKJ09	404SD	5E20q		10YR5/8 黄褐色土	-2.46		-0.41		-0.1			8 曲輪（2 面）
SKJ09	405SP	6E1r	○	7.5YR5/6 明褐色土	0.47		-0.25		0.55			8 曲輪 386SX 内（柵列 430SA)3 面
SKJ09	406SP	6E1q		7.5YR5/6 明褐色土	-0.26		0.21		0.27			8 曲輪（386SX 内）3 面
SKJ09	407SP	6E1q	○	7.5YR4/6 褐色土	0.5		-0.25		0.59			8 曲輪 386SX 内（柵列 430SA)3 面
SKJ09	408SP	6E1q		10YR5/6 黄褐色土	0.31		0.29		0.53			8 曲輪 386SX 内（柵列 431SA)3 面上層
SKJ09	409SP	5E20q		10YR5/8 黄褐色土	0.3		0.27		0.15			8 曲輪（386SX 内）3 面
SKJ09	410SK	6E1q		7.5YR5/6 明褐色土	1.4		0.58		0.14			8 曲輪（386SX 内）3 面
SKJ09	411SD	5E20s		大トレンチセクション参照	1.26		-0.97		0.14			9 曲輪（1 面上層）
SKJ09	412SK	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	413SK	5E20s		10YR4/6 褐色土	0.38		0.36		0.23			9 曲輪（1 面上層）
SKJ09	414SK	5E20t		7.5YR2/3 極暗褐色土（焼土ブロックを多く含む）	0.7		0.25		-0.21			9 曲輪（1 面）
SKJ09	415SK	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	416SK	5E20t		5YR3/6 暗赤褐色焼土と 7.5YR5/6 明褐色土と 10YR4/4 褐色土の斑土（炭化物を含む）	0.76		0.42		0.17			9 曲輪（1 面）
SKJ09	417SD	5E20t		5YR5/8 明赤褐色焼土と 5YR5/6 明赤褐色土の斑土（炭化物を含む）	-2.07		0.45		-0.19			9 曲輪（1 面）
SKJ09	418SK	5E20t		7.5YR5/6 明褐色土	0.41		0.38		0.58			9 曲輪（1 面）
SKJ09	419SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	420SK	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	421SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	422SK	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	423SK	5E20s		7.5YR4/6 褐色土	0.32		-0.23		0.07			9 曲輪（1 面）
SKJ09	424SK	5E20s		7.5YR4/6 褐色土	0.5		-0.48		0.09			9 曲輪（1 面）
SKJ09	425SD	5E20s		7.5YR5/6 明褐色土	-4.1		0.54		-0.11			9 曲輪（石列)1 面

遺構一覧表

調査区	遺構No.	グリッド	断面形	埋土	長軸（上端）	短軸（上端）	短軸（下端）	深さ	平面形	方位	備考
SKJ09	4265D	5F20c		10YR4/6 褐色土	-4.32	-0.4		-0.1			9 由輪（1 由）
SKJ09	4275K	6E1i		10YR4/6 褐色土	0.42	0.35		0.11			9 由輪（1 由）
SKJ09	4288P	5F20c		10YR5/6 黄褐色土	0.43	0.37		0.11			9 由輪（1 由）
SKJ09	4289P	5F20c		10YR5/8 黄褐色粗粒砂	0.3	0.28		0.21			9 由輪（1 由）
SKJ09	4305A	6E1q～6E1s	エレベーション	-	-	-		-			8 由輪（横列 3935P/4035P/4075P/6845P/6875P）3 由
SKJ09	4315A	6E1q～6E1s	エレベーション	-	-	-		-			8 由輪（横列 3935P/4035P/4085P）3 由
SKJ09	4325D	6E1i～6F1a	○	セクション図参照	7.38	-0.63		-0.16			9 由輪（石列）1 由
SKJ09	4335K	5F20a		7.5YR4/4 褐色砂土と 7.5YR3/3 暗褐色砂土の混土（炭化物を含む）	0.61	0.56		0.19			9 由輪（1 由）
SKJ09	4345K	5F20a	○	セクション図参照	1.16	0.81		-0.6			9 由輪（1 由）
SKJ09	4355D	5F19a・5F20a	点由		-7.7	0.43		0.1			9 由輪（石列）1 由
SKJ09	4365K	5F20a		7.5YR5/6 明褐色土（炭化物と焼土ブロックを含む）	0.48	-0.3		0.19			9 由輪（1 由）
SKJ09	4375P	5F20a		7.5YR4/6 褐色土	0.27	0.25		0.19			9 由輪（1 由）
SKJ09	4385K	5E20i		10YR5/6 黄褐色土と 7.5YR5/6 明褐色土の混土	0.38	0.37		0.13			9 由輪（1 由上層）
SKJ09	4395P	5E20i		10YR5/6 黄褐色土と 7.5YR5/6 明褐色土の混土	0.35	0.32		0.5			9 由輪（1 由・2 由）
SKJ09	4405K	6E1s		7.5YR4/6 褐色土	0.47	0.34		-0.52			9 由輪（1 由）
SKJ09	4415K	-		-	-	-		-			欠番
SKJ09	4425K	6E1t		7.5YR5/8 明褐色土	0.43	0.36		0.16			9 由輪（1 由）
SKJ09	4435D	6E1c	○	セクション図参照	-0.8	-0.51		-0.5			9 由輪（1 由）
SKJ09	4445D	5F20b・6F1c	○	セクション図参照	-7.42	-0.47		-0.14			9 由輪（1 由）
SKJ09	4455X	6F1c		7.5YR4/6 褐色土	-1.9	-0.79		-0.22			9 由輪（1 由）
SKJ09	4465D	6E1s		7.5YR5/6 明褐色土	-1.32	0.31		-0.06			9 由輪（1 由）
SKJ09	4475P	5E20i		7.5YR4/6 褐色土	0.31	0.27		0.23			9 由輪（1 由）
SKJ09	4485P	5E20i		10YR4/6 褐色土	0.39	0.35		-0.53			9 由輪（1 由）
SKJ09	4495K	5E20i		10YR4/6 褐色土（炭化物含む）	0.91	0.69		-0.81			9 由輪（1 由）
SKJ09	4505P	5E20x		10YR4/4 褐色土	0.29	0.26		0.22			9 由輪（1 由）
SKJ09	4515P	5E20x		7.5YR5/6 明褐色土	-0.24	0.2		0.05			9 由輪（1 由）
SKJ09	4525D	5E20x		5YR3/6 暗赤褐色砂土と 7.5YR5/6 明褐色土の混土（炭化物を含む）	1.16	0.22		0.08			9 由輪（1 由）
SKJ09	4535P	5E20i		7.5YR5/6 明褐色土	0.23	0.22		0.04			9 由輪（1 由）
SKJ09	4545D	5E20i		7.5YR5/6 明褐色土	-0.54	0.22		0.06			9 由輪（1 由）
SKJ09	4555P	5E20x		5YR4/8 赤褐色粒土と 7.5YR5/8 明褐色土の混土（炭化物片を含む）	-0.25	0.21		0.08			9 由輪（1 由）
SKJ09	4565K	5E20i		7.5YR5/6 明褐色土	0.48	0.26		0.07			9 由輪（1 由）
SKJ09	4575P	5E20i		7.5YR4/6 褐色土	0.31	0.29		0.11			9 由輪（1 由）
SKJ09	4585E	5F20c		7.5YR5/6 明褐色土	1.35	0.97		0.38			9 由輪（1 由）
SKJ09	4595P	5F20i		7.5YR5/6 明褐色土	0.36	0.35		0.15			9 由輪（1 由）
SKJ09	4605P	5E20i		7.5YR5/6 明褐色土	0.33	0.28		0.2			9 由輪（1 由）
SKJ09	4615K	5E20i		7.5YR4/6 褐色土	1.26	0.47		-0.21			9 由輪（1 由）
SKJ09	4625P	5E20i		5YR2/2 黒褐色土と 2.5Y4/8 赤褐色粒土の混土（炭化物を含む）	0.28	0.24		0.14			9 由輪（1 由）
SKJ09	4635P	5E20i		7.5YR4/6 褐色土（炭化物含む）	0.45	0.32		0.13			9 由輪（1 由）
SKJ09	4645P	5E20i		7.5YR4/4 褐色土（焼土ブロックと炭化物を含む）	0.29	0.22		0.1			9 由輪（1 由）
SKJ09	4655K	5E20i		7.5YR4/4 褐色土（焼土ブロックと炭化物を含む）	0.69	0.49		0.22			9 由輪（1 由）
SKJ09	4665K	5E20i		7.5YR4/4 褐色土（炭化物を含む）	0.61	0.22		0.16			9 由輪（1 由）
SKJ09	4675P	5E20r		7.5YR4/6 褐色土	0.34	0.32		0.38			9 由輪（1 由）
SKJ09	4685K	5E20i		7.5YR4/6 褐色土	0.49	0.46		0.6			9 由輪（1 由）
SKJ09	4695E	5F20b	○	セクション図参照	2.06	1.82		0.71			9 由輪（1 由）
SKJ09	4705D	5F20b・5F20c		10YR4/6 褐色シルトと 7.5YR4/6 シルトの混土	-7.89	-0.48		0.16			9 由輪（1 由）
SKJ09	4715P	5F20b		10YR4/6 褐色シルトと 2.5YR4/6 シルトの混土	0.29	0.25		0.13			9 由輪（1 由）
SKJ09	4725D	5F20b・5F20c		10YR4/6 褐色シルトと 7.5YR4/6 シルトの混土	-1.65	0.2		0.04			9 由輪（1 由）
SKJ09	4735D	5F20b		10YR4/6 褐色シルトと 7.5YR4/6 シルトの混土	3.67	0.31		0.06			9 由輪（1 由）
SKJ09	4745P	5F20c		10YR5/2 灰黄褐色シルトと 7.5YR3/4 暗褐色シルトの混土	0.36	0.31		0.14			9 由輪（1 由）
SKJ09	4755P	5F20c		10YR5/2 灰黄褐色シルトと 7.5YR3/4 暗褐色シルトの混土	0.25	-0.16		0.07			9 由輪（1 由）
SKJ09	4765P	5F20c		10YR3/3 暗褐色シルト	0.4	0.33		0.17			9 由輪（1 由）
SKJ09	4775P	5F20c	○	2.5Y5/4 黄褐色シルト	0.41	0.33		0.38			9 由輪（1 由）
SKJ09	4785K	5F19c		7.5YR5/6 明褐色シルト	0.63	0.33		0.18			9 由輪（1 由）

遺構一覧表

調査区	遺構No	グリッド	断面形	埋土	長軸（上端）	長軸（下端）	短軸（上端）	短軸（下端）	深さ	平面形	方位	備考
SKJ09	479SD	5F20c		10YR4/6 褐色シルトと 7.5YR4/6 シルトの互層	-4.75		-0.31		-0.1			9曲輪（1面）
SKJ09	480SD	5F20c		10YR4/6 褐色シルトと 7.5YR4/6 シルトの互層	-1.08		0.21		0.04			9曲輪（1面）
SKJ09	481SP	5F20c	○	10YR6/6 明黄褐色シルトと 5Y4/2 灰オリーブシルトの混土	0.36		0.3		0.43			9曲輪（1面）
SKJ09	482SK	5F20c		10YR5/6 黄褐色シルト	0.54		0.4		0.17			9曲輪（1面）
SKJ09	483SK	5F20c	○	セクション図参照	0.45		0.42		0.3			9曲輪（1面）
SKJ09	484SK	5E19c		7.5YR5/8 明褐色土	0.64		0.42		0.52			9曲輪（1面）
SKJ09	485SP	5E20s		7.5YR3/4 暗褐色土	0.37		0.34		0.21			9曲輪（1面）
SKJ09	486SK	5E20s	○	セクション図参照	0.48		0.34		0.29			9曲輪（1面）
SKJ09	487SD	5F20a・5F20b・6F1b		10YR4/6 褐色シルト	-11.91		-0.56		-0.17			9曲輪（1面）
SKJ09	488SD	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	489SD	5F20a・5F20b・6F1b	○	セクション図参照	-12.35		-0.82		-0.32			9曲輪（1面・2面）
SKJ09	490SP	5E20t		10YR6/6 明黄褐色土（風化花崗岩粒を多く含む）	0.39		0.35		0.2			9曲輪（1面）
SKJ09	491SP	5E19t		10YR4/4 褐色土	0.35		0.34		0.24			9曲輪（1面）
SKJ09	492SK	5F18b	○	セクション図参照	0.85		0.76		0.77			9曲輪北斜面（3面）
SKJ09	493SK	5F19t	○ 出土状況図	10YR4/3 にぶい黄褐色土	0.52		0.44		-0.39			9曲輪（1面）
SKJ09	494SK	5E20s		7.5YR4/4 褐色土	0.71		0.49		0.5			9曲輪（1面）
SKJ09	495SP	5E20s		7.5YR5/6 明褐色土（5YR3/4 明赤褐色焼土ブロックと炭化物を含む）	0.42		0.29		-0.19			9曲輪（1面）
SKJ09	496SK	5E20s		7.5YR5/8 明褐色土	0.52		0.42		-0.19			9曲輪（1面）
SKJ09	497SK	5E20s		7.5YR5/8 明褐色土	0.5		0.4		-0.23			9曲輪（1面）
SKJ09	498SP	5E20s		7.5YR5/8 明褐色土	0.23		0.23		0.14			9曲輪（1面）
SKJ09	499SX	5E20s			1.75		0.33		-0.15			9曲輪（1面）
SKJ09	500SP	5E20s		7.5YR4/4 褐色土	0.28		-0.15		0.06			9曲輪（1面）
SKJ09	501SA	5E15n～5E15c			-23.36		-1.94		-0.81			4曲輪（0面）
SKJ09	502SK	5F19c	○	セクション図参照	0.68		0.64		0.36			9曲輪北斜面（1面）
SKJ09	503SK	5F19c		7.5YR4/4 褐色土	0.63		0.5		0.39			9曲輪北斜面（1面）
SKJ09	504SE	5F19b	立面		2.74		1.81		-0.76			9曲輪（1面）
SKJ09	505SK	5E20t		10YR5/6 黄褐色土	0.63		0.53		0.29			9曲輪（1面）
SKJ09	506SK	5E20t		10YR5/6 黄褐色土	1.38		0.62		0.15			9曲輪（1面）
SKJ09	507SK	5E20t		10YR5/6 黄褐色土	0.64		0.44		0.3			9曲輪（1面）
SKJ09	508SK	5E20s		7.5YR5/6 明褐色土	0.77		0.63		0.07			9曲輪（1面）
SKJ09	509SD	5E19t・5F19a		7.5YR5/6 明褐色土	6.53		0.55		0.16			9曲輪（1面上層）
SKJ09	510SK	5E20t		10YR5/6 黄褐色土	0.33		0.24		0.08			9曲輪（1面）
SKJ09	511SP	5E19t		7.5YR5/6 明褐色土	0.23		0.21		0.07			9曲輪（1面）
SKJ09	512SW	5E17m	立面	-	2.03		-		-0.94			平成16年度調査区（西斜面石垣）3面
SKJ09	513SP	5E18p		7.5YR5/8 明褐色土	0.39		0.37		0.3			5曲輪（3面）
SKJ09	514SK	5E18p		7.5YR5/6 明褐色土	0.68		0.38		0.26			5曲輪（3面）
SKJ09	515SK	5E16m		10YR5/8 黄褐色土	0.65		0.44		0.12			平成16年度調査区（北斜面）3面
SKJ09	516SK	5E15o		7.5YR5/8 明褐色土	0.77		0.5		-0.46			4曲輪北斜面（3面）
SKJ09	517SK	5E15n	○	セクション図参照	1.18		0.77		-1.12			4曲輪北斜面（3面）
SKJ09	518SK	5E15n		7.5YR5/6 明褐色土	1.37		1.07		-0.89			4曲輪北斜面（3面）
SKJ09	519SK	5E15n		7.5YR5/6 明褐色土	0.98		0.91		-0.26			4曲輪北斜面（3面）
SKJ09	520SP	5E15n		7.5YR5/8 明褐色土	0.37		0.36		0.18			4曲輪北斜面（3面）
SKJ09	521SP	5E16n		10YR4/6 褐色土（炭化物を含む）	0.39		0.33		0.66			4曲輪北斜面（3面）
SKJ09	522SP	5E18r		10YR5/6 黄褐色土	0.45		0.31		0.14			4曲輪（3面）
SKJ09	523SP	5E17q		7.5YR5/6 明褐色土	0.43		0.4		0.85			4曲輪（柵列 534SA）3面
SKJ09	524SP	5E18r		10YR4/6 褐色土	0.33		0.29		0.26			4曲輪（3面）
SKJ09	525SD	5E18p～5E18r	○	セクション図参照	9.15		1.92		0.83			4曲輪（3面）
SKJ09	526SK	5E19n	○	セクション図参照	1.3		0.93		-1.73			321SD内（3面）
SKJ09	527SP	5E16n		7.5YR5/6 明褐色土	0.46		0.36		0.71			320SD内（3面）
SKJ09	528SK	5E15q	○	セクション図参照	1.52		1.19		1.08			4曲輪北斜面（3面）
SKJ09	529SK	5E16r		7.5YR5/8 明褐色土	-1.37		0.86		0.36			4曲輪（3面）
SKJ09	530SP	5E16o		7.5YR5/8 明褐色土	0.21		0.18		0.31			4曲輪（331SK内）3面上層
SKJ09	531SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	532SW	5E15r	○	-	5.32		-		-1.63			4曲輪北斜面（石垣）0面
SKJ09	533SD	5F19a・5F19b		10YR5/6 黄褐色土	5.78		-0.48		-0.25			9曲輪（1面）
SKJ09	534SA	5E17p～5E17s	エレベーション	-	-		-		-			4曲輪（柵列 361SP523SP377SP375SP374SP373SP372SP367SP）3面
SKJ09	535SA	5E17s	エレベーション	-	-		-		-			4曲輪（柵列 379SP380SP）3面
SKJ09	536SA	5E19q～5E17s	エレベーション	-	-		-		-			4曲輪（柵列 363SP364SP366SP381SP）3面
SKJ09	537SK	5E18s		7.5YR5/8 明褐色土	0.66		0.56		0.09			4曲輪（3面）
SKJ09	538SP	5F17b		7.5YR5/8 明褐色土	0.47		0.43		0.26			3曲輪（3面）
SKJ09	539SK	5E18r		7.5YR5/8 明褐色土	1.04		0.86		0.25			4曲輪（3面）
SKJ09	540SK	5E19r		7.5YR5/8 明褐色土	1.2		0.91		0.41			4曲輪（3面）
SKJ09	541SP	5E18q		7.5YR5/8 明褐色土	0.3		0.28		0.45			4曲輪（3面）
SKJ09	542SP	5F20a		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.38		0.3		0.47			9曲輪（2面）
SKJ09	543SP	5F19a	○	セクション図参照	0.54		0.46		0.26			9曲輪（2面）

遺構一覧表

調査区	遺構No.	グリッド	断面形	埋土	長軸（上端）	長軸（下端）	短軸（上端）	短軸（下端）	深さ	平面形	方位	備考
SKJ09	544SP	5F20a		10YR4/3 にぶい黄褐色土（焼土ブロック・炭化物を含む）	0.42		0.28		0.18			9 面輪（2 面）
SKJ09	545SP	5F19a		10YR5/4 にぶい黄褐色サバ土	0.22		-0.18		0.17			9 面輪（2 面）
SKJ09	546SP	5F19a		10YR5/4 にぶい黄褐色サバ土	0.25		0.24		0.16			9 面輪（2 面）
SKJ09	547SP	5F19a		10YR5/4 にぶい黄褐色サバ土	0.25		0.24		0.16			9 面輪（2 面）
SKJ09	548SP	5F19a		10YR6/4 にぶい黄褐色サバ土	0.23		0.22		0.06			9 面輪（2 面）
SKJ09	549SP	5F19a		10YR6/4 にぶい黄褐色サバ土	0.38		0.3		0.09			9 面輪（2 面）
SKJ09	550SP	5F19a		7.5YR5/8 明褐色土	0.26		0.25		0.07			9 面輪（2 面）
SKJ09	551SP	5F19a		10YR5/4 にぶい黄褐色サバ土	0.21		0.2		0.16			9 面輪（2 面）
SKJ09	552SP	5F19a		10YR5/4 にぶい黄褐色サバ土	0.22		0.21		0.04			9 面輪（2 面）
SKJ09	553SP	5F19a		2.5Y5/3 黄褐色サバ土	0.31		0.3		0.29			9 面輪（2 面）
SKJ09	554SP	5F19a		2.5Y5/3 黄褐色サバ土	0.38		0.35		0.27			9 面輪（2 面）
SKJ09	555SP	5E19k		2.5Y5/3 黄褐色サバ土	0.35		0.32		0.25			9 面輪（2 面）
SKJ09	556SP	5E19k		2.5Y5/3 黄褐色サバ土	0.29		0.26		0.31			9 面輪（2 面）
SKJ09	557SP	5E19i		7.5YR5/8 明褐色土	0.19		0.18		0.03			9 面輪（2 面）
SKJ09	558SP	5E20i		10YR5/6 黄褐色土	0.26		0.22		0.12			9 面輪（2 面）
SKJ09	559SP	5E20i		10YR5/8 黄褐色土	0.25		0.23		0.22			9 面輪（2 面）
SKJ09	560SP	5E20i		7.5YR6/8 褐色土	0.27		0.23		0.13			9 面輪（2 面）
SKJ09	561SP	5E19i		7.5YR5/6 明褐色土	0.43		0.41		0.45			9 面輪（2 面）
SKJ09	562SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	563SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	564SK	5F20a		7.5YR4/6 褐色土（焼土ブロック・炭化物を含む）	0.53		0.37		0.42			9 面輪（2 面）
SKJ09	565SK	5F20a		10YR4/6 褐色土	0.56		0.32		0.08			9 面輪（2 面）
SKJ09	566SP	5E20i		7.5YR4/6 褐色土	0.22		0.21		0.32			9 面輪（2 面）
SKJ09	567SK	5E20i		7.5YR5/6 明褐色土	0.43		0.35		0.21			9 面輪（2 面）
SKJ09	568SK	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	569SK	5F20i		10YR5/6 黄褐色土（拳大の石を含む）	0.62		0.42		0.26			9 面輪（2・3 面）
SKJ09	570SK	5F20a		10YR5/4 にぶい黄褐色粘砂と 7.5YR5/6 明褐色土の焼土（炭化物を含む）	1.17		0.61		0.7			9 面輪（2 面）
SKJ09	571SK	5F20a		7.5YR5/8 明褐色土	0.38		0.17		0.1			9 面輪（2 面）
SKJ09	572SD	5E20i・5F20a	○	セクション図参照	-6.92		0.41		0.21			9 面輪（2 面）
SKJ09	573SD	5F20a		7.5YR5/8 明褐色土	-5.14		0.39		0.15			9 面輪（2 面）
SKJ09	574SD	5F20i		10YR4/6 褐色土	17.46		-0.75		0.26			9 面輪（2 面）
SKJ09	575SX	5E20i	☆曲	セクション図参照	2.43		1.36		0.43			9 面輪（2 面）
SKJ09	576SK	5E20i		10YR4/6 褐色土	0.39		0.23		0.14			9 面輪（2 面）
SKJ09	577SK	5E20i		10YR4/6 褐色土	0.62		0.2		0.24			9 面輪（2 面）
SKJ09	578SK	5E19i		10YR5/8 黄褐色土（上下）10YR5/6 黄褐色土（下下）	0.75		0.36		-0.47			9 面輪（2 面）
SKJ09	579SD	5E19i・5E20i		10YR5/6 黄褐色土	1.08		0.14		0.03			9 面輪（2 面）
SKJ09	580SP	5E19i		7.5YR4/6 褐色土	0.5		0.48		0.8			9 面輪（2 面）
SKJ09	581SX	6F1c	○	セクション図参照	3.6		2.77		-0.62			9 面輪（2 面）
SKJ09	582SK	5E19i		7.5YR5/8 明褐色土	0.47		0.37		0.1			9 面輪（2 面）
SKJ09	583SK	5E19i		7.5YR5/8 明褐色土	0.41		0.23		0.12			9 面輪（2 面）
SKJ09	584SP	5E20i		10YR4/6 褐色土	0.22		0.21		0.18			9 面輪（2 面）
SKJ09	585SP	5E20i		10YR5/6 黄褐色土（5Y6/3 オリーブ黄色細砂シルトブロックを含む）	0.35		0.34		0.48			9 面輪（2 面）
SKJ09	586SP	5E20i		7.5YR5/6 明褐色土	0.24		0.21		0.56			9 面輪（2 面）
SKJ09	587SP	5E20i		7.5YR5/8 明褐色土	0.37		0.36		0.39			9 面輪（2 面）
SKJ09	588SP	5E20i		7.5YR5/6 明褐色土（焼土ブロックを含む）	0.3		0.26		0.13			9 面輪（2 面）
SKJ09	589SP	5E20i		7.5YR5/6 明褐色土	0.15		0.13		0.28			9 面輪（2 面）
SKJ09	590SP	5E20i		7.5YR5/6 明褐色土	0.16		0.14		0.25			9 面輪（2 面）
SKJ09	591SP	5E20i		7.5YR5/8 明褐色土（2.5Y4/6 オ・赤褐色焼土を含む）	0.31		0.23		0.29			9 面輪（2 面）
SKJ09	592SP	5F20i	○	セクション図参照	0.3		0.28		0.64			9 面輪（2 面）
SKJ09	593SP	5E20i		7.5YR5/8 明褐色土	0.45		0.38		0.32			9 面輪（2 面）
SKJ09	594SP	5E20i		7.5YR5/6 明褐色土	0.36		0.33		0.62			9 面輪（2 面）
SKJ09	595SP	5E20i		7.5YR5/6 明褐色土	0.47		0.37		0.5			9 面輪（2 面）
SKJ09	596SX	5E20i		炭化層	0.82		0.62		-0.4			9 面輪（2 面）炭化物範囲下
SKJ09	597SP	5E20i		7.5YR5/6 明褐色土（焼土ブロックを含む）	0.32		0.29		0.55			9 面輪（2 面）
SKJ09	598SK	5F20i		7.5YR5/6 明褐色土（炭化物を含む）	0.55		0.36		0.12			9 面輪（2 面）
SKJ09	599SP	5E20i		7.5YR5/6 明褐色土（炭化物を含む）	0.22		0.21		0.21			9 面輪（2 面）
SKJ09	600SK	5E19i		7.5YR5/6 明褐色土	1.04		0.97		-1.13			4 面輪北回由（320SD 内）3 面
SKJ09	601SK	5E15i		7.5YR5/6 明褐色土（拳大の風化花崗岩礫を含む）	1.25		0.96		-0.93			2 面輪（3 面）
SKJ09	602SK	5E15i		7.5YR5/8 明褐色土	0.68		0.5		0.74			9 面輪（2 面）

遺構一覧表

調査区	遺構№	グリッド	断面形	埋土	長軸(上端)	長軸(下端)	短軸(上端)	短軸(下端)	深さ	平面形	方位	備考
SKJ09	603SD	5E15t		10YR5/6 黄褐色土(2.5Y7/3 浅黄色固結シルトブロックを含む)	1.3		0.29		0.04			9曲輪（2面）
SKJ09	604SP	5E20s	○	セクション図参照	0.36		0.32		0.2			9曲輪（2面）
SKJ09	605SP	5E20t		10YR5/6 黄褐色土(上半に炭化物を多く含む)	0.43		0.28		0.28			9曲輪（2面）
SKJ09	606SK	5E19t・5E20t		10YR5/6 黄褐色サバ土	0.99		0.59		0.19			9曲輪（2面）
SKJ09	607SK	5E19t		7.5YR5/8 明褐色土	0.41		-0.34		0.05			9曲輪（2面）
SKJ09	608SP	5E19t		7.5YR5/8 明褐色土	0.31		0.14		0.06			9曲輪（2面）
SKJ09	609SP	5E19t		10YR5/6 黄褐色サバ土	0.25		0.24		0.06			9曲輪（2面）
SKJ09	610SP	5E19t		10YR5/6 黄褐色サバ土	0.27		-0.16		0.06			9曲輪（2面）
SKJ09	611SP	5F20a		7.5YR5/8 明褐色土	0.25		0.24		0.57			9曲輪（2面）
SKJ09	612SP	5F20b	○	セクション図参照	0.35		0.34		0.57			9曲輪（2面）
SKJ09	613SP	5F20a		7.5YR5/8 明褐色土	0.24		0.21		0.26			9曲輪（2面）
SKJ09	614SD	5F14a～5F16a		7.5YR5/6 明褐色サバ土	9.39		-0.65		-0.16			2曲輪（3面）
SKJ09	615SD	5F14a		7.5YR5/6 明褐色土	-3.14		-0.42		-0.11			2曲輪（3面）
SKJ09	616SD	5F14a		7.5YR5/8 明褐色土(風化花崗岩粒を多く含む)	1.81		0.31		0.12			2曲輪（3面）
SKJ09	617SK	5F14b		7.5YR5/8 明褐色土	-1.09		0.88		0.87			2曲輪東斜面（3面）
SKJ09	618SK	5F14a		7.5YR5/8 明褐色土	1.05		0.77		0.7			2曲輪（3面）
SKJ09	619SK	5E14t		10YR5/4 にぶい黄褐色土	1.11		0.96		-1.39			2曲輪（3面）
SKJ09	620SP	5F20b	○	セクション図参照	0.45		0.4		0.58			9曲輪（2面）
SKJ09	621SP	5F20b		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.23		0.21		0.36			9曲輪（2面）
SKJ09	622SP	5F19a		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.21		0.2		0.1			9曲輪（2面）
SKJ09	623SP	5F19a		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.27		0.2		0.17			9曲輪（2面）
SKJ09	624SP	5F20a		7.5YR4/4 褐色土	0.43		0.21		0.09			9曲輪（2面）
SKJ09	625SP	6F1a		10YR4/6 褐色土	0.22		0.23		0.2			9曲輪（2面）
SKJ09	626SP	6F1a		10YR4/6 褐色土(炭化物を含む)	0.36		0.39		0.74			9曲輪（2面）
SKJ09	627SP	6F1a		10YR4/6 褐色土(炭化物を含む)	0.3		0.24		0.38			9曲輪（2面）
SKJ09	628SK	5F15a		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.85		0.79		0.75			2曲輪（3面）
SKJ09	629SP	5F15a		10YR5/6 黄褐色土	0.34		0.31		0.19			2曲輪（3面）
SKJ09	630SF	5F14b～5F15d		7.5YR5/8 明褐色砂質土	-18.81		-1.3		-0.49			1曲輪（3面）
SKJ09	631SK	5F15b		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.54		0.4		0.1			1曲輪（3面）
SKJ09	632SK	5F15b		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.74		0.6		0.19			1曲輪（3面）
SKJ09	633SK	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	634SK	5F15b		7.5YR6/8 橙色砂質土	0.53		0.52		0.21			1曲輪（3面）
SKJ09	635SP	5F20b		10YR5/4 にぶい黄褐色土（炭化物を含む）	0.23		0.21		0.17			9曲輪（2面）
SKJ09	636SP	5F20a		10YR5/6 黄褐色サバ土	0.22		0.21		0.29			9曲輪（2面）
SKJ09	637SP	5F20a		10YR4/6 褐色土	0.23		0.19		0.28			9曲輪（2面）
SKJ09	638SP	5F20a		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.26		0.25		0.75			9曲輪（2面）
SKJ09	639SW	6E1t	立面	-	2.08		-		-0.39			9曲輪（2面）石垣
SKJ09	640SD	5E20t		7.5YR5/6 明褐色土(炭化物を含む)	16		0.18		0.1			9曲輪（2面）
SKJ09	641SD	5E20t		7.5YR5/6 明褐色土(炭化物を含む)	-0.95		0.25		0.07			9曲輪（2面）
SKJ09	642SP	5E20t		10YR4/6 褐色土	0.19		0.18		0.08			9曲輪（2面）
SKJ09	643SK	5F17b	○	セクション図参照	1.07		0.76		-1.36			3曲輪（3面）
SKJ09	644SP	5F17a		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.45		0.43		0.25			3曲輪（3面）
SKJ09	645SK	5E20t・6E1t		7.5YR5/6 明褐色土（炭化物と焼土ブロックを含む）	1.9		1.58		0.4			9曲輪（2面）
SKJ09	646SP	5E20r		10YR3/4 暗褐色土(大量の炭を含む)	0.31		0.27		0.6			9曲輪（2面）
SKJ09	647SP	6E1t		7.5YR5/6 明褐色土	0.22		0.2		0.09			9曲輪（2面）
SKJ09	648SP	6E1t		10YR5/8 黄褐色土	0.59		0.4		0.25			9曲輪（2面）
SKJ09	649SP	5F20a		10YR4/6 褐色土	0.17		0.14		0.27			9曲輪（2面下層）
SKJ09	650SP	5F20b		10YR5/6 黄褐色土と 10YR6/4 にぶい黄橙色土の互層	0.36		0.33		0.09			9曲輪（2面下層）
SKJ09	651SK	5F20a	○	セクション図参照	0.62		0.4		0.49			9曲輪（2面下層 564SK）
SKJ09	652SK	5F20a	○	セクション図参照	0.62		0.55		0.57			9曲輪（2面下層 611SP）
SKJ09	653SP	5E17t		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.24		0.23		0.19			3曲輪（3面）
SKJ09	654SD	5E20s		7.5YR5/6 明褐色土	-2.12		0.25		0.14			9曲輪（2面下層）
SKJ09	655SP	5F19a		10YR6/4 にぶい黄橙色サバ土	0.14		0.12		0.1			9曲輪（2面下層）
SKJ09	656SP	5F19b		10YR6/4 にぶい黄橙色サバ土	0.17		0.15		0.24			9曲輪（2面下層）
SKJ09	657SP	5F20a		10YR5/6 黄褐色サバ土	0.42		0.41		0.21			9曲輪（2面下層）
SKJ09	658SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	659SP	5F20b		10YR5/6 黄褐色サバ土	0.2		0.19		0.19			9曲輪（2面下層）

遺構一覧表

調査区	遺構№	グリッド	断面形	埋土	長軸(上端)	長軸(下端)	短軸(上端)	短軸(下端)	深さ	平面形	方位	備考
SKJ09	660SP	5E19t		2.5Y6/3にぶい黄色サバ土	0.29		0.25		0.18			9曲輪（2面）
SKJ09	661SP	5E20t		10YR4/6褐色土	0.28		0.25		0.45			9曲輪（2面下層）
SKJ09	662SP	5E20t		7.5YR4/4褐色土(炭化物を多く含む)	0.22		0.21		0.09			9曲輪（2面下層）
SKJ09	663SP	5E20t		7.5YR5/6明褐色土	0.3		0.29		0.51			9曲輪（2面下層）
SKJ09	664SP	5E20t		5YR4/8赤褐色焼土と10YR3/2黒褐色土の斑土（炭化物片を含む）	0.5		0.36		0.33			9曲輪（2面下層）
SKJ09	665SK	5E20s		10YR3/3暗褐色サバ土	-0.6		0.22		0.09			9曲輪（2面下層）
SKJ09	666SP	5E20s		7.5YR5/8明褐色土(2.5Y6/2灰黄色固結シルトブロックを含む)	0.27		0.24		0.46			9曲輪（3面）
SKJ09	667SD	5E20s・5E20t		7.5YR5/8明褐色サバ土	5.62		-0.39		-0.17			9曲輪（3面）
SKJ09	668SP	6E1s		7.5YR5/6明褐色土	0.21		0.2		0.13			9曲輪（3面上層）
SKJ09	669SP	5F20a		7.5YR6/6橙色土(炭化物を含む)	0.42		0.32		0.12			9曲輪（3面）
SKJ09	670SP	5E20t		7.5YR5/6明褐色土と7.5YR4/6褐色粘土の斑土	0.36		0.18		0.66			9曲輪（2面）
SKJ09	671SK	6F1b・6E1c	○	セクション図参照	3.85		-2.44		-0.72			9曲輪（3面）
SKJ09	672SP	5F20b		10YR5/6黄褐色土	0.27		0.23		0.23			9曲輪（2面）
SKJ09	673SP	5F20b		10YR5/8黄褐色土	0.18		0.17		0.13			9曲輪（2面下層）
SKJ09	674SP	5F20b		7.5YR4/6褐色土	0.15		0.13		0.2			9曲輪（2面下層）
SKJ09	675SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	676SP	5F20a		10YR5/8黄褐色土	0.2		0.19		0.23			9曲輪（2面下層）
SKJ09	677SP	5E20t		10YR5/6黄褐色土(炭化物を含む)	0.34		0.33		0.25			9曲輪（3面）
SKJ09	678SD	5E20t		7.5YR5/8明褐色土	1.46		0.39		-0.38			9曲輪（3面）
SKJ09	679SD	5E20t		7.5YR5/8明褐色土	1.93		-0.58		-0.17			9曲輪（3面）
SKJ09	680SK	5E20s・6E1s		7.5YR5/8明褐色粗粒砂	2.82		2.1		-0.23			9曲輪（3面上層）
SKJ09	681SD	5E20s・5E20t		7.5YR5/6明褐色サバ土	-5.58		0.25		0.16			9曲輪（3面）
SKJ09	682SP	6E1r		7.5YR5/6明褐色サバ土	0.24		0.21		0.08			9曲輪（柵列431SA）3面
SKJ09	683SP	6E1r		7.5YR6/8橙色サバ土	0.21		0.2		0.07			9曲輪（3面）
SKJ09	684SP	6E1r		10YR5/8黄褐色サバ土	0.32		0.3		0.68			9曲輪（柵列430SA）3面
SKJ09	685SP	6E1r		10YR5/4にぶい黄褐色土	0.24		-0.22		0.08			9曲輪（3面）
SKJ09	686SP	6E1s		10YR5/6黄褐色土	0.18		0.14		0.07			9曲輪（3面）
SKJ09	687SP	6E1s		7.5YR5/8明褐色サバ土	0.5		0.45		0.77			9曲輪（柵列430SA）3面
SKJ09	688SP	6E1s		10YR4/6褐色土	0.43		0.3		0.12			9曲輪（柵列431SA）3面
SKJ09	689SK	6E1s		10YR4/6褐色土	-0.41		0.27		0.17			9曲輪（3面）
SKJ09	690SP	5F20b		7.5YR5/6明褐色粘土と10YR6/6明黄褐色粘土の斑土	0.49		0.46		-0.4			9曲輪（2面下層）
SKJ09	691SP	5F20b		7.5YR4/6褐色シルト（上半）10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルト（下半）	0.27		0.25		0.14			9曲輪（2面下層）
SKJ09	692SK	6E1t		7.5YR5/8明褐色土	0.42		0.31		-0.59			9曲輪（3面）
SKJ09	693SK	6E1t		7.5YR6/8橙色土	0.53		0.42		0.13			9曲輪（3面）
SKJ09	694SP	6E1t		7.5YR6/8橙色土	0.26		0.22		0.33			9曲輪（3面）
SKJ09	695SP	5F20a		10YR4/4褐色土	0.26		0.24		0.31			9曲輪（3面）
SKJ09	696SP	5F20a		10YR5/4にぶい黄褐色土	0.17		0.16		0.13			9曲輪（3面）
SKJ09	697SX	6F1a		10YR5/6黄褐色シルト	3.37		-1.55					9曲輪（3面）
SKJ09	698SK	5E20r		7.5YR5/8明褐色サバ土(炭化物を含む)	1.31		0.42		-0.81			9曲輪（3面）
SKJ09	699SP	5E18q		7.5YR5/8明褐色土	0.38		0.35		0.61			4曲輪（3面）
SKJ09	700SK	6F1a		7.5YR5/6明褐色サバ土	3.02		0.45		-0.68			9曲輪（3面）
SKJ09	701SP	5E19q		7.5YR5/8明褐色土	0.53		0.44		0.41			4曲輪（3面）
SKJ09	702SP	5E18o		7.5YR5/8明褐色土	0.54		1.52		-0.56			5曲輪（3面）
SKJ09	703SK	5E18r		7.5YR5/8明褐色土(風化花崗岩粒を多く含む)	0.93		0.74		0.43			4曲輪（3面）
SKJ09	704SP	6E1t		10YR5/6黄褐色土	0.25		0.24		0.25			9曲輪（3面）
SKJ09	705SK	6F1a		10YR5/4にぶい黄褐色土	0.51		0.27		0.44			9曲輪（3面）
SKJ09	706SK	6F1b		10YR6/4にぶい黄橙色シルト	0.35		0.32		0.35			9曲輪（3面）
SKJ09	707SP	5E20t		7.5YR5/6明褐色サバ土と10YR5/6黄褐色土の斑土	0.42		0.34		0.36			9曲輪（2面下層）
SKJ09	708SP	5E20t	○	セクション図参照	0.34		-0.27		0.27			9曲輪（2面下層）
SKJ09	709SP	6F1c		10YR5/8黄褐色土	0.27		0.25		0.13			9曲輪（3面）
SKJ09	710SK	5F20c		7.5YR6/8橙色シルト	0.42		0.27		0.14			9曲輪（3面）
SKJ09	711SP	5F20b		7.5YR5/6明褐色土	0.29		0.28		0.13			9曲輪（3面）
SKJ09	712SK	5F20b		7.5YR5/8明褐色土	0.28		0.16		0.09			9曲輪（3面）
SKJ09	713SK	5F20a		10YR5/4にぶい黄褐色土（細かい焼土塊を含む）	0.42		0.26		0.05			9曲輪（3面）
SKJ09	714SD	5F20a		10YR5/6黄褐色土（下半は10YR5/8黄褐色土）	-2.79		0.44		-0.2			9曲輪（3面）
SKJ09	715SP	6E1s		10YR5/8黄褐色土	0.36		0.33		0.61			9曲輪（3面680SK内）

遺構一覧表

調査区	遺構№	グリッド	断面形	埋土	長軸(上端)	長軸(下端)	短軸(上端)	短軸(下端)	深さ	平面形	方位	備考
SKJ09	716SD	6E1t		10YR5/6 黄褐色土	-1.32		-0.37		-0.17			9曲輪（3面）
SKJ09	717SP	5E20s		10YR5/6 黄褐色土	0.21		0.2		0.07			9曲輪（3面 667SD 内）
SKJ09	718SP	5F20a		10YR5/4 にぶい黄褐色土	0.28		0.27		0.16			9曲輪（3面）
SKJ09	719SP	5F20a		10YR5/6 黄褐色土	0.34		0.32		0.34			9曲輪（3面）
SKJ09	720SK	5F20a		10YR5/6 黄褐色土（炭化物を含む）	0.69		0.54		0.35			9曲輪（3面）
SKJ09	721SP	5E20t		7.5YR5/8 明褐色土	0.33		0.28		0.43			9曲輪（3面 678SD 内）
SKJ09	722SK	5E20t・5F20a		7.5YR5/8 明褐色土	1.71		0.69		0.2			9曲輪（3面）
SKJ09	723SP	5E20s		7.5YR5/6 明褐色サバ土	0.19		0.18		0.18			9曲輪（3面）
SKJ09	724SK	5F20a		10YR5/4 にぶい黄褐色土（細かい焼土塊を含む）	0.46		0.41		0.07			9曲輪（3面）
SKJ09	725SW	5E20t・6E1t		-	2.83		-		-			9曲輪（3面 574SD と同じ）
SKJ09	726SP	6E1s		10YR6/6 明黄褐色中粒砂	0.37		0.36		0.2			9曲輪（3面）
SKJ09	727SP	5F20a		7.5YR5/8 明褐色土	0.32		-0.24		0.06			9曲輪（2面）
SKJ09	728SP	5F20a		7.5YR5/8 明褐色土	0.28		-0.24		0.09			9曲輪（2面）
SKJ09	729SP	5F20a		7.5YR5/6 明褐色土	0.49		0.43		0.37			9曲輪（2面下層）
SKJ09	730SP	5F20a		7.5YR5/6 明褐色土	0.52		0.46		0.6			9曲輪（2面下層）
SKJ09	731SP	5E20t		10YR5/8 黄褐色土	0.26		0.25		0.22			9曲輪（3面）
SKJ09	732SP	5E20t		7.5YR5/6 明褐色土	0.19		0.18		0.16			9曲輪（3面）
SKJ09	733SP	-		-	-		-		-			欠番
SKJ09	734SP	5E20t	○	セクション図参照	0.49		0.4		0.37			9曲輪（3面）
SKJ09	735SK	5F18c		5YR4/8 赤褐色土（炭化物片を含む）	0.93		0.73		0.85			3曲輪（3面）
SKJ09	736SP	5E19p		7.5YR5/6 明褐色土	0.21		0.18		0.2			6曲輪（3面）
SKJ09	737SP	5E19q		7.5YR5/6 明褐色土	0.23		0.21		0.23			6曲輪（3面）
SKJ09	738SK	5E20r		7.5YR5/6 明褐色土	1.09		0.38		1.41			9曲輪（3面）
SKJ09	739SX	5F16a			3.71		2.64		0.31			3曲輪（3面）
SKJ09	740SP	5F17c		7.5YR5/6 明褐色細粒砂（固結シルト塊を含む）	0.31		0.28		0.37			3曲輪（3面）
SKJ09	741SP	5F17d		10YR5/8 黄褐色土	0.24		0.22		0.32			3曲輪（柵列 748SA）3面
SKJ09	742SK	5E18p		10YR5/8 黄褐色土	0.93		0.91		-0.84			5曲輪（3面）
SKJ09	743SP	5F17c		7.5YR5/6 明褐色中粒砂	0.27		0.24		0.48			3曲輪（柵列 748SA）3面
SKJ09	744SP	5F17c		10YR5/8 黄褐色中粒砂	0.24		0.23		0.28			3曲輪（柵列 748SA）3面
SKJ09	745SP	5F17d		10YR5/8 黄褐色中粒砂	0.26		0.23		0.22			3曲輪（柵列 748SA）3面
SKJ09	746SP	5E19t		7.5YR5/8 明褐色砂質土	0.2		0.17		0.2			9曲輪（2面）
SKJ09	747SX	5F16b			2.32		1.77		0.33			3曲輪（3面）
SKJ09	748SA	5F17c・5F17d	エレベーション	-	-		-		-			3曲輪（柵列 741SP743SP744SP745SP）3面

08 調査区

調査区	遺構№	グリッド	断面形	埋土	長軸(上端)	長軸(下端)	短軸(上端)	短軸(下端)	深さ	平面形	方位	備考
08A	132SX	6F1f		トレンチセク図参照								庭園跡
08A	132SX 溝1	6F1g			2.83		0.36					3溝を改築して作られた溝
08A	132SX 溝2	6F1g			2.4		0.21					3溝を改築して作られた溝
08A	132SX 溝3	6F1g			9.2		0.28					最初の溝
08A	132SX 築山1	6F1g			2.6		1					
08A	132SX 築山2	6F1g			2.25		1.2					
08A	132SX 築山3	6F1g			1.9		-0.7					
08A	133SG	6F1g		暗灰黄色粘土	-3.35		-2.45		0.43			池
08A	134SK	5F18e			-0.6		-0.6					近代
08A	135SP	6F1f		オリーブ褐色シルト	0.35		0.28		0.3			
08A	136SK	5F20f		オリーブ褐色砂質シルト	0.6		0.52		0.09			139SP と重複しこれより新しい
08A	137SK	5F20e		黄褐色シルト、粗砂混	1.17		1.001		0.05			
08A	138SP	5F20f		オリーブ褐色砂質シルト、粘土ブロック混	0.27		0.27		0.09			
08A	139SP	5F20f		オリーブ褐色砂質シルト、粘土ブロック混	0.52		0.48		0.08			136SK と重複し、これより古い
08A	140SX	5F18.19e		赤褐色土と礫による築山	不明		3					当初築山として考えたが、曲輪盛り土の崩れであると判明した。
08A	141SP	5F19f		鈍い黄色細砂	0.35		0.27		0.04			
08A	142SK	5F20f		黄褐色粘質土、細砂縞状に混	1.16		1		0.18			内部にピットあり、0.25 × 0.22
08A	143SE	5F20h		暗灰黄色土	1.2		1		0.755			
08A	144SD	5F19f		暗黄色土、粗砂混	1.79		0.74		0.11			
08A	145SP	5F20g		灰黄色土	0.21		0.17		0.07			
08A	146SD	6F1g		鈍い黄色砂質土、礫混	2.2		0.17		0.16			143SE 付属施設、導水溝
08A	147SD	5F20g		にぶい黄色砂質土、礫混	2		0.25		0.12			井戸付属施設、導水溝
08A	148SP	5F20g		灰オリーブ粗砂	0.21		0.13		0.1			
08A	149SE	5F20g		にぶい黄色土	1.15		0.87		0.3			井戸の付属ピットか

遺構一覧表

調査区	遺構№	グリッド	断面形	埋土	長軸(上端)	長軸(下端)	短軸(上端)	短軸(下端)	深さ	平面形	方位	備考
08A	150SD	5F20g		灰黄色土	0.83		0.17		0.06			149SE の導水溝
08A	151SD	5F19i		褐色砂質シルト	8		0.72		0.25			風倒木痕
08B	152SK	5F20m		暗褐色シルト、オリーブ褐色シルトの２層	1.27		0.51		0.39			近代
08B	153SP	5F20m		褐色シルトにシルト質粘土ブロック混	0.54		0.53		0.64			
08B	154SD	5F20l ~ 6F1l		鈍い黄褐色シルト	8		0.5		0.13			
08B	155SP	6F1m		褐色シルトにシルト質粘土ブロック混	0.47		0.43		0.21			
08B	156SP	5F20m		鈍い黄色粘、砂質強い	0.48		0.4		0.33			
08AB	157SD	5F17.18e ~ n		黄褐色粘質土が主体	48		2.4		1.005			東西に連なる溝
08A	158SX	5F20i.6F1i		枝状の炭化物、炭粉からなる。	2		1.3		0.03			炭化物集中３郭の平坦面に位置
08B	159SX	5F17q			5.68		1.2					階段
08B	160SP	5F18p		黄褐色粘土質シルト	0.35		0.33		0.31			ピット列
08B	161SX	5F19o.p			5.2		1.28					エル字、階段
08B	162SP	5F18p		暗灰黄色土	0.27		0.22		0.25			ピット列
08B	163SP	5F18o		橙色土	0.26		0.26		0.34			ピット列
08B	164SP	5F19o		橙色土、明黄褐色土の２層	0.39		0.36		0.31			ピット列
08B	165SP	5F19n		明黄褐色土	0.33		0.31		0.28			
08B	166SI	5F20n		10yr4/6 シルト質粘土ほか６層に分層した。.	3		-2		0.23			古代竪穴住居
08B	167SX	5F19p			3.04		1.6					階段状遺構
08B	168SP	5F20m		にぶい黄褐色土	0.48		0.42		0.295			
08B	169SP	5F20l		鈍い黄褐色土	0.48		0.32		0.25			
08B	170SP	5F20m		黄褐色土、砂質が強い	0.2		0.16		0.19			
08B	171SP	5F20m		黄褐色砂質土	0.36		0.32		0.12			
08B	172SP	5F20m		鈍い黄色砂質土	0.32		0.2		0.13			
08B	173SD	5F20m ~ 5F190o		鈍い黄色土、粗砂混	18		0.55		0.18			
08B	174SD	5F20m ~ 5F20o		鈍い黄色砂	13.2		0.73		0.13			175SD を切っている
08B	175SD	5F20m ~ 5F20n		鈍い黄色砂	10.9		0.72		0.16			174SD に切られている
08B	176SK	5F16t		褐灰色腐食土、砂質強い	0.56		0.56		0.27			
08A	177SD	5F17g ~ i		鈍い黄色砂質土	8.4		0.96		0.24			
08B	178SX	5F18q ~ s		盛土	12.3		1.2					9 郭の斜面にあり、10 郭から続く
08B	179SP	5F20m		黄灰色砂質土、粗礫混	0.36		0.28		0.23			
08B	180SP	5F20m		黄灰色砂質土、粗礫混	0.4		0.32		0.38			
08A	181SD	5F20h		にぶい黄褐色土	0.8		0.2		0.16			143SD に導水する溝
08B	182SX	5F17p			2.16		1.76					階段
08B	183SP	5F20l		灰黄褐色砂質土、粗砂礫多混	0.28		0.24		0.47			
08B	184SX	5F16q ~ 17q		セクなし	5.28		4.72		0.8			竪穴状遺構
08B	185SX	6F1n			5.3		3.65		0.12			竪穴状遺構
08B	185SX-P1	5F20n			0.5		0.35		0.1			
08B	185SX-P2	5F20n			0.45		0.3		0.15			
08B	185SX-P3	6F1n			0.25		0.15		0.07			
08B	185SX-P4	6F1n			0.27		0.19		0.13			
08B	185SX-5SK	5F20n		7.5YR 砂質シルト	0.65		0.65		0.18			
08B	185SX-6P	6F1n		褐色砂質シルト	0.25		0.18		0.05			
08B	185SX-7P	6F1n		褐色シルト	0.45		0.41		0.09			
08B	186SX	5F17t			2.1		1		0.15			階段
08B	187SK	5F16t		にぶい黄橙色砂質土、粗砂含	0.4		0.32		0.35			櫓基部
08B	188SP	5F16s		灰黄色土 炭化物、焼土含	0.42		0.4		0.15			櫓基部
08A	189SK	5F16e		にぶい黄橙色砂質土、粗砂多含	-1.28		0.96		0.18			
08A	190SD	5F16e		灰黄色砂質土	4.95		2.73		0.42			
08A	191SK	5F16e		灰オリーブ色砂質土	1.15		0.8		0.3			
08B	192SX	5F15s		浅黄色土粗砂粒多含	4.4		3.6		0.38			竪穴状遺構
08B	193SP	5F15s		にぶい黄橙色土	0.2		0.16		0.15			竪穴状遺構
08B	194SP	5F15s		明黄褐色土	0.32		0.23		0.5			竪穴状遺構
08B	195SP	5F15s		にぶい黄橙色土	0.52		0.44		0.38			
08B	196SP	5F15s		にぶい黄橙色土	0.4		0.4		0.36			
08B	197SP	5F15s		浅黄色土、砂質強い	0.4		0.33		0.33			竪穴状遺構
08B	198SP	5F15s		にぶい黄色砂質土	0.24		0.17		0.21			竪穴状遺構
08B	199SP	5F15s		にぶい黄色砂質土	0.6		0.43		0.1			竪穴状遺構
08B	200SK	5G20a		明褐色シルト質粘土	1.8		1.44		0.6			

遺構一覧表

調査区	遺構No.	グリッド	断面形	埋土	長軸（上端）	長軸（下端）	短軸（上端）	短軸（下端）	深さ	平面形	方位	備考
08B	2015K	5F16m		褐色粘土質シルトほか	1.28		1		0.63			縄文陥穴
08B	2025P	5F16o		褐色粘土質シルト	0.32		0.32		0.4			
08B	2035P	5F16o		褐色シルト	0.36		0.24		0.38			
08B	2045P	5F16o		褐色粘土質シルト	0.32		0.32		0.35			
08B	2055P	5F17n		褐色粘土質シルト	0.44		0.4		0.23			
08B	2065P	5F17n		明褐色シルト質粘土	0.32		0.32		0.41			
08B	2075P	5F16n		明褐色シルト質粘土	0.72		0.48		0.52			
08B	2085P	5F16n		褐色シルト	0.42		0.32		0.31			
08B	2095D	5F16n		色なし	14.25		1.16		0.05			湧水溝か
08B	2105P	5F16n		褐色シルト質粘土	0.4		0.36		0.35			
08B	2115P	5F16o		褐色シルトに灰黄褐色シルトブロック混	0.32		0.32		0.47			
08B	2125P	5F16o		褐色シルトに灰黄褐色シルトブロック混	0.41		0.4		0.39			
08B	2135P	5F17o		褐色シルトに灰黄褐色シルトブロック混	0.4		0.32		0.53			
08B	2145P	5F17m		褐色粘土質シルト	0.36		0.32		0.4			
08A	2155K	5F15g		褐色シルト質粘土	1.02		0.96		0.36			
08B	2165F	5G19b			11.36		0.72					道路
08B	2175P	5F17o		褐色砂質シルト	0.24		0.2		0.5			
08B	2185P	5F17m		上層褐色砂質シルト層所褐色粘土質シルト	0.36		0.32		0.39			
08B	2195D	5F19.20La		セク図参照	24.3		8.83		6.53			
08B	2205P	5F17o		明褐色粘土質シルト	0.42		0.32		0.2			
08B	2215P	5F17o		明褐色シルト質粘土、砂粒混	0.32		0.28		0.14			
08B	2225D	5F19.20i		褐色シルト、表土ブロック、粗粒砂含	5.44		1.2		0.28			根切り溝か
08A	2235Y	5F15.16i										B形式
08B	2245D	5F20n		褐色砂質シルト	-3.2		0.64		0.14			写真なし。図面のみ。
08B	2255P	5F19h		褐色砂質シルト	0.44		0.36		0.19			写真なし。図面のみ。2195D内の溝
08A	2265K	5F16j		褐色粘土質シルトほか	1.32		1.2		1.05			陥穴。逆茂木穴1。縄文。2195D内のピット
08A	2275K	5F16i		褐色粘土質シルト	1.44		1.12		0.65			陥穴。逆茂木穴1。縄文
08A	2285X	5F17i		褐色シルトほか	1.12		0.48		0.23			七所施設
08B	2295X	5G20b		なし	1.68		1.12					溝跡
08B	2305X	5G19.20b		なし	9.2		1.04					犬走り
08A	2315P	6F1g		暗灰黄色砂質土	0.33		0.3		0.23			
08B	2325P	5F16o		にぶい黄褐色土	0.28		0.28		0.4			
08B	2335P	5F16o		にぶい黄褐色土	0.32		0.28		0.32			
08B	2345P	5F16p		褐灰色土	0.32		0.28		0.53			
08B	2355P	5F15p		にぶい黄橙色粘質土	0.37		0.36		0.46			
08B	2365P	5F17m		赤褐色土	0.44		0.28		0.5			
08B	2375P	5F18m		黄灰色土	0.24		0.24		0.275			
08B	2385P	5F18m		にぶい黄褐色土	0.25		0.24		0.52			
08B	2395P	5F18l		褐色砂質土	0.28		0.26		0.12			
08B	2405P	5F18l		明褐色砂質土	0.4		0.28		0.35			
08B	2415P	5F16p		にぶい褐色土	0.32		0.2		0.1			
08A	2425P	5F1f		黄灰色砂質土	0.45		-0.3		0.44			屋敷内
08A	2435P	5F1f		黄灰色土	0.3		0.2		0.06			屋敷内
08A	2445K	6F1e		黄褐色土	0.94		0.93		0.47			
08A	2455P	5F20n		黄褐色土粘土質シルト	0.23		0.2		0.2			
08B	2465P	6F1n		にぶい褐色粘質土	0.4		0.38		0.55			柱痕あり
08A	2475X	5F19j		褐色粘土質シルトほか4層に分層した	4.2		4		0.6			竪穴状遺構
08B	2485K	5F20n		黄褐色シルト質粘土	1.1		0.8		0.54			陥穴。縄文
08A	2495P	5F19g		黄褐色砂質土	0.25		0.25		0.321			
08A	2505P	5F19g		にぶい黄色砂質土	0.29		0.25		0.23			
08A	2515P	5F19g		にぶい黄色砂質土	0.31		0.28		0.33			
08A	2525P	5F19g		にぶい黄色砂質土	0.33		0.3		0.33			
08A	2535P	5F20g		暗灰黄色砂質土	0.32		0.3		0.37			
08A	2545P	5F20g		黄褐色砂質土	0.42		0.35		0.39			
08A	2555P	5F19g		暗黄褐色砂質土	0.37		0.35		0.5			
08A	2565P	5F19g		暗黄褐色砂質土	0.26		0.25		0.46			
08B	2575P	5F18p		黄褐色粘土	0.3		0.29		0.29			
08B	2585P	5F18p		明褐色粘質土	0.28		0.23		0.11			
08B	2595P	5F18p		暗灰黄色砂質土	0.32		0.25		0.4			
08A	2605D	5F18.19Lj		暗褐色砂質シルト	9.7		1.1		0.27			
08A	2615X	5F19h		黒褐色、炭化物層	0.83		0.63		0.07			
08A	2625P	6F1f		黄灰色砂質土	0.52		0.35		0.46			屋敷内
08A	2635P	5F19g		明灰黄色砂質土	0.34		0.26		0.31			
08A	2645P	5F19g		黄褐色粘質土が埋土、柱痕は暗灰黄色砂質土	0.33		0.33		0.37			
08A	2655P	5F19g		明灰黄色砂質土	0.25		0.19		0.2			
08A	2665P	5F19g		なし	0.25		0.24		0.139			
08A	2675K	5F19h		橙色土ほかと層	0.48		0.65		0.6			
08A	2685K	5F18e		橙色粘質土	1.25		1.2		0.15			

遺構一覧表

調査区	遺構No	グリッド	断面形	埋土	長軸(上端)	長軸(下端)	短軸(上端)	短軸(下端)	深さ	平面形	方位	備考
08A	269SP	5F19j		灰オリーブ色砂質土	0.33		0.24		0.23			247SX 床面
08A	270SP	5F19j		灰オリーブ色砂質土	0.32		0.3		0.09			247SX 床面
08B	271SP	5F20g		灰黄褐色粘質土	0.38		0.3		0.43			
08B	272SP	5F19q		明黄褐色砂質土	0.38		0.33		0.33			
08B	273SP	5F19r		にぶい黄褐色砂質土	0.64		0.55		0.36			
08B	274SP	5F19r		にぶい褐色	0.35		0.3		0.79			
08B	275SP	5F19q		にぶい黄褐色粘質土	-0.4		0.3		0.41			
08B	276SP	5F19q		にぶい黄褐色土	0.3		-0.25		0.1			
08B	277SP	5F17t		にぶい褐色粘質土	0.25		0.23		0.48			
08B	278SP	5F19q		明褐色粘質土	0.45		0.35		0.17			
08B	279SP	5F19q		にぶい黄褐色粘質土	0.48		0.45		0.29			
08B	280SP	5F19q		灰褐色粘質土	-0.4		-0.28		0.1			写真なし
08B	281SP	5F10r		褐色粘質土	0.4		0.39		0.45			
08B	282SP	5F19r		褐色粘質土	0.28		0.25		0.46			
08B	283SP	5F19r		褐色粘質土	0.53		0.5		0.3			
08B	284SP	5F19r		にぶい黄褐色土	0.38		0.3		0.38			289SP を切っている
08B	285SP	5F19r		にぶい黄褐色粘質土	0.3		0.25		0.15			
08B	286SP	5F19s		にぶい黄褐色粘質土	0.33		0.25		0.33			
08B	287SX	5F19q		明褐色土・焼土	-1.55		1.3		0.3			古代の遺構か
08B	288SP	5F19s		にぶい黄褐色粘質土	0.28		0.27		0.37			
08B	289SP	5F19r		にぶい褐色粘質土	0.43		0.35		0.27			
08B	290SP	5F20n		灰黄褐色粘質土	0.23		0.2		0.2			166SI を切っている。
08B	291SP	5F18q		灰黄褐色粘質土柱痕あり	0.35		0.31		0.46			
08B	292SP	5F18s		にぶい黄褐色砂質土	0.45		0.38		0.2			
08A	293SP	5F19g		にぶい黄褐色粘質土	0.25		0.2		0.16			
08A	294SP	5F19g		にぶい黄褐色粘質土	0.23		0.2		0.28			
08A	295SP	5F19h		にぶい黄褐色粘質土	0.2		0.15		0.3			
08A	296SP	5F19h		にぶい黄褐色粘質土	0.23		0.23		0.3			
08B	297SP	5F19s		にぶい黄褐色砂質土	0.35		0.29		0.23			
08B	298SX	5G20c		セク図参照	-3.25		-2.6		0.27			
08B	299SD（新）	5G17～19c		セク図参照	7.5		-4.6		2.2			
08B	299SD（古）	5G17～19c		セク図参照			-8.5		2.6			
08B	300SD	5G17b		セク図参照	3.2		1.25		0.6			299SD に切られている
08B	301SX	5G20b.c		炭化物・灰層	3.9		0.95		2.36			
08B	302SX	5G20c		セク図参照	-2.45		-1.7		2.05			
08B	303SP	5F20n		10yr5/3 シルト	0.35		0.29		0.54			166SI
08B	304SP	5G19c		にぶい黄褐色	0.38		0.37		0.47			
08B	305SP	5G19c		にぶい黄褐色	0.47		0.42		0.49			
08B	306SP	5G18c		にぶい黄褐色	0.45		0.43		0.46			
08B	307SP	5G18c		にぶい黄褐色	0.43		0.4		0.63			
08B	308SD	5F17t		黄褐色砂質シルトほか3層	3.8		2.1		0.95			
08B	309SX	5G18.19b		セク図参照	7.6		3.2		1.17			
08B	310SP	5F15t		10YR5/3 シルト	0.3		0.28		0.24			
08B	311SP	5F17r		10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土	0.5		0.38		0.56			
08B	312SP	5G19c		10YR5/2 灰黄褐色粘質土	0.58		0.45		0.52			
08B	313SP	5F17s		10YR5/3 シルト質砂	0.4		0.27		0.15			
08A	314SD	6F1g.h			4.57		0.5		0.1			
08B	315SX	5F16m			0.49		0.17					赤変の範囲
08B	316SX	5F17m～5G15a			51.51		1.89		0.16			

07 調査区

調査区	遺構No	グリッド	断面形	埋土	長軸(上端)	長軸(下端)	短軸(上端)	短軸(下端)	深さ	平面形	方位	備考
A区	1SX		皿状		251		111		22	不整楕円形		集石遺構。炭化物集中部あり。075・109SXより新。
A区	2P		階段状		48		44		55	円形		底面から逆位の天目碗出土。
B区	3SZ		-	-	-		-		-	-		B区肩上の礫群。
A区	4SX		皿状		-405		238		18	楕円形		087・090SX、088SE、034Pより新。
A区	5SX		皿状		-573		435		66	楕円形		
A区	6SX		皿状		269		195		19	隅丸長方形		043・044・046・057・092・095P、007SDより新。
A区	7SD		皿状		692		74		15	-		平面L字形の溝。006・008SXより古。
A区	8SX		皿状		-408		166		21	不整楕円形		007SDより新か。051・053・067・068・076・108Pより新。011・070Pより古。礫多数出土。
A区	9P		U字状		62		51		46	楕円形		128Pより新。擂鉢など出土。
A区	10P		U字状		47		40		43	円形		051SKより新。
A区	11P		半円状		40		37		28	円形		008SXより新。051SKより新。
A区	12P		U字状		59		54		48	円形		
A区	13P		U字状		33		31		37	円形		069Pより新。

遺構一覧表

調査区	遺構No.	グリッド	断面形	埋土	長軸（下端）	長軸（下端）	短軸（上端）	短軸（下端）	深さ	平面形	方位	備考
A区	14SX		皿状		180	140			23	不整楕円形		08SSX より新。
A区	15P		U字状		69	59			66	不整円形		
A区	16P		U字状		50	46			49	円形		060P より新。
A区	17P		U字状		34	28			39	楕円形		
A区	18P		U字状		68	62			68	不整円形		
A区	19P		U字状		63	51			64	楕円形		
A区	20P		階段状		50	37			56	楕円形		
A区	21P		箱状		41	37			50	円形		
A区	22P		U字状		67	46			58	楕円形		
A区	23P		U字状		48	44			51	円形		
A区	24P		台形状		59	46			42	不整楕円形		
A区	25P		U字状		25	24			36	円形		
A区	26P		箱状		61	51			40	楕円形		
A区	27P		U字状		28	22			37	楕円形		
A区	28P		U字状		20	19			26	円形		
A区	29P		U字状		64	62			52	円形		
A区	30P		箱状		46	30			25	楕円形		
A区	31P		階段状		62	39			23	楕円形		
A区	32P		U字状		43	41			47	隅丸方形		
A区	33P		階段状		63	53			45	不整円形		
A区	34P		皿状		79	57			21	不整楕円形		004・090SX より新。
A区	35P		箱状		31	30			18	円形		
A区	36P		箱状		23	22			23	円形		
A区	37P		U字状		28	26			51	円形		
A区	38P		階段状		32	30			27	円形		
A区	39SX		半円状		69	27			17	楕円形		板状の礫出土。
A区	40P		U字状		38	34			60	円形		
A区	41P		皿状		41	32			10	楕円形		042SD より新。
A区	42SD		皿状		-181	25			8	-		091・105P より新。041P より古。
A区	43P		階段状		53	48			57	不整円形		057P より新。006SX より古。
A区	44P		箱状		27	22			20	楕円形		006SX より古。
A区	45SX		皿状		269	115			24	不整形		061・062P より新。
A区	46P		皿状		35	33			16	円形		006SX より古。
A区	47P		半円状		49	34			18	楕円形		
A区	48P		U字状		46	41			90	円形		
A区	49P		半円状		38	28			16	楕円形		
A区	50SX		皿状		110	44			11	楕円形		075SX より新。
A区	51SK		箱状		109	74			39	長方形		008SX、010・011P より古。
A区	52P		U字状		21	20			39	円形		
A区	53P		半円状		33	30			25	円形		008SX より古。
A区	54P		U字状		43	37			52	不整円形		
A区	55P		台形状		82	60			49	楕円形		礫敷広出土。底面に板状の礫出土。
A区	56P		台形状		71	48			34	不整楕円形		
A区	57P		U字状		31	-21			40	楕円形か		043P より古。006SX より古。
A区	58P		階段状		51	44			38	円形		
A区	59SX		皿状		166	71			16	楕円形		085SX より新。
A区	60P		U字状		37	-29			43	円形か		016P より古。
A区	61P		U字状		53	43			79	楕円形		045SX より古。
A区	62P		皿状		55	39			30	楕円形		045SX より古。
A区	63P				38	26			20	楕円形		土面に礫あり。礫石か。
A区	64SX		皿状		103	78			15	不整形		
A区	65P		半円状		40	32			27	楕円形		085SX より新。
A区	66P		U字状		78	-41			52	円形か		130P より新。
A区	67P		U字状		75	71			65	不整円形		008SX より古。
A区	68P		U字状		46	27			49	楕円形		008SX より古。
A区	69P		U字状		27	23			46	円形		013P より古。
A区	70P		階段状		28	26			48	円形		008SX より新。
A区	71SX		皿状		475	358			34	不整楕円形		089SX より新。
A区	72P		U字状		52	48			45	隅丸方形		074P より新。
A区	73P		台形状		35	-16			22	円形か		サブトレンチにより、半分のみ遺存。
A区	74P		U字状		43	-38			49	円形か		072P より古。
A区	75SX		皿状		243	-222			27	不整楕円形か		001・050SX より古。
A区	76P		半円状		29	26			30	円形		008SX より古。
A区	77P		U字状		29	29			61	円形		
A区	78P		階段状		61	61			50	円形		
A区	79P		U字状		43	42			54	円形		
A区	80P		箱状		94	79			48	不整楕円形		
A区	81P		U字状		50	33			38	楕円形		ピット 2 基の可能性あり。
A区	82P		U字状		22	19			21	円形		
A区	83P		半円状		21	20			21	円形		
A区	84P		箱状		845	576			65			礎石建物跡。
A区	85SX		半円状		21	21			39	円形		
A区	86P		皿状		260	62			18	楕円形		004SX より古。090SX より新。通路か。
A区	87SX		偏斗状		-345	323			494	不整円形		004SX より古。
A区	88SE		皿状		89	48			10	楕円形		071SX より古。
A区	89SX		皿状		360	148			10	不整楕円形		004・087SX、034P より古。通路か。
A区	90SX		U字状		20	18			24	円形		042SD より古。
A区	91P		U字状		46	29			29	楕円形		006SX より古。
A区	92P		U字状		29	28			19	円形		
A区	93P		階段状		25	22			30	円形		
A区	94P		皿状		37	27			18	楕円形		006SX より古。
A区	95P		U字状		26	25			28	円形		
A区	96P		U字状		27	23			55	円形		

遺構一覧表

調査区	遺構No.	グリッド	断面形	埋土	長軸（上端）	長軸（下端）	短軸（上端）	短軸（下端）	深さ	平面形	方位	備考
A区	97P		開口状		38		38		22	円形		
A区	98P		U字状		24		24		35	円形		
A区	99P		U字状		27		22		53	楕円形		
A区	100P		U字状		27		26		57	円形		
A区	101P		U字状		36		26		60	円形か		
A区	102P		皿状		77		74		20	円形		礫出土。
A区	103P		-		-		-		-	-		整地面？
A区	104SX		U字状		23		22		26	円形		042SD より古。
A区	105P						-					元池の下。
A区	106SX		U字状		39		23		35	円形		
A区	107P		U字状		29		28		52	円形		008SX より古。
A区	108P		皿状		121		39		35	楕円形		001SX より古。
B区	109SX		皿状		-550		246		35			浅い窪み状の溝。
B区	110SD		半円状		62		42		19	不整円形		被熱した円形土坑。
B区	111SX（北）		-		-		-		-	-		被熱した石組み遺構。
B区	111SX（南）		箱状		724		381		78	不整長方形		掘乱。
B区	112SX		U字状		50		48		29	円形		003SZ と同一基の可能性大。
B区	113SZ		半円状		82		66		26	楕円形		
B区	114P		台形状		91		80		27	隅丸方形		
B区	115P		箱状		63		54		53	円形		
B区	116P		箱状		86		-76		52	円形		焼穴か。
B区	117SK		漏斗状		241		169		161	不整楕円形		北側のみ石組み。石組みからの深さは 105cm。長さ 310cm程の竹幅２本と組み合わさる遺構。
B区	118SE		箱状		359		69		36	-		底面に段を持つ。長方形の溝。
B区	119SD		箱状		80		68		59	楕円形		
B区	120P		漏斗状		66		59		34	不整円形		
B区	121P		箱状		45		35		20	楕円形		
B区	122P		皿状		133		120		24	不整形		
B区	123SK		皿状		227		-162		20	円形		
B区	124SK		箱状		216		145		73	楕円形		118SE と組み合わさる土坑。
B区	125SK		箱状		121		89		107	隅丸長方形		備考。底面に段及び１ヶ所。
B区	126SK		皿状		51		42		9	不整円形		-
A区	127P		U字状		35		-33		29	楕円形か		009P より古。
A区	128P		半円状		32		-25		21	円形か		
A区	129P		U字状		-42		34		38	楕円形か		066P より古。
A区	130P		U字状		22		21		25	円形		
	131P											

報告書抄録

ふりがな	くわしたじょうあと
書　　名	桑下城跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 181 集
編 著 者 名	小澤一弘　武部真木　永井邦仁　堀木真美子　宇佐見守　伊奈和彦
編 集 機 関	公益財団法人　愛知県・教育スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒 498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24　　TEL　0567(67)4161
発行年月日	西暦 2013 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調　査　期　間	調査面積 ㎡	調査原因
くわしたじょう あと 桑下城跡	あいちけんせとし 愛知県瀬戸市 かみしながちょう 上品野町	23204	030624	35 度 15 分 24 秒 （世界測地系による）	137 度 8 分 19 秒	1次 2005.01～2005.03 2次 2007.08～2008.03 3次 2008.08～2009.03 4次 2009.09～2010.01	10,400㎡	国道 363 号 道路改良工事

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特　記　事　項
桑下城跡	城館跡	戦国時代	堀　礎石建物 掘立柱建物 竪穴状遺構 土塁　柵列 庭園　井戸	菊花双鶴鏡　鍬形台 鬲・猪・兎・水鳥の水滴　茶入 両面硯　砥石　茶臼　一字一石経 漆器椀　杓子　箆　床板　鍬状板 横槌　陽物　連歯下駄 瓦塔、細石核	07 区北東堀より鏡面が現在でも映る菊花双鶴鏡が出土 09 区 9 曲輪で焼土層を確認、鍬形台、鬲が出土

文書番号	平成 16 年度 発掘届出（16 埋セ第 70 号）　通知（16 教生第 1569 号） 終了届け（16 埋セ第 143 号）　発見届・保管証（16 埋セ第 143 号） 監査結果通知（16 教生第 2143 号） 平成 19 年度 発掘届出（19 埋セ第 37 号）　通知（19 教生第 950 号） 終了届け（19 埋セ第 124 号）　発見届・保管証（19 埋セ第 124 号） 監査結果通知（20 教生第 289 号） 平成 20 年度 発掘届出（20 埋セ第 42 号）　通知（20 教生第 1045 号） 終了届け（20 埋セ第 114 号）　発見届・保管証（20 埋セ第 115 号） 監査結果通知（20 教生第 3276 号） 平成 21 年度 発掘届出（21 埋セ第 47 号）　通知（21 教生第 1038 号） 終了届け（21 埋セ第 109 号）　発見届・保管証（16 埋セ第 109 号） 監査結果通知（20 教生第 2715 号）

要　約	『古城絵図』に描かれた「本丸」の北側と本丸西側の「芝」部分の調査。本丸の周りは西堀（薬研堀）、北西堀（箱堀）、北堀、北東堀、東堀（薬研堀）の堀が、本丸北辺に礎石建物 1 棟と掘立建物の柱穴、本丸西側から平坦に削平された曲輪が 04 区 8 箇所、09 区 9 箇所、08 調査区 14 箇所を調査した。竪穴状遺構 3 棟、庭園の一部、09 区 9 曲輪では焼土層を含む 3 面を確認した。丘陵全体を利用した館城で、屋敷地から居館、そして大規模な改修による城の変化が見られる三河と尾張の国境の城である。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 181 集

桑下城跡　本文篇

2013 年 3 月 31 日

編集・発行　公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印　　刷　サンメッセ株式会社